北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書６

加賀市

大菅波コショウズワリ遺跡

２０２２

石　川　県　教　育　委　員　会

（公財）石川県埋蔵文化財センター

大菅波（おおすがなみ）コショウズワリ遺跡

２０２２

石　川　県　教　育　委　員　会

（公財）石川県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は大菅波コショウズワリ遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は加賀市大菅波町地内である。

3　調査原因は北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）で、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」）が石川県教育委員会から委託を受けて、平成28（2016）年度から令和３（2021）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行である。現地調査については、発掘作業および空中写真図化作業等に係る関連作業の支援を、平成28年度に株式会社島田組、平成29年度は株式会社アーキジオに委託し、県埋文センターの監理のもと実施した。なお、本書には令和２年度に石川県教育委員会文化財課が実施した工事立会（110㎡）の記録を掲載した。

5　調査に係る費用は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が負担した。

6　現地調査は平成28・29年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は下記のとおりである。

【第１次調査】

期　間　平成28年９月26日～同年12月14日

面　積　1,800㎡

担当課　調査部 国関係調査グループ

担当者　久田正弘（課長補佐）　西村翼（嘱託調査員）

【第２次調査】

期　間　平成29年４月14日～同年７月31日

面　積　3,370㎡

担当課　調査部 国関係調査グループ

担当者　立原秀明（主幹）　西田昌弘（専門員）

横山純子（嘱託調査員）　西村翼（嘱託調査員）

7　出土品整理は平成30年度～令和元年度に県埋文センターが実施し、調査部県関係調査グループが担当した。遺物実測・トレース・観察表作成・遺物番号注記作業は、平成30年度には株式会社上智・株式会社ラング、令和元年度には株式会社島田組に委託して行った。

8　自然科学的分析は令和元年度に株式会社パレオ・ラボに委託して行った。

9　報告書作成は令和２・３年度に実施し、令和２年度は調査部県関係調査グループ、令和３年度は調査部国関係調査グループが担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は久田が行った。

第１～４章：西山美那（県関係調査グループ嘱託調査員）、第５章第１・２節森　将史、第３節野口真利江、第４節小林克也、第５～７節藤根　久（株式会社パレオ・ラボ）、第６章：久田正弘（国関係調査グループ主幹）

10　調査には下記の機関の協力を得た。

加賀市教育委員会、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、赤澤徳明、浅野豊治、石川日出志、高田秀樹、刀根比呂子、藤根　久、吉田　淳、米澤義光

11　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

12　本書についての凡例は下記のとおりである。

⑴　遺構実測図その他の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

⑵　水平基準は海抜高であり、T.P.(東京湾平均海面)による。

⑶　出土遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。なお、実測番号との対応については、出土遺物観察表に記載している。

⑷　遺物の実測番号は、土器・石器・金属器の種類に関係なく連番号を付した。

⑸　遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。

SB：掘立柱建物、SI：周溝をもつ建物、SD：溝、SK：土坑、SF：道路状遺構、P：柱穴・小穴、NR：河川跡、SX：その他

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2
第３節　整理作業の経過 …… 3

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4

第１節　地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　第１次調査 …… 8

第１節　概要と基本層序 …… 8
第２節　１区の遺構と遺物 …… 8

第４章　第２次調査 …… 36

第１節　概要と基本層序 …… 36
第２節　２区の遺構と遺物 …… 36

第５章　自然科学的分析 …… 89

第１節　花粉分析 …… 89
第２節　寄生虫卵分析 …… 92
第３節　珪藻化石分析 …… 93
第４節　樹種同定 …… 96
第５節　石質同定 …… 103
第６節　ガラス質安山岩製石器の産地推定 …… 106
第７節　黒曜石製石器の産地推定 …… 108

第６章　総　括 …… 111

報告書抄録

写真図版

挿 図 目 次

第１図　北陸新幹線（金沢・敦賀間）概略図 …… 1
第２図　遺跡の位置 …… 4
第３図　周辺の遺跡（1/25000） …… 6
第４図　調査区位置図（1/5000） …… 6
第５図　大菅波コショウズワリ遺跡調査区全体図（1/500） …… 9
第６図　調査区グリッド配置・主要遺構配置図（1/1000） …… 10
第７図　１区全体図（1/500） …… 11
第８図　１区調査区壁断面図１（1/500・1/100） …… 12
第９図　１区調査区壁断面図２（1/100） …… 13
第10図　１区部分図１（1/250） …… 14
第11図　１区部分図２（1/250） …… 15
第12図　１区SB01実測図（1/60） …… 16
第13図　１区SB02実測図（1/60） …… 17
第14図　１区SB03実測図（1/60） …… 18
第15図　１区SB04実測図（1/60） …… 19
第16図　１区遺構図１（1/150・1/60） …… 21
第17図　１区遺構図２（1/100・1/60） …… 22
第18図　１区遺構図３（1/100・1/60） …… 24
第19図　１区遺構図４（1/80・1/40・1/10） …… 26
第20図　１区出土遺物１（1/3） …… 28
第21図　１区出土遺物２（1/3） …… 29
第22図　１区出土遺物３（1/3・1/2） …… 30
第23図　１区出土遺物４（1/3・1/2・2/3） …… 31
第24図　１区出土木製品（1/4） …… 32
第25図　２区全体図・調査区壁断面図（1/500・1/60） …… 37
第26図　２区西壁断面図（1/60） …… 38
第27図　２区２面全体図（1/150・1/60） …… 39
第28図　２区部分図１（1/250） …… 40
第29図　２区部分図２（1/250） …… 41
第30図　２区部分図３、SK15・16（1/250・1/60） …… 42
第31図　２区SB1実測図（1/60） …… 43
第32図　２区SB2実測図（1/60） …… 45
第33図　２区SB3実測図（1/60） …… 46
第34図　２区SB3・4（1/60） …… 47
第35図　２区SB4土層注記 …… 48
第36図　２区SB5実測図（1/60） …… 49
第37図　２区SB6・8実測図（1/60） …… 51
第38図　２区SB7実測図（1/60） …… 52
第39図　２区柱列等実測図１（1/100・1/60） …… 53
第40図　２区柱列等実測図２（1/100・1/60） …… 54
第41図　２区SI1等実測図１（1/100・1/60） …… 56
第42図　２区SI1等・SK実測図（1/60） …… 58
第43図　２区SX・土坑群実測図（1/60） …… 60
第44図　２区土坑群ピット実測図（1/60） …… 61
第45図　２区SD1・2実測図（1/150・1/60） …… 63
第46図　２区SD4・5、SK実測図（1/150・1/60） …… 64
第47図　２区SD9～12実測図（1/250・1/60） …… 65
第48図　２区SF1～3、SK10実測図１（1/200・1/60） …… 67
第49図　２区SF1～3実測図２（1/60） …… 68
第50図　２区NR01実測図１（1/200・1/60） …… 70
第51図　２区NR01実測図２（1/60） …… 71
第52図　２区出土遺物１（1/3） …… 75
第53図　２区出土遺物２（1/3） …… 76
第54図　２区出土遺物３（1/3） …… 77
第55図　２区出土遺物４（1/3） …… 78
第56図　２区出土遺物５（1/3・1/2） …… 79
第57図　２区出土土器６（1/3・1/1） …… 80
第58図　２区出土木製品１（1/4） …… 81
第59図　２区出土木製品２（1/6・1/4） …… 82
第60図　２区出土木製品３（1/4） …… 83
第61図　大菅波コショウズワリ遺跡における花粉分布図 …… 90
第62図　遺跡周辺の地質図 …… 106
第63図　ガラス質安山岩産地推定判別図（1）・（2） …… 108
第64図　黒曜石産地推定判別図（1）・（2） …… 110
第65図　旧石器～弥生時代の遺構・遺物出土位置図 …… 112
第66図　古代の遺構・遺物出土位置図 …… 112
第67図　古墳時代の遺構・遺物出土位置図 …… 113
第68図　中世の遺構・遺物出土位置図 …… 114
第69図　近世の遺構・遺物出土位置図 …… 114

表 目 次

第１表　調査・整理体制組織表 …… 3
第２表　周辺の遺跡一覧表 …… 7
第３表　１区出土遺物観察表１ …… 33
第４表　１区出土遺物観察表２ …… 34
第５表　１区出土石製品・木製品観察表 …… 35
第６表　２区出土遺物観察表１ …… 84
第７表　２区出土遺物観察表２ …… 85
第８表　２区出土遺物観察表３ …… 86
第９表　２区出土石製品観察表 …… 87
第10表　２区出土木製品観察表 …… 88
第11表　分析試料一覧表 …… 89
第12表　産出花粉化石一覧表 …… 89
第13表　寄生虫卵分析に用いた試料の計測値と寄生虫卵数 …… 92
第14表　試料一覧表 …… 93
第15表　堆積物中の珪藻化石産出表 …… 95
第16表　大菅波コショウズワリ遺跡出土木製品の樹種同定結果 …… 97
第17表　出土木製品の樹種同定結果一覧 …… 102
第18表　出土石製品の石質同定（肉眼観察）一覧表 …… 104
第19表　石製品と石材の関係 …… 104
第20表　分析対象のガラス質安山岩製石器 …… 106
第21表　ガラス質安山岩産地の判別群 …… 107
第22表　測定値および産地推定結果 …… 107
第23表　分析対象の黒曜石製石器 …… 108
第24表　東日本黒曜石産地の判別群 …… 109
第25表　測定値および産地推定結果 …… 110

図 版 目 次

図版１　１区遠景(北東から)・１区遠景(南東から)
図版２　１区遠景(南東から)・１区SB01～04全景(上が北)
図版３　１区西側上層(北西から)・１区西側上層全景(西から)
図版４　１区西側下層全景(西から)・１区下層河跡全景(北西から)
図版５　１区SB01～04検出状況(東から)・１区SB01～04完掘状況(南東から)
図版６　１区SB01完掘状況(東から)・１区SB01検出状況(北から)・１区SB01-P02断面(東から)・１区SB01-P03断面(東から)・１区SB01-P10断面(南から)
図版７　１区SB02完掘状況(北から)・１区SB02検出状況(北から)・１区SB02-P05柱根出土状況(南から)・１区SB02-P07断面(南から)・１区SB02-P09断面(南から)
図版８　１区SB03完掘状況(北から)・１区SB03検出状況(北から)・１区SB03-P02断面(東から)・１区SB03-P08断面(西から)・１区SB03-P09断面(西から)
図版９　１区SB04完掘状況(東から)・１区SB04検出状況(北から)・１区SB04-P03断面(東から)・１区SB04-P04断面(南から)・１区SB04-P06断面(北東から)
図版10　１区SD02断面(西から)・１区SD03断面(西から)・１区SD06断面(北から)・１区SD10断面(南東から)・１区SD12西部断面(西から)・１区SD12東部断面(西から)・１区SD12遺物出土状況(南から)・１区SD13東部断面(南東から)
図版11　１区SD08全景(北西から)・１区SD08断面(北西から)・1区検出面太型蛤刃石斧出土状況(北から)・１区P07縄文土器出土状況(西から)・１区尖頭器出土状況(北から)
図版12　１区出土遺物１
図版13　１区出土遺物２
図版14　１区出土遺物３
図版15　2-1･2-2区遠景(南から)、2-1･2-2区遠景(北から)
図版16　2-1･2-2区遠景(南から)、2-3区遠景(北から)
図版17　２区２面全景・調査区全景
図版18　２区SB1完掘状況(北東から)・２区SB1-P7断面(北東から)・２区SB1-P10断面(北西から)・２区SB1-P32柱根出土状況(北東から)・２区SB1-P67柱根出土状況(東から)
図版19　２区SB2完掘状況(南から)、２区SB2･3検出状況(東から)、２区SB2-P25断面(西から)・２区SB2-P26断面(西から)・２区SB2-P27断面(西から)
図版20　２区SB3完掘状況(南から)・２区SB3-P29断面(西から)・２区SB3-P40断面(西から)・２区SB3-P41断面(西から)・２区SB3-P44断面(西から)
図版21　２区SB4完掘状況(南から)・２区SB4-P46断面(西から)・２区SB4-P50完掘状況(西から)・２区SB4-P51柱根出土状況(北から)・２区SB4-P64断面(北西から)
図版22　２区SB5完掘状況(南西から)・２区SB5-P55柱根出土状況(南東から)・２区SB5-P59柱根、礎板出土状況(北東から)・２区SB5-P62礎板出土状況(北東から)・２区SB5-P63木片出土状況(北東から)
図版23　２区SB6完掘状況(南西から)・２区SB6検出状況(南東から)・２区SB6-P76断面(北西から)・２区SB6-P77断面(北西から)・２区SB6-P78断面(北東から)
図版24　２区SB7完掘状況(南から)・２区SB7掘削作業(南から)・１区SB7-P54断面(西から)・２区SB7-P132断面(西から)・２区SB7-P133断面(西から)
図版25　２区SI1他検出状況(南西から)、２区SI1･SD8作業状況(南西から)
図版26　２区SD1断面１(北東から)・２区SD2断面(東から)・２区SD4断面(南から)・２区SD8断面２(東から)・２区SD9断面(東から)・２区SD10断面(南東から)、２区SD11･12断面(北東から)、２区SD15断面(西から)
図版27　２区SK1断面(南東から)・２区SK2遺物出土状況(北から)・２区SK2断面(北から)・２区SK3断面(南から)・２区SK4断面(南から)･SK5断面(西から)、２区SK5礫・陶磁器出土状況(西から)、２区SK5完掘状況(東から)
図版28　２区SK6断面(北から)・２区SK6遺物出土状況(東から)２区SK6桶枠(南から)・２区SK7断面(東から)・２区SK8検出状況(南西から)・２区SK8断面(南から)・２区SK10断面(西から)・２区SK11断面(南から)
図版29　２区SK12断面(南から)・２区SK12完掘状況(北から)・２区SK13断面(南から)・２区SK14断面(南から)・２区SK15断面(南東から)・２区SK15下部断面(南東から)・２区SK15完掘状況(南東から)・２区SK16断面(南から)
図版30　２区SK17遺物出土状況(南東から)・２区SK17断面(南から)・２区SK17土師器出土状況１(北西から)・２区SK17土師器出土状況２(北西から)・２区SK17他完掘状況(南から)・２区SK18断面(南東から)、２区SK19･21断面(南から)、２区SK19･21完掘状況(南から)
図版31　２区SX2編物全景(東から)、２区SX2上位断面・編物出土状況(東から)、２区SX2編物出土状況(南から)・２区SX2編物の重なり(北から)・２区SX2完掘状況(南から)
図版32　２区SX4-b遺物出土状況(北東から)、２区SX4･SK8完掘状況(南から)、２区SX7断面(南西から)、２区SX8･P97～P102(南東から)、２区土坑群(南から)・２区SD10(南東から)、２区SD09･11･12(南東から)、２区２面全景(南から)
図版33　２区SF全景(東から)・２区SF1検出状況(東から)・２区SF1-P111～113断面(南西から)、２区SF1･6･7(南から)、２区SF2･3(東から)
図版34　２区NR1墨書土器出土状況１(南西から)・２区NR1墨書土器出土状況２(南西から)・２区NR1断面１(南東から)・２区NR1断面２(南西から)・２区NR1遺物出土状況(北東から)
図版35　２区NR1完掘状況(南から)・２区NR1北壁断面(南西から)・２区NR1北壁断面２(南西から)・２区NR1臼玉出土状況(北東から)・２区NR1黒曜石出土状況(西から)
図版36　２区出土遺物１
図版37　２区出土遺物２
図版38　２区出土遺物３
図版39　２区出土遺物４
図版40　２区出土遺物５

本 文 図 版 目 次

図版１　大菅波コショウズワリ遺跡から産出した花粉化石 ･･･ 91
図版２　SK2から産出した寄生虫卵 ･････････････････････････ 93
図版３　珪藻プレパラートと珪藻化石の顕微鏡写真 ･････････ 96
図版４　出土木製品の光学顕微鏡写真(1) ･･････････････････ 100
図版５　出土木製品の光学顕微鏡写真(2) ･･････････････････ 101
図版６　石製品石材のマイクロスコープ写真 ･･････････････ 105

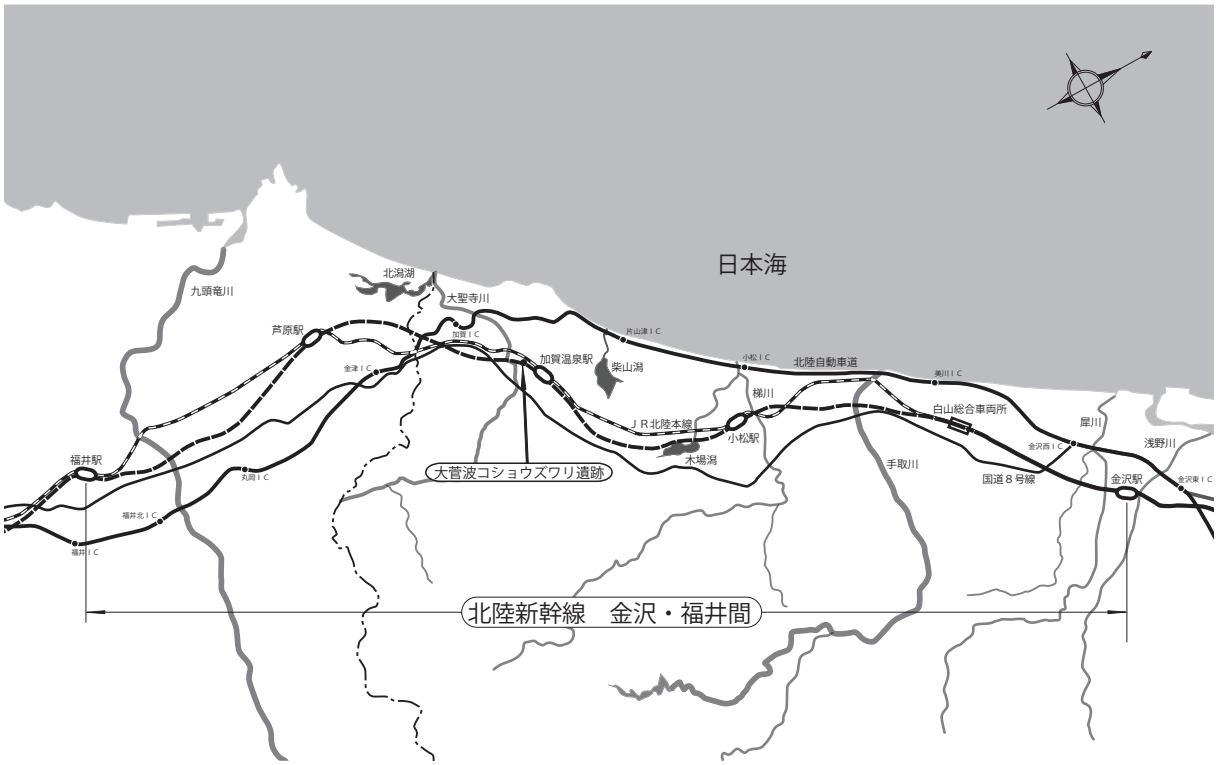
第１章　調査の経緯と経過

第１節　調 査 の 経 緯

大菅波コショウズワリ遺跡の発掘調査は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構を建設主体とする北陸新幹線建設事業に伴い、石川県教育委員会及び(公財)石川県埋蔵文化財センター(以下「県埋文センター」)により実施されたものである。

北陸新幹線は「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道」である。平成９(1997)年に東京駅から長野駅まで部分開業しており、平成27(2015)年には長野駅から金沢駅までの区間が開業された。これに伴い、石川県内では平成10～22(1998～2010)年度にかけて、津幡町地内から白山総合車両所までの区間において発掘調査が実施された。その後、福井県敦賀までの延伸が決定され、平成24(2012)年６月に国土交通省による認可を受けて事業が開始されることとなった。同年８月北陸新幹線(金沢・敦賀間)建設工事に着工し、８月19日には起工式が行われている。平成27年１月、政府は完成･開業時期を３年前倒しにして、平成34(2022)年度の開業を目指すことを決定した。

白山総合車両所から福井県境までの工事計画範囲における埋蔵文化財の取り扱いについては、鉄道建設･運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社(以下「事業者」)から石川県教育委員会文化財課(以下「県文化財課」)に照会があり、県文化財課は計画範囲内に22箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを回答した。また、周知の埋蔵文化財包蔵地については、文化財保護法第94条に基づき発掘調査等の保護措置が必要となる。



第１図　北陸新幹線(金沢・敦賀間)概略図

その後双方の話し合いにより、用地買収が済んで試掘を実施する環境が整った範囲から順に、分布調査、試掘等を実施することとなった。その結果、16遺跡について本調査の必要が決定された。

平成25年度には、白山総合車両所内の本線部分に係る宮保B遺跡や北出遺跡の本調査が実施された。平成27年度は、新幹線小松駅舎部分の八日市地方遺跡の調査が実施され、平成28年度以降本格的に調査が行われた。

県埋文センターは、試掘の結果埋蔵文化財調査が膨大な調査面積となることから、調査の効率化と期間短縮を目的に、平成28・29年度に民間会社による調査支援を導入した。主な委託内容は、仮設建物等の整備、現場の保守・管理、基準杭の設定、発掘機材の準備、作業員への指示・安全管理、図面等の作成、台帳等の作成、空中写真測量などである。

第２節　調 査 の 経 過

大菅波コショウズワリ遺跡の発掘調査は、平成28年４月１日には事業者と石川県、石川県と県埋文センターの間で委託契約を締結し、県埋文センターからは発掘届を県文化財課に提出した。なお、調査体制は第１表のとおりである。

平成28年度

第１次現地調査を平成28年９月26日から同年12月14日にかけて実施した。調査面積は1,800㎡である。９月23日に県文化財課、県埋文センター、株式会社島田組（現場代理人 板倉歓之）による現地確認を行い、９月26日から重機による表土除去、10月３日から作業員による現地作業を開始した。10月11日に平面直角座標第Ⅶ系（世界測地系）をもとに10m方眼のグリッドを設定した。随時工程会議を行いながら作業を進め、11月１日には第１回目の空中写真測量を実施した。11月７日からは鞍部埋土除去作業を開始し、11月10日からは下面の遺構検出作業及び掘削作業に着手した。第２回目の空中写真測量は11月22日に、第３回目は12月８日に行った。その後、安全柵の設置や機材整理を行い、12月14日に事業者に引渡し現地調査を完了した。

平成29年度

第２次現地調査は平成29年４月14日から同年７月31日にかけて実施した。調査面積は3,370㎡（当初3,340㎡）で、４月６日に事業者、JV、県文化財課、県埋文センター、株式会社アーキジオ（現場代理人 阿部将樹・中井英策）による現地打合せを行い、事前調整工事の進捗状況、現地作業での注意点、排水処理、現況図面、仮設建物建上などについて協議・確認をした。調査は調査区を2-1～2-3区に分けて行い、４月17日より2-1区から重機による表土除去を順次行った。４月20日からは平面直角座標第Ⅶ系（世界測地系）をもとに10m方眼のグリッドを設定した。４月24日に県埋文センターと支援業者による打合せを行い、調査工程、現地作業での注意点、今後の予定などの確認を行った。４月27日から作業員による現地作業を開始し、掘立柱建物や周溝をもつ建物、河川跡、波板状凹凸などを検出した。その後調査を進め、第１回目（2-1・2-2区のNR1以西）の空中写真測量を５月25日に、第２回目（2-1・2-2区のNR1以東）を６月19日、第３回目（2-3区）を７月20日に実施した。なお、2-3区の北側と東側で遺構が調査区外へ延びる様相を示し、県文化財課との協議の結果、調査区を拡張して調査を行うこととなった。結果、調査面積が当初より30㎡増加し3,340㎡となった。７月23日に現地説明会を行い、60名が参加した。作業員の現地作業は７月28日に終了し、７月31日に事業者に引渡し現地調査を完了した。

令和２年度

令和２年８月５・６日に県文化財課が担当し、北陸新幹線本線に近接する取付道路工事に伴う工事立会を実施した。立会範囲の対象は、平成28年度に県埋文センターが調査を実施した１区の南東部である（第５図）。表土除去の重機、ポンプ・発電機などの排水機材はJVから提供を受けた。調査区平面図などの実測及び単点の測量は県文化財課が行い、実測に伴う基準点の国土座標取得についてはJVの協力を得た。調査の結果、基本層序は、工事用砕石→暗褐色粘質土（耕土及び床土）→暗灰褐色粘質土→暗灰色粘質土（包含層か）→黄灰色粘質土（地山）であることが確認された（第５図）。対象範囲については、平成28年度調査成果から遺跡の縁辺部と想定されたとおり、調査区壁面で小穴を確認したのみで遺構は極めて希薄であった。遺物は出土していない。今後の対応として、工事を実施して支障なしと回答した。

第３節　整理作業の経過

事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として、出土品整理作業のうち記名・分類・接合作業を平成30年度に、実測・トレース作業を令和元年度にそれぞれ実施し、調査部県関係調査グループが担当した。

一部の遺物については、平成30年度に株式会社上智に実測・トレース・観察表作成・遺物番号注記作業、株式会社ラングに石器の実測・トレース・観察表作成・遺物番号注記作業を委託した。また、令和元年度に株式会社パレオ・ラボに花粉分析・寄生虫卵分析・珪藻分析・樹種同定・石質同定を、株式会社島田組に土器の実測・トレース・観察表作成・遺物番号注記作業を委託して行った。

報告書刊行については、令和２～３年度に原稿・図版作成等を行い、編集・校正作業を経て刊行することとなった。

第１次調査	平成28年9月26日～同年12月14日	第２次調査	平成29年4月14日～同年7月31日	整理期間	平成30年４月１日～平成31年3月31日
調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター 理事長　田中　新太郎	調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター 理事長　田中　新太郎	調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター 理事長　田中　新太郎
総　括	柴田　正秋（専務理事）	総　括	柴田　正秋（専務理事）	総　括	紺野　欽一（専務理事）
事　務	釜親　利雄（事務局長）	事　務	釜親　利雄（事務局長）	事　務	釜親　利雄（事務局長）
総　務	長嶋　誠（総務GL）	総　務	横山　謙一（総務GL）	総　務	山口　登（総務GL）
調　査	福島　正実（所長） 藤田　邦雄（調査部長） 伊藤　雅文（国関係調査GL）	調　査	藤田　邦雄（所長） 垣内　光次郎（調査部長） 川畑　誠（国関係調査GL）	調　査	藤田　邦雄（所長） 垣内　光次郎（調査部長） 久田　正弘（県関係調査GL）
担　当	久田　正弘（国関係調査G課長補佐） 西村　翼（国関係調査G嘱託調査員）	担　当	立原　秀明（国関係調査G主幹） 西田　昌弘（国関係調査G専門員） 横山　純子（国関係調査G嘱託調査員） 西村　翼（国関係調査G嘱託調査員）	担　当	久田　正弘（県関係調査GL） 立原　秀明（国関係調査G主幹） 西田　昌弘（国関係調査G専門員）
整理期間	平成31年４月１日～令和２年３月31日	整理期間	令和２年４月１日～令和３年３月31日	整理期間	令和３年４月１日～令和４年３月31日
調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター 理事長　田中新太郎	調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター 理事長　徳田　博	調査主体	（公財）石川県埋蔵文化財センター 理事長　徳田　博
総　括	紺野　欽一（専務理事）	総　括	田村　彰英（専務理事）	総　括	田村　彰英（専務理事）
事　務	釜親　利雄（事務局長）	事　務	北谷　俊彦（事務局長）	事　務	北谷　俊彦（事務局長）
総　務	伊藤　直（総務GL）	総　務	伊藤　直（総務GL）	総　務	北谷　祥子（総務GL）
調　査	垣内　光次郎（所長） 伊藤　雅文（調査部長） 久田　正弘（県関係調査GL）	調　査	伊藤　雅文（所長） 川畑　誠（調査部長） 久田　正弘（県関係調査GL）	調　査	伊藤　雅文（所長） 川畑　誠（調査部長） 澤辺　利明（国関係調査GL）
担　当	久田　正弘（県関係調査GL） 立原　秀明（国関係調査G主幹）	担　当	西山　美那（県関係調査G嘱託調査員）	担　当	久田　正弘（国関係調査G主幹）

第１表　調査・整理体制組織表

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地 理 的 環 境

大菅波コショウズワリ遺跡は石川県加賀市大菅波町地内に所在する。

加賀市は石川県の南西端に位置しており、北は日本海に面し、東は小松市、南から西にかけては福井県あわら市・坂井市・勝山市と接している。現在の加賀市は平成17(2005)年10月１日に旧加賀市と江沼郡山中町が合併して誕生した市であり、人口65,593人(令和２年９月１日現在)、市域面積305.87㎢、周囲98.5㎞を有する。交通はJR北陸本線と国道８号線が市域の平野部を東西に並走し、海岸沿線を走る北陸自動車道は南側で内陸に入り、福井県境を越えた辺りでJR北陸本線・国道８号線と交差する。米作りを中心とした農業地帯である一方、加賀市が発祥地とされる九谷焼や、高い木地挽物技術をもつ山中漆器などの伝統工芸も盛んである。また、山中温泉、山代温泉、片山津温泉は、小松市の粟津温泉とともに加賀温泉郷として広く知られている。

第２図　遺跡の位置

市域の地形は、北側は海岸線に沿って江沼砂丘、橋立丘陵、橋立台地、小松砂丘、柴山台地が、東側では小松市より続く月津台地が分布している。市域の南東側では標高100mを超える加賀山地、能美山地、江沼丘陵など山地が卓越し、南東端には市内最高峰である大日山(標高1,368m)が位置する。水系は大日山を水源として、市域西部を北流し平野部で西へと向きを変え日本海に注ぐ大聖寺川、市域東部を流れ柴山潟に注ぐ動橋川の２大水系に大別される。他にも田尻川、小塩川、尾俣川、八日市川など多くの小河川が流れる。大聖寺川と動橋川の下流域では江沼盆地や柴山潟を含む低地が形成されている。柴山潟は、小松市の木場潟、干拓事業により消滅した今江潟とともに「加賀三湖」と称されていた。福井県坂井市域には北潟湖もあり、このような河口に潟湖が形成された地形は日本海沿岸に広くみいだされる。

大菅波コショウズワリ遺跡が所在する大菅波町は江沼盆地の北東部に位置し、北側には標高70m前後の橋立丘陵が迫る。町域の大半を水田地と畑地が占めており、穀倉地帯である江沼盆地の典型を呈する。JR北陸本線が町域を南北に二分し、集落は線路の北側に、大菅波コショウズワリ遺跡は南側に立地している。大菅波町は近世には大菅波村と称し、加賀藩の支藩である大聖寺藩領であった。明治４(1871)年廃藩置県により大聖寺県となり、同年11月金沢県に編入、翌５年には石川県と改称され、大菅波村は石川県江沼郡管下となった。その後、明治22(1889)年の町村制施行により作見村、山田村、大菅波村、小菅波村、尾中村、富塚村、片山津村、弓波村が合併して作見村が成立し、大菅波は作見村の大字名となった。昭和17(1942)年に作見村と塩津村が合併して片山津町が発足、片山津町はその後幾度かの合併を経て昭和33(1958)年に大聖寺町、橋立町、山代町、動橋町、南郷村、三谷村、三木村、塩屋村と合併して加賀市となり、大菅波は加賀市の町名となった。集落は昔山麓に位置していたが、慶長初期頃現在の位置に移ったと伝わる。

第２節　歴史的環境

大菅波コショウズワリ遺跡周辺の遺跡を時代ごとにふれることで、歴史的環境を概観する。本節の遺跡名(番号)は第３図・第２表の番号と対応するため参照していただきたい。なお、遺跡名については石川県遺跡地図の表記に従っている。

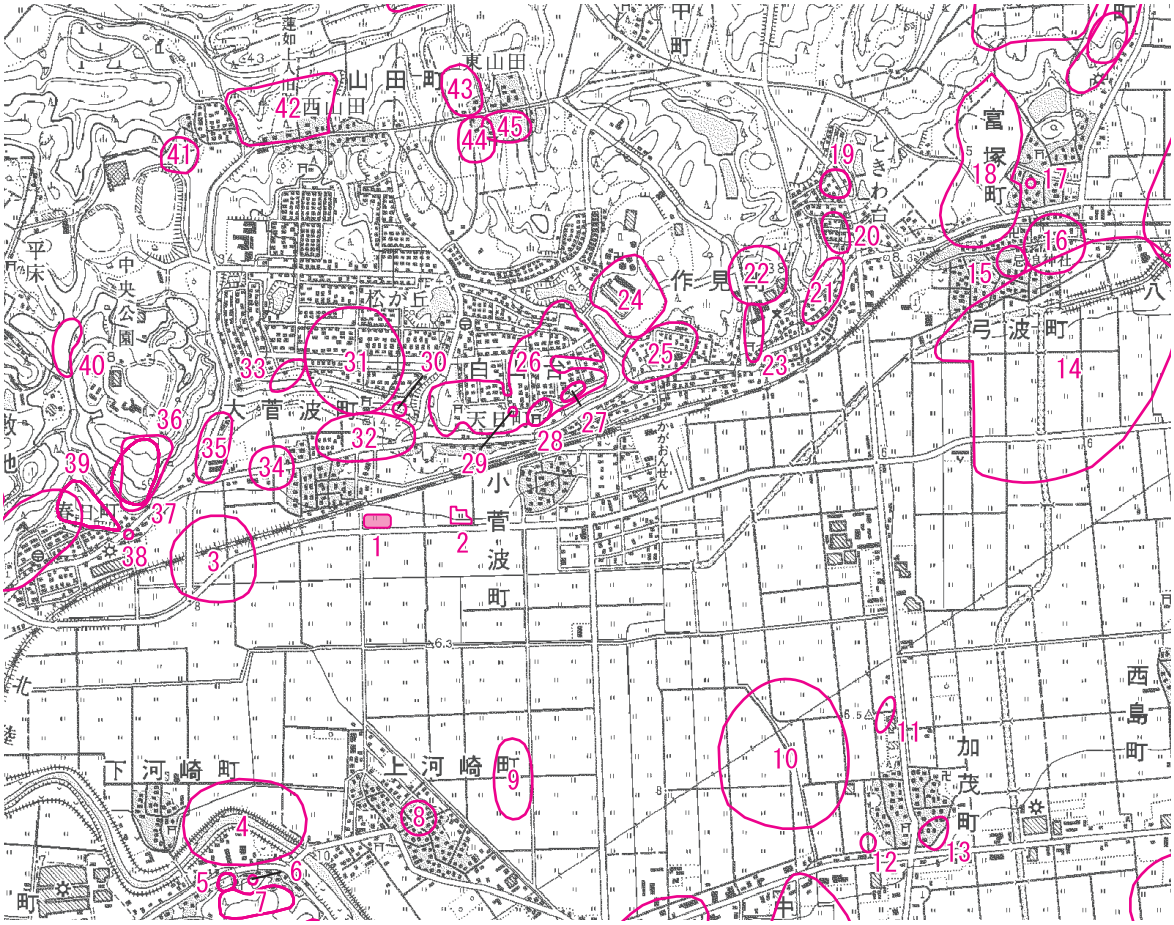
大菅波コショウズワリ遺跡(1)が所在する加賀市内では、これまで800箇所以上の遺跡が確認されている。市域で最古の遺跡は橋立台地に位置する旧石器時代後期の宮地向山遺跡であり、石刀や石鏃、棒状石斧、掻器といった石器が出土している。

縄文時代に入ると、橋立丘陵上、橋立台地上、柴山台地縁辺部、大聖寺川・動橋川両流域の河岸段丘や谷底低地などに遺跡が分布するようになる。早期の遺跡では大野山A遺跡や、県内最古級の土器が出土した伊切遺跡が確認されている。前期の遺跡としては動橋川中流域の津波倉遺跡や、橋立丘陵一帯の柴山水底貝塚遺跡、橋立神社裏遺跡、黒崎ごさんしろ遺跡などが挙げられる。中期の遺跡では柴山貝塚や藤ノ木遺跡が知られる。藤ノ木遺跡からは上山田式・古府式など北陸特有の土器に加え、東海・近畿・関東系の土器も出土したことから東西交流が盛んな地域であったことが窺える。小菅波国道遺跡では中期中葉から後半の遺構群が確認され、江沼盆地において初の縄文時代の確実な建物跡の検出となった。当該期の集落の動態を検討する上で重要な成果と言える。後・晩期の遺跡としては、注口土器や異形土製品が出土した横北遺跡などがある。

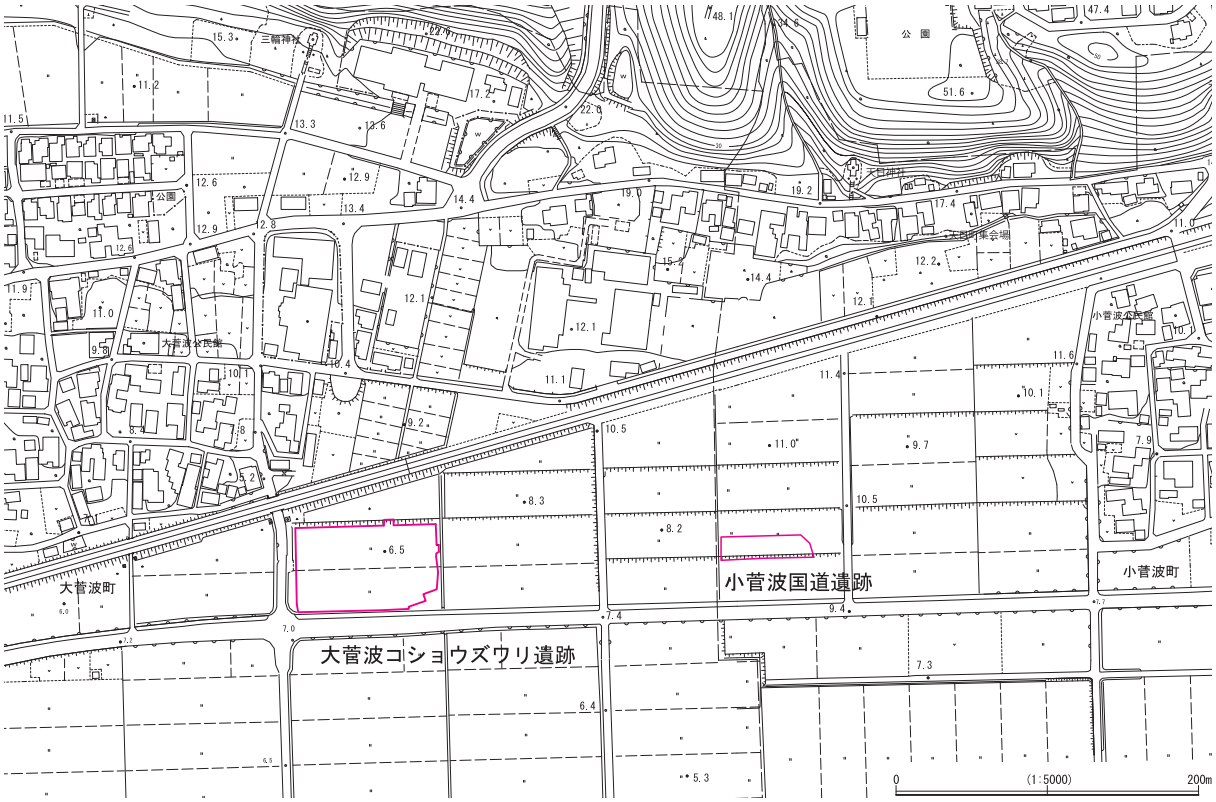
弥生時代前期～中期初頭には、縄文土器の流れをくむ柴山出村式土器が成立し、柴山出村遺跡や柴山水底遺跡などで柴山潟沿岸の湿地を利用した原始的な水稲栽培が開始される。中期後半には小菅波国道遺跡や猫橋遺跡にも遺構・遺物が少し確認される。後期になると柴山潟沿岸から八日市川にかけて遺跡は広範囲に広がり、八日市川流域の自然堤防・後背湿地に猫橋遺跡や弓波遺跡(14)が展開する。後期前半猫橋式土器の標式遺跡である猫橋遺跡は方形周溝墓を伴う大規模な集落跡で、炭化米や多量の木製品、管玉未成品などが出土し、弓波遺跡では後期の集落と墓域が確認された。加茂キツネ塚遺跡(11)では後期後葉の自然河道や水路などが確認され、集落の縁辺部を検出したものと思われる。

古墳時代に入ると、江沼盆地を見下ろす丘陵上や台地縁辺部に多くの古墳が築造され、遺跡数も飛躍的に増加する。古墳群は分校・松山地域、南郷・吸坂・黒瀬地域、冨塚・片山津地域、敷地・小菅波地域などに大別される。前期は盆地東部に分校古墳群が出現する。小菅波地域では小菅波４号墳以外の築造時期は不明だが、前期の築造と推定されている。前期後半から中期にかけては盆地西部に南郷古墳群や吸坂古墳群(5・7)が展開する。昭和58年に調査された敷地平野山古墳群(36)も前期から中期に位置付けられる。中期半ばから後期には盆地中央部に二子塚古墳群が出現し、唯一墳丘が現存する狐山古墳は北陸では数少ない典型的な前方後円墳である。埴輪と周溝を伴い、鋲留甲冑や銀製帯金具など豊富な副葬品が出土した。中期後葉には全長100m以上の前方後円墳と推定される富塚丸山古墳(17)などが築造され、後期には法皇山横穴群、栄谷丸山横穴群といった横穴群や、黒瀬御坊山C古墳群や二子塚東田古墳群に代表される群集墳が多く築造された。加賀市域では他にも数多くの古墳が分布調査により確認されているが、古代の集落遺跡である松山C遺跡から円筒埴輪片が出土するなど、墳丘が消滅してしまったために未発見となっている古墳が他にも存在している可能性が高い。集落跡としては、弓波遺跡、大菅波D遺跡(3)、片山津玉造遺跡、永町ガマノマガリ遺跡などが知られる。弓波遺跡では、古墳前期の方形区画２基(一辺約25mと26m)や建物跡などを検出した。弓波片山津玉造遺跡では緑色凝灰岩製の管玉・石製品製作が行われ、33基の工房兼住居跡が確認されている。

白鳳時代以降、津波倉廃寺、弓波廃寺(16)、保賀廃寺、宮地廃寺、高尾廃寺が建立され、一地方で



第３図　周辺の遺跡（S＝1/25000）



第４図　調査区位置図（S＝1/5000）

番号	県番号	遺跡名	種別	時代
1	643000	大菅波コショウズワリ遺跡	集落	古代
2	643100	小菅波国道遺跡	散布地	縄文、古墳
3	618100	大菅波D遺跡	散布地、集落	弥生、古墳、古代
4	610000	下河崎遺跡	散布地	古代
5	609900	吸坂B古墳群	古墳	古墳
6	609800	片山古墳	古墳	古墳
7	609700	吸坂A古墳群	古墳	古墳
8	610100	川崎専稱寺跡	社寺	中世
9	641400	上河崎遺跡	散布地	弥生
10	607100	加茂かがり場遺跡	集落	古墳、その他
11	642700	加茂キツネ塚遺跡	集落	弥生、中世
12	642500	加茂新高遺跡	集落	古代
13	643200	加茂フルドウ遺跡	集落	古墳
14	620900	弓波遺跡	散布地、集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世
15	620800	忌浪神社遺跡	散布地	古墳
16	620700	弓波廃寺	散布地、集落	弥生、古墳、古代、中世
17	620500	富塚丸山古墳	古墳	古墳
18	620600	富塚遺跡	散布地	古代
19	619702	作見焼2号窯跡	生産遺跡	中世
20	619600	作見C遺跡	散布地	古墳
21	619500	作見A遺跡	散布地	古墳
22	619400	作見砦跡	城館	中世
23	619300	作見B遺跡	散布地	古墳

番号	県番号	遺跡名	種別	時代
24	619100	作見観音堂跡	社寺	その他
25	619200	作見陣跡	その他	中世
26	619000	小菅波遺跡	集落	弥生、古墳
27	618900	小菅波神社裏B古墳群	古墳	古墳
28	618800	小菅波神社裏A古墳群	古墳	古墳
29	618700	小菅波神社裏C1号墳	古墳	古墳
30	618500	小菅波D1号墳	古墳	古墳
31	618600	西の御城跡	城館	その他
32	618400	大菅波C遺跡	散布地	古代
33	628800	大菅波古墳群	古墳	古墳
34	618300	大菅波B遺跡	散布地	古墳
35	618200	大菅波A遺跡	散布地	古代
36	617900	敷地平野山古墳群	古墳	古墳
37	618000	敷地平野山遺跡	散布地、集落	縄文、弥生
38	617800	敷地経塚	その他	近世
39	617700	敷地春日町古墳群	古墳	古墳
40	617200	平床遺跡	散布地	古代
41	617100	西山田遺跡	散布地	古墳
42	617000	西山田光教寺跡	社寺	中世
43	616700	東山田廃寺	社寺	その他
44	616800	東山田八幡神社遺跡	散布地	その他
45	616900	東山田玄蕃屋敷跡	城館	その他

第２表　周辺の遺跡一覧表

の建立数としては多いことから、支配階級層の間に仏教が強く浸透していたと推定される。また、動橋川中流域左岸の低丘陵上に位置する黒瀬瓦窯跡で生産された瓦は、保賀廃寺で使用されていたことが明らかになっている。この時代に入ると集落が江沼盆地一帯で営まれるようになり、散布地も含め市内各地で遺跡が確認されている。江沼地方は大宝律令の制定(701年)により越前国江沼郡となり、弘仁14(823)年に加賀国が越前国から独立する。これに伴い江沼郡の北半部が能美郡として分立し、江沼郡には長江、八田、忌波、山背、竹原、額田、菅浪、三枝の八郷、あるいは郡家郷を加えた九郷が置かれたとされる。

中世には多くの荘園が経営されるようになり、大菅波周辺は菅浪郷に属していたと推定されている。遺跡としては作見砦跡(22)などの城館や、南北180m、東西160mに及ぶ館跡と推定される勅使館跡、三木だいもん遺跡などが確認されている。また、県内最大の窯業地で須恵器及び陶器を焼いた南加賀古窯跡群が成立・展開するのもこの時期である。この時期の集落遺跡の確認数は少ないが、加茂新高遺跡(12)で当該期の井戸が２基、加茂ボケ生水ウラ遺跡で13世紀代の掘立柱建物数棟、井戸１基、竪穴状遺構１基が検出されている。中世集落の確認数が少ないのは、より安定した地盤を居住地に選定した結果、現集落と重なって未発見となっている遺跡が多いためと推定される。

近世の遺跡としては、大菅波コショウズワリ遺跡周辺では敷地経塚(38)があるが消滅している可能性がある。天正８(1580)年に織田勢によって加賀国の一揆が平定されると、江沼郡は慶長５(1600)年に前田氏の支配下に置かれることとなった。寛永16(1639)年には加賀藩の支藩として大聖寺藩が成立し、大聖寺藩は明治４(1871)年の廃藩置県まで存続する。

引用・参考文献

垣内光次郎ほか　2009　『三木A遺跡』　石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

竹内理三　1981　『角川日本地名大辞典17 石川県』　角川書店

立原秀明ほか　2016　『加茂キツネ塚遺跡・加茂新高遺跡・加茂ボケ生水ウラ遺跡』　石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

戸根比呂子　2019　『小菅波国道遺跡発掘調査報告書』　加賀市教育委員会

西英晃　2002　『大菅波D遺跡』　加賀市教育委員会

谷内明央ほか　2013　『松山D遺跡』　石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

第３章　第 １ 次 調 査

第１節　概要と基本層序

１．概　　要

平成28年度調査区を１区、平成29年度調査区を２区とした（第５図）。２区はさらに2-1～2-3区に細分して調査を実施した（第６図）。Ｘ35510、Ｙ-74300を基準としてA1杭を設定し、杭から北東方向にグリッドを配置した（第６図）。令和２年度の立会調査は南東隅である。

第１次調査は1,800㎡を対象に実施した。１区の北側は平成29年度調査の２区と接している。遺構番号はSB、SD、SK、P、SXを用い、それぞれ01から番号を付した。

大菅波コショウズワリ遺跡は、遺跡の北側に位置する橋立丘陵が八日市川に向けて傾斜する丘陵裾に位置しており、１区の遺構検出面も標高5.20～6.20m前後と南～南西側が低くなっている。なお、１区では西側の検出面を上層、その下で検出した鞍部を下層として調査した（第７図）。遺構密度としては、調査区東半でやや高く、小穴が集中し掘立柱建物４棟が展開する（図版２）。一方、河川跡を挟んだ西半では主に溝が検出され、遺構密度は高くない（図版３・４）。１区において検出された遺構の時期は古墳時代末～中世に位置付けられ、当該期の集落遺跡であることが明らかになった。

遺物は、古墳時代後期～古代にかけての須恵器・土師器を中心として、少数ではあるが縄文土器、弥生土器、石器、中世の土師器・陶磁器なども出土している。土器などは耕地整理の影響か、細片が多い。鞍部からは旧石器時代末の柳葉形尖頭器や縄文時代の石器類が出土した。

２．基　本　層　序

１区の層序は、上位から表土（耕作土、客土）、主にオリーブ黒色～黒色を呈する粘土（包含層）、主に浅黄色～にぶい黄橙色を呈する粘土（基盤層）を基本としている（第８・９図）。

第２節　１区の遺構と遺物

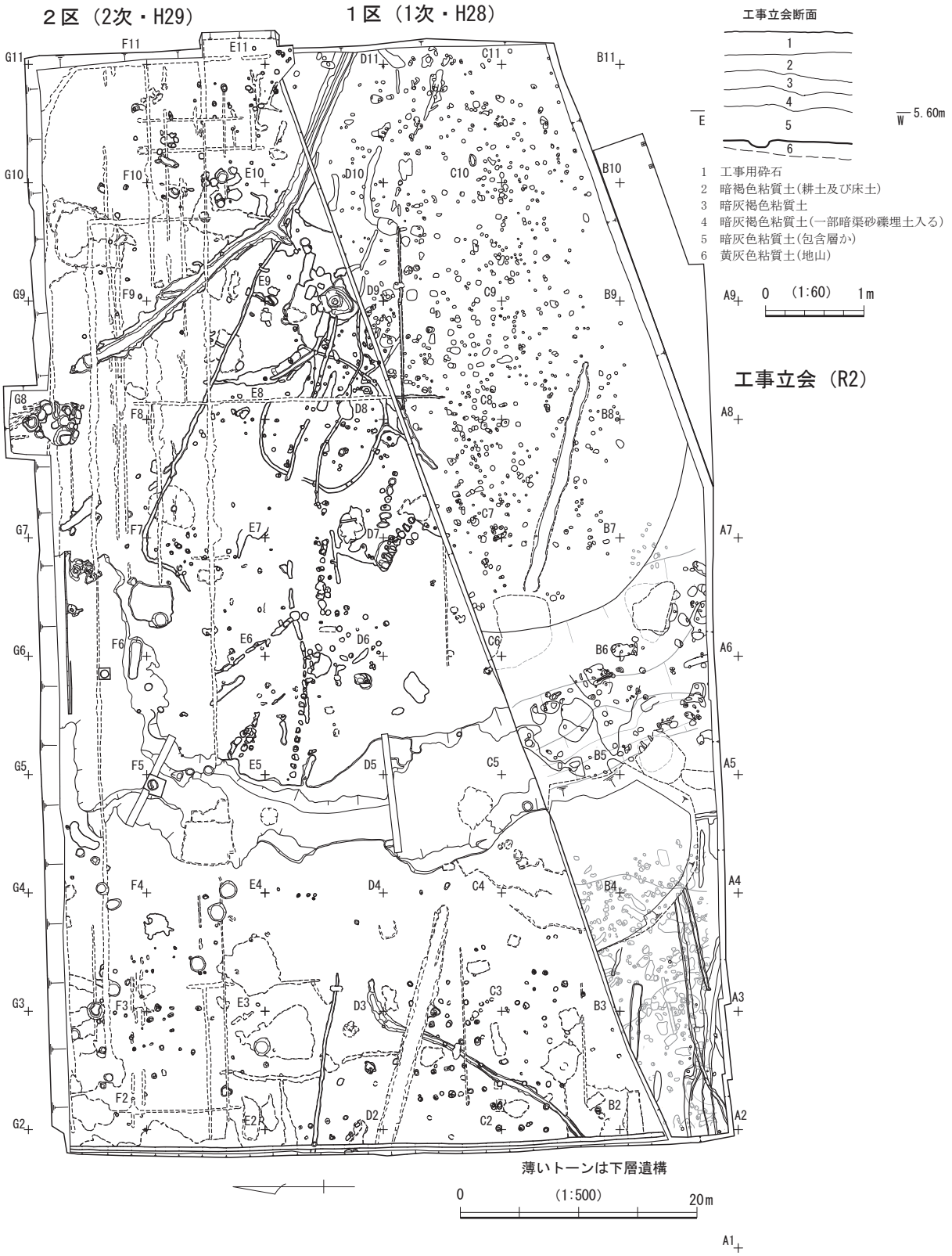
１．掘 立 柱 建 物

掘立柱建物は１区において４棟確認した。いずれも７世紀代と推定され、側柱建物と総柱建物がセットになるものと思われる。また、建物を復元するには至らなかったが中世と思われる柱穴も確認した。

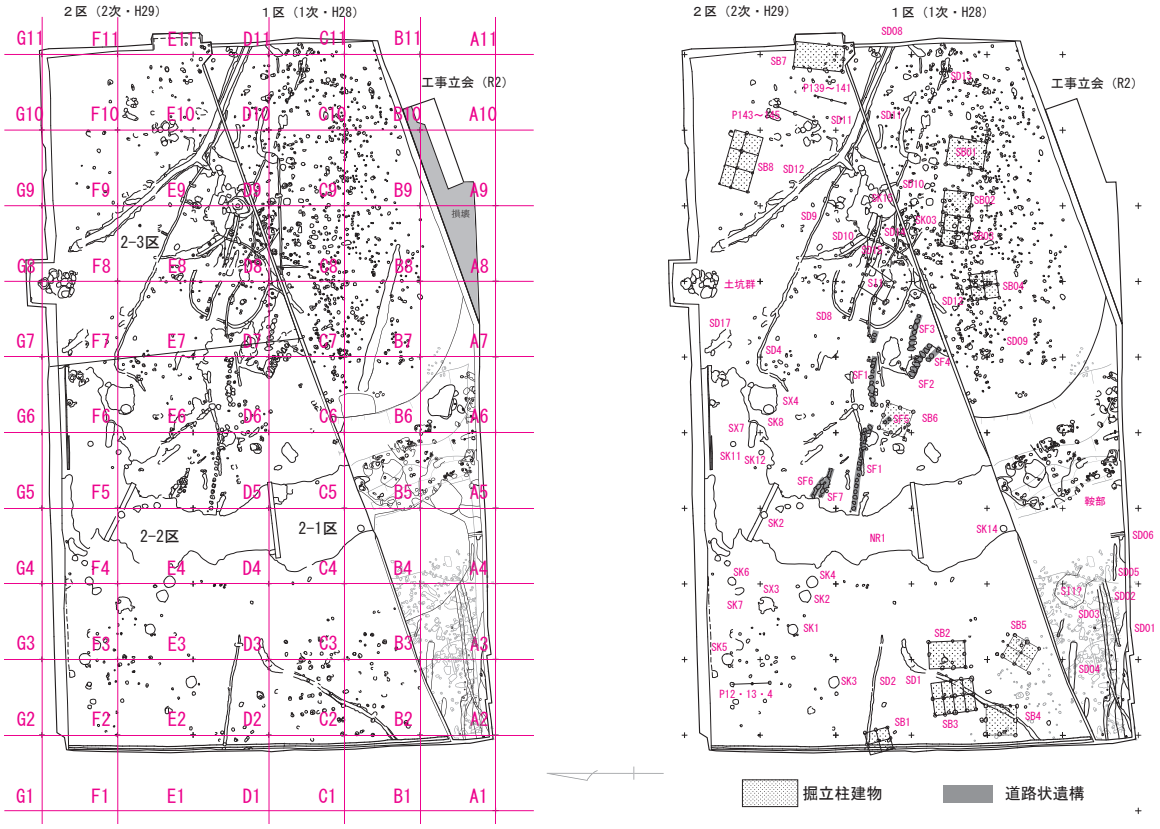
以下、個別に記述していく。

SB01（第12図、図版６）　１区東部C9グリッドで検出し、検出面は標高5.72～5.85m前後である。２間（3.6～3.7m）×３間（4.8m）の側柱建物で、主軸はN-9°-Eである。柱間や柱配列にはややばらつきが見られ、柱間は梁間で約1.2～2.4m、桁行で約1.5～1.7mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形、隅丸方形、不正方形と様々である。径は長軸で45～60㎝程、深さは12～27㎝程を測る。柱穴の覆土は概ね浅黄色～黒褐色であり、土層観察では柱痕跡が確認でき、据えられていた柱の径は15～20㎝程と推定できる。SB01-P03からは土師器高杯（第20図１）や須恵器甕（2）が出土し、SB01-P06からは土師器のハケ甕胴部上半（3）や高坏脚（4）が出土している。SB01はSB03とセットと思われる。

SB02（第13図、図版７）　１区東部C8･9グリッドで検出し、検出面の標高は5.79～5.94m前後である。２間（3.6m）×３間（4.4～4.6m）の側柱建物で、主軸はN-82°-Wである。柱間や柱配列は比較的整って



第５図　大菅波コショウズワリ遺跡調査区全体図(S＝1/500)



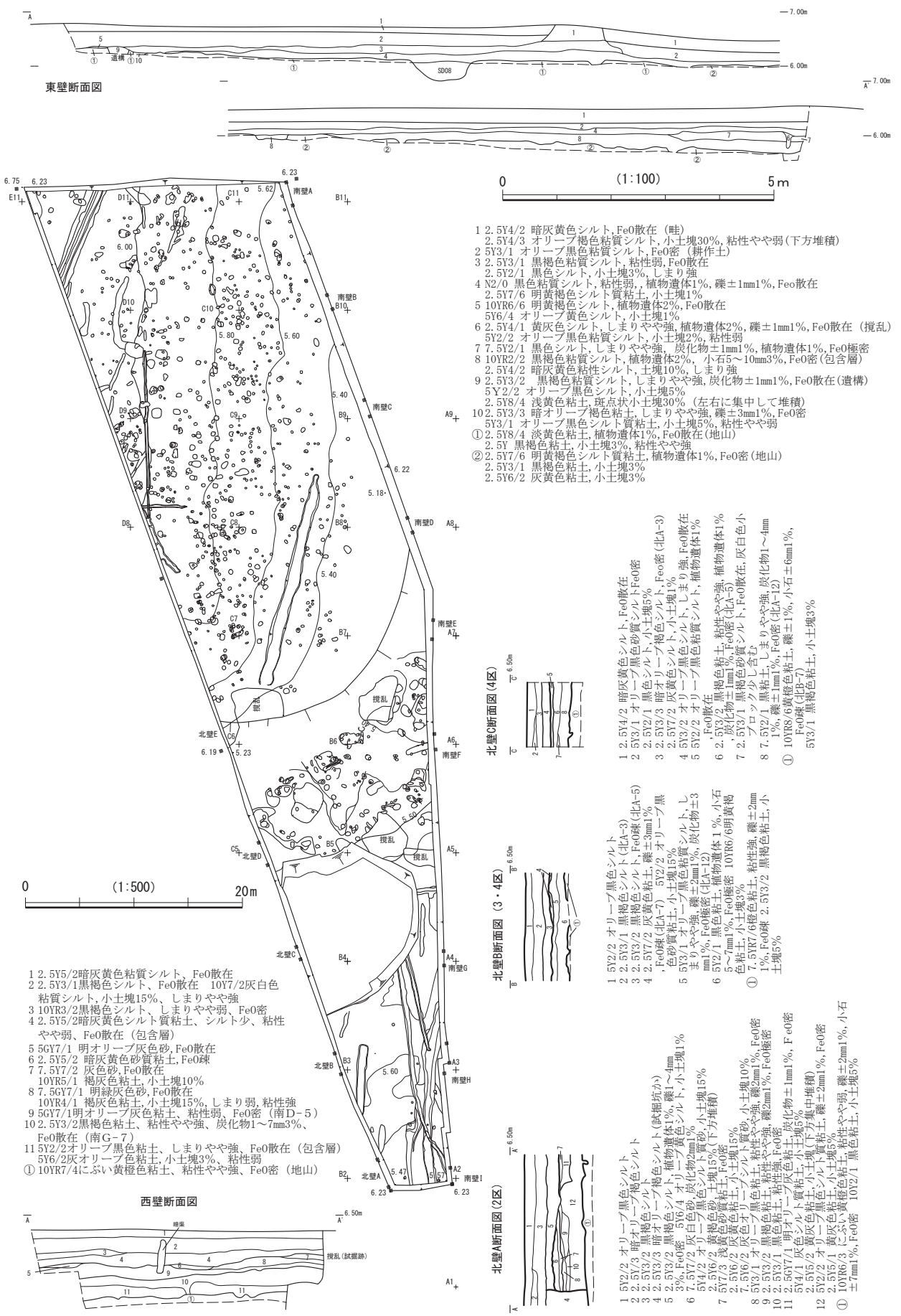
第６図　調査区グリッド配置・主要遺構配置図（S＝1/1000）

おり、柱間は梁間で約1.7～1.9m、桁行で約1.4～1.7mを測る。柱穴の平面形態は隅丸方形～不正方形が多く、一部で楕円形や不整円形を呈する。径は長軸で45～70cm程、深さは19～39cm程を測る。柱穴の覆土は概ね明オリーブ灰色～黒色であり、土層観察から柱痕跡が確認できるほか、SB02-P05やSB02-P07には柱根（第24図85・86、共にクリ）が残存しており、径10～20cm程の柱が据えられていたと考えられる。SB02はSB04とセットと思われる。

SB03（第14図、図版８）　１区東部C8グリッドで検出し、検出面は標高5.77～5.94m前後である。２間（3.4～3.7m）×２間（3.8～4.0m）の総柱式建物の倉庫で、主軸はN-11°-Eである。柱間や柱配列は比較的整っており、柱間は梁間約1.7～1.9m、桁行約1.9～2.1mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形、隅丸方形などである。径は長軸で約40～80cm、深さ約11～35cmを測る。柱穴の覆土は概ね明オリーブ灰色～黒色である。断面から、柱の径は10～15cm程と推定される。SB03-P08から須恵器横瓶の閉塞部分（第20図５）、SB03-P09から須恵器坏身（6）の破片が出土している。６の外面には少しの降灰がある。

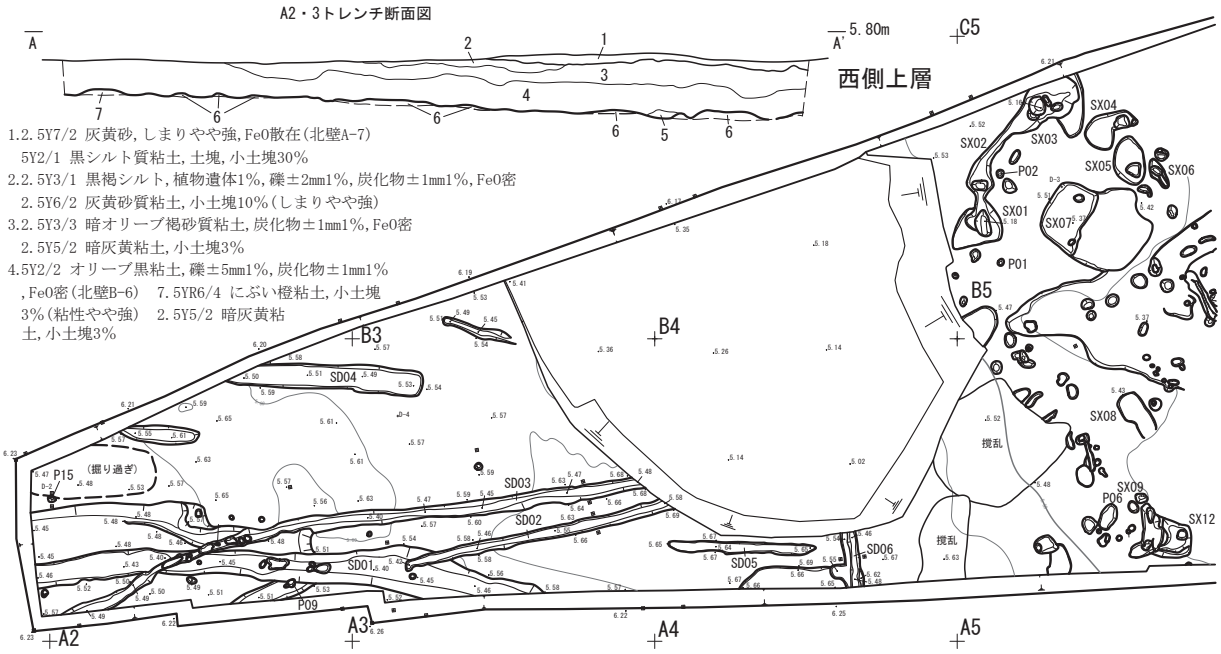
SB04（第15図、図版９）　１区東部B7・B8・C7・C8グリッドで検出し、検出面の標高は5.63～5.80mである。梁間と桁行の区別は難しいが、東西方向２間（3.5m）×南北方向２間（3.4～3.6m）の総柱建物で、主軸はN-6°-Wである。柱間や柱配列は比較的整っており、柱間は東西方向で約1.7～1.8m、南北方向で約1.6～1.9mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形、隅丸方形を呈する。径は長軸で30～40cm程、深さは10～33cm程である。柱穴の覆土は黄灰色～黒褐色である。SB04-P01とSB04-P04では柱根（第24図87・88、共にクリ）が残存していた。

第７図　１区全体図(S＝1/500)

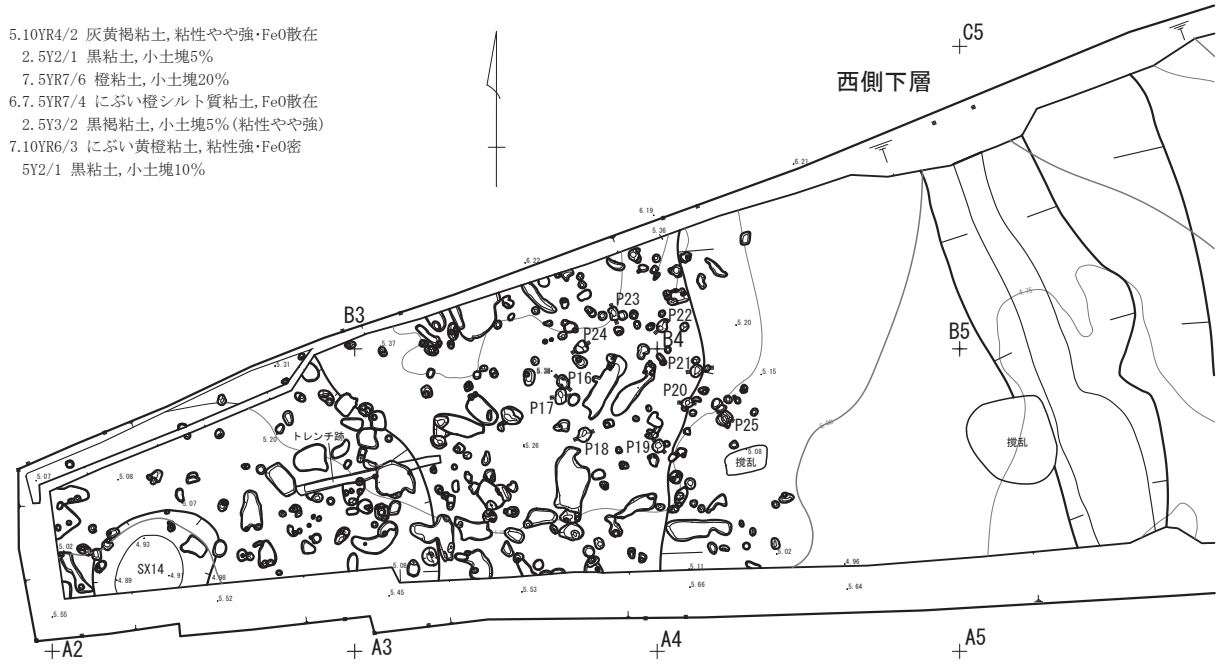


第８図　１区調査区壁断面図１（S＝1/500・1/100）

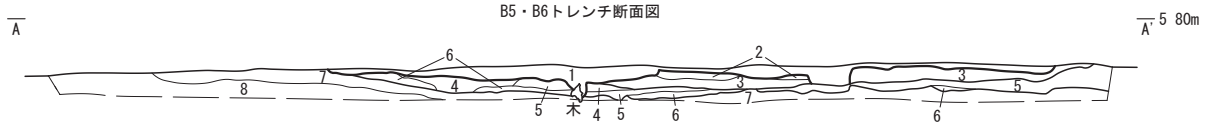
第９図　１区調査区壁断面図２(S＝1/100)



1.2.5Y7/2 灰黄砂，しまりやや強，FeO散在（北壁A-7）
5Y2/1 黒シルト質粘土，土塊，小土塊30%
2.2.5Y3/1 黒褐シルト，植物遺体1%，礫±2mm1%，炭化物±1mm1%，FeO密
2.5Y6/2 灰黄砂質粘土，小土塊10%（しまりやや強）
3.2.5Y3/3 暗オリーブ褐砂質粘土，炭化物±1mm1%，FeO密
2.5Y5/2 暗灰黄粘土，小土塊3%
4.5Y2/2 オリーブ黒粘土，礫±5mm1%，炭化物±1mm1%，FeO密（北壁B-6）　7.5YR6/4 にぶい橙粘土，小土塊3%（粘性やや強）　2.5Y5/2 暗灰黄粘土，小土塊3%



5.10YR4/2 灰黄褐粘土，粘性やや強・FeO散在
2.5Y2/1 黒粘土，小土塊5%
7.5YR7/6 橙粘土，小土塊20%
6.7.5YR7/4 にぶい橙シルト質粘土，FeO散在
2.5Y3/2 黒褐粘土，小土塊5%（粘性やや強）
7.10YR6/3 にぶい黄橙粘土，粘性強・FeO密
5Y2/1 黒粘土，小土塊10%

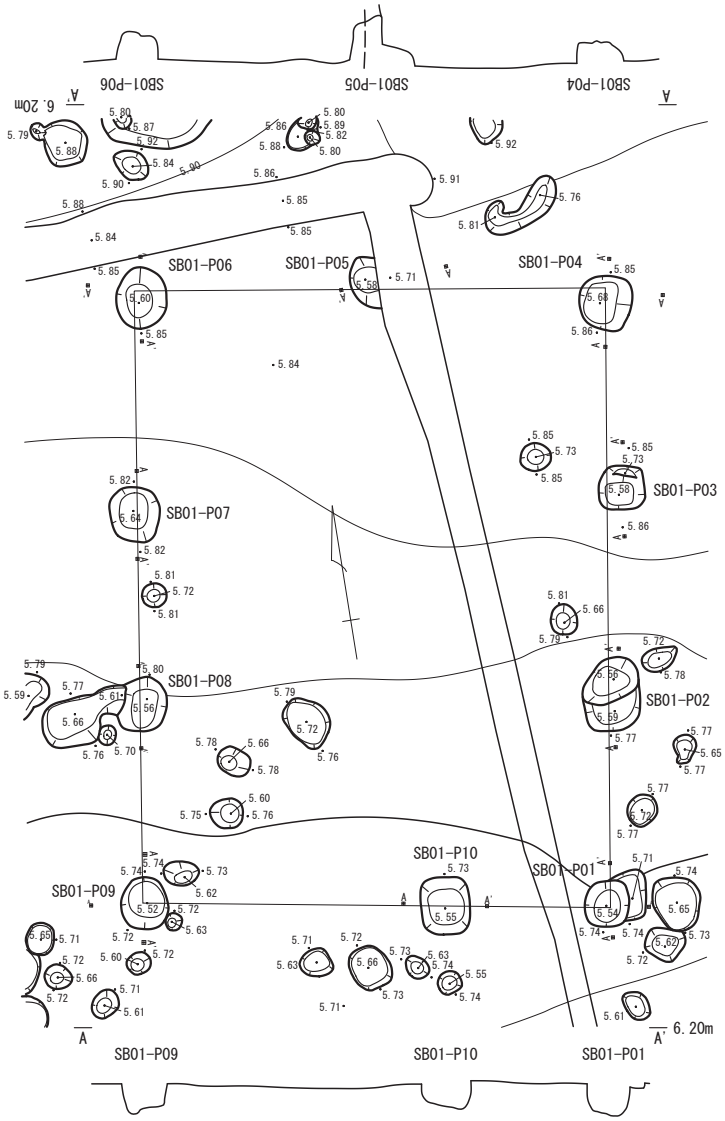


1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土，しまりやや強，植物遺体1%，FeO疎，木遺物あり（北壁D-4）
10Y7/1 灰白色粘土，小土塊10%
2 10Y6/2 オリーブ灰色粘土，しまりやや強，炭化物±2mm1%，FeO疎
2.5Y4/1 黄灰色粘土，小土塊1%
3 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土，植物遺体1%，FeO疎（北壁D-5）
10Y6/2 オリーブ灰色粘土，小土塊30%
5Y3/1 オリーブ黒色粘土，小土塊3%
4 10Y7/1 灰白色粘土，粘性やや強，FeO疎
7.5Y4/1 に灰色粘土，小土塊10%
5 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土，しまりやや強・FeO疎（北壁D-6）
2.5Y4/1 黄灰色粘土，小土塊10%（粘性やや強）
6 5GY7/1 明オリーブ灰色粘土，粘性やや強，炭化物±2mm1%，FeO疎
5Y3/1 オリーブ黒色粘土，小土塊20%
7 2.5Y3/2 黒褐色粘土，粘性やや強・FeO疎
10Y6/2 オリーブ灰色粘土，小土塊1%
8 7.5Y3/1 黒色粘土，しまりやや強・植物遺体1%，FeO散在
5Y3/2 オリーブ黒色粘土，小土塊3%（粘性やや強）

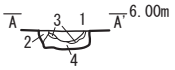
0　(1:250)　10m

第10図　１区部分図１（S＝1/250）

第11図　１区部分図２（S＝1/250）

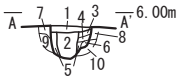


SB01-P04断面図



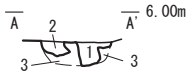
1 5Y2/2 オリーブ黒色粘土, Fe0散在
　2.5Y6/4 にぶい黄橙色粘土, 小土塊3%
2 2.5Y8/3 浅黄色粘土, Fe0散在
　2.5Y2/1 黒色粘土, 土塊30%(左方堆積)
3 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土, Fe0疎
　25Y4/1 黄灰色粘土, 小土塊30%
　2.5Y3/1 黒褐色粘土, 小土塊10%
4 2.5Y4/1 黄灰色粘土, Fe0疎
　2.5Y3/1 黒褐色粘土, 小土塊20%
　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土, 小土塊10%

SB01-P03断面図



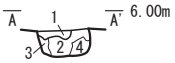
1 5Y3/2 オリーブ黒色粘土, Fe0疎
　10YR6/4 にぶい黄橙色粘土, 小土塊1%
2 10YR3/1 黒褐色粘土, Fe0散在
　2.5Y4/1 黄灰色粘土, 小土塊15%
3 2.5Y3/2 黒褐色粘土, Fe0疎
　2.5Y4/2 灰黄色粘土, 小土塊10%(下方堆積)
4 10YR5/2 灰黄褐色粘土, Fe0疎
5 2.5Y3/1 黒褐色粘土, Fe0散在
　2.5Y6/3 にぶい黄橙色粘土, 小土塊15%
　7.5Y7/2 灰白色粘土, 小土塊10%(3層より左に多量)
6 10YR4/1 褐灰色粘土, Fe0密
　2.5Y6/3 にぶい黄色粘土, 小土塊3%
7 2.5Y3/2 黒褐色粘土, Fe0散在
8 2.5Y3/2 黒褐色粘土, 炭化物±2mm1%, Fe0散在
　2.5Y6/4 にぶい黄橙色粘土, 小土塊10%(下方堆積)
9 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土, Fe0密
　2.5Y5/1 黄灰色粘土, 斑点状小土塊15%
10 2.5Y7/3 浅黄色粘土, Fe0散在
　2.5Y3/1 黒褐色粘土, 斑点状小土塊15%
　7.5Y8/2 灰白(やや緑色)色粘土, 小土塊10%

SB01-P02断面図



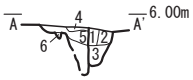
1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土, Fe0疎
　2.5Y6/3 にぶい黄色粘土, 小土塊1%
2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土, Fe0散在
　2.5Y3/2 黒褐色粘土, 小土塊15%(右方堆積)
3 7.5Y8/2 灰白(やや緑)色粘土, Fe0散在
　2.5Y4/1 黄灰色粘土, 小土塊10%

SB01-P06断面図



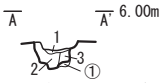
1 5Y2/2 オリーブ黒色粘土, Fe0散在
2 5Y3/1 オリーブ黒色粘土, Fe0散在
　2.5Y4/ 黄灰色粘土, 小土塊15%
3 7.5Y7/2 灰白色粘土, Fe0散在
　2.5Y3/2 黒褐色粘土, 小土塊10%(上方堆積)
4 2.5Y2/1 黒色粘土, 粘性やや強, Fe0疎
　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土, 小土塊15%(下方堆積)
　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土, 土塊10%(上方堆積)

SB01-P05断面図



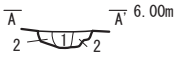
1 2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土, Fe0疎
2 5Y2/2 オリーブ黒色粘土, Fe0疎
3 2.5Y5/1 黄灰色粘土, Fe0疎
　2.5Y2/1 黒褐色粘土, 斑点状小土塊15%
　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土, 小土塊1%
4 10YR4/1 褐灰色粘土, しまりやや弱, Fe0散在(暗渠)
5 5Y2/2 オリーブ黒色粘土, Fe0疎(暗渠)
　2.5Y4/1 黄灰色粘土, 小土塊20%
6 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土, しまりやや弱, Fe0疎(暗渠)

SB01-P01断面図

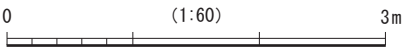


1 10YR3/1 黒褐色粘土, Fe0散在
2 10YR4/1 褐灰色粘土, しまりやや強, Fe0散在(左方に集中)　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土, 小土塊1%
3 7.5Y8/3 淡黄色粘土, Fe0疎
　2.5Y3/2 黒褐色粘土, 小土塊5%
① 7.5Y7/1 灰白色粘土, Fe0疎
　2.5Y3/2 黒褐色粘土, 小土塊5%

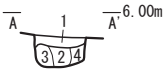
SB01-P07断面図



1 10YR4/1 褐灰色シルト質粘土, Fe0散在
2 2.5Y3/1 黒褐色粘土, Fe0散在
　2.5Y7/4 浅黄色粘土, 小土塊30%(1層より左方に多く、右方に少ない)

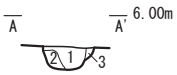


SB01-P08断面図



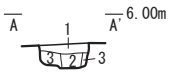
1 10YR4/1 褐色シルト質粘土, しまりやや強, 炭化物±2mm1%, Fe0散在
2 5Y2/2 オリーブ黒色シルト質粘土, 粘性弱, Fe0密
　2.5Y3/2 黒褐色粘土, 小土塊10%
3 2.5Y8/4 淡黄色粘土, Fe0散在
　2.5Y2/1 黒色粘土, 小土塊15%
4 10YR4/1 褐灰色粘土, Fe0疎
　7.5Y8/2 灰白(やや緑色)色粘土, 小土塊20%(下方堆積)

SB01-P09断面図



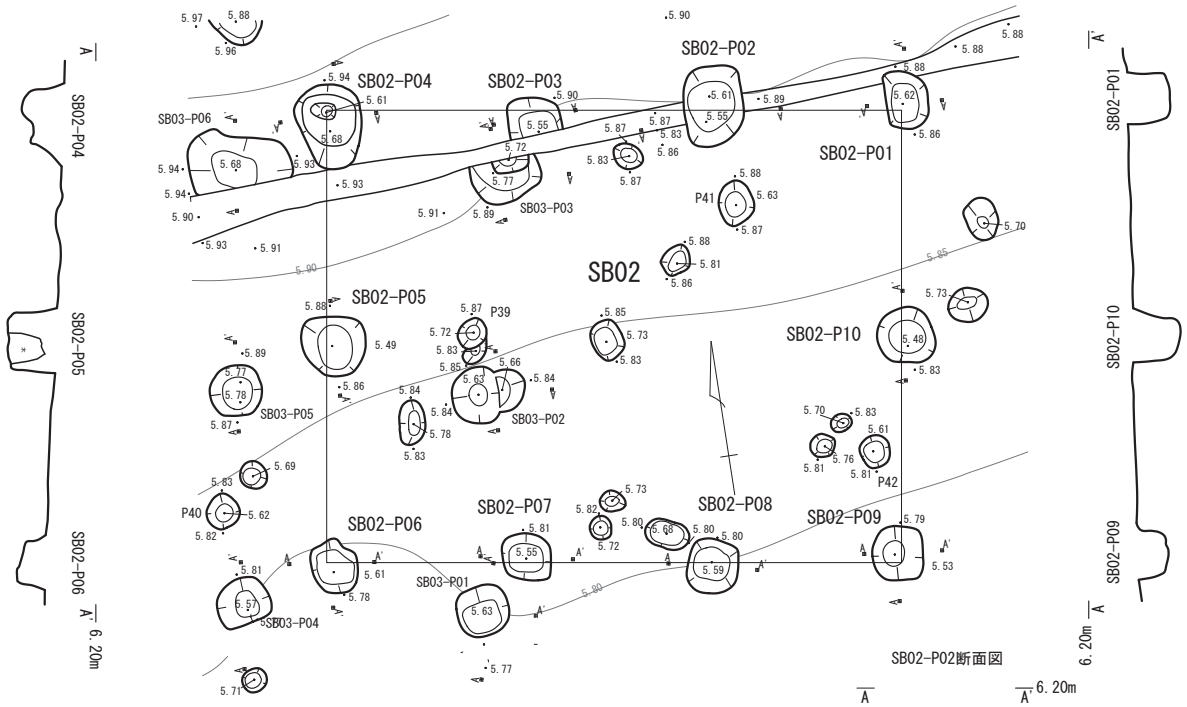
1 5Y2/2 オリーブ黒色シルト質粘土, 粘性弱, Fe0疎
2 5Y3/1 オリーブ黒色粘土, Fe0散在
　5Y6/4 オリーブ黄色粘土, 斑点状小土塊15%
3 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土, Fe0散在
　2.5Y3/1 黒褐色粘土, 小土塊10%

SB01-P10断面図

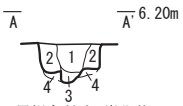


1 5Y2/2 オリーブ黒色シルト質粘土, 粘性弱, Fe0散在
2 5Y2/2 オリーブ黒色シルト質粘土, Fe0散在
　10YR5/1 褐灰色粘土, 小土塊15%
3 2.5Y3/1 黒褐色粘土, Fe0散在
　7.5Y7/3 浅黄(やや緑)色粘土, 小土塊20%

第12図　１区SB01実測図(S＝1/60)

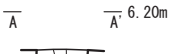


SB02-P04断面図



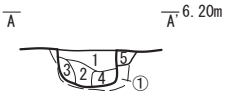
1 10YR3/1 黒褐色粘土,炭化物4mm1%,FeO疎
　2.5Y7/4 浅黄色粘土,小土塊2%
2 2.5Y3/1 黒褐色砂質粘土,FeO散在
　7.5Y7/3 浅黄色(やや緑)粘土,斑点状小土塊30%
　5Y2/2 オリーブ黒色粘土,小土塊15%(下方堆積)
3 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,しまり弱,粘性やや強,FeO疎
　5Y3/2 オリーブ黒色粘土,小土塊5%
4 暗灰色粘土,浅黄色粘土ブロック多い

SB02-P03断面図



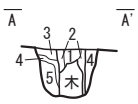
1 10YR2/2 黒褐色粘土,しまりやや強,FeO散在
2 10YR13/1 黒褐色粘土,FeO疎
　7.5Y7/1 灰白色粘土,小土塊10%

SB02-P02断面図



1 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト,しまりやや強,粘性やや弱,FeO散在
　5Y2/2 オリーブ黒色粘添,小添塊15%
　2.5Y7/4 浅黄色粘土,小土塊1%
2 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土,しまりやや強,粘性やや強,FeO疎
　2.5Y3/1 黒褐色粘土,小土塊10%,粘性やや弱
　2.5Y8/3 淡黄色粘土,斑点状小土塊3%
3 2.5Y3/1 黒褐色粘土,粘性やや弱,FeO密
　5Y8/3 淡黄(やや緑)色粘土,土塊30%
4 5Y2/2 オリーブ黒色粘土,斑点状小土塊30%,粘性やや弱,FeO疎
　2.5GY7/2 明オリーブ灰色粘土,斑点状小土塊30%,粘性やや弱
5 10YR3/1 黒褐色粘土,しまりやや強,FeO散在(暗渠の落込み？)
① 2.5GY8/1 灰(やや緑)色粘土,しまりやや強,粘性強,FeO疎
　2.5Y4/1 黄灰色粘土,小土塊10%
　2.5Y6/2 灰黄色粘土,土塊20%(上方堆積)

SB02-P05断面図

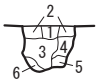


1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土,木製品(柱)あり,FeO疎
　2.5Y4/1 黄灰色粘土,小土塊5%
2 2.5Y4/1 黄灰色粘土,FeO散在
　10YR6/1 褐灰色粘土,小土塊10%
　2.5Y7/4 浅黄色粘土,小土塊1%
3 10YR4/1 褐灰色粘土,FeO疎
　2.5Y7/3 浅黄色粘土,土塊40%
4 5Y2/1 黒色粘土,FeO散在
　7.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,小土塊15%
5 10YR4/1 褐灰色粘土,FeO疎
　10Y7/2 灰白色粘土,斑点状小土塊40%

SB02-P01断面図

1 2.5Y2/1 黒色シルト質粘土,FeO疎
　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土,小土塊3%
2 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO散在
　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,斑点状小土塊10%
3 2.5GY 明オリーブ灰色粘土,FeO疎
　2.5Y2/1 黒色粘土,小土塊10%

SB02-P10断面図

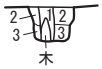


1 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO疎
2 2.5Y2/1 黒色粘土,FeO散在
　2.5Y7/3 浅黄色粘土,小土塊1%
3 7.5Y2/1 黒色粘土,粘性やや強,FeO疎
　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,斑点状小土塊3%
4 5Y2/2 オリーブ黒色粘土,FeO散在
　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,小土塊10%
5 2.5Y4/1 黄灰色粘土,しまりやや弱,FeO疎
　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,土塊10%
6 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,FeO疎
　2.5Y2/1 黒色粘土,土塊30%(下方堆積)

SB02-P06断面図

1 10YR5/1 褐灰色粘土,FeO散在
　7.5Y7/2 灰白色粘土,小土塊3%
2 10YR2/1 黒色粘土,FeO疎
　7.5Y7/3 浅黄色(やや緑) 粘土,小土塊15%
　(1層より右に多量,左に少量)
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土,小土塊5%,
　しまりやや強(左方堆積)

SB02-P07断面図

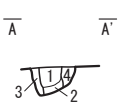


1 10YR3/1 黒褐色粘土,木製品(柱)あり,FeO散在
　10YR3/2 灰黄褐色粘土,しまり弱,粘性やや強
2 5Y2/2 オリーブ黒色粘土,しまりやや弱,FeO疎
　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土,斑点状小土塊15%
　7.5Y7/2 灰白色粘土,斑点状小土塊5%
3 10YR3/2 灰黄褐色粘土,しまり弱,FeO疎
　(1層より左方側に黄粗砂含む)
　7.5Y7/2 灰白色粘土,斑点状小土塊2%

SB02-P08断面図

1 7.5Y2/1 黒色粘土,FeO疎
　10Y7/2 灰白(やや緑)色粘土,小土塊5%,しまりやや弱(下方堆積)
2 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO散在
　10Y7/2 灰白(やや緑)色粘土,小土塊30%(1層より左は下方堆積)
2b 灰白色粘土少ない

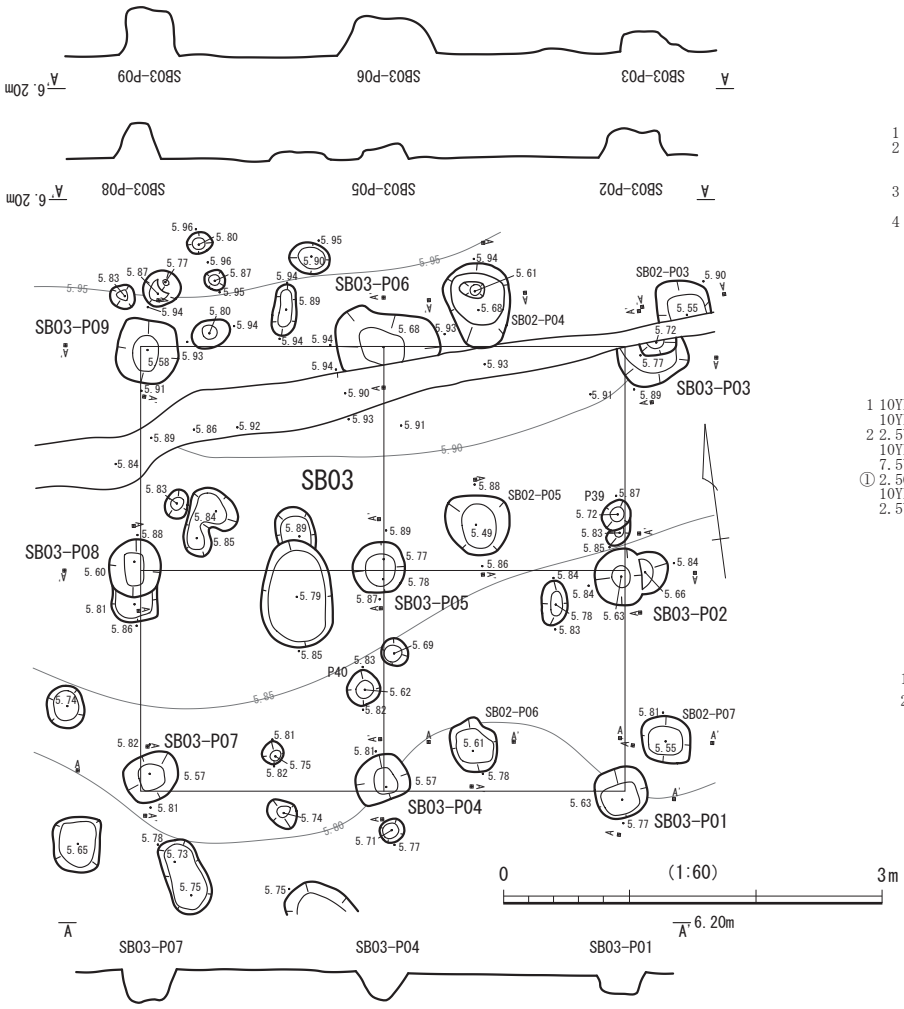
SB02-P09断面図



1 10YR3/1 黒褐色粘土,しまりやや強,FeO疎
2 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO散在
　2.5Y7/3 浅黄色粘土,斑点状小土塊10%
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土,小土塊3%
3 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO散在
　2.5Y7/3 浅黄色粘土,小土塊10%
　5Y3/1 オリーブ黒色粘土,土塊10%(下方堆積)
4 5Y2/1 黒色粘土,しまりやや弱,粘性やや強,FeO散在
　2.5Y7/3 浅黄色粘土,小土塊5%

0　(1:60)　3m

第13図　１区SB02実測図(S＝1/60)



SB03-P03断面図

1 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO疎
2 2.5Y2/1 黒色粘土,FeO密
2.5Y5/2 暗灰黄色粘土,小土塊15%
2.5Y6/4 にぶい黄色粘土,斑点状小土塊10%
3 10YR3/1 黒褐色粘土,しまりやや強,FeO疎
2.5Y6/2 灰黄色粘土,小土塊30%
4 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土,しまりやや強,FeO密
5Y2/2 オリーブ黒色粘土,小土塊10%
2.5Y6/4 にぶい黄色粘土,斑点状小土塊15%

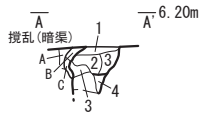
SB03-P02断面図

1 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO疎
10YR4/1 褐灰色粘土,小土塊5%（上方堆積）
2 2.5Y2/1 黒色粘土,FeO疎
10YR4/2灰黄褐色粘土,小土塊5%（上方堆積）
7.5Y7/2灰白色粘土,土塊20%
① 2.5GY7/2明オリーブ灰色粘土,FeO散在
10YR4/1 褐灰色粘土,小土塊10%,しまりやや強
2.5Y7/4浅黄色粘土,小土塊15%

SB03-P01断面図

1 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土,FeO疎
2 2.5Y3/1 黒褐色粘土,FeO散在
7.5Y7/3 浅黄色粘土,小土塊10%

SB03-P06断面図

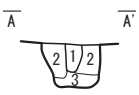


1 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO疎
2.5Y7/4 浅黄色粘土,斑点状小土塊1%
2 5Y2/1 黒色粘土,FeO疎
2.5Y6/3 にぶい黄色粘土,小土塊1%
3 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土,FeO散在
2.5Y8/3 浅黄色粘土,斑点状小土塊30%,
(2層の左下方に集中)
4 5Y4/1 灰色粘土,FeO疎
7.5Y8/2 灰白色粘土,小土塊15%
A (暗渠)
B 5Y3/1 オリーブ黒色粘土,FeO疎(暗渠)
2.5Y4/2 暗灰黄色粘土,小土塊10%
C 2.5Y3/1 黒褐色粘土,FeO疎(暗渠)
10YR5/1 褐灰色粘土,小土塊15%

SB03-P05断面図

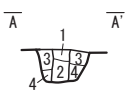
1 2.5Y2/1 黒色粘土,FeO散在
2.5Y6/4 にぶい黄色粘土,小土塊
① 7.5Y7/1 灰白色粘土,FeO散在
2.5Y4/1 黄灰色粘土,小土塊5%

SB03-P09断面図



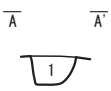
1 10YR2/1 黒色粘土,礫±3mm1%,FeO疎
7.5Y7/2 灰白色粘土,斑点状小土塊3%(下方に集中)
2 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO散在
7.5Y7/2 灰白色粘土,斑点状小土塊20%(1層よりも右に多い)
3 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,しまりやや弱,FeO疎
2.5Y5/1 黄灰色粘土,小土塊10%,しまりやや弱

SB03-P08断面図



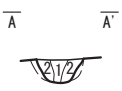
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土,FeO疎
2.5Y7/4 浅黄色粘土,小土塊7%
2 10YR3/1 黒褐色粘土,FeO疎
10Y7/1 灰白色粘土,小土塊1%
3 5Y3/2 オリーブ黒色粘土,FeO散在
10Y7/1 灰白色粘土,斑点状小土塊40%
4 7.5Y4/1 灰白色粘土,粘性やや強,FeO疎
2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,小土塊30%,粘性強

SB03-P07断面図



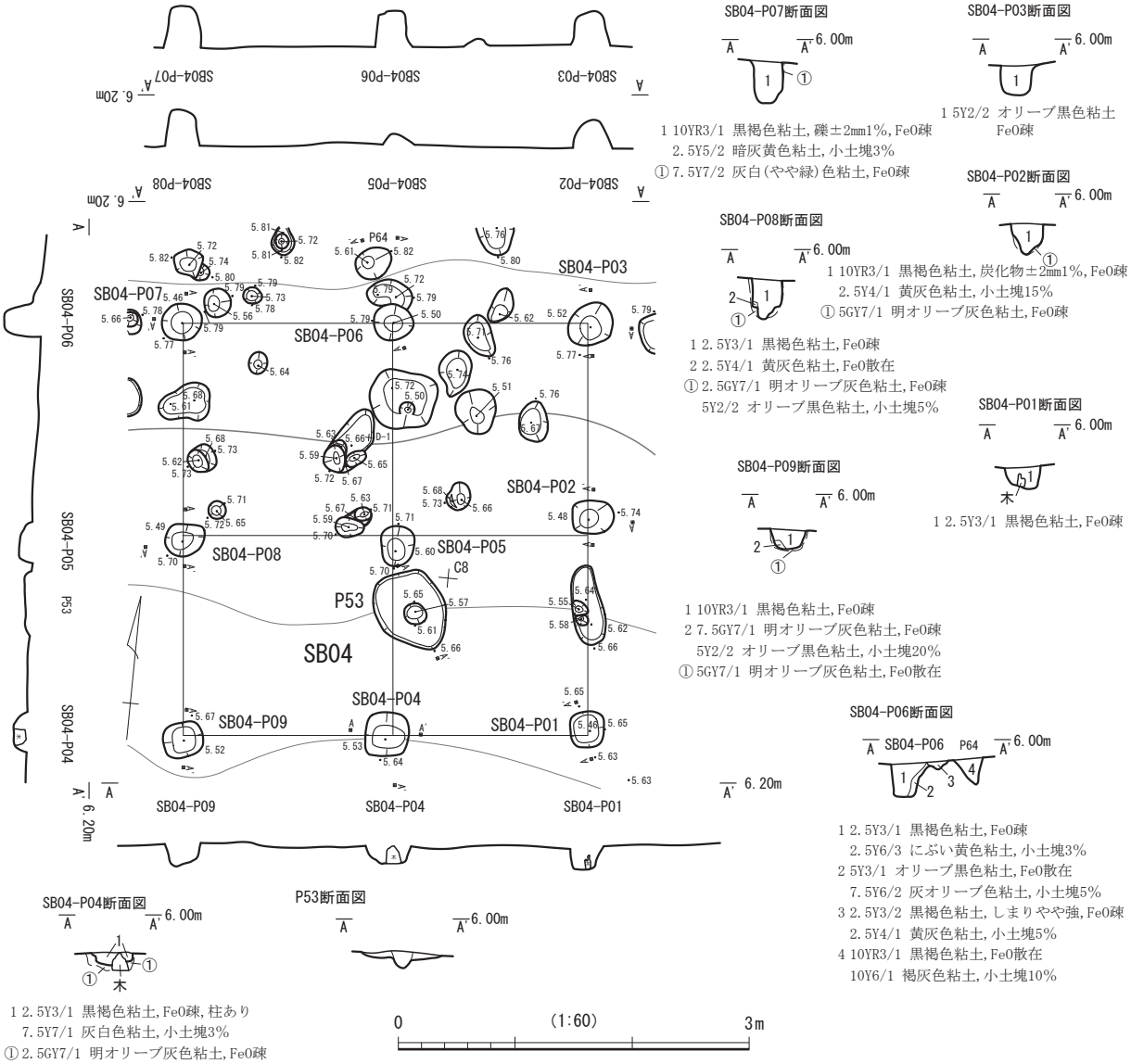
1 2.5Y5/2暗灰黄色粘土,しまりやや強,FeO散在
2.5Y7/4 浅黄色粘土,斑点状小土塊5%
2.5Y3/1 黒褐色粘土,小土塊10%

SB03-P04断面図



1 7.5Y2/2 オリーブ黒色粘土,FeO散在
2.5GY7/2 明オリーブ灰色粘土,小土塊10%（下方堆積）
2 2.5Y2/1 黒色粘土,FeO散在
2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土,斑点状小土塊10%

第14図　１区SB03実測図(S＝1/60)



第15図　１区SB04実測図(S＝1/60)

２．溝

SD01（第16図、図版３）　１区西部A2・3グリッドで検出し、検出面の標高は5.44～5.58mである。長さ15m程で両端とも調査区外へ延び、SD02・03に切られている。幅は70～160cm程で、深さは５～15cm程である。平面形は緩い弧を描いている。断面形はやや不整形な半円状で、覆土は概ね灰色～黒褐色である。縄文土器深鉢（第20図７）や須恵器甕体部下半(8)などを図化した。７はLR縄文を持つ。８の外面は剥離する。

SD02（第16図、図版３）　１区西部A3･4グリッドで検出した。検出面は標高5.54～5.69mで、長さ8.8m程を確認している。幅約30～50cm、深さ約９～12cmを測る。平面形は直線的で、主軸はN-77°-Eである。断面形は不整形な半円状で、覆土は概ね灰色～黄灰色である。縄文土器深鉢（第20図９）、須恵器坏蓋(10)、須恵器壺(11)などを図化した。10は弱い稜を持つ蓋である。

SD03（第16図、図版３）　１区西部A2・3グリッドで検出し、検出面の標高は5.47～5.68mである。長さ約18.7mを確認した。幅は30～50cm程で、深さは４～27cm程である。溝西部が南に向かって緩く曲がる平面形を呈し、断面形は逆台形状である。溝の覆土は黄灰色～オリーブ黒色である。

SD04（第16図、図版３）　１区西部A2・3グリッドで検出し、検出面は標高5.54～5.59mである。溝の西側が調査区外へと延びているが、２区において溝の続きは検出されなかった。１区では長さ６m程を確認しており、幅は約60～90cm、深さは約１～８cmを測る。直線的な平面形を呈し、主軸はN-86°-Wである。溝からは須恵器高坏（第20図12）や近代のものとみられる板状木製品（第24図89）などが出土した。

SD05（第16図、図版３）　１区西部A4グリッドで検出し、検出面の標高は5.65～5.67mである。全長約4.9m、幅約30～40cmを測り、深さは２～３cm程と浅い。平面形は直線的で、主軸はN-89°-Wである。縄文時代に属する珪質頁岩の石核（第22図65）などが出土した。

SD06（第16図、図版３）　１区西部A4グリッドで検出した。検出面は標高5.65m前後で、長さ1.8m程を確認した。幅約50～100cm、深さ約５～23cmを測る。主軸はN-8°-Wである。断面形は浅い皿状で中央付近が一段深くなり、溝の覆土は灰白色～オリーブ黒色である。

SD08（第17図、図版11）　１区北東隅D10･11グリッドで検出し、検出面の標高は6.05～6.12mである。１区では長さ9.3m程が確認され、２区のSD11・12へと続く。幅1.3～1.7m程、深さは３～40cm程で、主軸はN-68°-Wである。断面形は半円状～逆台形状で、覆土は明黄褐色～黒褐色で、堆積課程は３断面とも３段階ある。２区ではSD10・11（第47図）に繋がり、中～近世と思われる。古墳時代の土師器高坏（第20図13）や古代末の内黒有台埦(14)、縄文時代の石錘（第22図66・67）などを図化した。

SD09（第11図）　１区中央付近B6・7・8グリッドで検出し、検出面は標高5.44～5.53mである。SD番号を付して調査を行ったが、圃場整備前の用水路（攪乱）と思われ、２区撹乱12に繋がる。縄文時代の不明石製品（第22図68）、中世の土師皿（第20図15）、加賀焼甕(16)、越前焼甕(17)などを図化した。

SD10（第17図）　１区北東部D9グリッドで検出し、検出面は標高6.02～6.05mである。全長約3.6m、幅約20～30cmを測り、深さは２～７cm程と浅い。平面形は直線的で、主軸はN-68°-Wである。途切れながら、C10区まで繋がるようである。断面形は逆台形状で、覆土はオリーブ黒色である。須恵器坏身（第20図18）などが出土した。

SD10西（第17図）　１区北東部D9グリッドで検出した。検出面の標高は6.03～6.07mで、長さ1.7m程を確認した。幅は約20～30cm、深さは４cm程だった。主軸はN-80°-Wである。断面形は逆台形状で、覆土は黄灰色である。２区SD14に繋がるようである。

SD01～03, P15

0　平面（1:150）　10m

(掘り過ぎ)

SD01断面図

1　2.5Y3/2　黒色褐砂質シルト, しまりやや強, 炭化物1～4mm1%, FeO散在
2　5Y4/2　灰色オリーブ砂質シルト, FeO散在
3　10Y6/1　灰色シルト, しまり強, 炭化物1～3mm1%, FeO疎
　5Y3/1　オリーブ黒色砂, 土塊10%
4　暗渠
5　2.5Y4/2　暗灰黄色砂, FeO疎(暗渠掘り方)
　10Y6/2　オリーブ灰色砂, 土塊15%
①　10Y5/1　灰色砂, FeO散在

SD02断面図

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト, しまり強, FeO散在
2　5Y6/2　灰色オリーブシルト, しまり強, FeO疎
　5Y2/1　黒色砂, 小土塊5%
3　10Y6/1　灰色シルト, FeO散在
　2.5Y4/1　黄灰色シルト, 小土塊30%
4　5Y7/3　浅黄色砂質シルト, しまり強, FeO疎
5　2.5Y4/1　黄灰色シルト, 植物遺体1mm, FeO散在
6　5Y6/2　灰色オリーブシルト, FeO疎
　2.5Y2/1　黒色粘土, 小土塊3%
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土, FeO密

P15断面図

1　10Y6/2　オリーブ灰色砂質粘土, FeO密, 柱有り
　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土, 小土塊10%
　N2/0　黒色粘土, 小土塊1%
①. 5Y2/2　オリーブ黒色粘土, 粘性やや強, FeO密(北壁A-8)
　(木は一度抜かれている)

SD03断面図

1 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト, しまりやや強, FeO散在
　7.5Y7/2 灰色シルト, 小土塊5%
2 5Y3/2 オリーブ黒色砂質シルト, FeO密
　5Y6/2 灰色オリーブシルト, 小土塊3%
3 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト, しまりやや強, FeO散在,
　黒色ブロックやや多く含む
　7.5Y7/2 灰色シルト, 土塊30%(北壁A-7)
4 5Y3/1 オリーブ黒色粘土, FeO散在
5 7.5Y7/2 灰色シルト, FeO疎, 黒色粒子少し含む
① 2.5Y3/2 黒褐色粘土, 植物遺体1mm, FeO密

SD06断面図

1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土, 粘性やや強, FeO疎
　10Y6/2 オリーブ灰色粘質シルト, 小土塊３%
2 5Y4/1 灰色粘土, 粘性強, FeO疎
　10Y7/1 灰白色粘土, 小土塊7%
① 10Y7/1 灰白色粘土, 粘性強, FeO散在(北壁A-7)
　5Y3/1 オリーブ黒色粘土, 小土塊3%, 粘性強
② 2.5Y3/1 黒褐色粘土, 粘性強, FeO散在
③ 7.5Y2/1 オリーブ黒色粘土, 粘性強, FeO疎

P13断面図

1 10YR4/1 褐灰色粘土, FeO散在
　7.5Y7/2 灰色粘土, 小土塊5%
① 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土, FeO散在
　2.5Y4/1 黄灰色粘土, 小土塊15%

P13, SD12

SD12(A)断面図

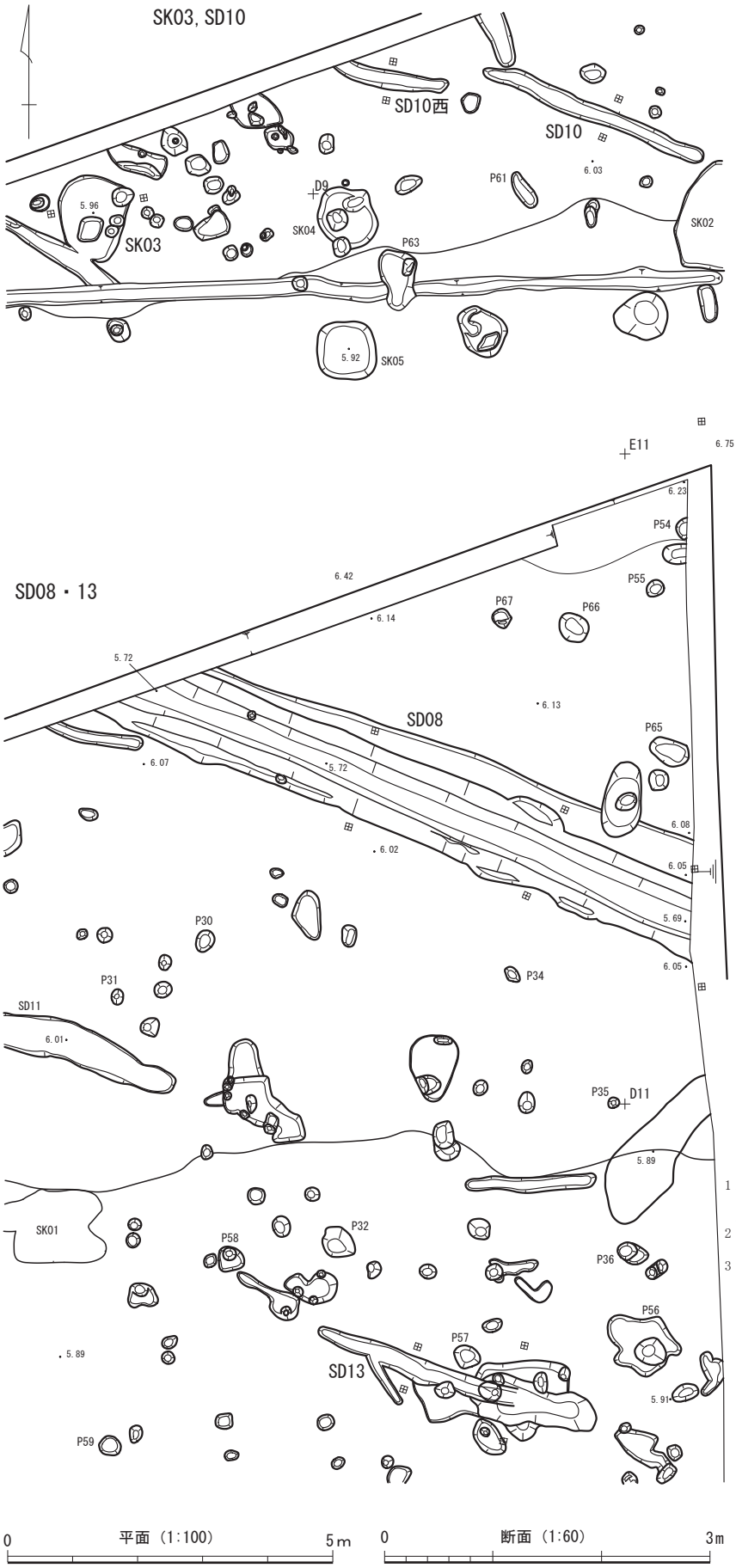
1 10YR3/1 黒褐色粘土, しまり強, 粘性やや弱, FeO疎
2 2.5Y5/3 黄褐色粘土, しまりやや強, 粘性やや弱, FeO疎
　2.5Y2/1 黒褐色粘土, 小土塊5%, しまりやや強
3 2.5Y5/2 暗黄色粘土, しまりやや強, FeO疎
　10Y7/1 灰白(やや青)色粘土, 土塊30%, 粘性やや強
① 10YR8/2 灰黄褐色粘土, 粘性弱, FeO散在（風倒木）
　10YR2/2 黒褐色粘土, 小土塊10%(下方堆積)
　7.5Y2/2 灰白色粘土, 小土塊15%

SD12(B)断面図

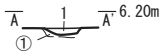
1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト, FeO疎(撹乱)
　5Y3/1 オリーブ黒色粘土, 小土塊3%
2 10YR2/2 黒褐色粘土, 粘性やや強, FeO散在
　5Y3/2 オリーブ黒色粘土, 小土塊2%,
　しまりやや強(右方堆積)
① 5Y3/2 オリーブ黒色粘土, 粘性やや強,
　FeO散在(風倒木)
　10YR2/1 黒褐色粘土, 小土塊5%

0　断面（1:60）　3m

第16図　１区遺構図１（S＝1/150・1/60）

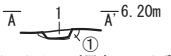


SD10西側断面図



1 2.5Y4/1 黄灰色粘土, 炭化物±1mm1%, FeO密
2.5Y2/1 黒色粘土, 斑点状小土塊3%
① 2.5Y7/2 灰黄色粘土, FeO密

SD10断面図



1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土, 粘性弱, FeO散在
① 2.5Y7/4 浅黄色粘土, FeO散在

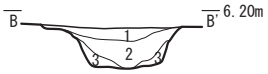
SK03断面図

1 10YR3/1 黒褐色粘土, 粘性やや弱, FeO散在
2.5Y5/3 黄褐色シルト, 小土塊5%
2 5Y3/1 オリーブ黒色粘土, しまりやや強, FeO疎
10Y7/1 灰白色粘土, 小土塊3%

SD08(A)断面図

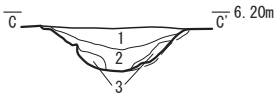
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土, しまりやや強, 粘質弱, 礫1～4mm1%, 炭化物±2mm1%, FeO散在
2.5Y3/1 黒褐色粘土, 斑点状小土塊20%
2 5Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土, しまりやや弱, 礫±2mm1%, FeO散在
3 10YR3/1 黒褐色粘土, しまりやや弱, 粘質弱, FeO疎
10Y8/2 灰白(やや緑)色粘土, 斑点状小土塊15%
(2層より左方に多く、右方に少ない)

SD08(B)断面図



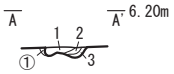
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土, しまりやや強, 粘質弱, 礫1～4mm1%, 炭化物±2mm1%, FeO散在
2.5Y3/1 黒褐色粘土, 斑点状小土塊20%
2 5Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土, しまりやや弱, 礫±2mm1%, FeO散在
3 10YR3/1 黒褐色粘土, しまりやや弱, 粘質弱, FeO疎
10Y8/2 灰白(やや緑)色粘土, 斑点状小土塊15%
(2層より左方に多く、右方に少ない)

SD08(C)断面図



1 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土, しまりやや強, 粘質弱, 礫1～4mm1%, 炭化物±2mm1%, FeO散在
2.5Y3/1 黒褐色粘土, 斑点状小土塊20%
2 5Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土, しまりやや弱, 礫±2mm1%, FeO散在
3 10YR3/1 黒褐色粘土, しまりやや弱, 粘質弱, FeO疎
10Y8/2 灰白(やや緑)色粘土, 斑点状小土塊15%
(2層より左方に多く、右方に少ない)

SD13(A)断面図



1 5Y2/2 オリーブ黒色粘土, しまりやや強, 粘性やや強, FeO散在　10YR7/3 にぶい黄橙色粘土, 小土塊15%, 粘性やや強
2 10YR7/6 明黄褐色粘土, しまりやや強, 粘性やや強, FeO散在
3 2.5Y3/1 黒褐色粘土, しまりやや強, FeO散在
① 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土, FeO散在

第17図　１区遺構図２（S＝1/100・1/60）

SD11・SK02など（第11・19図、図版２）　１区北東部D9・10グリッドで検出し、検出面は標高6.03～6.05mである。長さ6.7m程、幅約35～70cm、深さ約１～４cmを測り、平面形はくの字状を呈する。調査中は、周溝を持つ建物と想定したが、主柱穴と思われる柱穴は確認できなかった。須恵器無台坏（19、Ⅵ期）を図化した。

SD12（第16図）　１区北端C7・8グリッドで検出し、検出面の標高は5.92～6.00mである。長さ５m前後を確認した。幅は40～50cm程、深さは３～22cm程を測る。主軸は西部がN-48°-E、やや屈曲してN-66°-Eである。断面形は逆台形状を呈するとみられ、覆土は暗灰黄色～黒褐色である。土師器甕（第20図20）のほか、須恵器坏身（21）、須恵器高坏（22）などを図化した。

SD13（第17図）　１区東端C10グリッドで検出し、検出面は標高5.89～5.92mである。長さ約3.2m前後、幅20～40cm程、深さ５～12cm程である。主軸はN-71°-Wである。断面形は不整形な半円状で、覆土は明黄褐色～黒褐色である。

３．土　　坑（SK）

SK03（第17図）　１区北端C・D8グリッドで検出した。検出面は標高6.02～6.04mで、平面形は楕円形を呈する。長軸約1.4m、短軸約１mを測り、深さは７～９cmと浅い。断面形は浅い半円状である。須恵器の甕（第20図23）や坏蓋（24）などを図化した。24の天井部はロクロケズリであり、やや摩滅している。

４．小　　穴

番号を付した小穴は67基を数える。掘立柱建物の柱穴として柱列を捉えられたもの以外にも、建物プランの復元には至らなかったが柱根が残存する柱穴なども複数確認できたため、断面図を作成したものの中から以下に記述する。

P05（第18図）　１区東部B8グリッドで検出し、検出面の標高は5.4m前後である。平面形は隅丸方形を呈し、長軸36cm、深さ14cmを測る。柱根（第24図90）が残存していた。

P07（第11・18図、図版11）　１区中央付近A6グリッドで検出した。検出面は標高5.37mで、平面形は楕円形を呈する。長軸54cm、深さ28cmを測る。縄文土器深鉢（第20図25）が出土した。厚さ12～13mmと厚く、全体に摩滅するが、大粒のRL縄文を持ち、底部はナデ・ミガキである。大粒の砂粒を多く含み、体部には少し煤が付着する。

P13（第16図）　１区北端C7グリッドで検出し、検出面の標高は5.85m前後である。平面形は円形を呈し、径約30cm、深さは12cm程を測る。覆土は褐灰色である。

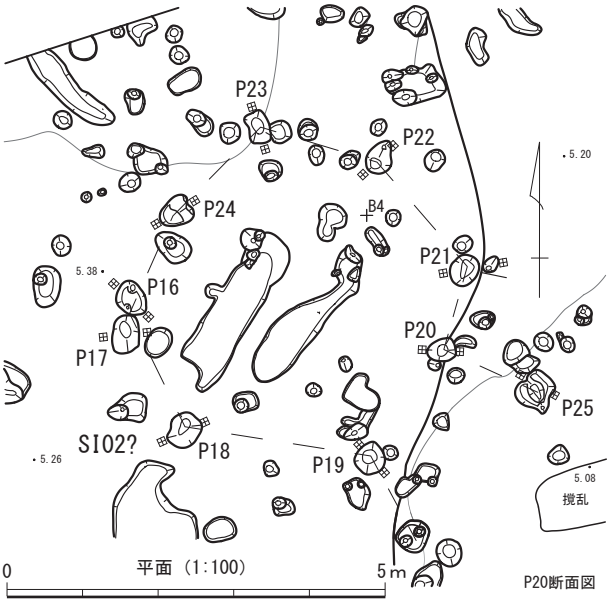
P15（第10・18図）　１区西端A2グリッドで検出し、検出面は標高5.45m前後である。平面形は楕円形を呈し、長軸27cm、深さ９cmを測る。覆土はオリーブ灰色で、柱根（第24図91）が残存していた。

P16（第18図、図版４）　１区西部２面のA3グリッドで検出し、検出面の標高は5.36～5.38mである。平面形は楕円形を呈し、長軸47cm、深さ12～19cmを測る。覆土はにぶい黄色～オリーブ黒色である。

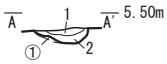
P17（第18図、図版４）　１区西部２面のA3グリッドで検出し、検出面は標高5.36mである。平面形は方形で、長軸約50cm、深さ８cmを測る。覆土は黄灰色～オリーブ黒色である。

P18（第18図、図版４）　１区西部２面のA3グリッドで検出し、検出面は標高5.31～5.33mである。平面形は楕円形を呈し、長軸49cm、深さ５～19cmを測る。柱痕跡らしき土層が確認でき、覆土は黒褐色～オリーブ黒色である。

P19（第18図、図版４）　１区西部２面のA3・4グリッドで検出し、検出面の標高は5.25m前後である。平面形は円形で、径約40cm、深さ９cmを測る。覆土は暗オリーブ褐色～黒色である。

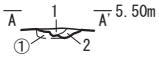


P16断面図



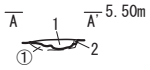
1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土，しまりやや強，礫±2mm1%，FeO疎
2. 5Y4/2 暗灰色黄色粘土，小土塊3%，粘性やや強
2 2. 5Y6/4 にぶい黄色粘土，粘性強，礫±1mm1%，FeO疎
2. 5Y4/1 黄灰色粘土，土塊40%（右方堆積）
2. 5Y3/1 黒褐色粘土，小土塊3%
① 2. 5Y7/4 浅黄色粘土，粘性強，しまりやや弱，FeO疎
5Y2/2 オリーブ黒色粘土，小土塊5%

P17断面図



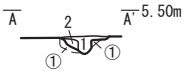
1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土，FeO散在
2. 5Y7/3 浅黄色粘土，小土塊5%，粘性やや強
2 2. 5Y4/1 黄灰色粘土，粘性強，FeO散在
5Y3/1 オリーブ黒色粘土，小土塊3%
2. 5Y6/4 にぶい黄色粘土，小土塊3%
① 2. 5Y6/2 灰黄色粘土，粘性強，FeO散在
5Y2/2 オリーブ黒色粘土，小土塊5%

P19断面図



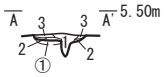
1 2. 5Y3/1 黒色粘土，粘性弱，礫±1mm1%，FeO散在
2. 5Y7/3 浅黄色粘土，小土塊3%
2 2. 5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土，FeO散在
2. 5Y5/4 黄褐色粘土，土塊30%
① 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土，FeO散在

P21断面図



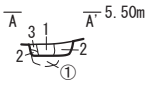
1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土，粘性やや強，礫±2mm1%，FeO疎
2. 5Y5/3 黄褐色粘土，小土塊5%（下方堆積）
2 2. 5Y4/1 黄灰色粘土，礫±2mm1%，炭化物±1mm1%，FeO疎
2. 5Y7/3 浅黄色粘土，小土塊5%（上方堆積）
① 2. 5Y5/2 暗灰黄色粘土，粘性やや強，礫±2mm1%，FeO疎
2. 5Y3/1 黒褐色粘土，小土塊3%

P18断面図



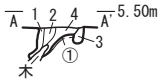
1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土，粘性強，FeO散在
2. 5Y6/3 にぶい黄色粘土，小土塊3%
2 2. 5Y3/2 黒褐色粘土，粘性やや強，しまりやや強，FeO疎
3 2. 5Y3/2 黒褐色粘土，FeO疎
2. 5Y6/4 にぶい黄色粘土，小土塊3%
① 2. 5Y4/2 暗灰黄色粘土，FeO疎
5Y2/2 オリーブ黒色粘土，小土塊3%，粘性強，しまりやや強

P20断面図



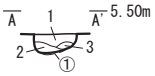
1 5Y2/1 黒色粘土，粘性やや強，礫±1mm3%，FeO疎
2 2. 5Y2/1 黒色砂質粘土，FeO疎
2. 5Y6/2 灰黄色粘土，小土塊1%
3 2. 5Y2/1 黒色粘土，FeO疎
2. 5Y7/4 浅黄色粘土，小土塊30%
① 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土，粘性強，FeO散在
7. 5Y4/1 灰色粘土，小土塊3%，粘性強

P24断面図



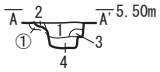
1 2. 5Y3/2 黒褐色粘土，粘性やや強，FeO疎
2. 5Y7/4 浅黄色粘土，土塊40%
2 5Y3/2 オリーブ黒色粘土，粘性やや強，FeO散在
3 2. 5Y4/1 黄灰色粘土，粘性やや強，しまりやや弱，FeO疎，木あり
10Y7/1 灰白色粘土，小土塊3%（X軸方向の中央堆積）
4 5Y2/2 オリーブ黒色粘土，FeO疎
① 2. 5Y6/4 にぶい黄色粘土，粘性やや強，しまりやや弱，FeO散在
5Y2/1 黒色粘土，小土塊3%，粘性強

P22断面図



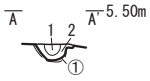
1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土，しまりやや強，礫±1mm1%，FeO疎
2. 5Y7/4 浅黄色粘土，斑点状小土塊5%
2 2. 5Y2/1 黒色粘土，粘性やや強，FeO散在
3 2. 5Y6/3 にぶい黄色粘土，粘性やや強，FeO疎
① 2. 5Y5/2 暗灰黄色粘土，粘性やや強，礫±2mm1%，FeO疎
2. 5Y3/1 黒褐色粘土，小土塊3%

P23断面図



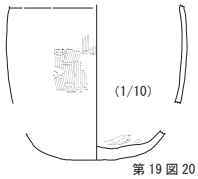
1 5Y2/2 オリーブ黒色粘土，粘性やや強，しまり弱，FeO疎
2. 5Y7/6 明黄褐色粘土，斑点状小土塊5%
2 2. 5Y6/3 にぶい黄色粘土，しまりやや強，FeO疎
5Y3/1 オリーブ黒色粘土，小土塊10%
3 10YR6/6 明黄褐色粘土，FeO疎
5Y3/1 オリーブ黒色粘土，小土塊40%
4 2. 5Y3/1 黒褐色粘土，FeO散在
2. 5Y7/4 浅黄色粘土，小土塊10%
① 2. 5Y7/4 浅黄色粘土，FeO疎
5Y3/1 オリーブ黒色粘土，小土塊5%，粘性やや強

P25断面図

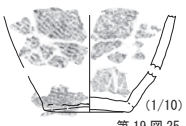


1 10YR3/1 黒褐色粘土，しまりやや強，FeO散在
2. 5Y7/4 浅黄色粘土，小土塊1%
2 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土，FeO散在
2. 5Y3/2 黒褐色粘土，小土塊
① 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土，FeO散在
2. 5Y4/1 黄灰色粘土，小土塊5%

0　断面（1:60）　3m

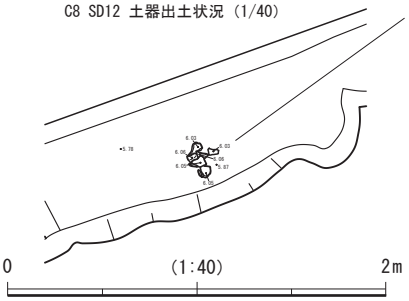


第 19 図 20

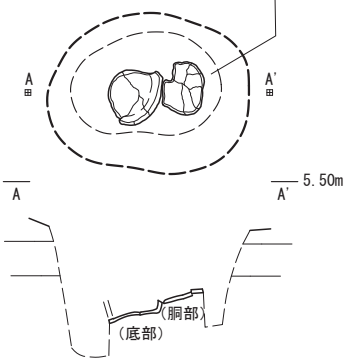


第 19 図 25

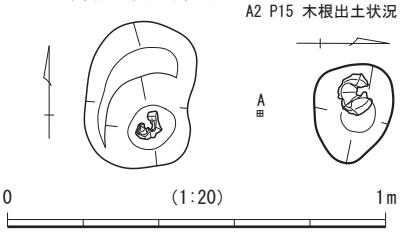
C8 SD12 土器出土状況（1/40）



A6 P07 土器出土状況　S=1/20

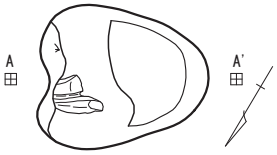


B8 P05 木根出土状況（1/20）



A2 P15 木根出土状況（1/20）

B3 P24 木出土状況（1/20）



第18図　１区遺構図３（S＝1/100・1/60）

P20（第18図、図版４）　１区西部２面のA4グリッドで検出し、検出面の標高は5.23～5.25mである。平面形は楕円形で、長軸38㎝、深さは20㎝程である。土層断面からは柱痕跡が確認できる。覆土は灰黄色～黒色である。

P21（第18図、図版４）　１区西部２面のA4グリッドで検出し、検出面は標高5.25m前後である。平面形は楕円形を呈し、長軸43㎝、深さ８㎝を測る。柱痕跡と思われる土層が観察でき、覆土は黄灰色～オリーブ黒色である。

P22（第18図、図版４）　１区西部２面のA4グリッドで検出した。検出面は標高5.30m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸46㎝、深さ５～15㎝を測り、覆土はオリーブ黒色～黒色である。

P23（第18図、図版４）　１区西部２面のA3グリッドで検出し、検出面の標高は5.40m前後である。平面形は方形を呈し、長軸43㎝、深さ22㎝を測る。覆土は明黄褐色～オリーブ黒色である。

P24（第18図、図版４）　１区西部２面のA3グリッドで検出した。検出面の標高は5.37～5.38mで、平面形は不整楕円形を呈する。長軸は42～47㎝程で、深さは９～25㎝を測る。柱根（第24図92）が残存していた。

P25（第18図、図版４）　１区西部２面のA4グリッドで検出した。検出面は標高5.21～5.23mで、平面形は不整方形を呈する。長軸51㎝、深さ６～15㎝を測る。柱痕跡らしき土層が確認でき、覆土はにぶい黄橙色～黒褐色である。

SI02？（第18図）　西側下層のピット群は、調査中に縄文時代の柱穴列（楕円形か柄鏡形）の可能性を想定していた。P24のクリ材なので、縄文時代の用材としては問題がない。しかし、調査中に木材を取り上げた際には、柱材としての感覚は少なくて木の方向が合わないので、可能性を指摘するに留めたい。

P26　１区北部C7グリッドで検出した。検出面は標高5.80mで、平面形は方形を呈する。径約30㎝、深さ８～25㎝を測る。土師器高坏（第21図26）が出土した。

P53（第15図）　１区東部B7グリッドで検出した。検出面の標高は5.66～5.70mで、平面形は楕円形を呈する。長軸は70㎝程、深さは５～13㎝を測る。土層断面からは柱痕跡が確認できる。

P57　１区東端C10グリッドで検出し、検出面の標高は5.91m前後である。平面形は不整方形を呈し、長軸約40㎝、深さは４㎝程である。生焼けの須恵器坏蓋（第21図27）や土師器の高坏脚部（28）と埦（29）を図化したが、土師器は摩耗している。

P66　１区北東隅D10グリッドで検出し、検出面は標高6.15m、平面形は楕円形である。長軸約50㎝、深さ22～28㎝を測る。土師器くの字甕（30）が出土し、胴部ハケ調整で口縁部はヨコナデだが、摩耗する。

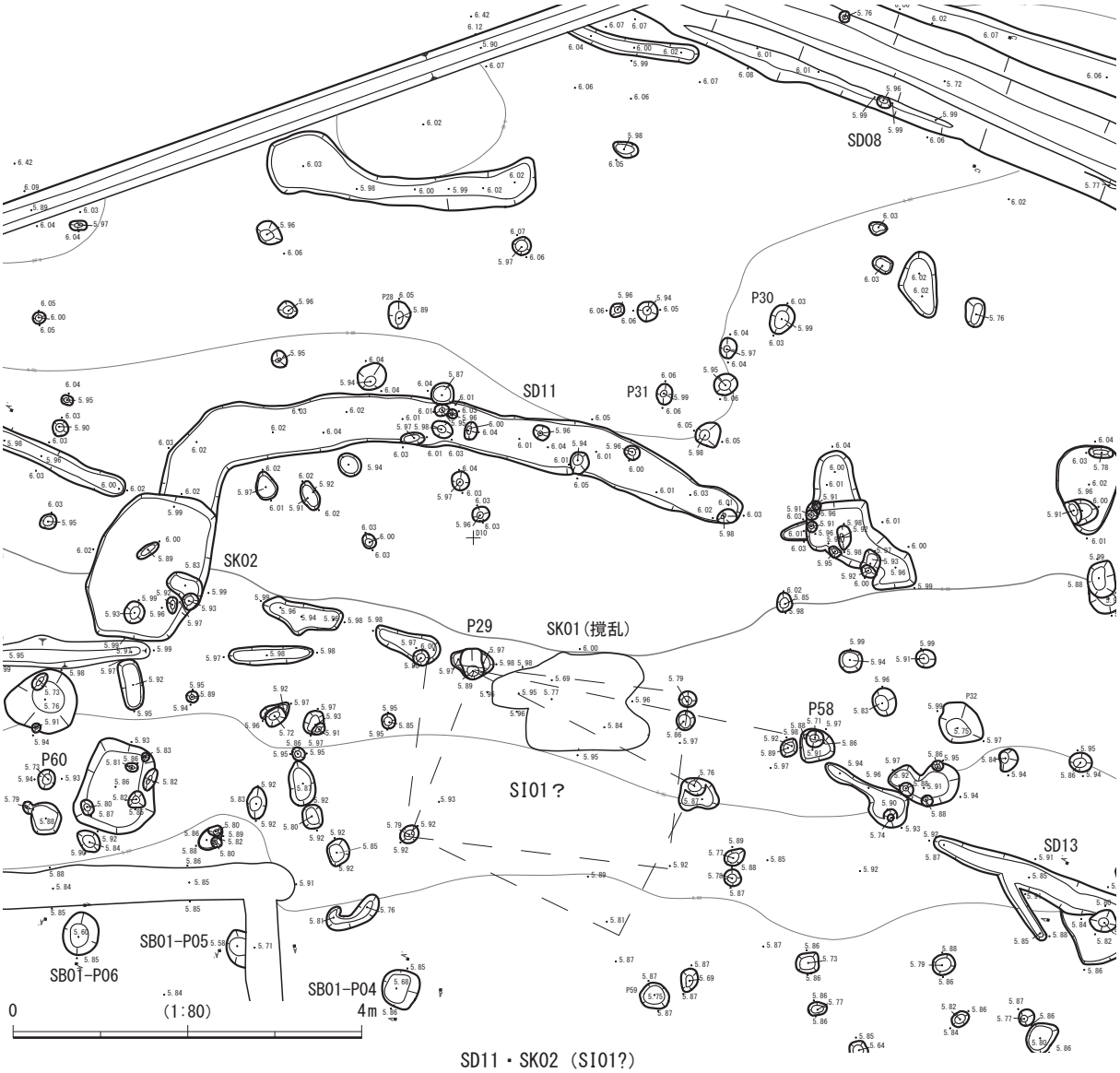
５．そ　の　他

SX04（第10図）　１区西部B5グリッドで検出し、検出面は標高5.40～5.50mである。平面形は不整形で、長軸約1.7m、短軸約60～120㎝、深さ５～10㎝を測る。土師器高坏（第21図31）が出土した。

SX06（第10図）　１区西部B5グリッドで検出し、検出面の標高は5.44m前後である。平面形は楕円形を呈し、長軸約1.1m、短軸約50㎝、深さ９～32㎝を測る。第21図32は内径接合なので弥生中期中葉の小松式甕である。

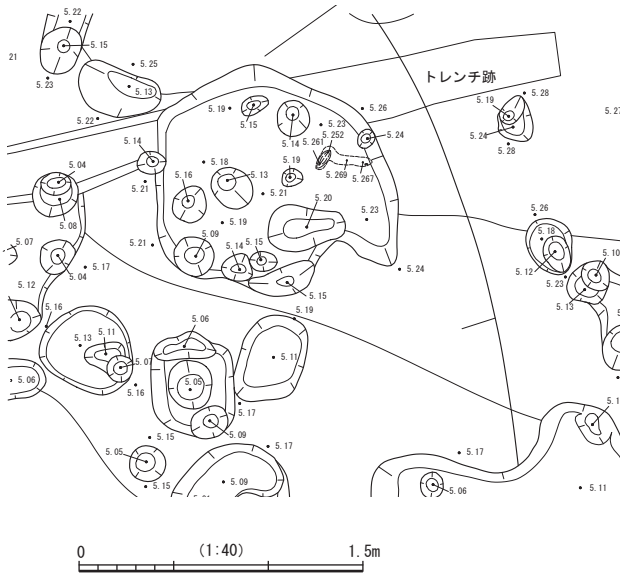
SX07（第10図）　１区西部B5グリッドで検出し、検出面は標高5.42～5.51mである。平面形は不整方形を呈し、長軸約3.4m、短軸約2.9m、深さ６～20㎝を測る。土師器高坏（第21図33）や縄文土器深鉢（34）などが出土した。33は内外面が摩滅し、34はRL縄文と下半はナデである。

SX10（第11図）　１区南端A6グリッドで検出し、検出面は標高5.43～5.47mである。平面形は不整形

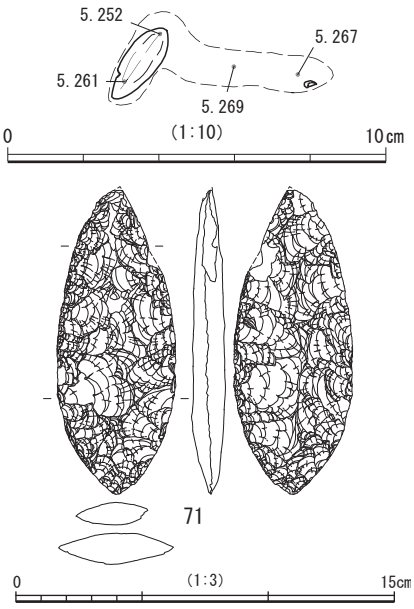


SD11・SK02（SI01?）

尖頭器出土状況（1/40）



尖頭器出土状況（1/10）



第19図　１区遺構図４（S＝1/80・1/40・1/10・1/3）

で、長軸方向3.3m程を確認した。深さは５～40cmを測る。中世の土師器小皿（第21図35）が出土した。

鞍部（第10・11図）　１区西側A4～A7グリッドで検出した。下層では、A4・B4～A6・C6で確認された。自然河道はやや狭くなり、A5・B5～A6グリッド内である。鞍部上面には、不整形な土坑や小ピットが確認され、SX10では中世の小型土師器皿が出土している。最下層では第23図72～75・83が出土した。

出土遺物　以下、包含層などから出土した遺物を記載する。旧石器時代末と思われる柳葉形尖頭器（第23図71）はA3区下面包含層出土である。重機で下層検出面まで下げていた時に、バケットに引っ掛かって、裏返って移動した（第19図、図版11）。鞍部下層など出土の72～75は旧石器時代末～縄文時代前期頃であろうか。71・73～75は凝灰岩製である。

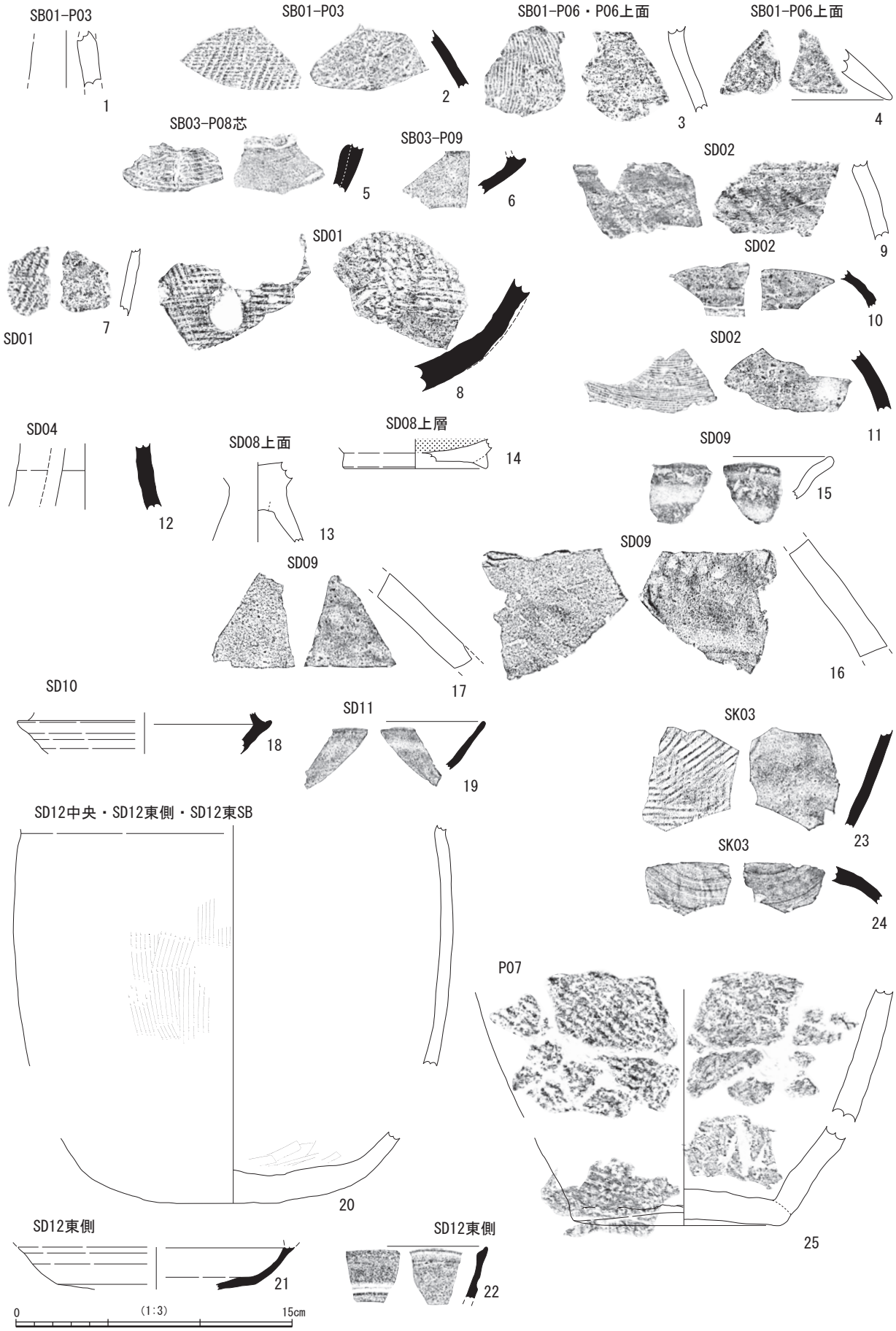
縄文時代では、B6区鞍部上面から縄文土器の粗製深鉢（61）が出土している。厚さなどから、中期であろうか。縄文時代の石器は、定角式磨製石斧（69・83）、打製石斧（79・80）、石鏃（81）、剥片（70・76・77）があり、84の石錘は調査区東側の水田で表採した。81は下呂石製石鏃である。黒曜石は藤根久氏の協力で諏訪産と同定された。

弥生時代（中期）では、A3区で太型蛤刃石斧（82）が出土した（図版11）。

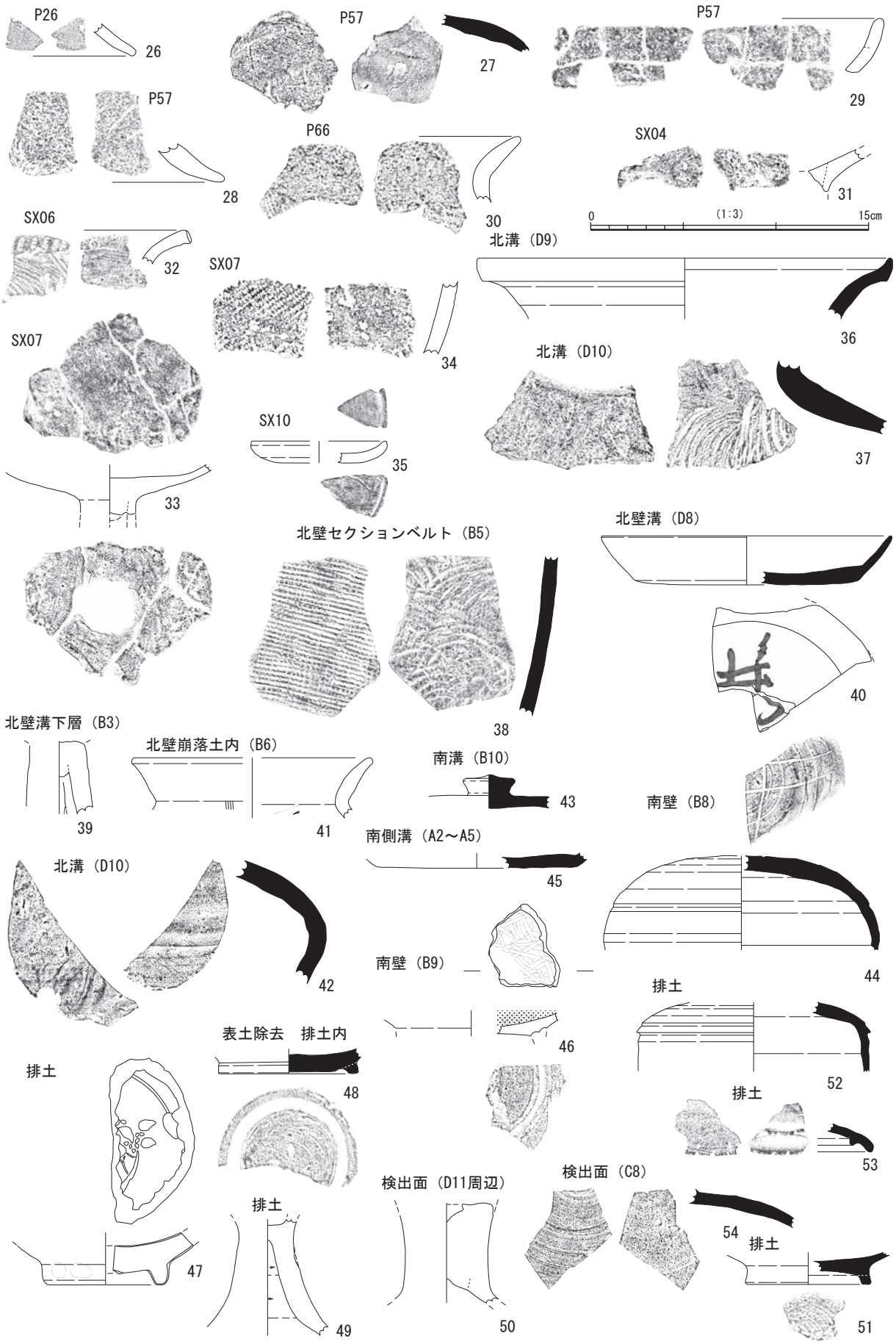
古墳時代では、土師器甕（41・55）、土師器高杯（39・49）、須恵器坏蓋（52・44・54）、須恵器高杯（58）、瑳（57）、甕（36～38）、瓶類（42・56・59）が後期、須恵器坏蓋（53）が末期である。44の天井部にはヘラ記号があり、周辺は黒化し、滑らかである。52は天井部に降灰。54はロクロケズリであるが、最後のみロクロナデである。58の受部内面には降灰。59は内面上半・外面下半に自然釉。

古代では、須恵器坏蓋（43）、須恵器有台坏（60・48）、須恵器無台坏（45）、須恵器有台皿（51）、土師器内黒埦（46）、土師器高杯（50）を図化した。60はⅣ期、45・48・51は９世紀中葉以降、46は10世紀代であろう。40と46の底面には、墨書が確認される。40は墨書不明文字２と縦方向のヘラ記号を持つ。46の文字も判読不明である。60は重ね焼きⅠかⅡ類である。

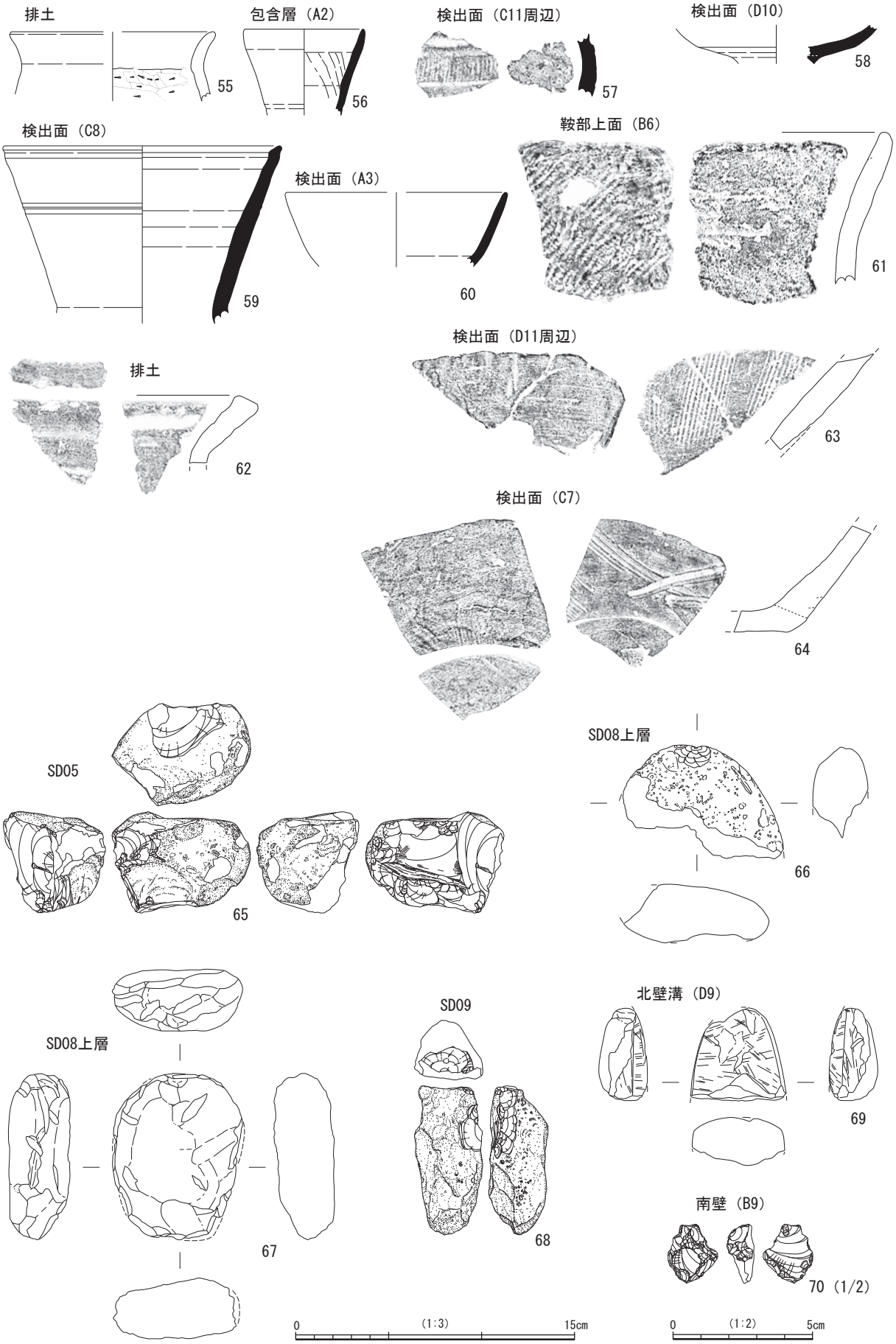
中・近世では、龍泉窯青磁碗（第21図47）、越前焼甕（62）、加賀焼摺鉢（63・64）などを図化した。47は全体に厚く、見込みには花文を持つようである。63は27㎜間に13本の卸目がある。64は外面にケズリ、内面は使用により滑らか。第24図93は総黒色の漆器椀であり、近世と思われ、樹種はトチノキである。



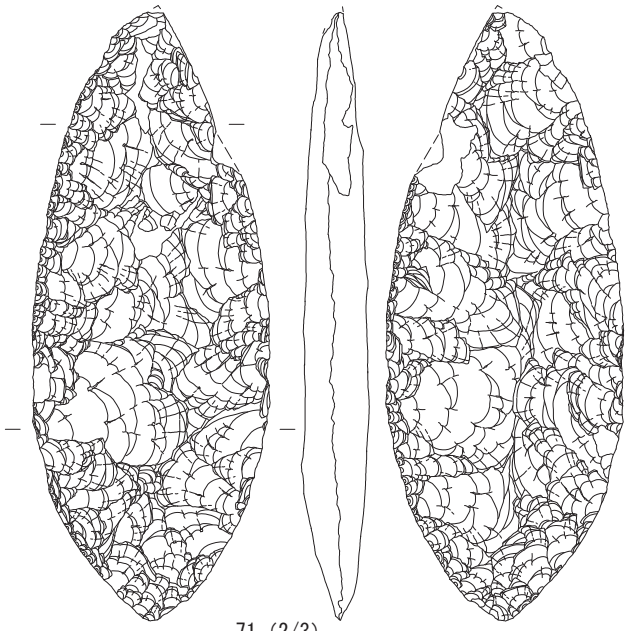
第20図　１区出土遺物１（S＝1/3）



第21図　１区出土遺物２（S＝1/3）

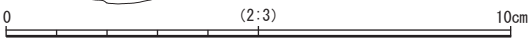


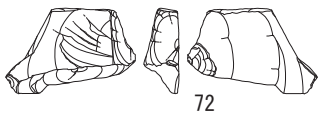
第22図　１区出土遺物３（S＝1/3・1/2）



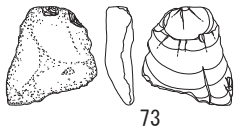
71（2/3）

下面包含層（A3）

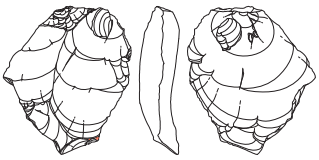




72



73



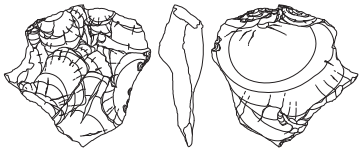
74

鞍部最下層（B5、72～74）

鞍部最下層（A5）

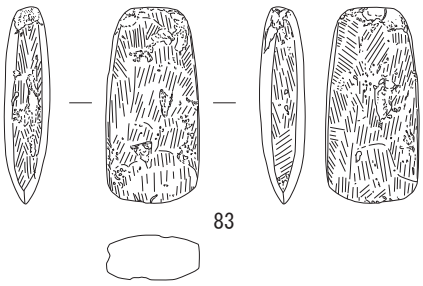
75

下面　壁　排水（A4）



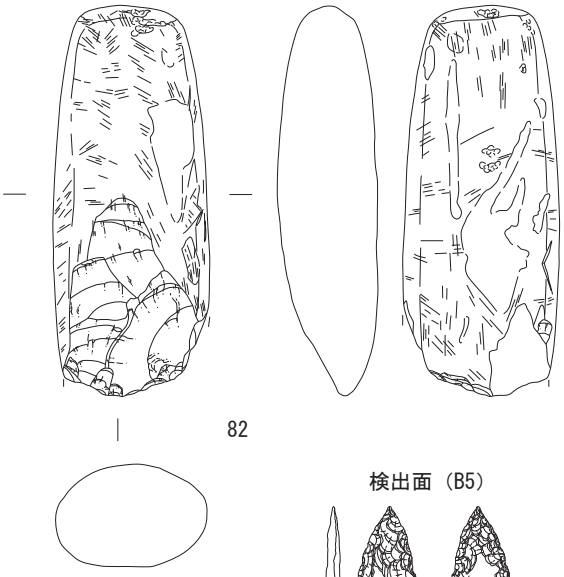
78

鞍部最下層（A5）



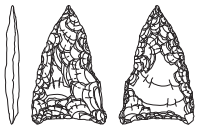
83

検出面（A3）



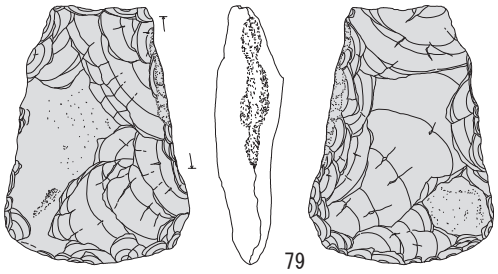
82

検出面（B5）



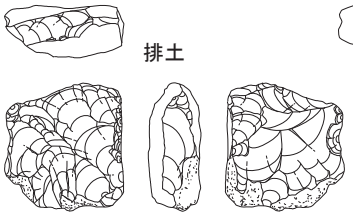
81（1/1）

表土除去　排土内



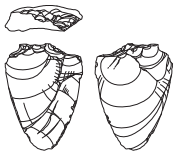
79

排土

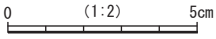


76（1/1）

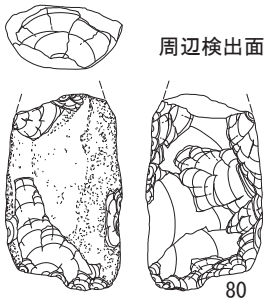
検出面



77（1/2）

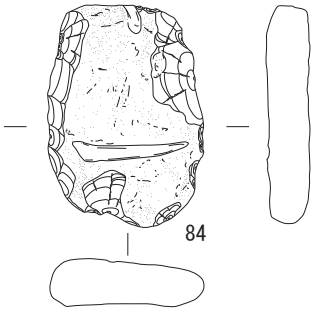


周辺検出面（C11）



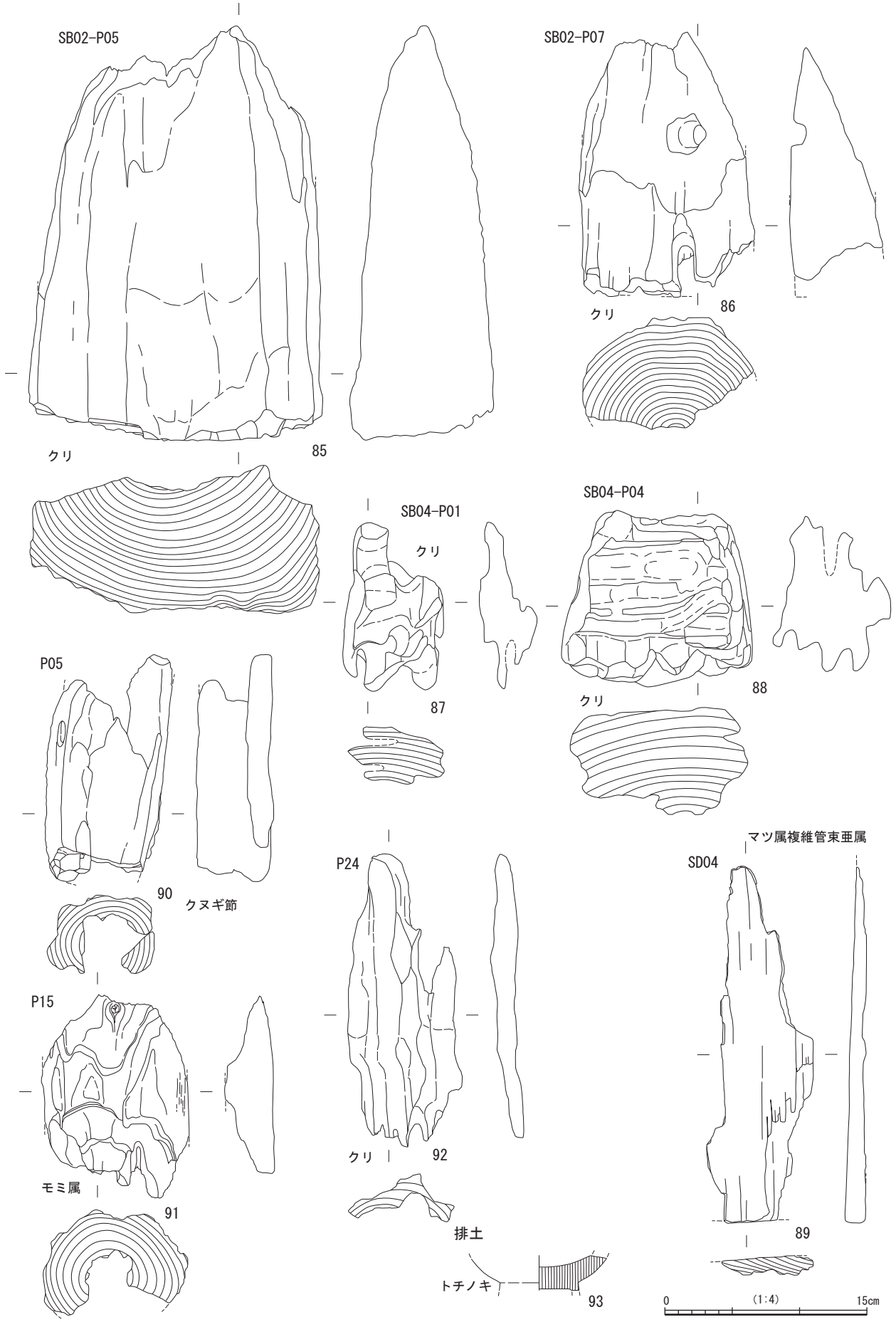
80

東側通路
2番目の水田



84

第23図　１区出土遺物４（S＝1/3・1/2・2/3）



第24図　１区出土木製品（S＝1/4）

報告	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	色調(内)	色調(外)	釉調	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
1	0154	1区	C9	SB01-P03	高坏	(3.3)			破片	褐灰	灰白		橙色粒	良	ナデ	ナデ	
2	0181	1区	C9	SB01-P03	甕	-	-	(3.2)	破片	灰白	灰白		白色粒・黒色粒やや多	良	同心円タタキ・ナデ	格子タタキ・カキ目	
3	0179	1区	C9	SB01-P06・P06上面	甕	-	-	(4.6)	破片	にぶい黄橙	にぶい黄橙		1mm大流紋岩(白)多	良	ナデ	ハケ	
4	0180	1区	C9	SB01-P06上面	高坏	-	-	(2.8)	破片	灰白	灰白		1mm大白色粒・灰色粒	良	マメツ	マメツ	
5	0182	1区		SB03-P08芯	横瓶	-	-	(1.6)	破片	灰白	灰		0.5mm大白色粒・黒色粒	良	ナデ・ロクロナデ・同心円タタキ	カキ目	外面工具のアタリ痕
6	0183	1区	C8	SB03-P09	坏身	-	-	(2.1)	1/12	灰	灰		白色粒多、長石微量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面受部に坏蓋口縁部の溶着
7	0189	1区	A3	SD01	深鉢	-	-	(3.7)	極小	にぶい黄橙	にぶい黄橙		0.5～1mm大流紋岩多、細長石・石英・角閃石	良	ナデ	LR縄文	
8	0190	1区	A3	SD01	甕	-	-	(6.1)	破片	灰	灰		0.5mm大白色粒多、石英細粒子・黒色粒	良	格子タタキ	格子タタキ	
9	0191	1区	A3	SD02	深鉢	-	-	(4.4)	極小	にぶい黄橙	にぶい黄橙		1～2mm大の流紋岩(白)多く、長石・石英・角閃石	良	ナデ・ケズリ	ナデ	
10	0192	1区	A3	SD02	坏蓋	-	-	(2.0)	1/12以下	灰	灰		白色粒・黒色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
11	0193	1区	A3	SD02	壺	-	-	(3.3)	破片	黄灰	灰黄		長石・石英・チャート・白色粒多	良	ナデ・ユビオサエ	カキ目	
12	0149	1区	A3	SD04	高坏	-	-	(3.6)	3/12	灰	黄灰		黒灰色・白色砂粒含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	長方形スカシ3方向か
13	0150	1区	D10	SD08上面	高坏	-	-	(4.4)	4/12	灰白	灰白		白色細砂・赤色粒・赤色粒、少量の角閃石	良	マメツ	マメツ	
14	0151	1区	D10・11	SD08上層	有台椀	-	(7.7)	(1.6)	3/12	灰	灰白		1mm大流紋岩少量、長石	不良	ロクロナデ・マメツ	ロクロナデ・マメツ	3～5mm大の石2つ含む。内黒か
15	0194	1区	B7西	SD09	皿	-	-	(2.3)	1/12以下	にぶい黄橙	にぶい黄橙		長石・白色粒少、海綿骨針微量	良	ナデ・ユビオサエ	ナデ・ヨコナデ	口縁歪みあり
16	0196	1区	B8東	SD09	加賀甕	-	-	(5.1)	1/12以下	灰黄褐	褐灰		0.5mm大白色粒・黒色粒	良	ナデ・ユビオサエ	ロクロナデ	断面灰白色
17	0195	1区	B8東	SD09	越前甕	-	-	(6.5)	極小	灰褐	にぶい赤褐		細石英・長石	良	工具ナデ・ナデ	ナデ	
18	0152	1区	C9	SD10	坏身	-	-	(2.3)	5/12	灰白	灰白		白色粒子少、黒色粒子微量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	坏受部1.5/12
19	0197	1区	D10	SD11	無台坏	-	-	(2.6)	1/12以下	灰白	灰白		白色粒・黒色粒をやや多	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部内外面重ね焼Ⅲ類
20	0147	1区	C7東、C8西、C7	SD12中央・東側・東SB	甕	-	-	(13.1)+(3.9)	1/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙		1～2mm大流紋岩(黒)・石英・赤色粒多	良	マメツ・一部ケズリ・ナデ	ハケ・マメツ	底部10/12
21	0153	1区	C8	SD12東側	坏身	-	-	(1.8)	1/12	灰白	灰白		細石英・黒色粒子を微量	不良	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・ケズリ	生焼け
22	0198	1区	C8西	SD12東側	高坏	-	-	(2.4)	1/12	灰白	灰白		長石砂粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面自然釉、スカシの痕跡
23	0199	1区	C8	SK03	甕	-	-	(5.3)	破片	灰	灰		微量の石英と白色粒・黒色粒	良	同心円タタキのちナデ	平行タタキ	
24	0200	1区	C8	SK03	坏蓋	-	-	(2.0)	2/12	灰	灰		0.5mm大白色粒	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ・ロクロナデ	断面赤灰色
25	0173	1区	A6	P07	深鉢	-	(11.7)	(12.7)	底部完	にぶい黄橙	にぶい黄橙		1～3mm大砂粒を多	不良	ナデ	縄文・ナデ	外底部周縁に種子圧痕。内面体部黒色化
26	0174	1区	B7	P26	高坏	-	-	(1.8)	1.5/12	明赤褐	明赤褐		白色粒子を多	良	マメツ	ナデ	内面口唇部～外面やや黒化
27	0175	1区	C10	P57	坏蓋	-	-	(2.0)	2/12	灰白	灰白		砂粒の混入少ない	不良	ナデ	マメツ(ケズリ)か	
28	0176	1区	C10	P57	高坏	-	-	(2.1)	1.5/12	灰白	浅黄橙		1mm大白色粒・灰色粒をやや多	良	マメツ	マメツ	
29	0177	1区	C10	P57	椀？	-	-	(2.9)	1/12以下	浅黄橙	浅黄橙		流紋岩・長石を少量	不良	マメツ	マメツ	
30	0178	1区	D10	P66	甕	-	-	(3.6)	破片	淡黄	浅黄橙		1mm大の流紋岩(白)やや多	不良	ヨコナデ・マメツ	ヨコナデ・ハケ・マメツ	
31	0185	1区	B5	SX04	高坏	-	-	(2.3)	3/12	浅黄橙	浅黄橙		1mm大の流紋岩多、赤色粒	不良	マメツ	マメツ	
32	0184	1区	B5	SX06	甕	-	-	(1.8)	1/12以下	にぶい黄橙	にぶい黄橙		1mm大白色粒と長石・石英	良	ハケ後ヨコナデ	粗いハケ	外面口縁端部刻目。内面に黒斑
33	0186	1区	B5	SX07	高坏	-	-	(2.7)	底部完	にぶい黄橙	にぶい黄橙		0.5mm大流紋岩をやや多	良	マメツ	マメツ	
34	0187	1区	B5	SX07	深鉢	-	-	(3.9)	1/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙		0.5mm大流紋岩多	良	ナデ	RL縄文・ナデ	
35	0188	1区	A6	SX10	小皿	-	-	1.2	1/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙		黒色砂粒を少	良	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	
36	0155	1区	D9	北溝	甕	(22.2)	-	(3.3)	1/12	灰	灰		長石・白色粒子を微量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	断面セピア色
37	0202	1区	D10	北溝	甕	-	-	(4.0)	極小	灰	灰白		白色粒・石英を含む	良	ロクロナデ・同心円タタキ	カキ目	外面降灰・自然釉

第3表　1区出土遺物観察表1

報告	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	色調(内)	色調(外)	釉調	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
38	0204	1区	B5	北壁SB	甕	－	－	(8.6)	極小	灰	灰		石英・白色粒を微量	良	同心円タタキのちナデ	格子タタキ	断面赤褐色
39	0156	1区	B3	北壁溝(下層)	高坏	－	－	(3.9)	破片	橙	橙		1～2mm流紋岩(白)・赤色粒を多	不良	シボリ	マメツ	
40	0157	1区	D8	北壁溝	無台坏	(15.6)	(12.0)	2.7	1/12	灰白	灰白		長石・石英を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ ヘラケズリ後ナデ	底部3/12、底部外面墨書2字・ ヘラ記号。重ね焼Ⅲ類
41	0158	1区	B6	北壁崩落土内	甕	(12.7)	－	(3.2)	2/12	にぶい橙	にぶい橙		長石・石英の細粒をやや多く含む	良	ヨコナデ・ケズリ	ハケ・ヨコナデ	
43	0159	1区	B10	南溝	坏蓋	－	－	(1.8)	摘み完	灰白	灰白		白色粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面少し滑らか
43	0203	1区	D10	北溝	瓶	－	－	(6.6)	1/12	灰白	灰白		白色砂粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面灰被り
44	0161	1区	B8	南壁	坏蓋	－	－	(5.1)	1.5/12	青灰	青灰		白色粒を微量に含む	良	回転ナデ	ロクロナデ・回転ケズリ	断面灰赤色。外面降灰。天井部線刻・ 黒化・滑らか
45	0160	1区	A2～A5	南側溝	無台坏	－	(10.8)	(0.9)	2/12	灰白	灰白		白色粒を含む	良	ロクロナデ	回転ヘラキリ離し後ナデ	外底部、乾燥させる際の草などの痕
46	0162	1区	B9	南壁	有台椀	－	－	(1.4)	2/12	黒	にぶい黄橙		0.5mm石英多量、白色粒・角閃石	良	ヘラミガキ(密)	ヨコナデ・回転糸切り	内黒
47	0148	1区		排土	青磁碗	－	(6.3)	(2.8)	5/12	明緑灰	明緑灰		黒色細粒子	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ 高台周縁ユビオサエ	龍泉窯15C前～中頃、高台裏面に 鉄釉。内面見込み花弁状の印花文
48	0163	1区		表土除去排土内	有台坏	－	(7.1)	(1.4)	7/12	灰白	灰白		細白色粒子と長石・石英	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面見込み仕様痕か
49	0164	1区		排土	高坏	－	－	(6.3)		灰白	灰白		白色粒・黒砂・長石・石英・ 角閃石・赤色粒	良	ナデ・ヘラケズリ	マメツ	
50	0168	1区	D11周辺	検出面	高坏	－	－	(5.4)	6/12	灰	灰白		1mm大の白色粒を含む	良	マメツ	マメツ	
51	0165	1区		排土	有台皿	－	(6.6)	(1.7)	2/12	灰	灰		白色粒をやや多く、長石を微量	良	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	内面に使用痕
52	0166	1区		排土	坏蓋	－	－	(3.7)	2/12	灰	灰白		0.5mmの白色粒を含む	良	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・ 回転ヘラケズリ	天井部灰被り。外面口縁重ね焼痕
53	0206	1区		排土	坏蓋	－	－	(1.5)	破片	灰	灰		白色粒・黒色粒を多く含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
54	0209	1区	C8	検出面	坏蓋	－	－	(2.1)	小片	灰	灰		0.5mm大の白色粒を含む	良	ロクロナデ	回転ヘラケズリ・ ロクロナデ	
55	0167	1区		排土	甕	(10.8)	－	(3.8)	2.5/12	灰黄褐	灰黄褐		1～2mm大の流紋岩(灰)を多く、 石英・角閃石・赤色砂粒を含む	良	ヨコナデ・ ヨコ方向のケズリ	ヨコナデ	
56	0169	1区	A2	包含層	甕	(6.3)	－	(4.7)	2.5/12	青灰	青灰		白色細粒子をやや多く含む	良	ロクロナデ・シボリ痕	ロクロナデ	口縁部歪みあり
57	0208	1区	C11周辺	検出面	甕	－	－	(3.4)	破片	灰	灰		白色粒・黒色粒をやや多く含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面体部に櫛描刺突出文・沈線、 自然釉
58	0170	1区	D10	検出面	高坏	－	－	(2.1)	3/12	灰白	灰		長石・赤色粒の細粒を少量	良	ロクロナデ(マメツ)	ロクロナデ・ケズリ	内底面に降灰による付着物
59	0171	1区	C8	検出面	瓶	(14.8)	－	(9.6)	2/12	褐灰	褐灰		0.5mmの白石粒・黒色粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	頸部3/12、外面沈線2条。外面全体と 内面上半に自然釉
60	0172	1区	A3	検出面	有台坏	(11.8)	－	(4.0)	1/12	灰白	灰		白色粒を多	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
61	0201	1区	B6	暗部上面	深鉢	－	－	(8.2)	1/12以下	にぶい黄橙	にぶい黄橙		1～2mm大の流紋岩、赤色粒多く、 0.5mm大の石英少量、角閃石微量	良	ナデ	縄文(RL)	
62	0205	1区		排土	越前甕	－	－	(4.7)	1/12以下	褐	灰褐		白色粒・石英砂粒を少し含む	良	ロクロナデ、鉄釉	ロクロナデ、鉄釉	
63	0207	1区	D11周辺	検出面	加賀擂鉢	－	－	(5.2)	破片	灰白	灰白		1mm大の流紋岩多く、 黒色粒を少量	不良	櫛歯11本/26mm	ロクロナデ	
64	0210	1区	C7	検出面土器2	加賀擂鉢	－	－	(5.7)	2/12	明赤褐	明赤褐		細かい白色粒	良	ナデ・卸目	ナデ・ケズリ	外底面離れ砂

第4表　1区出土遺物観察表2

報告番号	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	長(cm)	幅(cm)	厚・高(cm)	重量(g)	石材	備考
65	0211	1区	A4	SD05	石核	5.4	7.4	5.3	238.0	珪質頁岩	自然面：有(亜円礫)　裏面の一部に磨面。黒色の付着物
66	0229	1区	D10東	SD08上層	石錘	(6.15)	(8.65)	3.1	(137)	凝灰岩	
67	0230	1区	D10東	SD08上層	石錘	8.95	7.0	3.3	251		ガジリ多し
68	0213	1区	B8東	SD09	不明	7.8	3.6	3.1	94.1	凝灰岩	自然面：有
69	0227	1区	D9	北壁　溝	磨製石斧	(5.0)	(5.2)	(2.6)	(66.1)	凝灰岩	裏面に被熱による破損。
70	0222	1区	B9	南壁	剥片	2.1	1.8	1.0	2.3	黒曜石	
71	0212	1区	A3	下面包含層	尖頭器	(12.1)	4.7	1.3	(63.7)	凝灰岩	全体的に風化が顕著
72	0214	1区	B5	鞍部最下層	剥片	3.0	4.6	1.4	20.9	ガラス質安山岩	風化著しい
73	0215	1区	B5	鞍部最下層	剥片	3.8	3.5	1.1	9.7	凝灰岩	自然面：有
74	0216	1区	B5	鞍部最下層	剥片	5.8	5.0	1.4	29.1	凝灰岩	
75	0217	1区	A5	鞍部最下層	剥片	2.6	4.6	1.1	11.1	凝灰岩	自然面：有
76	0221	1区		排土	剥片	1.6	1.6	0.7	2.2	玉髄	自然面：有、右側面・裏面両極剥離
77	0223	1区		検出面	剥片	2.8	2.0	0.6	3.3	黒曜石	両側縁部に微細剥離痕
78	0224	1区	A4	下面　壁排水	剥片	5.6	5.3	1.8	33.3	凝灰岩	
79	0218	1区		表土除去排土内	打製石斧	10.2	7.3	2.6	173.6	流紋岩	自然面：有、全体的に風化が顕著
80	0219	1区	C11	周辺検出面	打製石斧	(7.8)	4.6	2.5	(118.0)	デイサイト	自然面：有(円礫)
81	0220	1区	B5	検出面	石鏃	3.0	2.0	0.4	2.0	下呂石	
82	0225	1区	A3	検出面土器1	磨製石斧	(15.5)	6.4	4.1	(619)	凝灰岩	太型蛤刃
83	0226	1区	A5	暗部最下層	磨製石斧	7.8	3.7	1.8	90.3	透閃石岩ヵ	
84	0228	1区		東側通路2番目の水田	石錘	8.8	6.2	1.9	147.2	凝灰岩	

報告番号	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚・高(cm)	樹種	木取り	時期	備考
85	0263	1区	C7gr	SB02-P05		(30.9)	21.8	11.0	クリ	板目	古墳	
86	0266	1区	C7gr	SB02-P07		(19.7)	(13.1)	(8.5)	クリ	芯持丸木	古墳	
87	0267	1区	B8gr	SB04-P01		(12.5)	(7.5)	(4.3)	クリ	割れ	古墳	
88	0270	1区	B7gr	SB04-P04		(13.1)	(14.3)	(8.0)	クリ	板目	奈良・平安	
89	0268	1区	A3gr	SD04		(26.5)	(8.0)	(1.5)	マツ属複維管束亜属	板目	近代	
90	0264	1区	B8gr	P05		15.0	8.55	5.8	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	不明	
91	0269	1区	A2gr	P15		(15.1)	(11.0)	(7.9)	モミ属	芯持丸木	不明	
92	0265	1区	B3gr	P24		21.7	8.5	3.65	クリ	割れ	不明	
93	0271	1区		排土				(2.6)	トチノキ	横木取り	中・近世	残存　底 9/12、底径(5.7)

第5表　1区出土石製品・木製品観察表

第４章　第２次調査

第１節　概要と基本層序

１．概　　要

第２次調査は3,370㎡を対象に、2-1・2-2・2-3区と細分して調査を実施した（第25図）。遺構番号はSB、SI、SD、SK、SF、NR、P、SXを用い、それぞれ１から番号を付した。

２区は調査区全体が耕地整理時の削平を受けており微地形は判然としないが、１区と同様南側が低くなっている。遺構検出面は標高5.10～6.50m前後と高低差がある。削平を受けたため遺構の深さは全体的に浅いものの、遺構密度は１区と比較しても高い。掘立柱建物８棟、周溝をもつ建物１棟、溝17条、井戸も含めた土坑21基、道路状遺構（波板状凹凸）、河川跡、小穴などを検出した（第27～30図）。遺構の時期は大きく古墳時代後期～平安時代と近世の２時期に分けられる。古墳時代後期～平安時代では、調査区を北から南へ縦断する河道の両岸に遺構が展開している。掘立柱建物群、周溝をもつ建物、井戸、土坑群の一部が当該期に属するとみられ、当遺跡はこの時期に最盛期を迎えたと考えられる。近世の遺構としては、土坑、井戸、柱穴などが検出面の標高レベルが高い調査区北側でまとまって検出された。底部に編物を敷いた土坑や、結桶を井戸枠とした井戸なども確認した。柱列は明らかでないが、礎石をもつ柱穴などもあり、他にも掘立柱建物の存在が予想される。また、西側はA1～C3区にかけて２面（下層）を調査（第27図）しており、少数のピットを確認した。

２．基　本　層　序

層序は、上位から表土（盛土、耕作土）、暗灰黄色粘土（整地土）、黒褐色粘土（包含層）、にぶい黄橙色粘土（漸移層）、にぶい黄橙色～灰白色粘土（基盤層）を基本としている（第25図）。前述のとおり耕地整理時に削平を受けており、土層観察からは包含層が攪拌されたような様相も見受けられた。

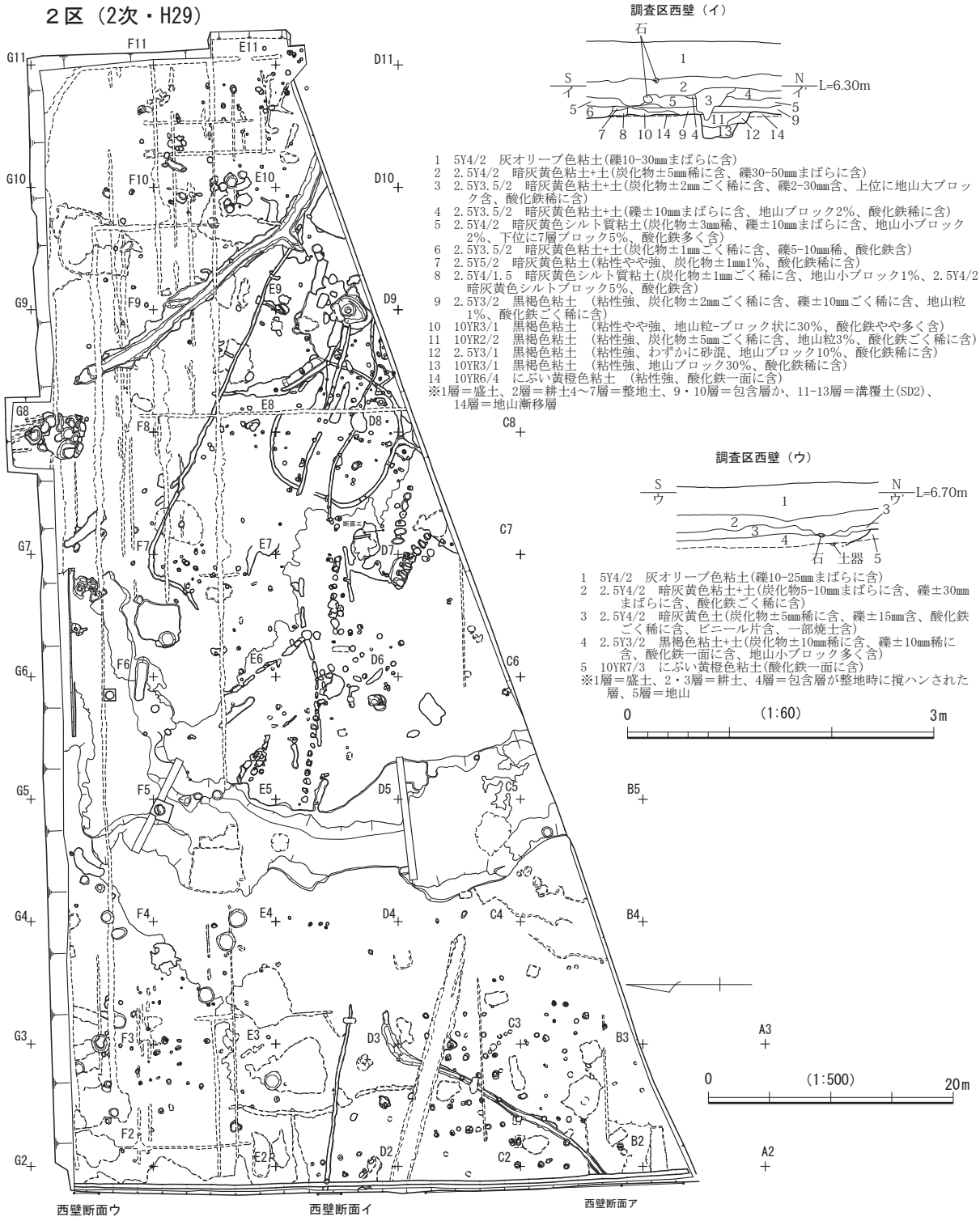
第２節　２区の遺構と遺物

１．掘立柱建物・柱列

掘立柱建物は２区において８棟確認しており、時期は古墳時代後期～平安時代と近世に位置付けられる。前年度調査の１区同様、２×２間の正方形に近い建物と桁行が長い長方形の建物が対をなしていると考えられる。SB1～5までが河道右岸に、SB6～8が左岸に位置する。また、建物配置を想定することはできなかったが、柱痕跡ないし礎石をもつ柱穴が点在しているため実際の棟数は増えるものと予想される。

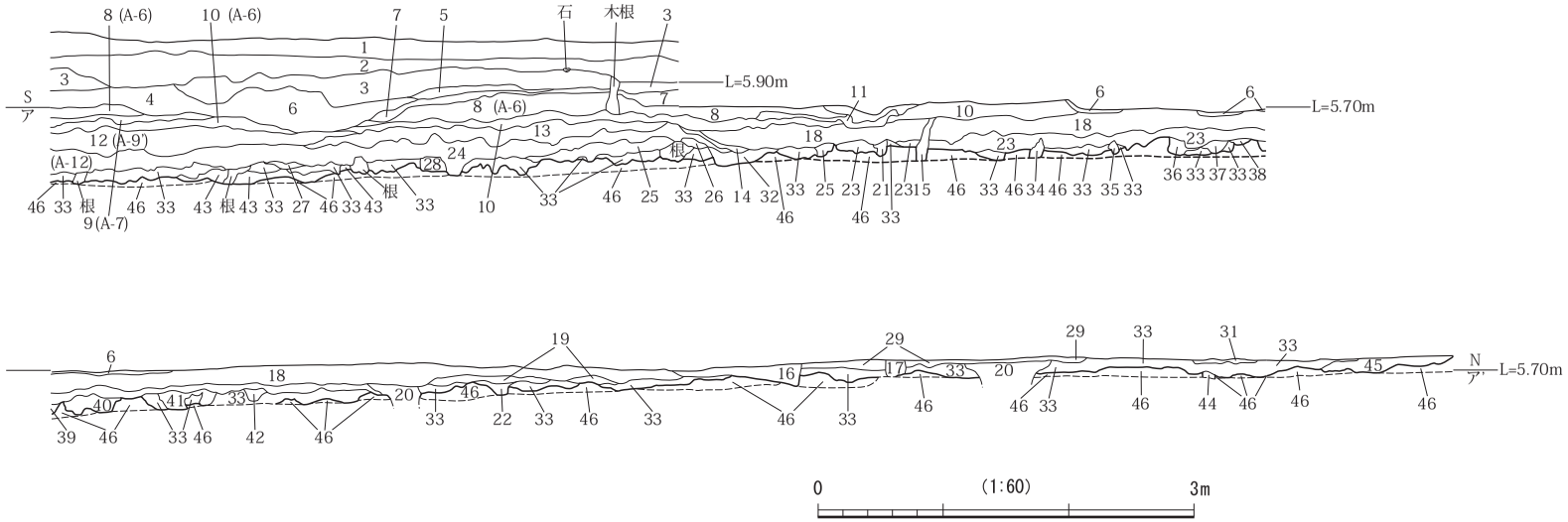
以下、個別に記述していく。

SB1（第31図、図版18）　２区西端D1・2グリッドで検出し、検出面は標高5.89～5.97mである。２間（2.9m）×２間（３m）の総柱建物で、西辺が調査区外へ延びる。主軸はN-14°-Wである。柱間や柱配列は比較的整っており、柱間は梁間で1.45～1.5m、桁行で1.5～1.6mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、いずれも径40～45cm程である。深さはP8が12cmと最も浅く、他は23～40cmを測る。土層観察から柱痕跡や柱の抜き取り跡を確認できるピットが多く、P6では南方向への抜き取り跡とみられる土層を確認した。柱根はP32とP67（第58図241スダジイ）が残存しており、径15cm程の柱が据えられて



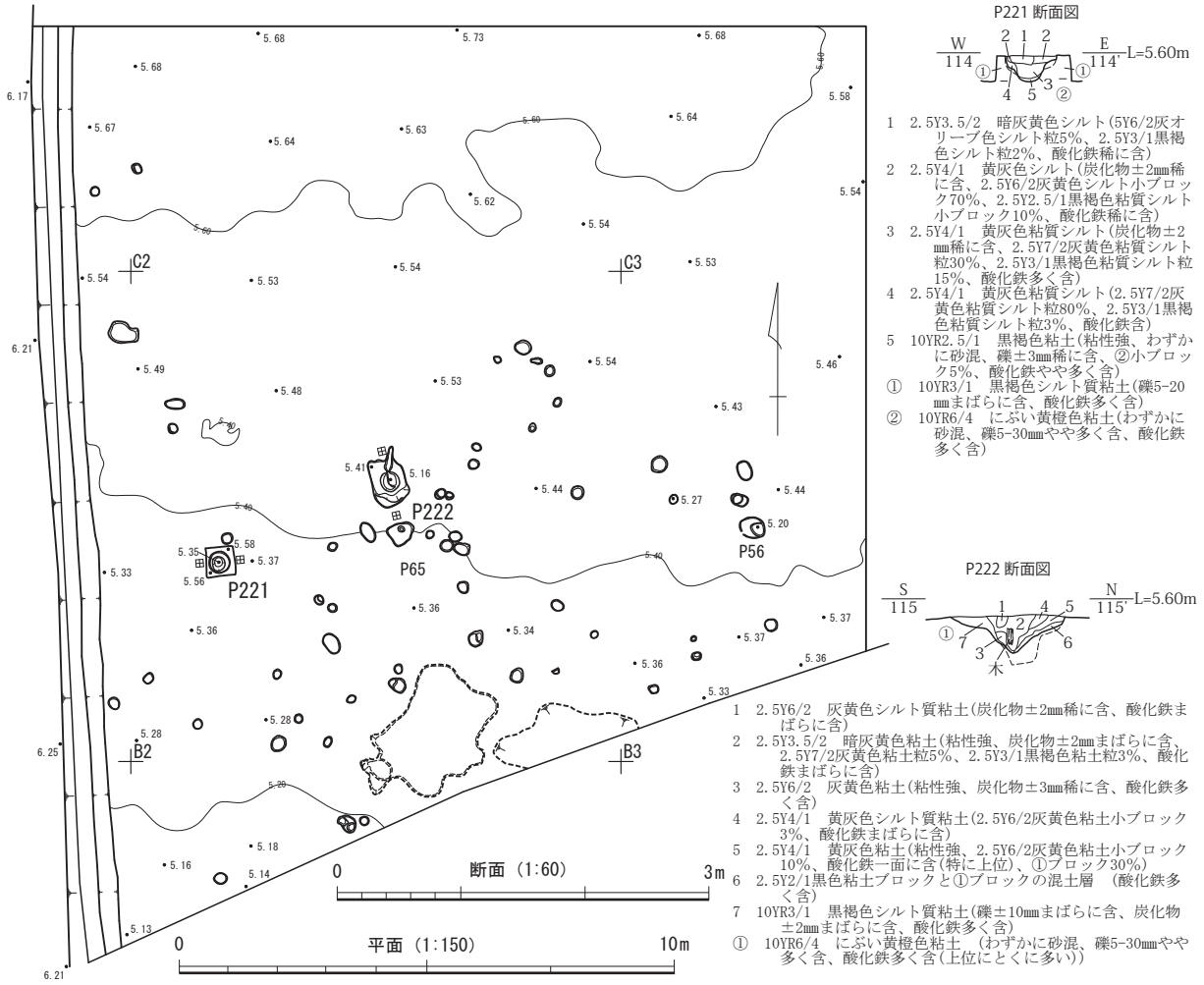
第25図　２区全体図・調査区壁断面図(S＝1/500・1/60)

調査区西壁断面図（ア）

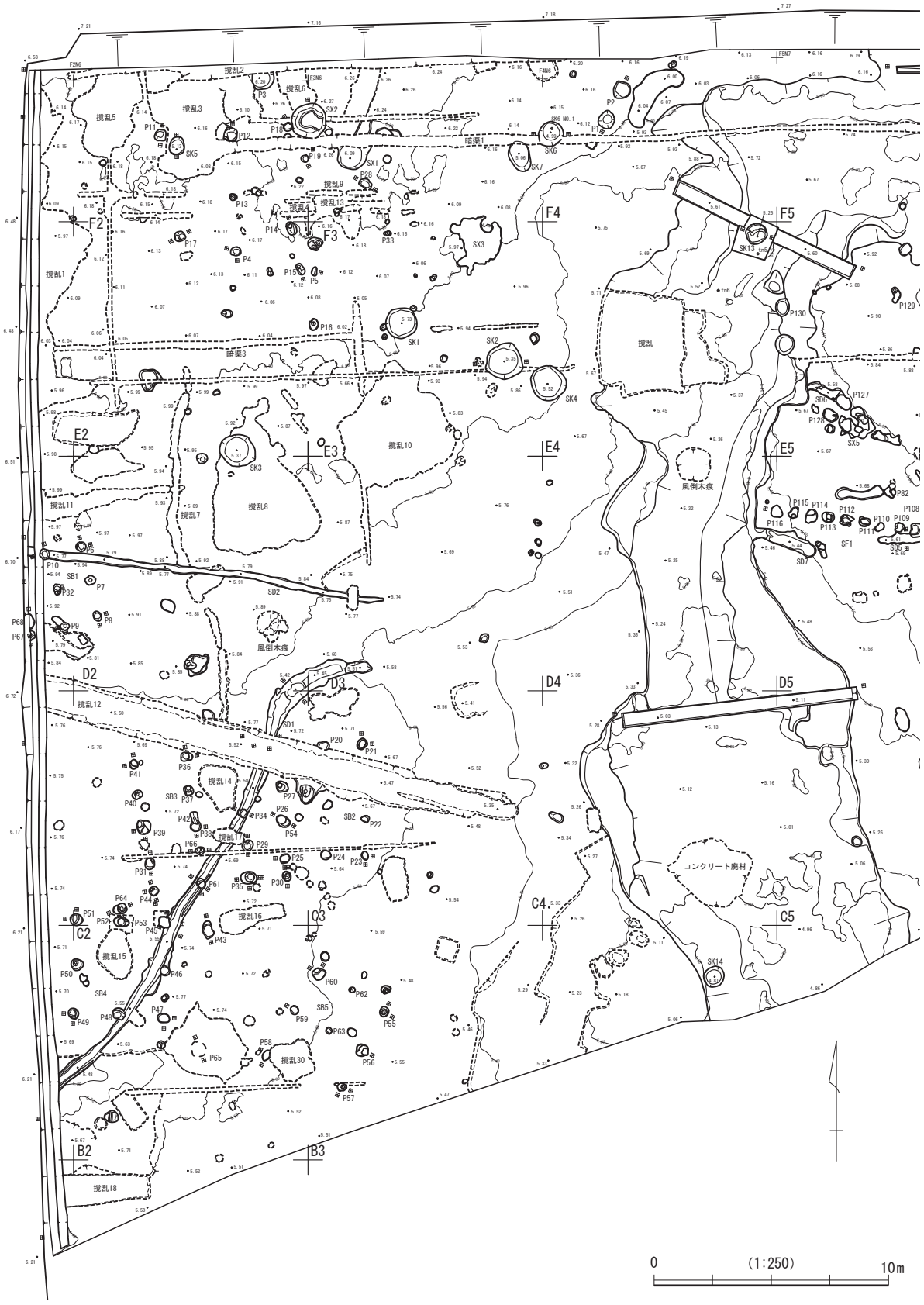


第26図　2区西壁断面図（S＝1/60）

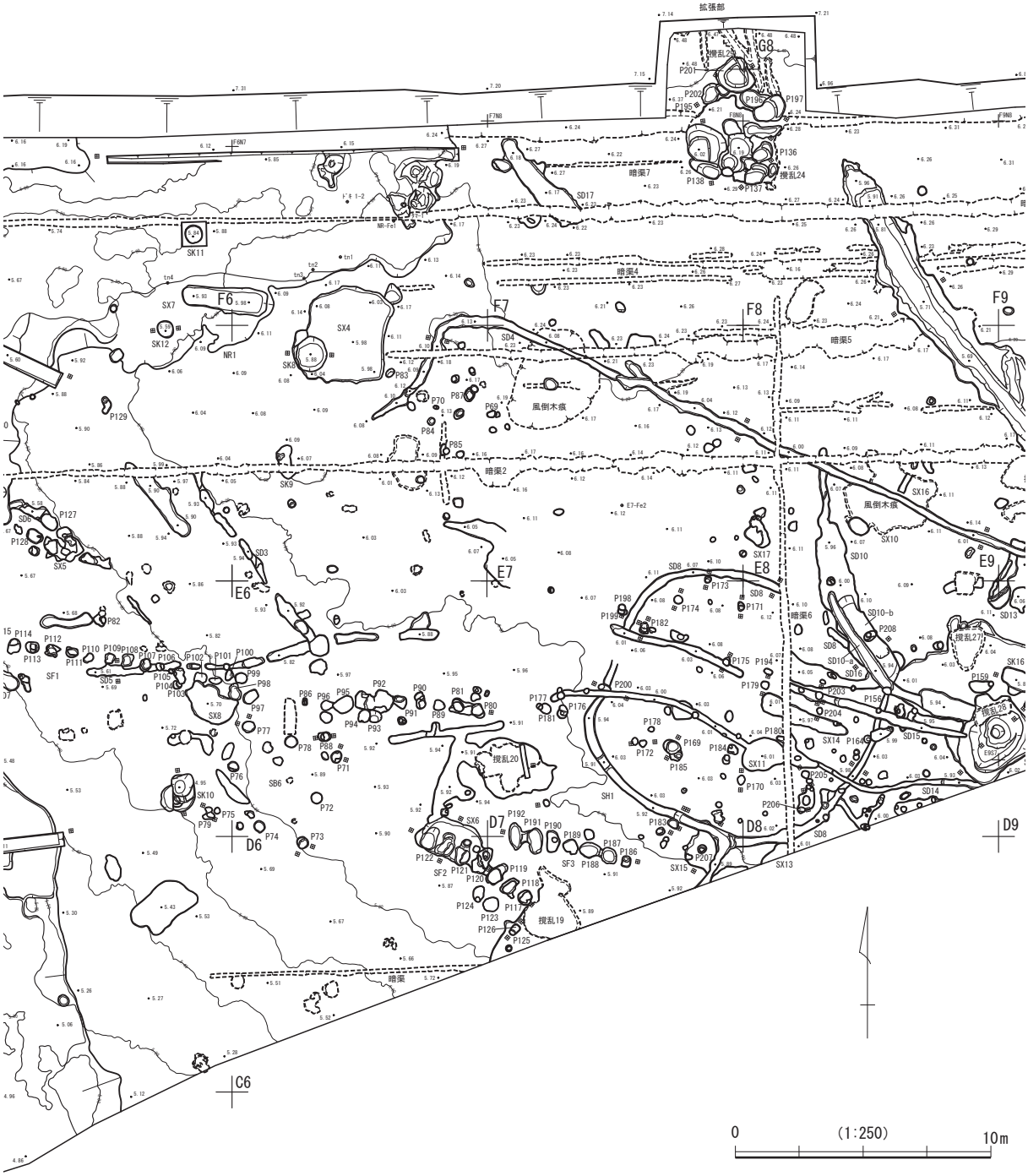
1　5Y4/1　灰色粘土+土　（礫5-10㎜まばらに含）
2　2.5Y4/1　黄灰色粘土+土　（炭化物±5㎜稀に含、礫3-30㎜やや多く含、酸化鉄含、地山ブロック10%）
3　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土+土　（炭化物±5㎜稀に含、礫10-20㎜やや多く含、酸化鉄含、地山ブロック10%）
4　2.5Y4/1　黄灰色粘土+土　（炭化物±1㎜ごく稀に含、礫5-10㎜稀に含、酸化鉄一面に含、地山小ブロック2%）
5　5Y3/1　オリーブ黒色シルト　（礫±20㎜ごく稀に含、酸化鉄やや多く含）
6　5Y3/1　オリーブ黒色シルト質粘土　（炭化物3-10㎜まばらに含、礫5-15㎜上位に含、砂混）
7　5Y3/1　オリーブ黒色シルト　（酸化鉄ごく稀に含、8層ブロック下位に10%）
8　7.5Y6/2　灰オリーブ色微砂　（酸化鉄やや多く含）
9　10Y7/1　灰白色砂質シルト　（酸化鉄やや多く含）
10　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（粘性強、灰白色粘土ブロック一部に含、酸化鉄やや多く含）
11　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土　（礫5-10㎜まばらに含、8層ブロック7%、2.5Y3/1黒褐色シルト小ブロック2%、酸化鉄稀に含）
12　2.5Y3/2　黒褐色粘土　（粘性強、炭化物±1㎜稀に含、礫5-10㎜まばらに含、酸化鉄多く含）
13　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土　（粘性強、炭化物±1㎜稀に含、礫±5㎜まばらに含、酸化鉄やや多く含）
14　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（粘性やや強、礫5-20㎜まばらに含、地山粒3%、酸化鉄やや多く含）
15　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（粘性強、炭化物±2㎜稀に含、礫±10㎜稀に含、地山ブロック40%(境界曖昧)、酸化鉄含）
16　2.5Y4/1.5　暗灰黄色粘質シルト
17　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土　（木片含）
18　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土　（粘性やや強、砂わずかに混、炭化物ごく稀に含、礫5-10㎜稀に含、地山粒2%、酸化鉄含）
19　2.5Y3/2　黒褐色シルト質粘土　（礫5-10㎜まばらに含、炭化物±2㎜稀に含、地山ブロック・粒5%、酸化鉄含）
20　2.5Y4/1　黄灰色粘土　（粘性強、炭化物±5㎜稀に含、礫5-15㎜稀に含、層北側2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック60%、地山ブロック帯状に10%、酸化鉄まばらに含）
21　地山を基層として　(2.5Y3.5/1黒褐色粘土上位を中心として30%、礫5-10㎜稀に含、酸化鉄多く含)
22　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土　（粘性強、炭化物±3㎜まばらに含、礫±5㎜稀に含、酸化鉄やや多く含）
23　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（粘性強、炭化物±5㎜稀に含、礫±10㎜含、地山ブロック下位で50%、酸化鉄含、地山粒1%、酸化鉄やや多く含）
24　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土　（粘性やや強、炭化物±2㎜稀に含、礫10-20㎜含、2.5Y3/1.5黒褐色粘土筋状に3%）
25　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土　（粘性強、礫±10㎜まばらに含、地山粒10%、酸化鉄含）
26　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土　（粘性強、地山粒3%、酸化鉄含）
27　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土　（炭化物±1㎜ごく稀に含、砂わずかに含、酸化鉄まばらに含）
28　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（炭化物±1㎜稀に含、礫±5㎜稀に含、地山ブロック15%、酸化鉄含）
29　2.5Y3/1　黒褐色シルト　（礫5-40㎜まばらに含、地山粒1%、酸化鉄やや多く含）
30　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（礫5-10㎜やや多く含、炭化物±3㎜まばらに含、地山粒10%、酸化鉄やや多く含）
31　2.5Y3/1　黒褐色シルト　（礫2-10㎜まばらに含、地山粒3%、酸化鉄含）
32　地山を基層として　(2.5Y3.5/1黄灰色粘土ブロック40%、礫2-30㎜含、酸化鉄やや多く含)
33　2.5Y3/1黒褐色粘土と地山の混土層　（礫5-10㎜まばらに含、酸化鉄含）
34　10YR5/2　灰黄褐色粘土　（粘性強、礫±5㎜ごく稀に含、2.5Y4/1黄灰色粘土粒30%、地山粒3%、酸化鉄まばらに含）
35　10YR5/2　灰黄褐色粘土　（粘性強、礫±5㎜ごく稀に含、2.5Y4/1黄灰色粘土粒30%、地山粒3%、酸化鉄まばらに含）
36　2.5Y3.5/1黒褐色粘土ブロックと地山ブロックの混土層　（粘性強、礫±2㎜稀に含、酸化鉄まばらに含）
37　2.5Y3.5/1黒褐色粘土ブロックと地山ブロックの混土層　（粘性強、礫±2㎜稀に含、酸化鉄まばらに含）
38　2.5Y3.5/1黒褐色粘土ブロックと地山ブロックの混土層　（粘性強、礫±2㎜稀に含、酸化鉄まばらに含）
39　2.5Y3.5/1黒褐色粘土ブロックと地山ブロックの混土層　（粘性強、礫±2㎜稀に含、酸化鉄まばらに含）
40　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土　（粘性強、礫5-15㎜稀に含、地山ブロック・粒20%、酸化鉄含）
41　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土　（粘性強、礫5-15㎜稀に含、地山ブロック・粒20%、酸化鉄含）
42　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土　（粘性強、地山粒15%、酸化鉄含）
43　地山を基層として　(2.5Y3.5/1黄灰色粘土ブロック10%、礫5-10㎜まばらに含、酸化鉄含)
44　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土　（粘性強、礫±5㎜稀に含、地山粒30%、酸化鉄まばらに含）
45　2.5Y4/1　黄灰色粘土　（礫10-20㎜含、2.5Y2/1黒色粘土粒5%、地山粒40%、酸化鉄まばらに含）
46　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土　（粘性強、礫5-30㎜まばらに含、酸化鉄含、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック5%）
※1層＝耕土、2～4層＝整地土、5・6層＝撹乱(溝状)、7～10層＝鞍部上位覆土(黒系シルトと微砂の互層)
※8層上面がH28調査区(1区)の上面検出面に相当
※4層＝H28調査区北壁A-5層に相当
※8層＝H28調査区北壁A-6層に相当
※9層＝H28調査区北壁A-7層に相当
※10層＝H28調査区北壁A-8層に相当
※24層の黒褐色粘土→12～14層の酸化鉄混じりの黒褐色粘土が鞍部でもより低い南側で堆積した後、鞍部の中でもやや高位の北側の範囲で18層の黒褐色粘土が堆積。その後、耕地整理による削平(6層などの灰白グループ含)がみられるといった大まかなまとまりが認められる。
※13層＝H28北壁A-9層に対応、12層＝H28北壁A-9層に類似層、24層＝H28北壁A-12層に対応
※18層・29層・31層は同一層群
※19層・23層は類似層
※16層以北の33層は小礫(径3-8㎜が主)が斑点状にまじり多くなる
※遺物取り上げを8・9層＝「灰白シルト」
12～14層＝「黒褐色粘土」
）　B2北半より以北は18層＋相当層の時期としては新しい「黒褐色粘土」
24層以下＝　「黒褐色粘土」
とした。



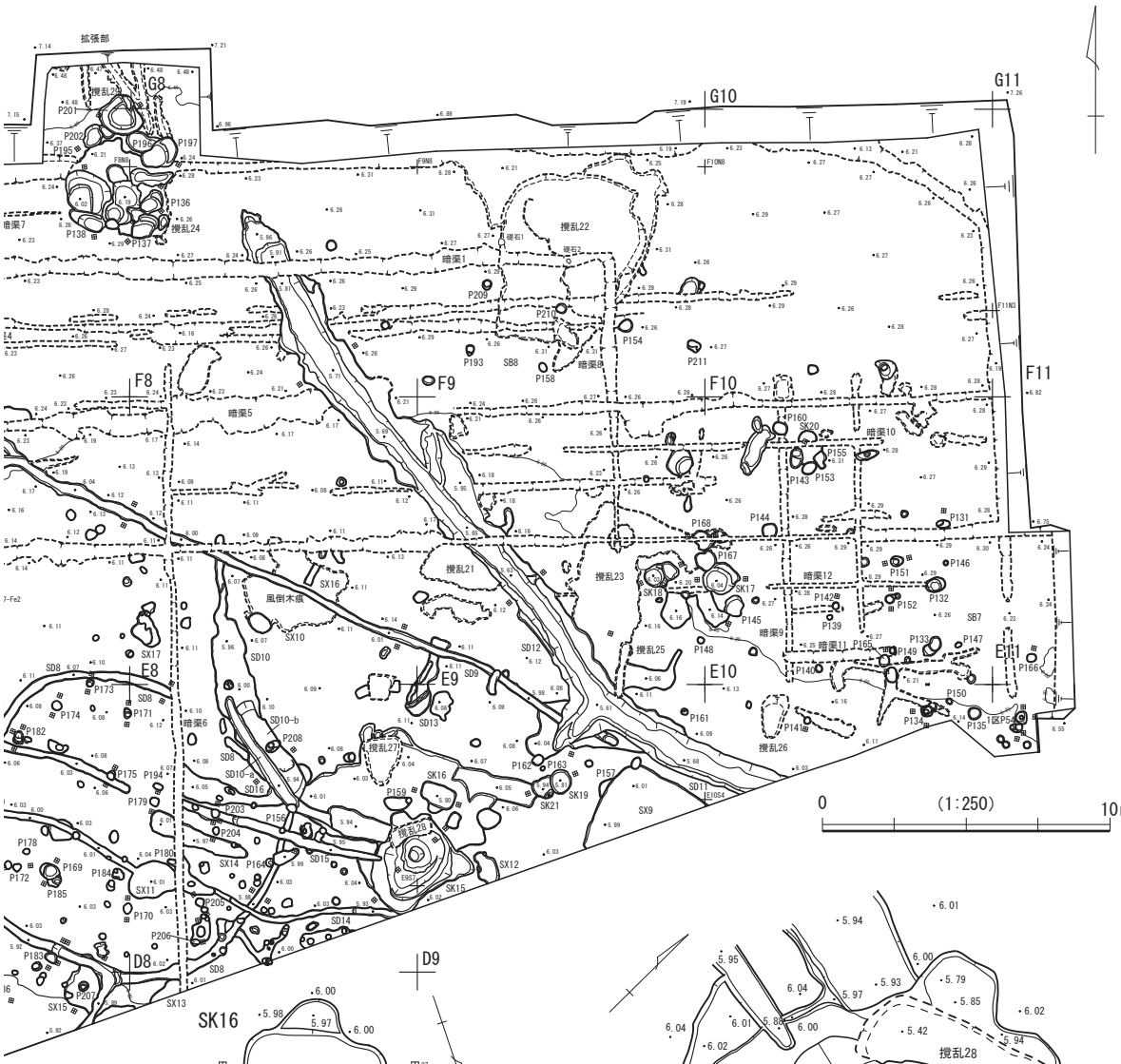
第27図　２区２面全体図(S＝1/150・1/60)

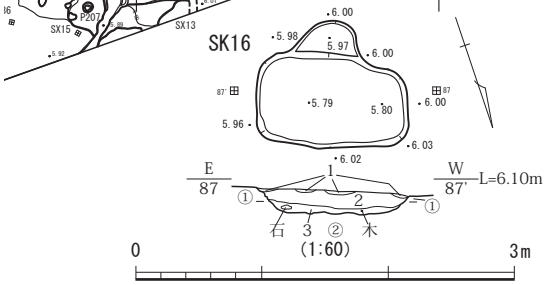


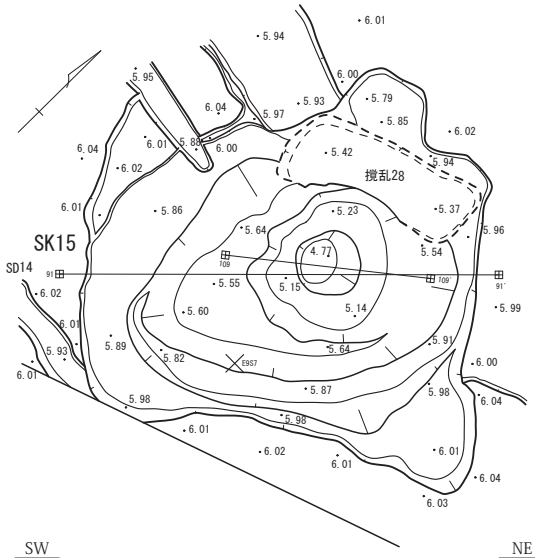
第28図　２区部分図１（S＝1/250）

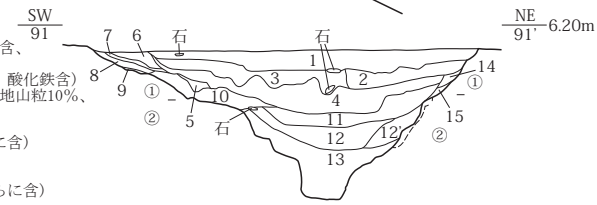


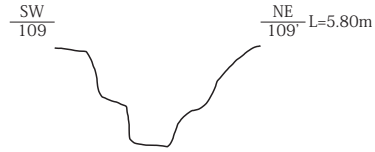
第29図　２区部分図２（S＝1/250）







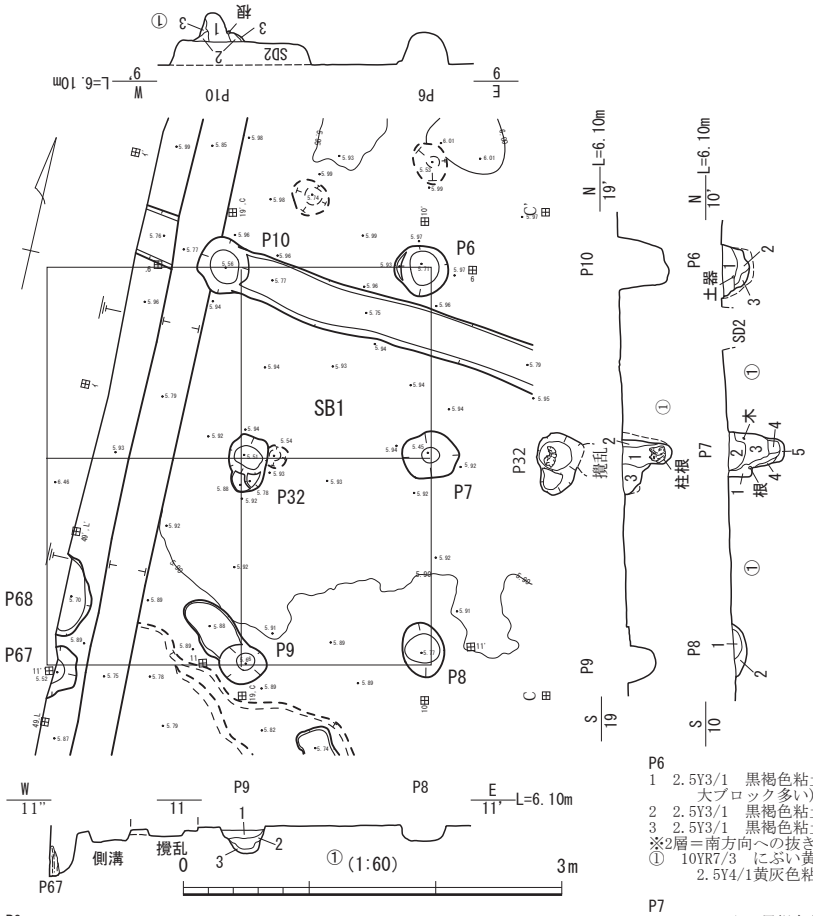




1　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト(わずかに砂混、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±3mmごく稀に含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含、土質均質)
3　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mmごく稀に含、地山粒10%、酸化鉄まばらに含)
※上面の堆積土の残欠 ※D9グリッド北面検出面一段下げた後、検出した遺構
①　5Y6.5/2　灰オリーブ色シルト(砂わずかに混、礫10-20mmまばらに含、2.5Y3/1黒褐色シルト筋状に20%、酸化鉄多く含)
②　2.5GY6/1　オリーブ灰色シルト質粘土(2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土筋状に10%、酸化鉄まばらに含)

SK15
1　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(礫±15mm、±100mmまばらに含、炭化物2-10mm稀に含、酸化鉄多く含)
2　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(粘性強、礫±10mm稀に含、炭化物±3mm稀に含、地山粒1%、酸化鉄含)
3　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(礫10-80mmごく稀に含、炭化物5-10mmまばらに含、地山粒10%、酸化鉄含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±3mmごく稀に含、酸化鉄中位に一面に含)
5　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1mmごく稀に含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
6　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
7　2.5Y3/1　黒褐色シルト(地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
8　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mmごく稀に含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
9　地山を基層として(2.5Y3/1.5黒褐色シルト質粘土ブロック5%、酸化鉄稀に含)
10　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2mm稀に含、地山ブロック15%、酸化鉄やや多く含)
11　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(粘性強、しまりやや弱、植物遺体含、地山小ブロック2%、酸化鉄多く含)
12　5Y2.5/1　オリーブ黒色粘土(粘性強、しまり弱、植物遺体含、地山小ブロック1%、腐植層か)
12'　5Y2.5/1　オリーブ黒色粘土(粘性強、しまり弱、植物遺体含、地山小ブロック3%、腐植層か)
13　5Y3/1　オリーブ黒色粘土(粘性強、しまり弱、炭化物±2mm稀に含、地山ブロック2%、腐植層か)
14　2.5Y2.5/1　黒色粘土(炭化物±1mmごく稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含)
15　地山に近似するが地山よりわずかに濁
①　5GY6/1　オリーブ灰色シルト質粘土(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック7%、酸化鉄多く含)
②　2.5GY6/1　オリーブ灰色粘質シルト(粘性やや強、酸化鉄多く含)

第30図　２区部分図３、SK15・16(S＝1/250・1/60)



調査区西壁

1　5Y4/2　灰オリーブ色粘土(礫10-30㎜まばらに含)
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土+土(炭化物±5㎜稀に含、礫30-50㎜まばらに含)
3　2.5Y4/2　暗灰黄色シルト質粘土(炭化物±3㎜稀、礫±10㎜まばらに含、地山小ブロック2%、下位に7層ブロック5%、酸化鉄多く含)
4　2.5Y3.5/2　暗灰黄色粘土+土(炭化物±1㎜ごく稀に含、礫5-10㎜稀に含、酸化鉄含)
12　西壁(イ)-14層

P67

5　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山小ブロック20%、(層北側に集中する)、酸化鉄稀に含)
6　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±3㎜まばらに含、礫±10㎜ごく稀に含、地山小ブロック20%(層南側集中する)、酸化鉄稀に含)
7　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、しまり弱(炭化物±1㎜稀に含、地山粒1%)
8　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物1-3㎜稀に含、地山粒2%)
※6層＝柱腐食後の流入土、7層＝柱痕、8層＝掘り方

P68

9　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(炭化物1-3㎜稀に含、地山小ブロック30%、酸化鉄まばらに含)
10　12層を基層として(2.5Y3.5/1黄灰色粘土小ブロック30%、酸化鉄含)
11　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1㎜稀に含、12層小ブロック25%、酸化鉄まばらに含)

P9

1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、礫土20㎜ごく稀に含、地山ブロック5%、酸化鉄含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物1-2㎜稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄含)
3　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック3%、酸化鉄稀に含)
※抜き取り痕か
①　10YR7/3　にぶい黄橙色粘土(粘性やや強、砂わずかに混、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック1%、酸化鉄やや多く含)

P32

1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物1-5㎜まばらに含、礫±5㎜稀に含、地山粒7%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、地山粒20%)
3　2.5Y3.5/1　黄灰色シルト質粘土(礫2-5㎜まばらに含、地山ブロック30%、酸化鉄多く含)
※1層＝柱痕、2・3層＝掘り方
①　10YR7/3　にぶい黄橙色粘土(粘性やや強、砂わずかに混、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック1%、酸化鉄やや多く含)

P6

1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、地山ブロック30%(特に層壁側は大ブロック多い)、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、地山粒3%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山小ブロック40%、酸化鉄含)
※2層＝南方向への抜き取り痕か
①　10YR7/3　にぶい黄橙色粘土(粘性やや強、砂わずかに混、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック1%、酸化鉄やや多く含)

P7

1　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒7%、酸化鉄含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、地山ブロック20%、酸化鉄まばらに含、炭化物±3㎜ごく稀に含、酸化鉄含)
4　5Y3/1　オリーブ黒色粘土(粘性強)
5　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック30%、酸化鉄含)
※4層＝柱痕か、1層＝根による撹乱

P8

1　2.5Y2/1　黒色粘土(地山ブロック30%、炭化物±1㎜、ごく稀に含、酸化鉄多く含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック30%、酸化鉄やや多く含)

P10

1　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜ごく稀に含、地山小ブロック20%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土　地山小ブロック15%、酸化鉄多く含、炭化物±1㎜ごく稀に含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック25%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝抜き取り痕か
①　10YR7/3　にぶい黄橙色粘土　(粘性やや強、砂わずかに混、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック1%、酸化鉄やや多く含)

第31図　２区SB1実測図(S＝1/60)

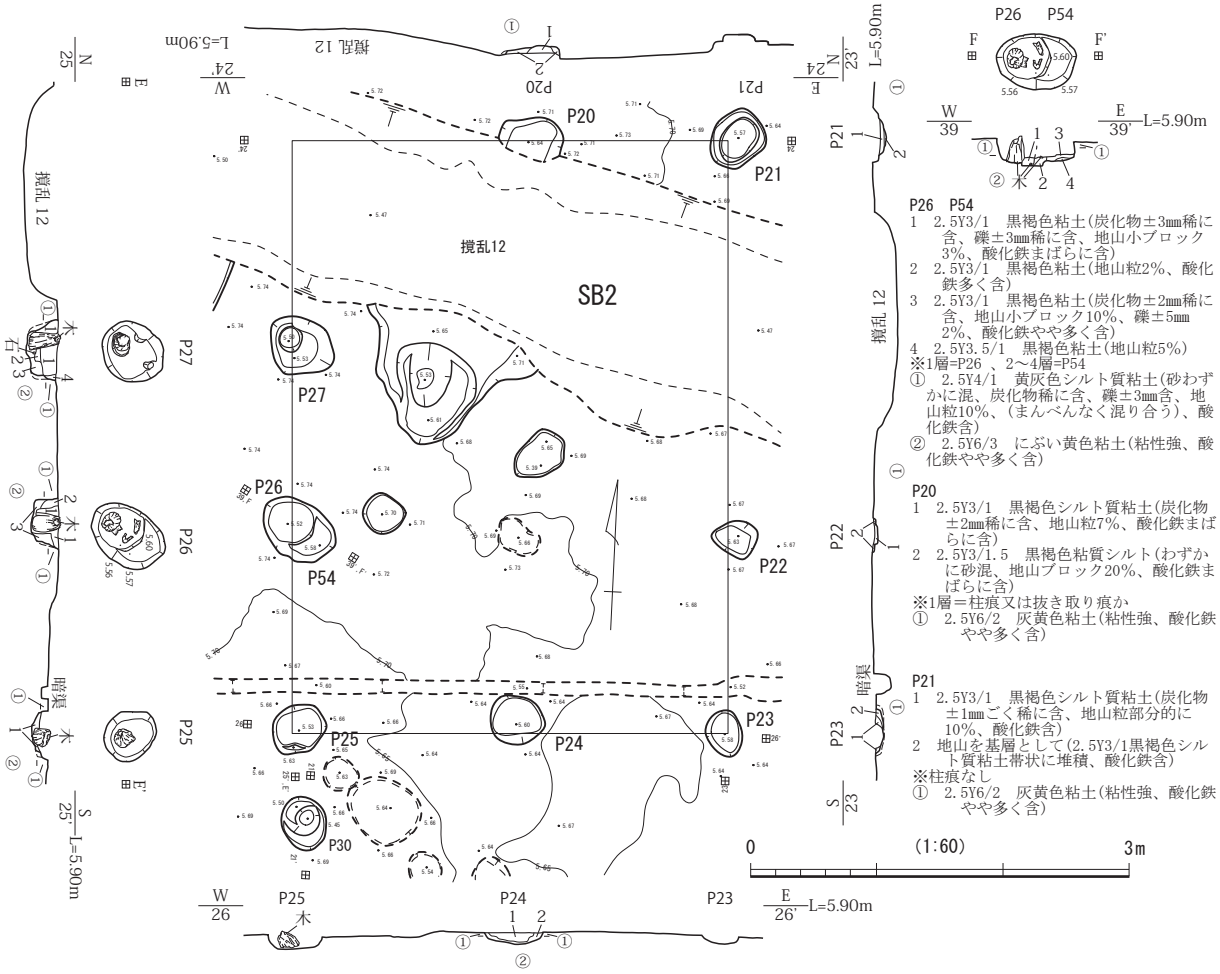
いたようである。柱穴の覆土は黒褐色～黒色である。柱穴からは土師器の細片が少量出土しているほか、P7から６世紀前葉に位置付けられる須恵器の坏蓋（第52図94）が出土している。

SB2（第32図、図版19）　２区南西隅C2・3グリッドで検出し、検出面は標高5.64～5.74mである。２間（3.4m）×３間（4.7m）の側柱建物で、建物北西隅の一部が攪乱12によって切られている。主軸はN-4°-Wである。柱間は梁間で約1.65～1.7m、桁行で約1.5～1.6mとほぼ揃っており、柱配列も比較的整っている。柱穴の平面形態は方形や円～楕円形と不揃いである。径は長軸で34～51㎝程で、深さは４～24㎝を測る。P20・P22・P23で確認した柱痕跡ないし抜き取り跡とみられる土層や、柱根はP25、P26・P27（第58図242･243共にサクラ属）に残存しており、径15～20㎝程の柱が据えられていたと考えられる。柱穴の覆土は概ね黒褐色である。P26から出土した須恵器片は、SB1-P7出土の須恵器坏蓋と接合する（第52図94）。また、P26に切られているP54が建物の建て替えによるものなのか、別遺構なのかは判然としない。建物の時期はSB1と同時期と考えられる。

SB3（第33図、図版20）　２区南西隅C2グリッドで検出した。検出面は標高5.67～5.77mである。２間（4.2m）×４間（5.6m）の総柱建物で、建物北東隅の一部が攪乱12・14によって切られる。主軸はN-7°-Wである。柱間は梁間で約2.1～2.2m、桁行で約1.3～1.5mと比較的揃っており、柱配列にも大きなずれはない。柱穴の平面形態は方形や円～楕円形、不整円形と不揃いである。径は長軸で39～70㎝程、深さは13～43㎝を測る。土層からは柱痕跡や抜き取り跡が確認でき、P40では北方向への、P35では西方向への抜き取り跡とみられる土層をそれぞれ確認した。柱根は残存していないが、柱痕跡から柱の径は15～20㎝程と推定される。柱穴の覆土は概ね黄灰色～黒褐色である。柱穴からは土師器の細片がごく少量出土している。建物の時期は古墳時代後期～平安時代とみられるが、より詳細な時期の特定には至らなかった。

SB4（第34図、図版21）　２区南西隅C1･C2･B2グリッドで検出し、検出面は標高5.67～5.77mである。２間（3.8m）×２間（４m）で、建物中央部は周囲の柱穴の底面レベル近くまで攪乱を受けているため総柱か側柱かは不明である。しかし、北辺の柱列から飛び出すP64の土質がSB4の柱穴と類似していることや、柱痕跡が明瞭なことから、棟持柱をもつ建物だった可能性がある。主軸はN-2°-Eである。柱間や柱配列は整っており、柱間は梁間で約1.8～２m、桁行で約1.9～2.1mを測る。柱穴の平面形態は概ね円形や方形を呈し、径は長軸で48～56㎝前後、深さは17～37㎝を測る。柱痕跡ないし抜き取り跡を観察できる柱穴が多く、P49では東方向への抜き取り跡とみられる土層が観察できた。これらの土層観察やP51から出土した柱根（第58図244クリ）から、設置されていた柱の径は15～20㎝前後と推測される。なお、P51の柱根は耕地整理時に原位置から多少動いた可能性がある。柱穴の覆土は概ね黄灰色～黒褐色である。建物の時期は古墳時代後期～平安時代に位置付けられるが、出土遺物が細片のため、詳細な時期の特定はできていない。

SB5（第36図、図版22）　２区南西隅B2・3グリッドで検出し、検出面は標高5.52～5.68mである。２間（3.2～3.5m）×２間（3.6～4.2m）の総柱建物で、南辺の一部が攪乱30によって切られている。主軸はN-30°-Eである。柱間は梁間で1.5～1.7m、桁行で1.7～2.3mと不規則で、柱配列に大きなずれはないものの、建物の平面形は南西へと開くような形を呈する。柱穴の平面形態は円～楕円形、方形を呈し、径は長軸で28～54㎝程、深さは９～42㎝程を測る。柱根はP55、P59（第58図245クリ）、P60が残存しており、礎板はP59・P62（第59図247・第58図246共にクリ）が確認された。P63からは柱根の一部とみられる木片が出土している。出土した柱根や柱痕跡から、径15～20㎝程の柱が据えられていたと推定される。柱穴の覆土は概ね黄灰色～黒褐色、一部で黒色である。時期は他の掘立柱建物と同様、古墳時代後期～平安時代に比定できるが、出土遺物が少なく他遺構との切り合いもないので詳細な時期は不明である。



P26　P54
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±3mm稀に含、礫±3mm稀に含、地山小ブロック3%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山粒2%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2mm稀に含、地山小ブロック10%、礫±5mm 2%、酸化鉄やや多く含)
4　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(地山粒5%)
※1層=P26 、2～4層=P54
①　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(砂わずかに混、炭化物稀に含、礫±3mm含、地山粒10%、(まんべんなく混り合う)、酸化鉄含)
②　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

P20
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mm稀に含、地山粒7%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(わずかに砂混、地山ブロック20%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝柱痕又は抜き取り痕か
①　2.5Y6/2　灰黄色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

P21
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1mmごく稀に含、地山粒部分的に10%、酸化鉄含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土帯状に堆積、酸化鉄含)
※柱痕なし
①　2.5Y6/2　灰黄色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

P27
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山小ブロック2%、酸化鉄ごく稀に含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(粘性強、地山粒1%、炭化物±1mmごく稀に含、酸化鉄ごく稀に含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1mmごく稀に含、地山粒小ブロック2%、酸化鉄ごく稀に含)
4　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土粒20%、炭化物±1mm稀に含、酸化鉄稀に含)
①　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(砂わずかに混、炭化物稀に含、礫±3mm含、地山粒10%(まんべんなく混り合う)、酸化鉄含)
②　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土　(粘性強、酸化鉄やや多く含)

P26
1　2.5Y3/2　黒褐色粘土(炭化物±1mmごく稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(地山粒3%、酸化鉄含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±3mm稀に含、礫±3mm稀に含、地山小ブロック3%、酸化鉄まばらに含)
①　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(砂わずかに混、炭化物稀に含、礫±3mm含、地山粒10%(まんべんなく混り合う)、酸化鉄含)
②　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

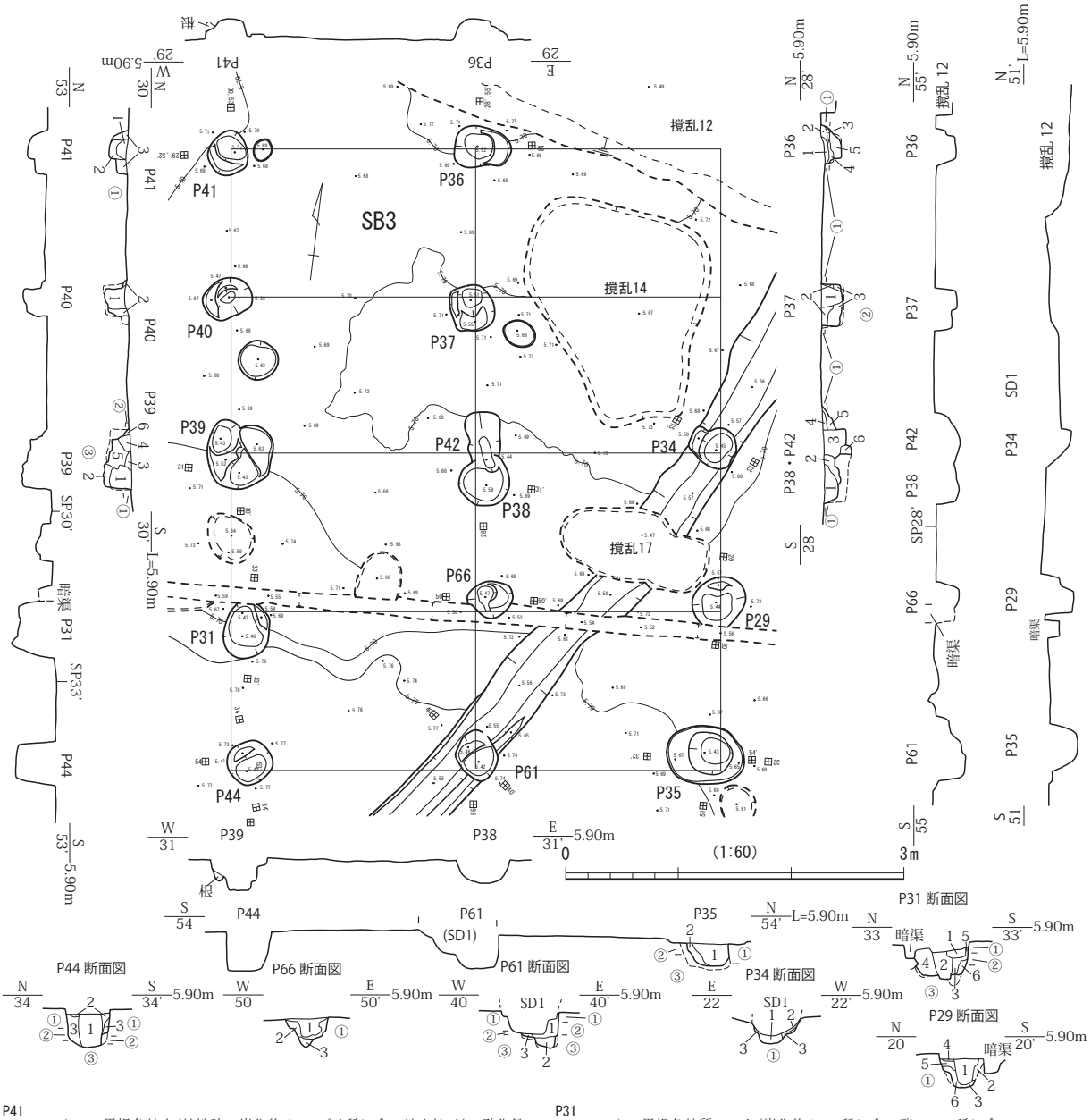
P25
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±2mm稀に含、地山小ブロック10%、酸化鉄含)
①　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(砂わずかに混、炭化物稀に含、礫±3mm含、地山粒10%(まんべんなく混り合う)、酸化鉄含(南隣のP30は10YR6/4だが比較してもやはり異なっていた))
②　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

P22
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山粒壁際で10%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(地山小ブロック20-30%混、酸化鉄まばらに含)
※1層＝柱痕か
①　2.5Y6/2　灰黄色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

P23
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1mmごく稀に含、2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土ブロック3%、酸化鉄多く含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック5%、酸化鉄やや多く含)
※1層＝柱痕又は抜き取り痕か
①　2.5Y6/4　にぶい黄色粘土(粘性強、酸化鉄多く含)

P24
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1mmごく稀に含、礫±2mm稀に含、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(地山粒20%(下位は50%)、酸化鉄やや多く含)
※明確な柱痕なし。P21～23に類似
①　10YR4.5/3　にぶい黄褐色粘質シルト(礫±2mmまばらに含、2.5Y4/1黄灰色粘質シルト小ブロック5%)
②　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(わずかに砂混、酸化鉄やや多く含)

第32図　２区SB2実測図(S＝1/60)



P41
1　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒3%、酸化鉄ごく稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±2㎜ごく稀に含、地山小ブロック7%、酸化鉄稀に含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック10%、炭化物2-5㎜まばらに含、礫2-5㎜まばらに含、酸化鉄まばらに含)
※1・2＝柱痕、3層＝掘り方

P40
1　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±2㎜ごく稀に含、2.5Y5/1.5黄灰色粘土小ブロック上位に2%、地山ブロック5%、酸化鉄稀に含)
2　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック15%、炭化物±2㎜ごく稀に含、酸化鉄含)
※1層＝柱痕又は北方向への抜き取り痕か

P39
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物1-5㎜稀に含、礫±5㎜稀に含、地山小ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3.5/2　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1㎜ごく稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
3　10YR5.5/3　にぶい黄色粘質シルト(2.5Y3/1.5黒褐色粘質シルトブロック40%、礫±10㎜含、酸化鉄稀に含)
4　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(炭化物±2㎜ごく稀に含、地山粒1%、酸化鉄稀に含)
5　③層を基層として(2.5Y3/1.5黒褐色粘土ブロック40%、礫±5㎜稀に含、酸化鉄含)
6　10YR6/2　灰黄褐色シルト質粘土(2.5Y3/1.5黒褐色粘質シルト小ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
※1・2層＝柱痕か(やや不整形)
①　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1㎜稀に含、礫2-30㎜稀に含、2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック1%、②層粒5%)
②　10YR5.5/3　にぶい黄色粘質シルト(2.5Y3/1.5黒褐色粘土ブロック5%、炭化物±1㎜ごく稀に含、礫±10㎜ごく稀に含、酸化鉄稀に含)
③　10YR6.5/4　にぶい黄橙色粘土(粘性強、礫2-10㎜含、2.5Y4/1黄灰色粘土筋状に2%、酸化鉄やや多く含)

P31
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±2㎜稀に含、礫5-15㎜稀に含、地山ブロック7%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物1-5㎜まばらに含、地山小ブロック・粒7%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒ごく稀に含、酸化鉄稀に含)
4　2.5Y3/2　黒褐色粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒15%、酸化鉄まばらに含)
5　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック30%、礫±3㎜稀に含、酸化鉄稀に含)
6　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック7%、炭化物±1㎜稀に含、礫5-10㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)
※2・3層＝柱痕、4～6層＝掘り方
①　2.5Y2/1　黒色粘質シルト(礫2-5㎜まばらに含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
②　2.5Y5.5/3　にぶい黄色粘質シルト(礫±2㎜まばらに含、2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック3%、酸化鉄稀に含)
③　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(粘性やや強、わずかに砂混、2.5Y3.5/1黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄含)

P44
1　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2㎜まばらに含、礫5-10㎜稀に含、地山小ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(礫±3㎜稀に含、地山小ブロック1%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y4/1　黄灰色粘土(粘性強、地山小ブロック40%、酸化鉄ごく稀に含)
※1層＝柱痕、2・3層＝掘り方
※土質はP31に類似
①　2.5Y2/1　黒色粘質シルト(礫2-5㎜まばらに含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
②　2.5Y5.5/3　にぶい黄色粘質シルト(礫±2㎜まばらに含、2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック3%、酸化鉄稀に含)
③　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

第33図　２区SB3実測図(S＝1/60)

P36
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(地山粒1%)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト質粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒1%、酸化鉄稀に含)
4　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(礫±3㎜ごく稀に含、地山ブロック50%、酸化鉄まばらに含)
5　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(2.5Y5/2暗灰黄色粘土ブロック10%、地山ブロック下位に10%、酸化鉄稀に含)
※5層＝柱痕又は抜き取り痕か

P37
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1㎜ごく稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、礫±2㎜ごく稀に含、地山小ブロック7%、酸化鉄稀に含)
3　地山ブロックと2.5Y3/1黒褐色粘土ブロックの混土層(礫±5㎜ごく稀に含、酸化鉄まばらに含)
※1層＝柱痕、2・3層＝掘り方

P38
1　地山ブロックと2.5Y4/1黄灰色粘土ブロックの混土層(粘性強、炭化物±1㎜稀に含礫±5㎜稀に含、酸化鉄含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±3㎜まばらに含、礫±5㎜ごく稀に含、地山ブロック20%、酸化鉄含)

P42
3　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物±2㎜稀に含、礫±10㎜稀に含、地山小ブロック2%酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
5　地山ブロックと2.5Y3/1黒褐色粘土ブロックの混土層(炭化物1-5㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)
6　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1㎜稀に含、地山ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
※1・2層＝P38、3～6層＝P42、6層＝柱痕か
①　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土　(粘性やや強、わずかに砂混、礫±5㎜稀に含、2.5Y3/1黒褐色粘土筋状又は小ブロック状に5%、酸化鉄まばらに含)
②　10YR6.5/4　にぶい黄橙色粘土　(粘性強、酸化鉄含)

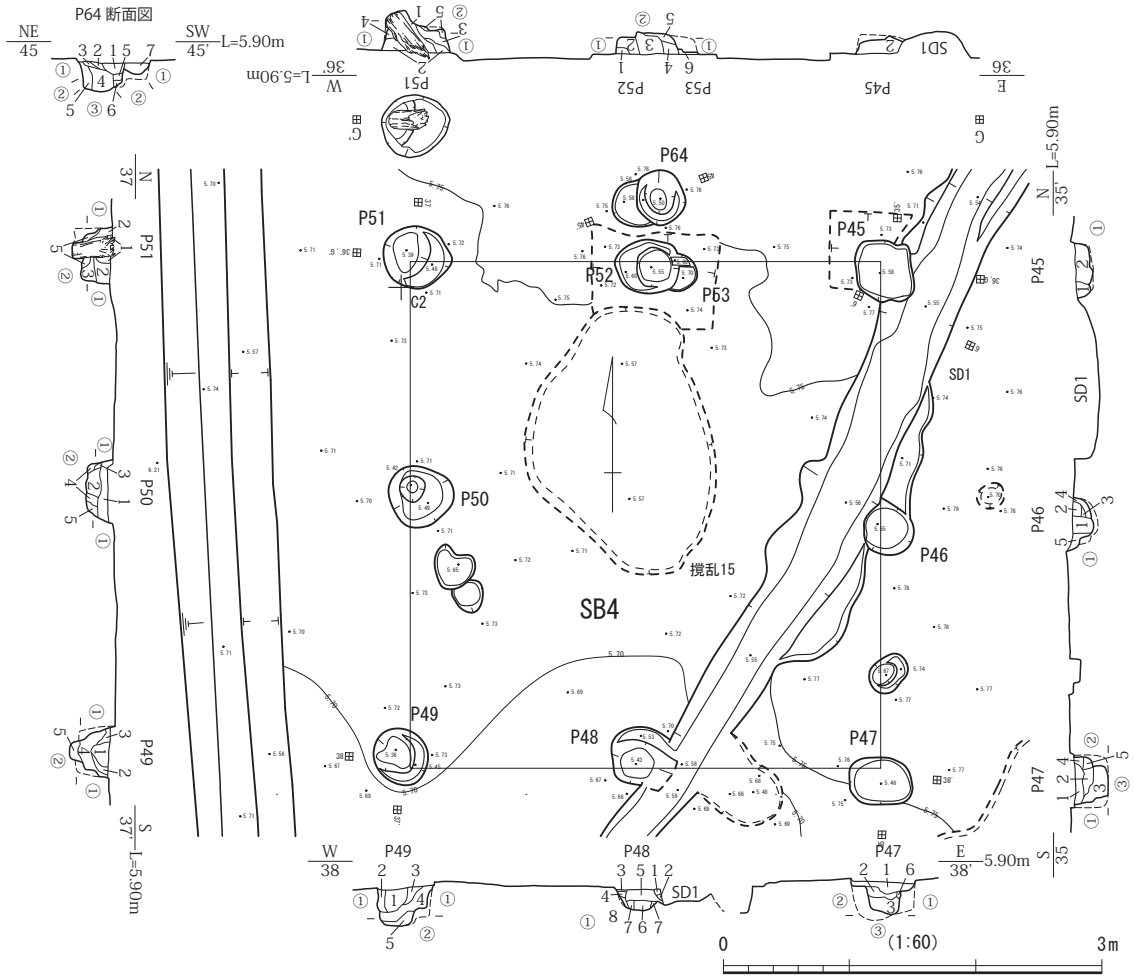
P66
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±3㎜稀に含、礫5-20㎜まばらに含、地山粒3%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫3-5㎜まばらに含、地山ブロック40%、酸化鉄稀に含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック5%、礫5-10㎜まばらに含、酸化鉄含)
※1層＝北方向への抜き取り痕、2・3層＝掘り方又は抜き取り時の流入土
①　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土(粘性強、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック2%、酸化鉄やや多く含、礫10-20㎜まばらに含)

P61
1　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(炭化物1-10㎜稀に含、礫5-10㎜まばらに含、地山小ブロック2%、酸化鉄含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、地山ブロック10%、酸化鉄含)
3　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック7%、炭化物±3㎜稀に含、礫±10㎜稀に含、酸化鉄含)
※1・2層＝柱痕、3層＝掘り方
※P30、P35と列をなすか？　対はなし
①　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、礫2-10㎜まばらに含、酸化鉄稀に含)
②　地山を基層として(2.5Y5/1黄灰色粘土粒40%、酸化鉄稀に含、礫2-10㎜まばらに含)
③　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(礫5-10㎜まばらに含、酸化鉄やや多く含)

P34
1　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、礫±5㎜稀に含、地山小ブロック3%、2.5Y4/1黄灰色粘土東側底に帯状堆積、酸化鉄やや多く含)
2　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック40%、炭化物±2㎜まばらに含、礫5-10㎜まばらに含、酸化鉄多く含)
3　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック10%、酸化鉄稀に含)
※SD1底面で検出
※1層＝柱痕、2・3層＝掘り方
①　2.5Y6/2　灰黄色粘土(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック5%、酸化鉄多く含)

P29
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物1-5㎜稀に含、地山粒3%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(地山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
4　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック20%、礫±2㎜含、酸化鉄まばらに含)
5　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜稀に含、礫±5㎜稀に含、地山ブロック10%、酸化鉄稀に含)
6　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック5%、酸化鉄稀に含)
①　2.5Y6/2　灰黄色粘土　(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック5%、酸化鉄多く含)

P35
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物±3㎜稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y4/1　黄灰色粘土(礫5土㎜稀に含、地山ブロック40%、2.5Y3/1黒褐色粘質シルトブロック20%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝西方向への抜き取り痕か、2層＝流入土
①　10YR5/4　にぶい黄褐色シルト(礫5-10㎜まばらに含、2.5Y3/1粘質シルトブロック15%、酸化鉄まばらに含)
②　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、礫±5㎜稀に含、地山ブロック15%、酸化鉄まばらに含)
③　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(酸化鉄やや多く含)



第34図　２区SB3・４(S＝1/60)

P51
1　2.5Y4/1　黄灰色粘土(粘性やや強、礫±10㎜稀に含、酸化鉄ごく稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物±1㎜ごく稀に含、礫2-10㎜まばらに含、2.5Y3/2黒褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(粘性やや強)
4　2.5Y4/1　黄灰色粘土(粘性やや強、地山小ブロック40%、酸化鉄稀に含、炭化物±5㎜稀に含、礫5-10㎜稀に含、地山粒40%、酸化鉄稀に含)
5　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック20%、礫2-10㎜稀に含、酸化鉄稀に含)
※耕地整理時に柱根動いたものか
※1・2層＝柱根脇への流入土、3～5層＝掘り方
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫2-10㎜まばらに含、炭化物±2㎜稀に含)
②　10YR7/3　にぶい黄橙色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

P50
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物1-5㎜まばらに含、礫5-15㎜稀に含、2.5Y6.5/2灰黄色粘土小ブロック10%、酸化鉄含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、礫±3㎜稀に含、2.5Y6.5/2灰黄色粘土粒1%、酸化鉄ごく稀に含)
3　2.5Y3/2　黒褐色粘土(炭化物±1㎜稀に含、礫±5㎜稀に含、酸化鉄ごく稀に含)
4　2.5Y5/1　黄灰色粘土(炭化物±1㎜稀に含、礫±2㎜ごく稀に含、②小ブロック・粒20%、酸化鉄まばらに含)
5　2.5Y5/1　黄灰色粘土(礫±2㎜ごく稀に含、②小ブロック40%(ブロックの境界は不明瞭))
※2層＝柱痕、3～5層＝掘り方
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫2-10㎜まばらに含、炭化物±2㎜稀に含)
②　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(炭化物±2㎜稀に含、礫±2㎜稀に含、酸化鉄やや多く含)

P49
1　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(粘性やや強　炭化物1-10㎜含、礫±2㎜ごく稀に含、2.5Y6/2灰黄色粘土粒20%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/2　黒褐色粘土(粘性強、炭化物1-5㎜まばらに含、礫±3㎜稀に含、2.5Y6/2灰黄色粘土粒30%)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、礫±3㎜稀に含、2.5Y6/2灰黄色粘土粒1%、②ブロック3%、酸化鉄稀に含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物1-10㎜まばらに含、礫±10㎜稀に含、2.5Y6/2灰黄色粘土小ブロック30%、酸化鉄ごく稀に含)
5　2.5Y4/1　黄灰色粘土(粘性強、炭化物±1㎜稀に含、②小ブロック20%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝東方角への抜き取り痕、2～4層＝抜き取り時の流入土、5層＝柱のあたり痕か
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±3㎜含、礫3-10㎜まばらに含、2.5Y6/2灰黄色粘土小ブロック・粒上位に20%、酸化鉄まばらに含)
②　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土(粘性強、上位で色調暗くなる、礫±10㎜稀に含)

P48
1　2.5Y3/2　黒褐色粘土(粘性やや強め、7.5Y7/1灰白色粘土と黒色粘土のブロック10%混、酸化鉄含)
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土(粘性やや強め、7.5Y7/1灰白色粘土と黒褐色粘土のブロック10～20%混、酸化鉄含)
3　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土(7.5Y7/1灰白色粘土と黒褐色粘土の小ブロック20～30%混、酸化鉄若干含)
4　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土(3層に比べ地山の混入多くまだらに30～40%混)
5　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土(3層よりも色調やや明るめ、地山と黒褐色粘土の小ブロックまばらに20%混、酸化鉄若干含)
6　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強め、7.5Y7/1灰白色粘土マーブル状に10～20%混、酸化鉄若干含)
7　2.5Y3/1　黒褐色粘土(6層に比べ灰白色粘土の混入40%と多くなる)
8　7.5Y7/1　灰白色粘土(粘性強い、黒褐色粘土小ブロック5%混)
※1・2層＝SD1覆土、6層＝柱痕、7層＝掘り方

P52
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(砂わずかに混、炭化物±1㎜稀に含、礫±5㎜稀に含、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト(砂わずかに混、炭化物±2㎜稀に含、礫5-10㎜まばらに含、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2㎜稀に含、礫±5㎜まばらに含、酸化鉄稀に含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±2㎜稀に含、礫2-5㎜まばらに含、酸化鉄ごく稀に含)
5　2.5Y4/1.5　暗灰黄色粘土(礫±2㎜稀に含、地山粒3%)
※1～5層＝P52、6層＝P53　3層＝柱痕又は抜き取り痕、1・2、4・5層＝掘り方

P53
6　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1㎜まばらに含、地山小ブロック2%、礫±2㎜稀に含、酸化鉄含)
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫2-10㎜まばらに含、炭化物±2㎜稀に含)
②　2.5Y6/3にぶい黄色粘土(地山か？)と2.5Y4/1黄灰色粘土が細かく混ざり合う(礫5-20㎜含、炭化物±1㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)

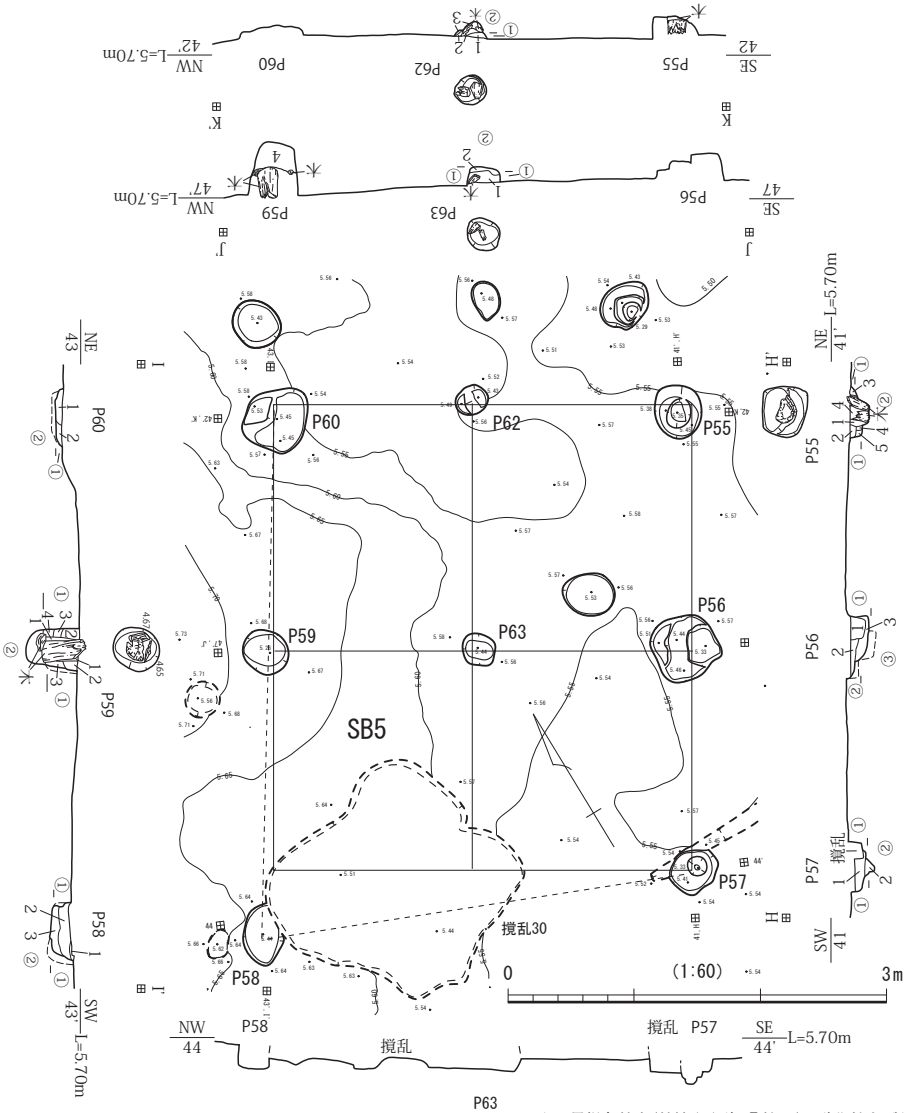
P45
1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト(わずかに砂混、礫±3㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫2-10㎜含、2.5Y4/2灰黄褐色粘土ブロック3%、酸化鉄稀に含)
※明確な柱痕・抜き取り痕なし
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫2-10㎜まばらに含、炭化物±2㎜稀に含)

P46
1　2.5Y3.5/1　黄灰色粘質シルト(礫±3㎜稀に含、2.5Y7/2.5灰黄色粘土粒10%、2.5Y3/1黒褐色シルト粒3%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3.5/1　黄灰色粘質シルト(2.5Y7/2.5灰黄色粘土粒2%、2.5Y3/1黒褐色シルト粒1%、酸化鉄稀に含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±2㎜、酸化鉄ごく稀に含)
4　2.5Y3.5/1　黄灰色粘質シルト(2.5Y7/2.5灰黄色粘土粒5%、2.5Y3/1黒褐色シルト小ブロック10%、酸化鉄稀に含)
5　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(2.5Y7/2.5灰黄色粘土粒20%、2.5Y3/1黒褐色粘土粒2%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝柱痕、2～5層＝掘り方
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫2-10㎜まばらに含、炭化物±2㎜稀に含)

P47
1　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/2　黒褐色粘土(2.5Y7/2.5灰黄色粘土小ブロック・粒5%、酸化鉄稀に含)
3　2.5Y4/1　黄灰色粘土(炭化物±2㎜稀に含、2.5Y7/2.5灰黄色粘土粒3%、酸化鉄やや多く含)
4　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト(炭化物±1㎜稀に含、2.5Y3/1黒褐色粘質シルト粒20%、2.5Y7/2.5灰黄色粘土粒20%、酸化鉄ごく稀に含)
5　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(2.5Y7/2.5灰黄色粘土小ブロック10%)
6　2.5Y4/1　黄灰色粘土(2.5Y7/2.5灰黄色粘土粒・小ブロック30%、下位は2.5Y3/1黒褐色シルト粒3%、酸化鉄やや多く含)
※2・3層＝柱痕か、4・5層＝掘り方か　①・②層＝鞍部埋土
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫2-10㎜まばらに含、炭化物±2㎜稀に含)
②　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、礫2-10㎜まばらに含、2.5Y7/2.5灰黄色粘土ブロック40%、地山ブロック下位に20%)
③　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土(礫2-5㎜まばらに含、10YR4/2灰黄褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄多く含)

P64
1　2.5Y3/2　黒褐色粘土(炭化物(10㎜前後)稀に含、地山と灰黄色粘土が小ブロックでまばらに10%混)
2　2.5Y3/2　黒褐色粘土(1層より地山の混入多)
3　2.5Y3/2　黒褐色粘土(土質1層に類似)
4　2.5Y3/2　黒褐色粘土(1層に比べ色調やや褐色味帯びる。炭化粒稀に含、下位を中心に地山小ブロック10%混)
5　2.5Y3/2　黒褐色粘土(地山と灰黄色粘土がブロックでまばらに10～20%混)
6　2.5Y3/2　黒褐色粘土(5層に比べ色調やや明るめ、地山ブロック30%混)
7　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト(下位を中心に地山と灰黄色粘土が小ブロックでまばらに10-20%混、酸化鉄若干含)
※4層＝柱痕、5・6層＝掘り方、7層＝別ピットか
※柱ラインからは北へ飛び出すがP52よりもほかの柱穴に土質類似し、柱痕明瞭、棟持柱か
①　2.5Y3/2～3/1　黒褐色粘土　＝鞍部埋土
②　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土　＝鞍部埋土
③　10YR6/6　明黄褐色粘土　＝地山

第35図　２区SB4土層注記



P60
1　2.5Y3.5/1　黒褐色粘質シルト(②小ブロック10%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(礫±5㎜まばらに含、②ブロック10%、酸化鉄やや多く含)
※1層＝柱痕か、2層＝掘り方か
①　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(礫±5㎜まばらに含、②小ブロック3%、酸化鉄やや多く含)
②　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(礫2-10㎜まばらに含、2.5Y4/1黄灰色粘土粒30%、酸化鉄含)

P59
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強　しまりなし)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±1㎜稀に含、礫2-5㎜稀に含、②粒5%、酸化鉄まばらに)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫±5㎜稀に含、②粒5%、酸化鉄稀に含)
4　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(②小ブロック20%、酸化鉄稀に含)
※1層＝柱痕、2～4層＝掘り方　※底面に礎板有
①　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(炭化物±3㎜稀に含、礫±3㎜稀に含む、下位で漸移的に②と混ざり合う)
②　10YR7/3　にぶい黄橙色粘土(粘性強、礫±2㎜稀に含、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック3%、酸化鉄まばらに含)

P58
1　2.5Y3.5/1　黄灰色粘質シルト(炭化物±1㎜ごく稀に含、礫5-10㎜まばらに含、2.5Y5/2暗灰黄色シルト小ブロック5%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y2/1　黒色粘土(礫±3㎜稀に含、②ブロック3%、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y4/1　黄灰色粘土(粘性強、礫±5㎜稀に含、②ブロック7%、酸化鉄やや多く含)
※明瞭な柱痕なし
①　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(炭化物±3㎜稀に含、礫±3㎜稀に含、下位で漸移的に②と混ざり合う)
②　10YR5/3　にぶい黄褐色粘土(粘性強、礫5-10㎜まばらに含、2.5Y4/1黄灰色粘土60%、酸化鉄多く含)

P62
1　10YR3/1　黒褐色シルト質粘土　(砂混、炭化物±1㎜稀に混、礫±5㎜稀に含、②小ブロック2%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土　(②粒20%、酸化鉄稀に含)
3　②を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土粒20%、酸化鉄稀に含)
※耕地整理時に両方向へ倒れたか
①　2.5Y3/1　黒褐色シルト　(礫±2㎜まばらに含、②粒3%、酸化鉄多く含)

P63
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強 ②粒2%、酸化鉄まばらに含、礫±3㎜稀に含)
2　2.5Y4/1　黄灰色粘土(炭化物±1㎜稀に含、礫±3㎜稀に含、②粒20%、酸化鉄稀に含)
※柱根は耕地整理時に動いたものか
①　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(②粒3%、酸化鉄稀に含、炭化物±1㎜ごく稀に含)
②　10YR5.5/3　にぶい黄褐色粘土(粘性強、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック30%(境界不明瞭)
②　10YR7/3　にぶい黄橙色粘土(粘性強、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック10%(上位で増す)、礫±3㎜まばらに含)

P55
1　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(酸化鉄ごく稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(砂わずかに混、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1㎜ごく稀に含、②小ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土(②粒10%、酸化鉄稀に含)
5　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、礫±2㎜稀に含、②粒1%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝柱痕、2～5層＝掘り方
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜ごく稀に含、②小ブロック東側に20%、酸化鉄含)
②　2.5Y6/2　灰黄色粘土(礫1-10㎜やや多く含、2.5Y3/1黒褐色粘土粒2%、酸化鉄やや多く含)

P56
1　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(礫±3㎜ごく稀に含、③小ブロック1%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(礫1-5㎜まばらに含、③ブロック25%、酸化鉄含)
3　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(礫±2㎜まばらに含、③ブロック40%、酸化鉄含)
※1層＝柱痕か、2・3層＝掘り方か
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫±3㎜稀に含、③粒1%、酸化鉄稀に含)
②　10YR5/1.5　暗灰黄色粘土(酸化鉄稀に含)
③　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(粘性強、礫±3㎜稀に含、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック2%、酸化鉄含)

P57
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±3㎜稀に含、礫±5㎜まばらに含、砂わずかに混、酸化鉄やや多く含)
2　②を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック30%、礫±2㎜稀に含、酸化鉄やや多く含)
※明瞭な柱痕なし
①　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(礫±2㎜まばらに含、酸化鉄多く含、②小ブロック5%)
②　10YR6/3　にぶい黄橙色粘土(粘性強、2.5Y4/1黄灰色粘土粒1%、礫±1㎜稀に含、酸化鉄多く含)

第36図　２区SB5実測図(S＝1/60)

SB6（第37図、図版23）　２区中央部C6・D5・D6で検出し、検出面の標高は5.65～5.94m前後である。梁間と桁行の区別が難しいが２間（3.6m）×２間（3.6m）の側柱建物で、主軸はN-22°-Eである。柱間は約1.6～1.9mを測り、柱配列に大きなずれはない。柱穴の平面形態は円～方形、不整形を呈する。径は長軸で20～50cm程を測る。深さはP75とP79で約２～４cmと最も浅く、その他は12～23cm程である。土層断面で柱痕跡ないし抜き取り跡を確認できる柱穴が多く、P73は南西方向へ、P76は北方向へ、P78は南東方向へそれぞれ柱を抜き取ったものと推測される。柱根は出土していないが、土層観察から据えられていた柱は径20～25cm前後と考えられる。柱穴の覆土は概ね黄灰色～黒色である。柱穴からは少量の須恵器・土師器片のほか、P77から須恵器の甕（第52図95）などが出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

SB7（第38図、図版24）　２区南東隅D10・D11・E10グリッドで検出し、検出面は標高6.15～6.29m前後である。２間（3.3m）×３間（6.5m）の側柱建物で、主軸はN-5°-Eである。柱間は梁間で約1.6～1.7m、桁行で約２～2.3mを測り、柱配列は比較的整っているが、建物の平面形は北側へやや開く。柱穴の平面形態は円～楕円形、不整方形を呈する。径は長軸で40～70cm程、深さは約３～29cmを測る。柱根は残存していないが、柱痕跡ないし抜き取り跡とみられる土層が観察でき、径15～20cm前後の柱が据えられたと考えられる。柱穴の覆土は概ね黒褐色で、一部で灰黄褐色や褐灰色である。柱穴からは土師器・須恵器の細片が出土した。SB7の西側ではP151・P152・P165がSB7と軸をほぼ同じくして検出され、柱痕跡または抜き取り跡とみられる土層も観察できたが、出土遺物が細片のため時期は不明で、SB7に伴う遺構なのかは判然としない。SB7も他の掘立柱建物同様、古墳時代後期～平安時代に位置付けられよう。

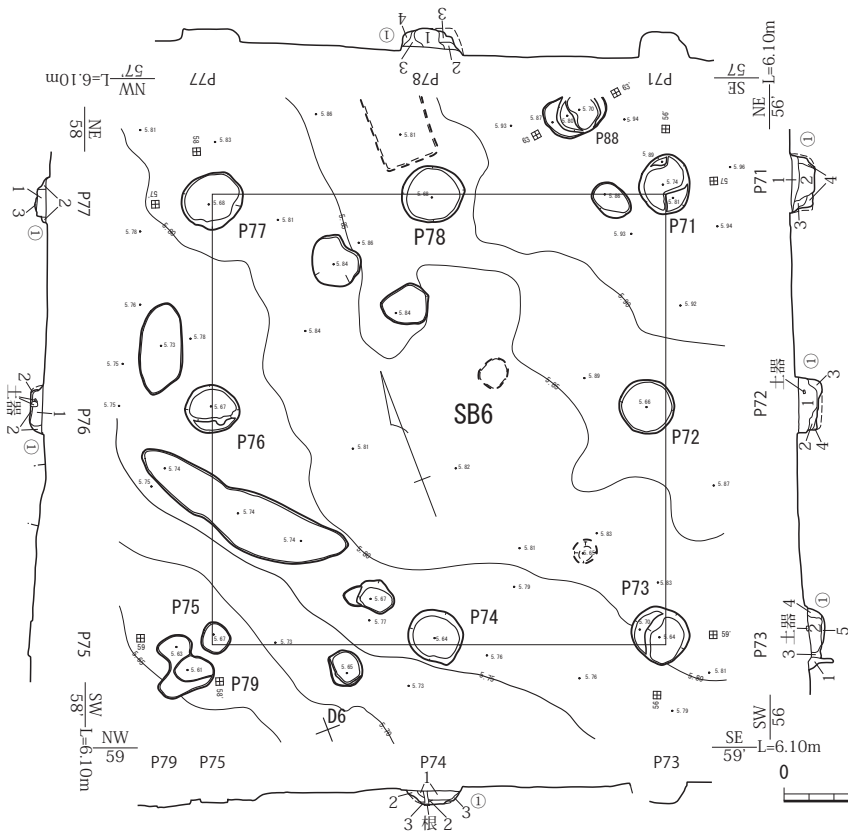
SB8（第37図）　２区北東隅F9グリッドで検出し、検出面の標高は6.25～6.32m前後である。２間（3.8m）×３間（7.4m）の総柱建物とみられ、北辺には礎石らしき石が残っていた。主軸はN-73°-Wである。柱間は梁間で約1.5～2.3m、桁行で約2.2～2.6mと少々ばらつきが見られるが、柱配列は比較的整っている。柱穴の平面形態は円～楕円形、隅丸方形を呈する。径は長軸で35～50cm程、深さは３～23cm程を測る。出土遺物は少量の土師器・須恵器片のみで時期は不明だが、近世の遺構が集中している調査区北部での検出のため、近世の建物の可能性がある。

P139・140・141・142（第39図）　２区東端D・E10グリッドで検出した。検出面は標高6.12～6.30m前後で、平面形は隅丸方形や円～楕円形を呈する。いずれも長軸は20～30cm程度で、深さは５～25cm程を測る。柱根は残存していないが、土層観察から柱痕跡ないし抜き取り跡が確認できた。柱列の軸はN-13°-Eである。なお、P139は柱列からやや外れていることや、覆土の色調が比較的明るいことから、柱列には含まれない可能性が高い。柱穴からの出土遺物は少量の須恵器・土師器片のみで、時期は不明である。

P1・2（第44図）　２区北部F4グリッドで検出し、検出面の標高は6.09～6.14m程である。平面形は楕円形と方形を呈し、P1で長軸70cm、深さ４～９cm、P2で長軸80cm、深さ５～８cmを測る。柱根や明瞭な柱痕跡は残っていなかった。２基を結ぶ軸はN-25°-Eである。出土遺物が小片のため時期は不明だが、近世遺構が集中している調査区北側で検出されたため、近世の遺構と考えられる。

P4・5（第40図）　２区北西隅E2・3グリッドで検出した。検出面は標高6.09～6.14mである。平面形は円～楕円形を呈し、P4で長軸45cm、深さ24～26cm、P5で長軸41cm、深さ16cmを測る。P4には柱根（第59図267）が残存しており、P5からは礎石らしき石が出土している。２基を結ぶ軸はN-75°-Wである。P5から土師器の細片がごく少量出土した。近世の柱穴と推定できる。

P14・15（第40図）　２区北西隅E2グリッドで検出し、検出面は標高6.14～6.24mである。平面形は楕円形を呈し、P14で長軸58cm、深さ19～23cm、P15で長軸50cm、深さ40cmを測る。２基とも柱痕跡が確



P71
1　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜まばらに含、地山小ブロック5%酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、レキ±3㎜稀に含、地山小ブロック3%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y5/1　黄灰色粘土(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック30%、地山粒10%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y5/1　黄灰色粘土(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック3%、地山小ブロック30%、酸化鉄稀に含)
※2層＝抜き取り痕、3・4層＝掘り方又は抜き取り時の流入土
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土(粘性やや強、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄一面に含)

P72
1　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山ブロック30%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(地山ブロック30%、酸化鉄まばらに含)
3　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック7%、酸化鉄稀に含)
4　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土筋状2%)
※明瞭な柱痕、抜き取り確認できず

P73
1　2.5Y4/1　黄灰色粘土(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック20%、酸化鉄ごく稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物1-10㎜まばらに含、地山粒1%、土器片含、酸化鉄稀に含)
3　2.5Y3.5/1　黒褐色粘質シルト(地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
4　地山ブロックと2.5Y2.5/1黒褐色粘土ブロックの混土層(酸化鉄やや多く含)
5　地山を基層として　(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄稀に含)
※1層＝根、2層＝南西方向への抜き取り痕、3～5層＝掘り方又は抜き取り時の流入土

※P71～P78いずれも土質類似する

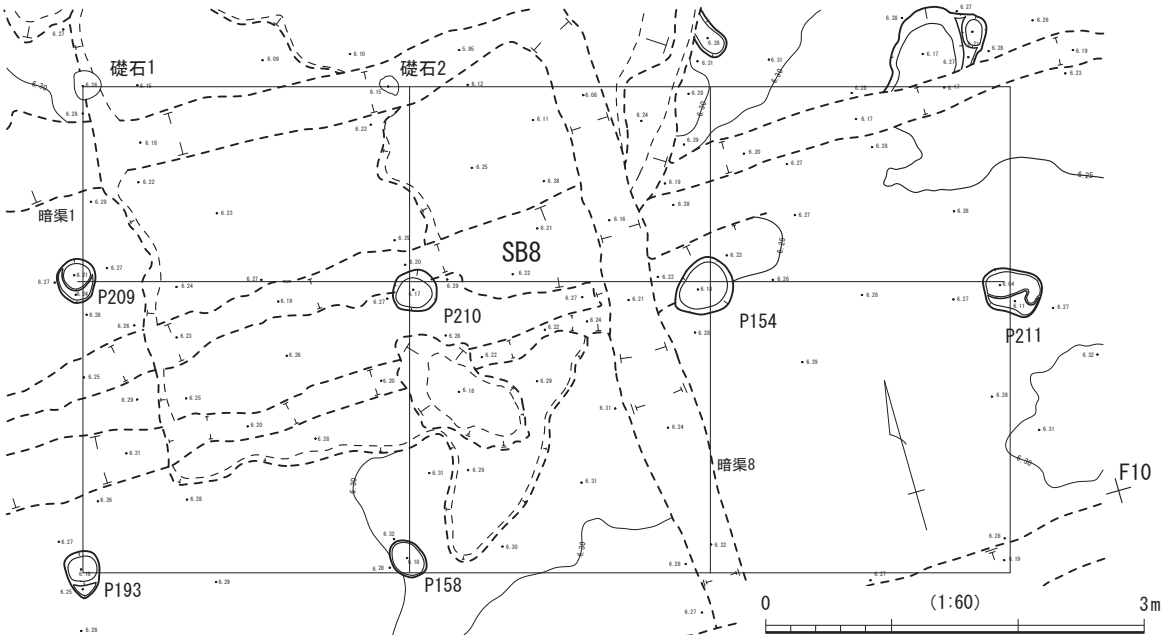
P77
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±3㎜まばらに含、地山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘質シルト　小ブロック30%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(地山粒10%、酸化鉄稀に含)
※1層＝柱痕、2層＝掘り方

P76
1　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜稀に含、礫5-20㎜稀に含、土器片含、地山粒1%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山ブロック40%、酸化鉄稀に含)
※1層＝北方向への抜き取り痕、2層＝掘り方又は抜き取り時の流入土
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土　(粘性やや強、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄一面に含)

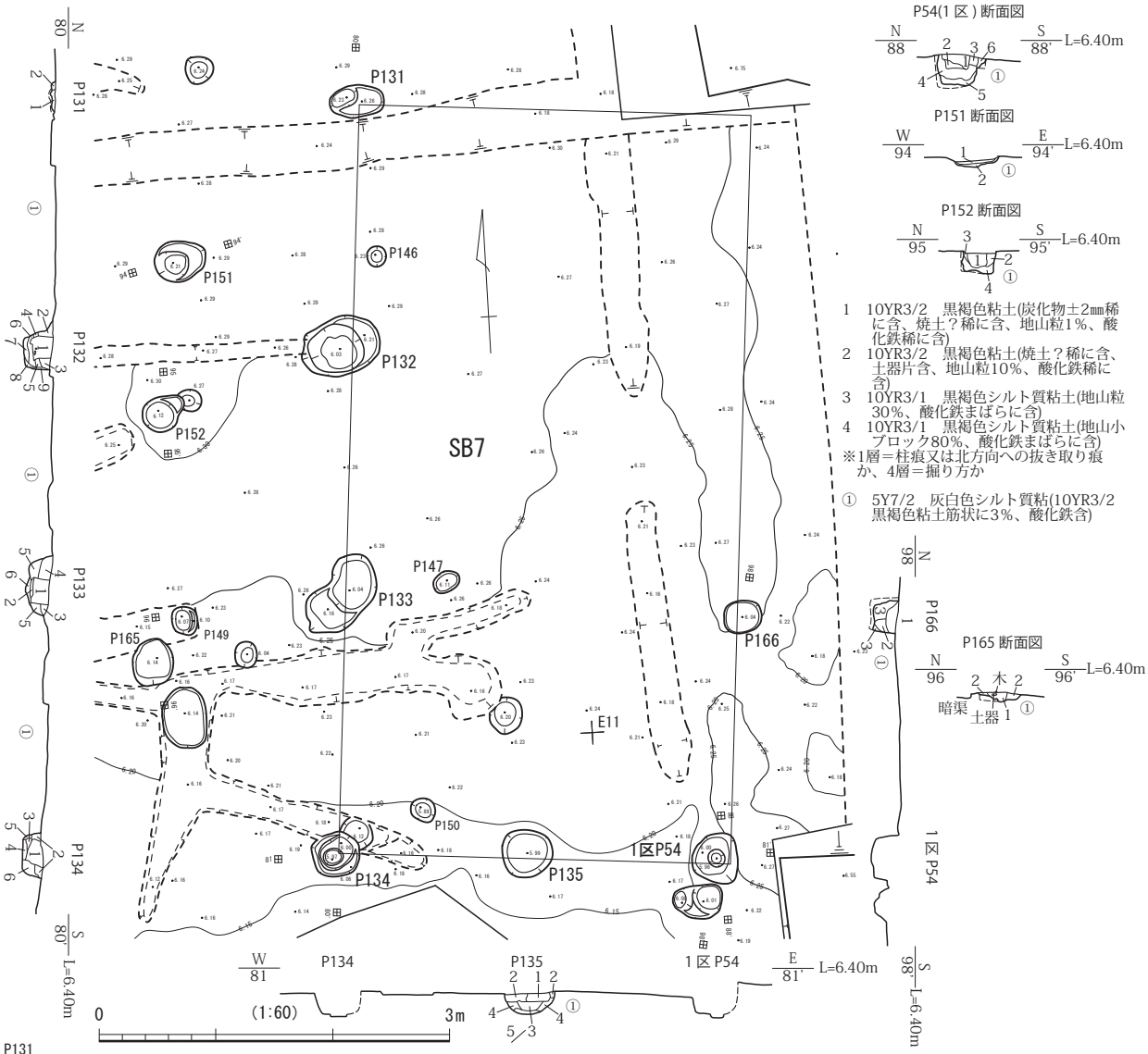
P75
黒褐色粘土　地山混の単層

P78
1　2.5Y2/1　黒色粘土(炭化物1-3㎜稀に含、地山ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物2-5㎜まばらに含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(地山小ブロック・粒50%、酸化鉄稀に含)
4　地山に似るがわずかに濁
※1層＝南東方向への抜き取り痕、2～4層＝掘り方又は抜き取り時の流入土
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土(粘性やや強、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄一面に含)

P74
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、地山ブロック3%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜ごく稀に含、地山小ブロック10%、酸化鉄稀に含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄多く含)
※明瞭な柱痕又は抜き取り痕確認できず
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土(粘性やや強、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄一面に含)



第37図　２区SB6・８実測図(S＝1/60)



P131
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト(炭化物±1mm稀に含、地山粒2%)
2　地山を基層として(10YR3/1.5黒褐色粘土小ブロック20%、酸化鉄やや多く含)
※1層＝柱痕、2層＝掘り方か

P132
1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト(炭化物2-10mm含、焼土粒まばらに含、土器片含、地山粒25%、酸化鉄ごく稀に含)
2　10YR3/2　黒褐色粘質シルト(地山小ブロック60%、酸化鉄やや多く含)
3　10YR3/2　黒褐色粘質シルト(炭化物±2mm稀に含、焼土？3%、地山粒30%、酸化鉄まばらに含)
4　10YR3/2　黒褐色粘土(炭化物±2mmまばらに含、地山粒5%、酸化鉄やや多く含)
5　地山を基層として(10YR3/1黒褐色粘土粒5%、酸化鉄稀に含)
6　地山を基層として(10YR3/1黒褐色粘土粒3%、酸化鉄まばらに含)
7　地山を基層として(10YR3/1黒褐色粘土粒2%、酸化鉄まばらに含)
8　10YR3/1　黒褐色粘土(地山粒20%、酸化鉄稀に含)
9　地山を基層として(10YR3/1黒褐色粘土粒3%、酸化鉄ごく稀に含)
※1層＝柱痕、掘り方は2～4層、5・6層、7層、8・9層で各々まとまり有

P133
1　10YR3/2　黒褐色粘土(炭化物2-10mmまばらに含、焼土粒？まばらに含、地山粒7%、酸化鉄まばらに含)
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト質粘土(地山粒30%、酸化鉄稀に含)
3　10YR3/2　黒褐色粘質シルト(礫±10mm稀に含、地山粒15%、酸化鉄まばらに含)
4　10YR3/1.5　黒褐色粘土(焼土粒稀に含、地山ブロック50%、10YR2.5/1.5黒褐色粘土ブロック2%(5層か)、酸化鉄まばらに含む)
5　10YR2.5/1.5　黒褐色粘土(炭化物±2mm稀に含、地山小ブロック5%、酸化鉄稀に含)
6　地山を基層として(10Y3/2黒褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
※1・2層＝柱痕、掘り方は3～5層、6層で各々まとまり有

P134
1　10YR3/1　黒褐色粘土(炭化物2-10mmまばらに含、土器片含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
2　10YR3/2　黒褐色粘土(炭化物±1mmまばらに含、地山粒10%、酸化鉄やや多く含)
3　10YR3/1　黒褐色粘土(炭化物±3mm稀に含、地山粒5%、酸化鉄まばらに含)
4　10YR3/1　黒褐色粘土(地山小ブロック70%、酸化鉄やや多く含)
5　10YR4/1　褐灰色粘土(炭化物±2mmまばらに含、地山粒20%、酸化鉄まばらに含)
6　10YR3/1　黒褐色粘土(炭化物±1mm稀に含、地山粒80%、酸化鉄やや多く含)
※1～5層＝抜き取り痕か(南方向へ)
①　2.5Y7/3　浅黄色シルト質粘土　(2.5Y4/1黄灰色粘土筋状に5%)

P135
1　10YR3.5/1　黒褐色粘土(炭化物±2mmまばらに含、焼土？稀に含、地山粒5%、酸化鉄多く含)
2　10YR3/1　黒褐色粘土(炭化物2-5mmまばらに含、焼土？稀に含、地山ブロック50%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(礫±10mm稀に含、地山粒60%、酸化鉄多く含)
4　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(地山粒60%、酸化鉄多く含)
5　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(地山粒70%、酸化鉄やや多く含)
①　2.5Y7/2　灰黄色粘土(2.5Y4/1黄灰色粘土筋状に10%、酸化鉄やや多く含)

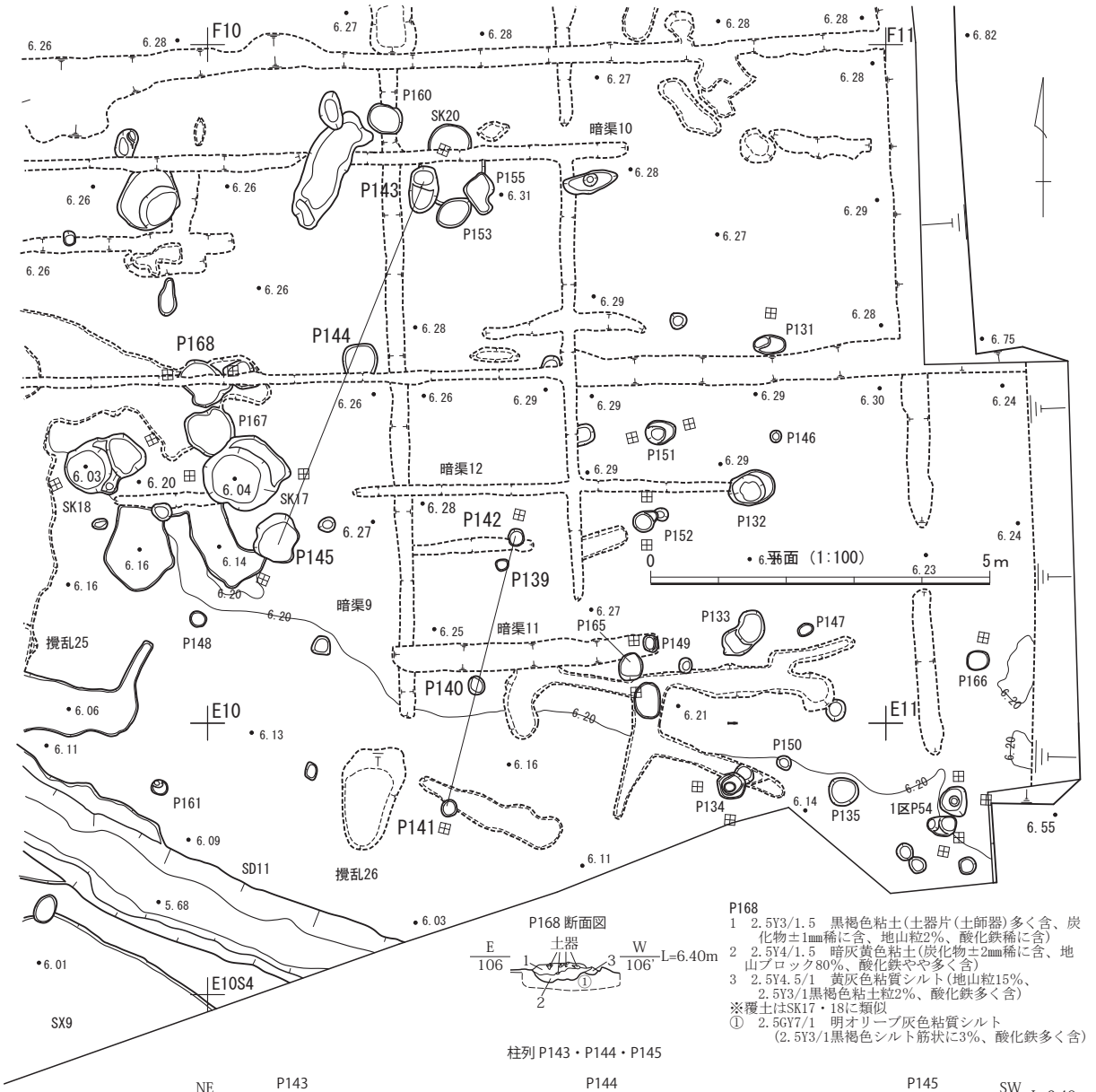
P166
1　2.5Y3/2　黒褐色シルト質粘土(炭化物2-5mm稀に含、焼土ごく稀に含、地山粒1%)
2　10YR4/2　灰黄褐色粘土(粘性強、地山粒15%、炭化物±1mm稀に含、2.5Y3/2黒褐色粘土小ブロック5%、酸化鉄稀に含)
3　10YR4/1　褐灰色粘土(炭化物±2mmまばらに含、地山粒30%、焼土ごく稀に含、2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝柱痕か、3層＝他のピット同様、柱根下位でまだらな掘り方みられる
①　5Y6.5/3　浅黄色粘質シルト(2.5Y3.5/2暗灰黄色粘質シルト小ブロック7%、酸化鉄多く含)

P54(1区)
1　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(炭化物2-5mmまばらに含、礫±5mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄多く含)
2　10YR3/1　黒褐色シルト質粘土(地山粒10%、2.5Y2.5/1黒褐色シルト質粘土粒5%、酸化鉄やや多く含)
3　10YR3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mm稀に含、焼土稀に含、地山小ブロック30%、酸化鉄多く含)
4　10YR3/1　黒褐色粘土(炭化物±2mm稀に含、焼土稀に含、地山小ブロック50%、酸化鉄多く含)
5　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(炭化物±3mm稀に含、礫±5mm稀に含、地山小ブロック80%、酸化鉄多く含)
※1・2層＝柱痕、掘り方は3層、4・6層、5層で各々様相類似
①　5Y6.5/3　浅黄色粘質シルト　(2.5Y3.5/2暗灰黄色粘質シルト小ブロック7%、酸化鉄多く含)

P151
1　10YR3/1.5　黒褐色シルト質粘土(炭化物2-10mmまばらに含、焼土？稀に含、地山小ブロック5%、酸化鉄稀に含)
2　地山を基層として(10YR3/1.5黒褐色シルト質粘土粒10%、酸化鉄まばらに含)
※P151、P152、P165、間隔異なるが列状に並ぶ

①　5Y7/2　灰白色シルト質粘土(10YR3/2黒褐色粘土筋状に3%、酸化鉄含)

第38図　２区SB7実測図(S＝1/60)



P168
1　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(土器片(土師器)多く含、炭化物±1mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y4/1.5　暗灰黄色粘土(炭化物±2mm稀に含、地山ブロック80%、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y4.5/1　黄灰色粘質シルト(地山粒15%、2.5Y3/1黒褐色粘土粒2%、酸化鉄多く含)
※覆土はSK17・18に類似
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘質シルト(2.5Y3/1黒褐色シルト筋状に3%、酸化鉄多く含)

P143
1　2.5Y3/2　黒褐色シルト質粘土(礫±10mmまばらに含、10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック20%、地山ブロック20%、炭化物5-10mm稀に含、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3.5/2　暗灰黄色シルト(地山ブロック80%、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y3.5/2　暗灰黄色シルト(10YR5/4にぶい黄褐色粘土小ブロック5%、炭化物±5mm稀に含、地山ブロック10%、酸化鉄やや多く含)

P144
1　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(礫±10mm稀に含、炭化物±2mmごく稀に含、地山粒7%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック3%、地山小ブロック20%、酸化鉄まばらに含)

P145
1　10YR3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±3mmまばらに含、土器片含、地山粒1%、酸化鉄多く含)
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±1mm稀に含、北側上位に3層土入る、地山ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y6/1.5　灰黄色シルト(10YR3/1黒褐色粘質シルト小ブロック5%、地山粒5%、酸化鉄多く含)
①　10Y7/1　灰白色シルト(10YR4/1褐灰色シルト筋状に3%、酸化鉄多く含)

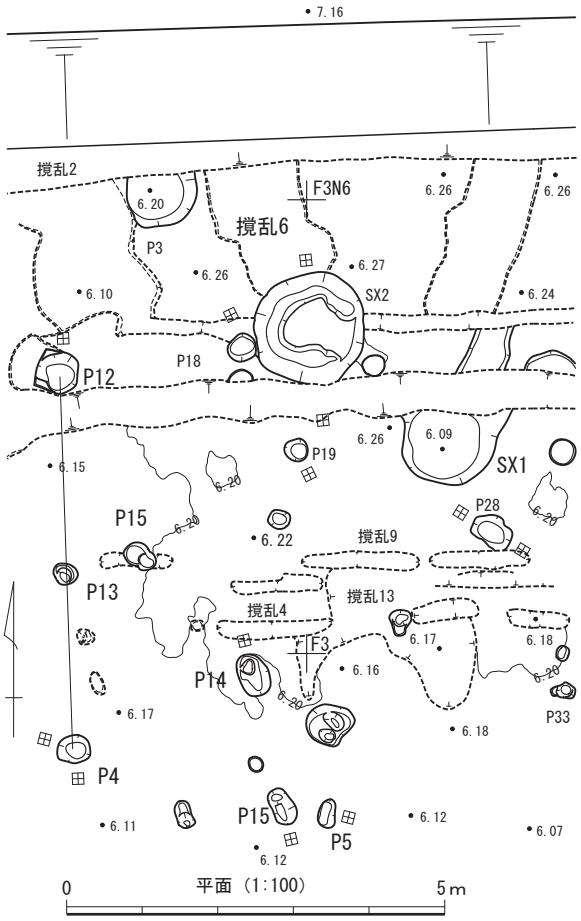
P139
1　10YR4/1　褐灰色シルト(地山小ブロック40%、酸化鉄多く含)
※P140・P141・P142とは別ピットか、色調も明るめ

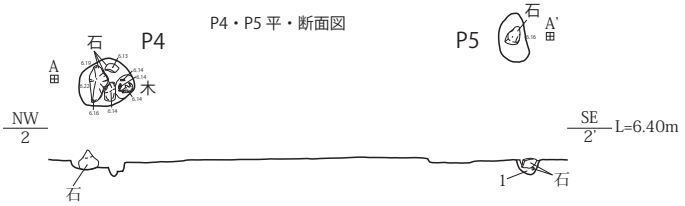
P142
1　10YR3/1.5　黒褐色シルト(炭化物2-5mmまばらに含、焼土まばらに含、地山粒10%)
2　10YR2.5/2　黒褐色粘質シルト(炭化物2-10mmまばらに含、地山粒30%、酸化鉄まばらに含)
3　地山を基層として(10YR2.5/2黒褐色粘質シルト小ブロック10%、酸化鉄稀に含)
4　10YR3/1　黒褐色粘質シルト(地山粒80%、酸化鉄稀に含)
※2層＝柱痕、または1・2層＝抜き取り痕か
※1層＝柱痕、他の建物に比べ掘り方狭い
①　2.5Y7/3　浅黄色シルト質粘土(2.5Y3.5/1黄灰色シルト質粘土筋状に10%、酸化鉄上位は一面に広がる)

P140
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±5mm稀に含、土器片含、地山粒2%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(地山粒1%、土器片含、酸化鉄含)
3　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1mm稀に含、酸化鉄まばらに含)
※1～3層＝柱痕、掘り方確認できず

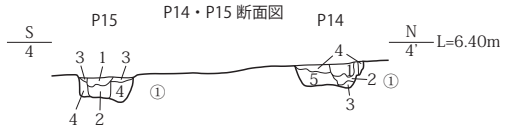
P141
1　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(炭化物±1mmまばらに含、土器片含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト(地山粒20%、酸化鉄稀に含)
3　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(地山粒70%、酸化鉄やや多く含)
※1層＝柱痕、他の建物に比べ掘り方狭い
①　2.5Y7/3　浅黄色シルト質粘土(2.5Y3.5/1黄灰色シルト質粘土筋状に10%、酸化鉄上位は一面に広がる)

第39図　２区柱列等実測図１（S＝1/100・1/60）





P5
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒10%、酸化鉄多く含）
①　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト質粘土　（酸化鉄まばらに含）

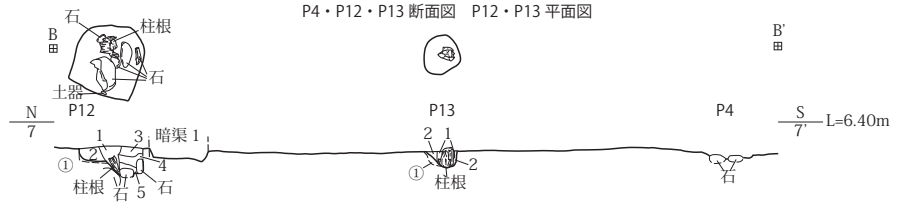


P15
1　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2㎜ごく稀に含、地山粒3%、10YR3/1黒褐色粘土下位に帯状堆積)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒7%、酸化鉄含)
3　地山を基層として(粘性強、2.5Y3.5/1黄灰色シルト質粘土ブロック60%、酸化鉄多く含)
4　地山を基層として(2.5Y3.5/1黄灰色シルト質粘土ブロック40%、酸化鉄含)
※1・2層＝柱痕、3・4層＝掘り方

①　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト質粘土(酸化鉄まばらに含)

P14
1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト(5Y5/2灰オリーブ色シルト大ブロック50%)
2　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト(炭化物±2㎜まばらに含、地山ブロック10%、5Y5/2灰オリーブ色シルト小ブロック1%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山粒20%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±5㎜ごく稀に含、地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
5　地山を基層として(2.5Y3/1.5黒褐色粘質シルトブロック30%、炭化物±2㎜ごく稀に含、酸化鉄まばらに含)
※1～3層＝柱痕、4・5層＝掘り方
※P14・15の掘り方覆土似る
①　2.5Y6/4　にぶい黄橙色シルト質粘土(酸化鉄まばらに含)

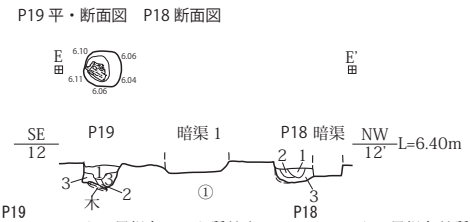
0　断面（1:60）　3m



P12
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(上位は＋土)(炭化物±1㎜まばらに含、上位に地山小ブロック30%、酸化鉄多く含、柱材の一部？が残存する)
2　地山を基層として(2.5Y3.5/1黒褐色粘質シルトロック30%、礫±5㎜稀に含、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y3/2　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、礫±5㎜ごく稀に含、地山ブロック3%、酸化鉄多く含、焼土粒1㎜ごく稀に含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山小ブロック3%、酸化鉄やや多く含)
5　地山を基層として(4層小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝柱痕又は抜取痕(北方向に傾斜)

P13
1　2.5Y3/1　黒褐色土(酸化鉄まばらに含、柱痕あり)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(地山粒5%、酸化鉄まばらに含)
※柱痕

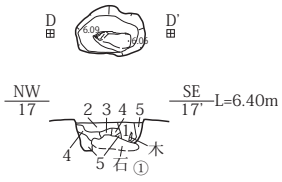
P4
2.5Y3/1　黒褐色粘質シルトの単層(地山混)
①　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト質粘土(酸化鉄まばらに含)



P19
1　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒小ブロック10%、酸化鉄含)
2　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(地山粒2%、酸化鉄稀に含)
3　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(炭化物±1㎜稀、地山ブロック30%、酸化鉄含)
※底面礎板？明確な柱痕みえず

P18
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±2㎜稀に含、地山小ブロック7%、酸化鉄多く含、礫±5㎜ごく稀に含)
2　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(地山小ブロック20%、酸化鉄含)
3　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(礫±20㎜ごく稀に含、地山ブロック40%、酸化鉄やや多く含)
※1・2層＝南東方向への抜き取り痕か

①　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック2%、酸化鉄多く含)



1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト(2.5Y3/2黒褐色粘土ブロック木の周辺に堆積、地山ブロック10%、酸化鉄含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山小ブロック3%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(酸化鉄含)
4　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘質シルト小ブロック40%、酸化鉄やや多く含)
5　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック20%、酸化鉄やや多く含)
※1層＝柱痕か？

①　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土(粘性強、酸化鉄多く含)

第40図　２区柱列等実測図２（S＝1/100・1/60）

認でき、掘方の覆土には類似性が認められる。２基を結ぶ軸はN-13°-Wである。P14からごく少量の須恵器・土師器細片が出土したのみで時期は不明だが、近世に属すると考えられる。

P143・144・145（第39図）　２区東端E10グリッドで検出し、検出面の標高は6.20～6.32m前後である。平面形は楕円形・方形・不整円形を呈する。長軸は50～70㎝程、深さは８～14㎝程を測る。柱根や明瞭な柱痕跡は確認できなかった。柱列の軸はN-23°-Eである。柱穴からは少量の須恵器・土師器片が出土したのみで、時期は不明である。

P12・13・4（第40図）　２区北西隅E・F2グリッドで検出し、検出面の標高は6.12～6.23mである。P12の平面形は方形を呈し、長軸57㎝、深さは30㎝前後である。P13の平面形は円形で、長軸33㎝、深さ18㎝を測る。P12・13共に柱根（第60図268・269共にクリ）が残存し、さらにP12では抜き取る際北方向に柱を動かしたような土層が確認できる。柱列の主軸はN-3°-Wで、柱間は2.3～2.6m程を測る。柱根や石以外の出土はなく時期は不明だが、近世の柱穴と考えられる。

２．周溝をもつ建物

２区では周溝をもつ建物を１棟検出し、SD10も可能性があろうか。上部は耕地整理時の削平を受けており、確認できたのは浅い周溝と４基の主柱穴のみである。

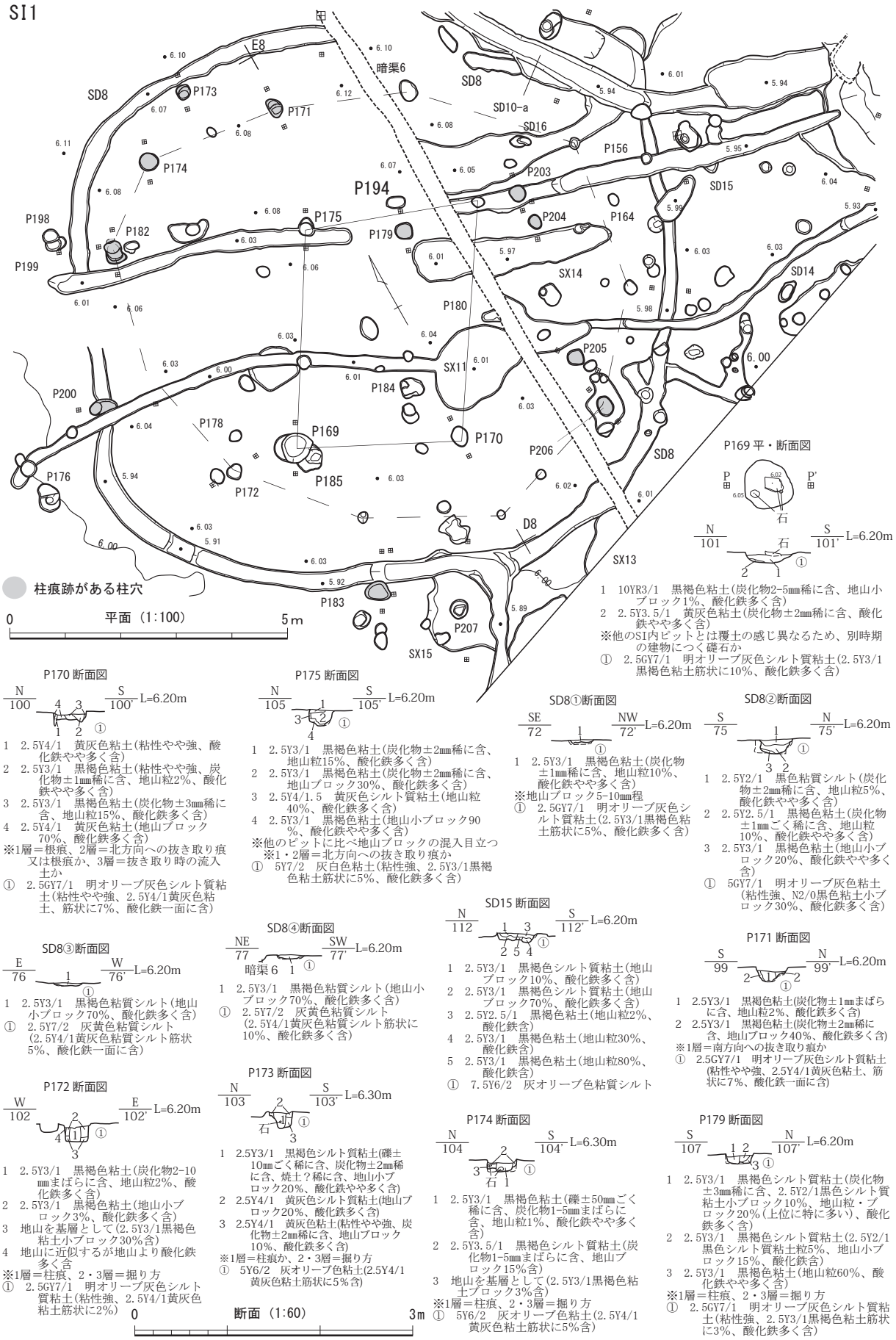
SI1（第41図、図版25）　２区中央付近D7・8グリッドを中心に検出した。検出面は標高6.01～6.13m前後である。調査にあたっては北西部をaとし、時計回りにb・c・dと細分して小穴などの調査、遺物の取り上げを行った。周溝であるSD8を含めた検出規模は長軸約10.7m、短軸約10mを測る。主柱穴は４基を確認し、柱配置から方形をなすものと考えられる。柱間は概ね３～４m程を測り、主柱穴から想定される建物の主軸はN-33°-Eである。主柱穴の平面形は円～楕円形を呈する。P169で径約50㎝、深さ約13㎝、P170で長軸約40㎝、深さ約11㎝、P175で長軸約30㎝、深さ約13～18㎝を測る。P170・175では北方向への抜き取り跡ないし柱痕跡と思われる土層が確認できた。付近には柱痕跡がある柱穴が存在する（薄いトーン）ことから、周溝に沿って多角形の柱が廻る可能性が指摘できる。周溝の平面形は隅丸方形で、溝の幅は20～50㎝程、深さ２～26㎝程を測る。主柱穴からはごく少量の土師器細片が出土し、周溝からは土師器埦や甑（第52図96）などが出土した。付近の検出面では、須恵器坏身（97）や奈良・平安時代に位置付けられる須恵器高坏（98）を確認した。遺物の様相などから、建物の年代は古墳時代後期頃に位置付けられる。

３．土　　坑

SK1（第28図、図版17）　２区北西部E3グリッドで検出した。検出面は標高5.94～6.01m前後で、平面形は円形を呈する。長軸1.35m、短軸1.3m、深さは21～29㎝を測る。断面形は不整形な逆台形状を呈する（図版27）。須恵器や17～18世紀に位置付けられる磁器片のほか、17世紀前半の唐津焼皿（第52図107）などが出土していることから、近世の土坑とみられる。

SK2（第42図、図版27）　２区北西部E3グリッドで検出し、検出面は標高5.81～5.94m前後である。平面形は円形を呈し、径1.58m、深さは46～59㎝を測る。断面形は角に丸みをもつ箱形を呈し、覆土は黄灰色～黒褐色である。上位で底板（第59図249・250）や指物（251）が出土したほか、少量の須恵器・土師器片、近世の陶器碗（第52図108）、不明木製品（第59図252）、底板（253）などが出土していることから、近世の井戸と推定される。寄生虫卵の分析では、糞便が混じり込んでいる（第４章第２節参照）。

SK3（第28図）　２区北西E2グリッドで検出し、検出面は標高5.93m前後である。平面形は楕円形を呈し、1.7×1.4m、深さ56㎝である。



第41図　２区SI1等実測図１（S＝1/100・1/60）

SK4（第28図、図版27）　２区北西E3グリッドで検出し、検出面は標高5.80m前後である。SK2の南東側約50cmに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、1.5×1.45m、深さ36cmである。

SK5（第42図、図版27）　２区北西隅F2グリッドで検出し、検出面は標高6.14m前後である。平面形は楕円形を呈し、長軸74cm、短軸65cm、深さ101cm前後を測る。断面形は箱状で、覆土は黄灰色～黒褐色である。ごく少量の須恵器細片や多量の礫が出土しているが、この礫は地山礫より大きく人為的に入れられたものと考えられる。礫面の下からは土嚢袋大の亜角礫が出土しており、廃棄時に投げ入れられたと推定される。17世紀前半に位置付けられる刷毛目の唐津焼埦（第52図109）や、17世紀前半に位置付けられる肥前焼の皿（110）などが出土したことから、近世の井戸と考えられる。

SK6（第42図、図版28）　２区北西部F4グリッドで検出し、検出面は標高6.10～6.16mである。平面形は円形で、径108cm、深さ111～117cmを測る。断面形は概ね逆台形状だが、掘方の一部で階段状を呈する。覆土は灰色～黒褐色、一部オリーブ黒色である。結桶を枠として用いた井戸で、上位で桶の側板（第59図254～256）が一部残存していた。少量の須恵器・磁器片のほか、陶器埦（第52図111・108）や、漆接ぎとみられる痕跡が残る京焼風の埦（112）、肥前磁器の盃（113）などが出土している。また、栓と思われる木製品（第59図257、マツ属複維管束亜属）や角材（258アスナロ）、杓子状木製品（259）に加え、桶内の腐植土中からは漆器椀（カエデ属？）に穴を開けて柄（アスナロ）を付けた柄杓（260）が出土した。111は17世紀後半～18世紀前半と思われることから、遺構の年代は江戸時代前半に位置付けられる。寄生虫卵の分析では、糞便が混じり込んでいる（第４章第２節参照）。

SK7（第28図）　２区北西部F3グリッドで検出した。検出面は標高6.09～6.16mで、平面形は楕円形を呈する。暗渠に切られているが長軸は136cm程、深さ約103～110cmを測る。18世紀前期頃の磁器片や土師器片のほか、側面２箇所に孔が空けられている板状木製品（第60図261）などが出土した。

SK8（第50図、図版28）　２区北部E6グリッド、SX4の底面で検出した。検出面の標高は6.03～6.06m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸約1.4m、短軸約1.2m、深さ約17～19cmを測る。断面形は不整形な半円状で、覆土は黄灰色～黒褐色である。板状木製品（第60図262）が出土した。遺物や平面プランがSK1～4に類似していることなどから、年代は近世に比定される。

SK10（第48図、図版28）　２区中央付近D5グリッドで検出し、検出面の標高は5.58～5.69m前後である。平面形は不整形で、長軸約1.5m、短軸約1.3m、深さ約５～74cmを測る。断面形は角に丸みをもった箱状だが、南側が階段状を呈する。覆土は概ね黄灰色～黒褐色だが、一部で地山ブロックと黒褐色粘土ブロックの混土層を確認した。少量の土師器片や須恵器の坏片などが出土しているが、時期は不明である。

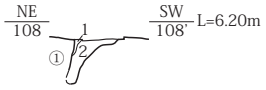
SK11（第29図、図版28）　２区北部F5グリッドで検出し、検出面は標高5.86～5.95m、平面形は円形を呈する。長軸72cm、短軸67cm、深さ約11cmを測り、断面形は皿状である。時期は近世と推定される。

SK12（第46図、図版29）　２区北部E5グリッド、NR1の底面で検出した。検出面は標高5.94～5.97m前後で、平面形は円形を呈する。長軸約65cm、短軸約60cm、深さ約38cmを測り、断面形は箱状である。覆土は黒褐色で、上位で少量の磁器や土師器が出土している。平面形や断面形、覆土の特徴が他の近世土坑と類似することから、遺構の時期は近世と推定される。

SK13（第42図、図版29）　２区西半E4グリッドで検出した。検出面は標高5.63～5.65m前後で、平面形は円形を呈する。径約90cm、深さは18～40cm程で、断面形は不整形な半円状を呈する。覆土は概ね黒褐色で、底部付近は地山との混層である。出土遺物はごく少量の土師器細片のみだが、NR1を切り込んでいることから近世の土坑とみられる。

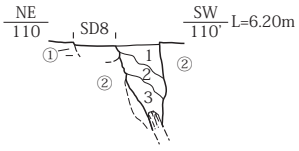
SK14（第50図、図版17）　２区南部B4グリッドでNR1の底面で検出した。検出面は標高4.95m、平面形は円形を呈する。長軸93cm、短軸74cm、深さ約14cmを測る。時期は不明であるが、NR1を切り込ん

P182 断面図



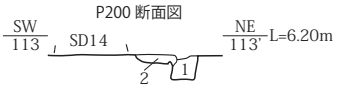
1　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(地山小ブロック70%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物±2mmまばらに含、地山粒1%、酸化鉄多く含)
※柱痕又は周堤付近の抜き取り痕や杭痕か
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色シルト質粘土(粘性強、2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に2%、酸化鉄一面に含)

P183 断面図



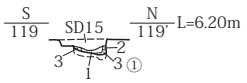
1　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物1-5mmごく稀に含、地山粒5%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1mm稀に含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
3　5Y2/1　黒色粘土(粘性強)
※杭か？が南西方向に傾いて残る
※SD8より新、対となるような小穴確認できず
①　SD8
②　7.5GY7/1　明緑灰色粘土(粘性強、2.5Y4/1黄灰色粘土筋状に3%(上位に集中)、酸化鉄一面に広がる(上位))

P200 断面図



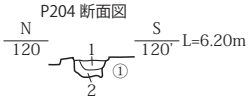
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫±10mm稀に含、土器片含、地山粒2%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(わずかに砂混、炭化物±1mm稀に含、地山小ブロック5%、酸化鉄やや多く含)
※1層＝柱痕、底面平坦、2層＝掘り方か
※SD8より新

P203 断面図



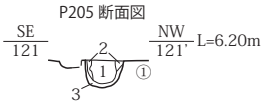
1　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(炭化物±2mm稀に含、地山粒10%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山粒1%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山粒60%、酸化鉄多く含)
①　5Y6/3　オリーブ黄色シルト質粘土(粘性強、2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に2%、酸化鉄やや多く含)

P204 断面図



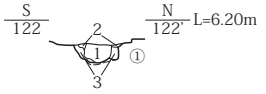
1　2.5Y2.5/1　黒色粘土(粘性強、炭化物±3mmまばらに含、土器片含、地山ブロック・粒7%、酸化鉄やや多く含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック3%、酸化鉄やや多く含)
①　5Y6/3　オリーブ黄色シルト質粘土(粘性強、2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に2%、酸化鉄やや多く含)

P205 断面図



1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±2mm稀に含、地山ブロック10%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y2.5/1　黒色粘土(粘性強、炭化物±2mmごく稀に含、地山粒1%、酸化鉄多く含)
3　地山を基層として(2.5Y5/1黄灰色粘土小ブロック7%、酸化鉄多く含)
①　5Y6/3　オリーブ黄色シルト質粘土(粘性強、2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に2%、酸化鉄やや多く含)

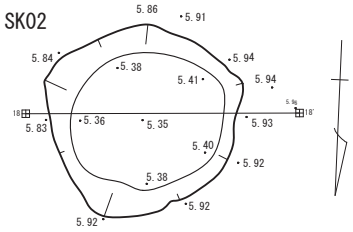
P206 断面図



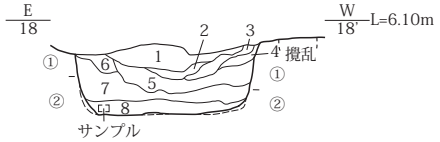
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±5mmごく稀に含、地山小ブロック5%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(地山小ブロック3%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山小ブロック80%、酸化鉄一面に含)
①　5Y6/3　オリーブ黄色シルト質粘土(粘性強、2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に2%、酸化鉄やや多く含)

0　断面（1:60）　3m

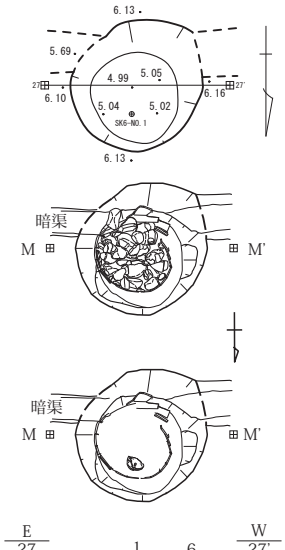
SK02



1　2.5Y3.5/1　黄灰色シルト質粘土(炭化物±10mmごく稀に含、礫2～10mmまばらに含、酸化鉄多く含)
2　2.5Y4/1　黄灰色粘土(炭化物±3mm稀に含、礫±2mm稀に含、N1.5/0黒色シルト(しまりなし)層上位に帯状に堆積、地山粒1%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y4/1　黄灰色粘土(地山小ブロック・粒60%、酸化鉄多く含)
4　2.5Y3.5/1　黄灰色粘質シルト(炭化物±2mmごく稀に含、地山粒10%、2.5Y3/1黒褐粘土小ブロック2%、酸化鉄く含)
5　2.5Y3.5/1　黄灰色シルト質粘土(炭化物5-10mmまばらに含、地山小ブロック50%、酸化鉄多く含、礫±10mm稀に含)
6　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(地山粒3%、酸化鉄やや多く含)
7　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(粘性強、礫±10mm稀に含、地山小ブロック・粒40%、酸化鉄まばらに含)
8　②を基層として(炭化物±2mmごく稀に含、礫2-5mm稀に含、②より色調やや濁る)
※遺物も少なく性格不明。周囲に点在する同規模のSKは断面メモ写真のみ撮影し完掘(SK4・1・3)　近世土坑
※1～5層上位で曲物底板等の木製品や大型礫出土
①　2.5Y6/2　灰黄色粘土(礫±5mm稀に含、下位で部分的に砂混、酸化鉄多く含)
②　5GY6/1　オリーブ灰色シルト質粘土　(わずかに砂混、礫10-50mm含、酸化鉄部分的に多く含)

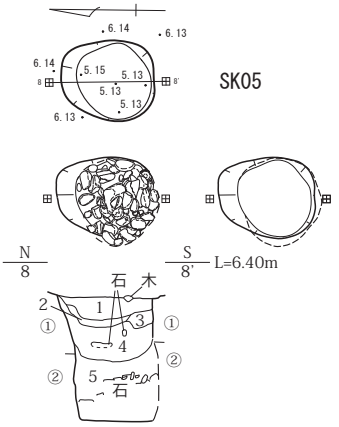


SK06



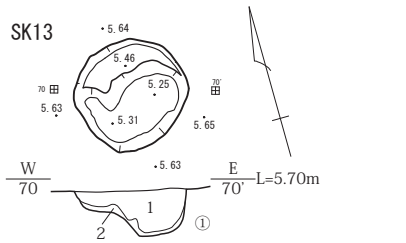
1　5Y4/1　灰色粘土(砂混、上位に5Y4/1灰色土帯状に堆積、炭化物±1mmまばらに含、礫2-10mmやや多く含、地山ブロック・粒5%、酸化鉄多く含)
2　5Y3.5/1　オリーブ黒色粘土(粘性強、砂混、炭化物2-10mmまばらに含、礫2-10mm稀に含、地山ブロック60%(東側に多い)、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物2-5mmまばらに含、地山小ブロック3%、結桶板あり)
4　地山ブロックと2.5Y3/1黒褐色粘土ブロックの混土層(酸化鉄多く含)
5　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(地山ブロック40%、炭化物±1mm稀に含、酸化鉄多く含)
6　5Y5/1　灰色粘土(7層ブロック10%酸化鉄やや多く含)
7　地山ブロックと2.5Y3/1黒褐色粘土ブロックの混土層(炭化物±2mm稀に含、4層に似る)
8　5Y4/1　灰色粘土(地山ブロック40%、2.5Y3/1黒褐色ブロック10%、酸化鉄多く含)
※桶を枠材に用いた井戸
※桶の上位では曲物の側板一部残存
※2～3層＝枠内覆土
※4～8層＝掘り方

SK05



1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±2mm稀に含、礫10-40mm稀に含、地山粒3%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3.5/2　黒褐色粘土(しまりやや弱、地山小ブロック20%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(炭化物±2mm稀に含、地山粒1%、酸化鉄多く含)
4　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物1-10mmまばらに含、礫40-160mm稀に含、地山粒2%)
5　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(粘性強、酸化鉄稀に含)
①　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト質粘土(酸化鉄まばらに含)
②　礫層

SK13



1　2.5Y3/2　黒褐色粘土(粘性強、炭化粒極稀に含、オリーブ灰色粘土小ブロック状に下位を中心にまばらに5%混、砂粒若干混)
2　2.5Y3/2黒褐色粘土＋2.5Y7/3浅黄色粗砂(1層と地山の混層)
①　2.5Y7/3　浅黄色砂礫層(小指～親指爪大の礫と粗砂を中心に幼児拳大までの礫が混入、しまり弱い)

第42図　２区SI01等・SK実測図(S＝1/60)

でいることから近世の土坑とみられる。

SK15（第30図、図版29）　２区南東部D8・9グリッドの検出面から一段下げた面で検出した。検出面の標高は5.99～6.04m前後である。平面形は不整方形を呈し、長軸約3.1m、短軸約３m、深さは２～122㎝程である。断面形は階段状を呈し、覆土は概ね黒褐色～黒色だが、植物遺体を含む層や腐植層とみられるオリーブ黒色粘土層も確認した。多量の須恵器･土師器片のほか、土師器埦（第52図114）や、須恵器有台坏（115）、土錘（116）、時期不明の凝灰岩製砥石（117）などが出土している。遺物の様相などから、古代末以降の井戸であり、井戸枠・水溜などが抜かれたものと推定される。

SK16（第30図、図版29）　２区南東部D9グリッドの検出面から一段下げた面で検出した。検出面は標高5.96～6.03m前後で、平面形は概ね隅丸方形を呈する。長軸約1.2m、短軸約１m、深さ約３～20㎝を測る。断面形は逆台形状で、覆土は黒褐色である。比較的多量の須恵器・土師器片のほか、古墳時代の土師器甕（第52図118）が出土した。

SK17（第46図、図版30）　２区東部E10グリッドで検出し、検出面は標高6.22m前後である。平面形は不整方形を呈し、長軸約1.2m、短軸約１m、深さ約７～19㎝を測る。断面形は逆台形状で、覆土は黒褐色である。少量の土師器片や、全体が摩耗した土師器の小型丸底壺（第52図119）、土師器埦（120）などが出土していることから、古墳時代後期に位置付けられる。

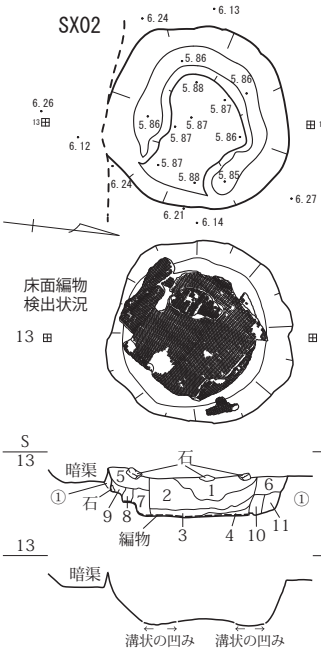
SK18（第46図、図版30）　２区東部E9グリッドで検出した。検出面の標高は6.18～6.21m前後で、平面形は不整楕円形を呈する。長軸約1.2m、短軸約95㎝、深さ約９～15㎝を測る。断面形は半円状だが中央付近でやや浅くなっている。覆土は黒褐色である。出土遺物は少量の土師器片のみで時期は不明だが、平面形や覆土が類似することからSK17と同時期と推定される。

SK19（第46図、図版30）　２区東部D9グリッドで検出した。検出面は標高6.04～6.07m前後で、平面形は円形を呈する。長軸約85㎝、短軸約75㎝、深さ約26㎝を測る。断面形は箱状で、覆土は黒褐色～黒色である。SK21より新しい遺構だが、少量の土師器片が出土しているに過ぎず時期は不明である。

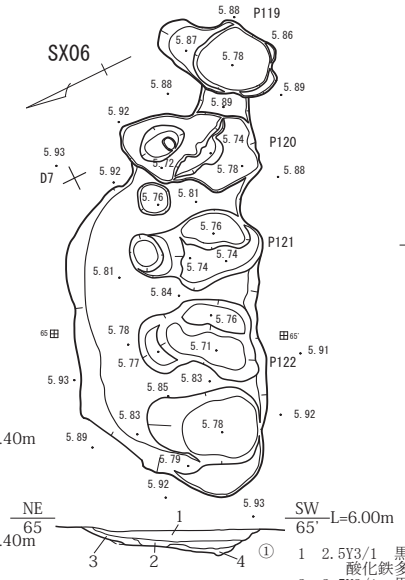
SK21（第46図、図版30）　２区東部D9グリッドで検出し、検出面は標高6.04～6.07m前後である。平面形は不整円形で、径80㎝前後、深さ約12～22㎝を測る。SK19に切られているため全容は不明だが、断面形は逆台形状を呈するとみられる。覆土は概ね黒褐色で、覆土の特徴はSK17・18に類似する。少量の土師器細片のほか、手捏ねの土師器（第52図121）が出土した。覆土の特徴や遺物の様相から、遺構の年代は古墳時代後半に位置付けられると考える。

土坑群（第43図、図版32）　２区北端F7・8グリッドで検出した。北側が調査区外へ延びることを確認し､調査区を一部拡張して掘削を行った。検出面は標高6.24～6.42m前後である。５m×３m程の範囲に、長軸１～２m程度の不整円～楕円形を呈する数基の土坑が集中している。遺構にはP136～138・P195～197・P201・P202と、ピット番号を付けて調査を行った。上部が削平されているため、最も深いP201でも深さ33㎝程である。P136からは全体が摩耗した土師器の甕（第52図122）やごく少量の土師器細片が出土した。P137からは土師器片が少量出土しているが、接合には至らなかった。P138からは少量の土師器片と土師器甕（123）などが出土している。P196は比較的多量の土師器が出土したが、いずれも細片で図化には至っていない。P197からは多量の土師器片と共に土師器埦（124）や土師器高坏（125・126摩耗）、完形の手捏ね土師器（127、口縁部歪み大）などが出土した。P201では石や比較的多量の土師器片のほか、土師器甕（第54図128）、土師器埦（129）、完形の土師器小壺（130）、土師器高坏（131）などが出土している。土坑群の性格は不明だが、出土した遺物の様相などから年代は古墳時代後半に位置付けられる。

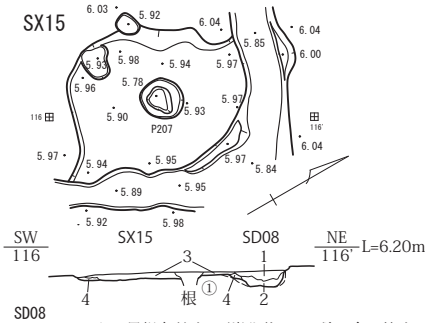
SX2（第43図、図版31）　２区北西隅F2・3グリッドで検出し、検出面の標高は6.21～6.27mである。平面形は円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.47m、深さ35～42㎝を測る。断面形は概ね逆台形状で、覆土



1　2.5Y4/1　黄灰色粘土(礫50-160㎜層上位にまばらに含、5Y5/1灰色粘土層上位と下位に帯状に堆積、地山小ブロック20%、酸化鉄多く含)
2　地山小ブロックと2.5Y3/2黒褐色シルト小ブロックの混土層(5Y5/1灰色粘土層下位に堆積、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1黒褐色ブロックと地山小ブロックの混土層(酸化鉄多く含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山小ブロック30%、酸化鉄多く含
5　2.5YR3/2黒褐色シルト小ブロックと地山小ブロックの混土層(炭化物±3㎜稀に含、礫5-10㎜まばらに含、酸化鉄やや多く含)
6　2.5YR3.5/1　黒褐色粘質シルト(地山粒10%、酸化鉄やや多く含)
7　地山を基層として(2.5Y3/1.5黒褐色シルト粒20%、礫±3㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)
8　地山を基層として(2.5Y3/1.5黒褐色シルト粒5%、礫±10㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)
9　地山を基層として(2.5Y2/1黒褐色粘土小ブロック2%、礫±30㎜ごく稀に含、酸化鉄含)
10　2.5Y4/1　黄灰色粘土(炭化物±10㎜ごく稀に含、2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック5%、地山小ブロック15%、酸化鉄含)
11　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土小ブロック30%、炭化物±1㎜ごく稀に含、酸化鉄含)
①　2.5Y6/3　にぶい黄色シルト質粘土(酸化鉄まばらに含)



1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(礫5-15㎜まばらに含、炭化物含、地山粒2%酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜稀に含、地山ブロック3%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(地山ブロックマーブル状に40%、酸化鉄多く含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(地山ブロックマーブル状に50%、酸化鉄多く含)
※SF2の続きは4層のみ
①　5Y6/2　灰オリーブ色粘土　(2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に2%、酸化鉄多く含)

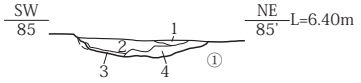


SD08
1　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土　(炭化物±2㎜稀に含、焼土ごく稀に含、地山粒5%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山粒25%、酸化鉄多く含)
SX15
3　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、地山小ブロック20%、酸化鉄多く含)
4　地山と近似するがわずかに濁
※一段下げの段階ではSD8を平面的に追うことができなかったが断面ではSX15→SD8の切り合いを確認
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土(粘性強、2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック又は筋状に10%、酸化鉄多く含)

P136 断面図

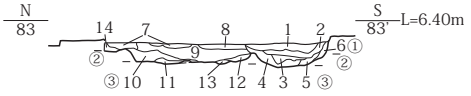
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±10㎜稀に含、2.5Y3.5/1黄灰色シルトブロック5%、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y4.5/1　黄灰色粘土(炭化物±2㎜ごく稀に含、地山小ブロック80%、酸化鉄一面に含)
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト筋状に10%、酸化鉄一面に含(見た目は2.5Y5/4黄褐色))

P137 断面図



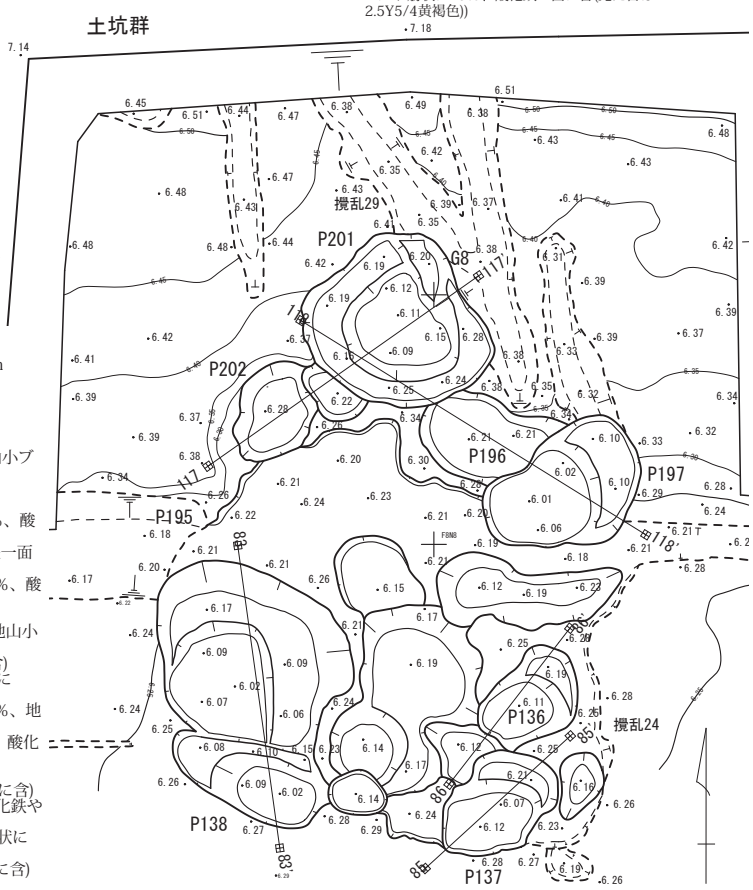
1　2.5Y2.5/1　黒褐色粘質シルト(地山小ブロック10%、酸化鉄やや多く含、礫±20㎜稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±10㎜稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄多く含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫±15㎜稀に含、地山小ブロック30%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(炭化物±3㎜稀に含、地山ブロック40%(特に層西側に集中)、酸化鉄やや多く含)
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト筋状に10%、酸化鉄一面に含(見た目は2.5Y5/4黄褐色))

P138 断面図



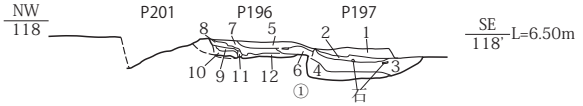
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物5-10㎜まばらに含、地山小ブロック3%、酸化鉄多く含)
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　(地山粒5%、酸化鉄多く含、2.5Y3/1黒褐色粘質シルト小ブロック20%)
3　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘質シルト小ブロック10%、酸化鉄一面に含)
4　2.5Y3.5/1　黄灰色粘質シルト(地山小ブロック40%、酸化鉄一面に含)
5　2.5Y4/1　黄灰色粘土(地山粒60%、2.5Y3/1粘土ブロック3%、酸化鉄一面に含)
6　地山に近似するが地山よりわずかに濁
7　5Y3/1　オリーブ黒色シルト(2.5Y2.5/1黒色シルト粒3%、地山小ブロック25%、酸化鉄多く含)
8　2.5Y4/1　黄灰色シルト　(地山ブロック90%、酸化鉄多く含)
9　2.5Y2/1　黒色粘質シルト　(2.5Y3/1黒褐色粘質シルト南側に20%、地山小ブロック3%、酸化鉄多く含)
10　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト(2.5Y3/1黒褐色粘質シルト30%、地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
11　2.5Y4/1　黄灰色粘土(礫±5㎜稀に含、地山ブロック80%、酸化鉄稀に含)
12　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山粒5%、酸化鉄やや多く含)
13　2.5Y4/1　黄灰色粘土(地山小ブロック70%、酸化鉄まばらに含)
14　2.5Y4.5/1　黄灰色シルト質粘土(地山小ブロック50%、酸化鉄やや多く含)
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト筋状に10%、酸化鉄一面に含(見た目は2.5Y5/4黄褐色))
②　2.5Y5/4　黄褐色シルト(礫±30㎜まばらに含、酸化鉄一面に含)
③　礫層

土坑群



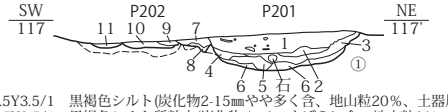
第43図　２区SX・土坑群実測図(S＝1/60)

P196・P197・P201 断面図



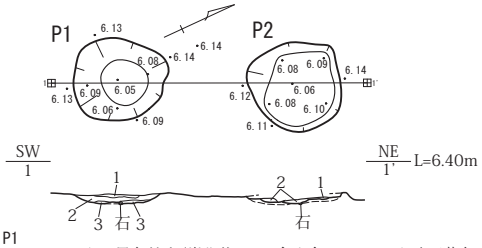
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土　(炭化物±1㎜稀に含、地山粒1%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土　(炭化物±3㎜稀に含、土器片含、地山小ブロック5%、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土　(礫10-30㎜まばらに含、炭化物2-15㎜含、地山粒5%、酸化鉄やや多く含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土　(粘性強、炭化物±5㎜まばらに含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
5　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土　(炭化物2-5㎜まばらに含、地山粒10%、酸化鉄多く含)
6　2.5Y4/1　黄灰色粘土　(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山粒30%、酸化鉄多く含)
7　2.5Y4/1　黄灰色シルト　(炭化物2-10㎜まばらに含、地山粒・ブロック20%、酸化鉄多く含)
8　2.5Y3/1　黒褐色シルト　(炭化物±2㎜稀に含、地山粒10%、酸化鉄多く含)
9　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土　(2.5Y3/1黒褐色粘土粒2%、地山小ブロック60%、酸化鉄多く含)
10　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土　(2.5Y3/1黒褐色粘土粒3%、地山粒15%、酸化鉄多く含)
11　2.5Y4/1　黄灰色粘土と地山粒の混土層　(酸化鉄多く含)
12　2.5Y4/1　黄灰色粘土　(炭化物2-10㎜まばらに含、地山小ブロック60%、酸化鉄多く含)

P201・P202 断面図

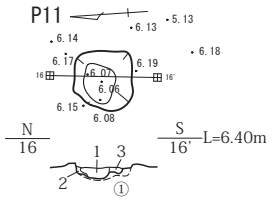


1　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト(炭化物2-15㎜やや多く含、地山粒20%、土器片含、酸化鉄多く含)
2　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±10㎜まばらに含、地山粒3%、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(炭化物10-20㎜まばらに含、2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土粒15%、地山粒20%、酸化鉄多く含)
4　10YR3.5/1　褐灰色粘質シルト(炭化物±1㎜稀に含、地山粒5%、酸化鉄多く含)
5　2.5Y4/1　黄灰色粘土(炭化物±10㎜稀に含、地山小ブロック50%、2.5Y2.5/1黒褐色粘土粒3%、酸化鉄多く含)
6　地山を基層として　(2.5Y5/1黄灰色粘土ブロック40%、酸化鉄一面に含)
7　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±3㎜ごく稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄多く含)
8　2.5Y5/1　黄灰色粘土(地山粒40%、酸化鉄やや多く含)
9　10YR5/1　褐灰色シルト質粘土(2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土ブロック30%、地山粒3%、酸化鉄多く含)
10　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト(地山小ブロック10%、酸化鉄多く含)
11　2.5Y5/1　黄灰色シルト質粘土(2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土ブロック50%、地山粒10%、酸化鉄多く含)
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色シルト　(2.5Y4/1黄灰色シルト筋状に10%、酸化鉄一面に含(見た目は2.5Y5/4黄褐色)

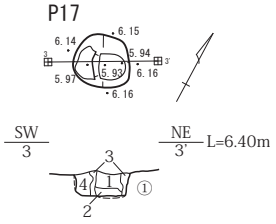
0　(1:60)　3m



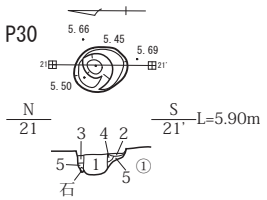
P1
1　10YR1.7/1　黒色粘土(炭化物±2㎜多く含、2.5Y3.5/2暗灰黄色粘土小ブロック10%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物±2㎜ごく稀に含、酸化鉄稀に含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性やや強、地山粒1%、酸化鉄稀に含、砂わずかに混)
P2
1　2.5Y4/1　黄灰色粘土(炭化物±2㎜稀に含、地山粒7%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y5/1　黄灰色粘土(炭化物±2㎜稀に含、地山粒40%、酸化鉄稀に含)
※上面は黒色粘土-黒褐色粘土が堆積。底面やや不整形
地山　2.5Y6/4　にぶい黄色粘土　(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック5%、砂礫わずかに混)



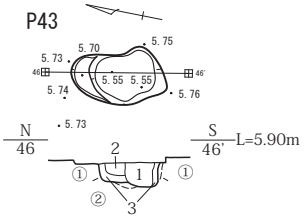
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物1-3㎜稀に含、地山ブロック粒15%、酸化鉄含)
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±1㎜ごく稀に含、地山ブロック50%、酸化鉄まばらに含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色土ブロック20%、酸化鉄まばらに含)
※1層＝北方向への抜き取り痕か
①　2.5Y6/3　にぶい黄色粘土(粘性やや強、酸化鉄多く含)



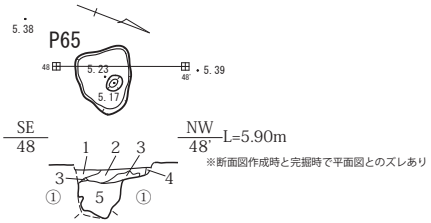
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物2～5㎜稀に含、地山粒15%)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物2～10㎜まばらに含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック25%、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック20%、酸化鉄含、礫(径10㎜前後)極稀に混)
4　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック15%、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック40%、酸化鉄含、礫(径10㎜前後)極稀に混)
①　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト質粘土(酸化鉄まばらに含)
※1・2層=柱痕　3・4層=掘り方、他の柱穴と異なり縦位に埋土



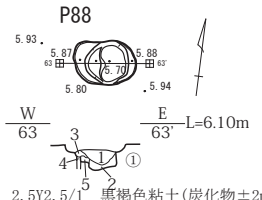
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫±5㎜まばらに含、地山小ブロック3%(下位は10%)、酸化鉄やや多く含)
2　地山を基層として(2.5Y4/2暗灰黄色ブロック30%、炭化物±1㎜稀に含、酸化鉄まばらに含、礫±5㎜稀に含)
3　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(炭化物±1㎜稀に含、地山粒7%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y4/1　黄灰色粘土(炭化物±1㎜含、地山粒7%、酸化鉄稀に含)
5　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック5%、酸化鉄稀に含)
※1層=柱痕、2～5層=掘り方
①　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土(粘性強、酸化鉄多く含)



1　2.5Y3/2　黒褐色粘土(炭化物1-5㎜稀に含、地山小ブロック下位を中心に10%混、上位で酸化鉄含)
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土(地山小ブロックまばらに5%混、酸化鉄含)
3　2.5Y3/2　黒褐色粘土+2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト(地山ブロック下位を中心に30%混)
※1層＝柱痕、2・3層＝掘り方、鞍部上面検出
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土　＝鞍部埋土
②　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土　＝地山

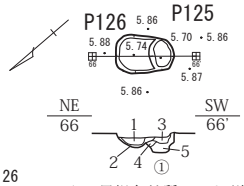


1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト(地山小ブロックまだらに30%混、礫(3-10㎜)稀に混、酸化鉄含)
2　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(粘性やや強、地山小ブロック-マーブル状に10%混、酸化鉄含)
3　2.5Y5/2-6/2　暗灰黄色-灰黄色粘土(粘性やや強、黒褐色粘土まだらに10%混、地山小ブロック5%混、酸化鉄含)
4　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(土質2層に類似)
5　2.5Y3/2　黒褐色粘土(粘性やや強、色調やや褐色味帯びる、地山ブロックまばらに5%混、酸化鉄上位を中心に含)
※1～4層・①＝鞍部埋土、5層＝鞍部埋没途中の小穴
①　2.5Y3/1　黒褐色粘土　＝鞍部埋土
②　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土　＝地山



1　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土(炭化物±2㎜稀に含、礫±10㎜稀に含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(地山小ブロック40%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山粒20%)
5　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック7%、酸化鉄まばらに含)
※1・2層＝西方向への抜き取り痕か、3層＝抜き取り時の流入土か、4層＝根痕

①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土(粘性強、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄多く含)



P126
1　2.5Y2.5/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±5㎜ごく稀に含、地山粒稀に含、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y2.5/1　黒褐色粘質シルト(地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
P125
3　5Y2/1　黒色粘質シルト(炭化物±2㎜稀に含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
4　地山に近似する
5　地山小ブロックと5Y2/1黒色粘質シルト小ブロックとの混土層(酸化鉄まばらに含)

①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土　(2.5Y3/1黒色粘土筋状に5%、酸化鉄一面に含)

第44図　２区土坑群・ピット実測図(S＝1/60)

は黄灰色～黒褐色である。底部には筵状の編物が２枚重ねて敷かれていた。上の編物は長さ75㎝、幅81㎝で、下の編物は南西部が折り重なっているため全長は不明だが、130㎝以上とみられる。幅は上の編物と同程度と思われる。土層断面の観察から、径80～95㎝程の底のないたらい状の枠内部に編物を敷いていたものと推定される。須恵器・土師器・陶磁器片が少量出土しており、時期は江戸時代前半に位置付けられる。

４．溝

SD1（第45図、図版17）　２区南西B2・C2グリッドを中心に検出し、検出面は標高5.58～5.79m程である。西側は調査区外へ延びるが、長さ約23.3mを測る。幅は約25～95㎝と北東部が幅広で、深さは９～25㎝を測る。主軸は中央部でN-27°-E、緩く屈曲して北東部でN-60°-Eである。断面形は半円状～逆台形状で、覆土は黒褐色～黒色である（図版26）。少量の須恵器・土師器細片のほか、６世紀後半代の須恵器坏蓋（第52図99）が出土した。

SD2（第45図、図版17）　２区西端D1～3グリッドで検出し、検出面の標高は5.74～5.99mである。西側は調査区外へ延びるが、長さ15.3m程を確認した。幅は25～40㎝程、深さは３～20㎝を測る。主軸はN-83°-Wである。断面形は逆台形状で、覆土は黒褐色である（図版26）。少量の須恵器・土師器細片のほか、７世紀前葉に位置付けられる須恵器の坏身（第52図100）が出土した。

SD3（第46図、図版17）　２区西端D1～3グリッドで検出し、検出面の標高は5.93m前後である。途切れ途切れであるが、長さ6.2mを確認した。幅0.1～0.6m、深さ１～７㎝である。

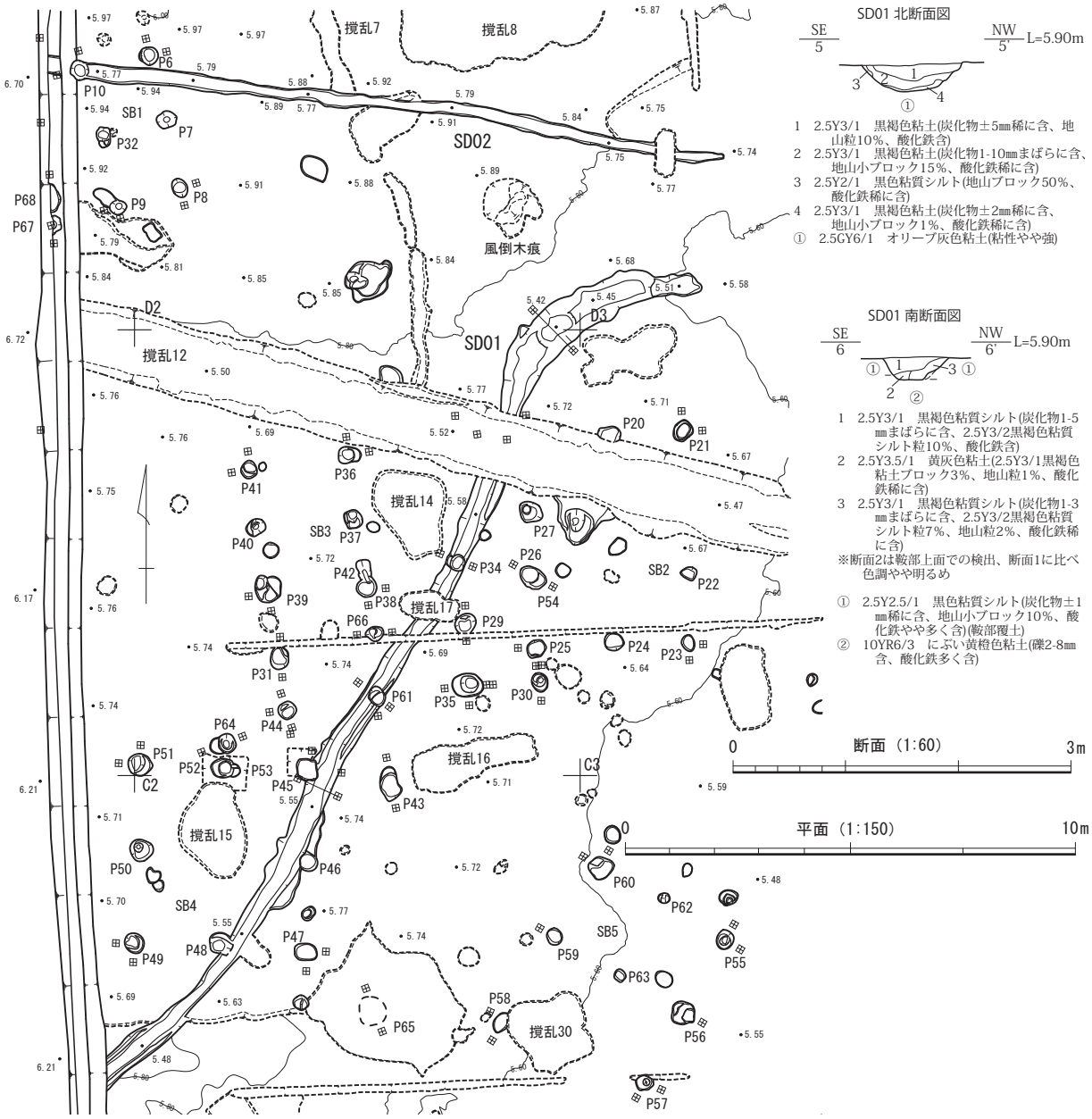
SD4（第46図、図版17）　２区中央付近D6・E6グリッドで検出した。検出面の標高は5.13～6.24m前後である。東側がSD9に繋がっており、長さ約11.8mを確認した。幅は20～50㎝程、深さは３～11㎝程である。主軸は西部でN-28°-E、くの字に屈曲し東部でN-65°-Wである。断面形は半円状で、覆土は黒褐色である（図版26）。須恵器・土師器が少量出土しているが、細片のため時期は不明である。

SD5（第46図、図版17）　２区中央D5・6グリッドで検出し、検出面の標高は5.70～5.93m前後である。途切れた部分も含めると全長は13.9m程を測る。幅は15～50㎝程、深さは４～14㎝程である。溝は緩く屈曲しており、主軸は西部でN-87°-E、中央部でN-74°-E、東部でN-89°-Eである。断面形は不整形な半円状で、覆土は概ね黒褐色、下位で地山ブロックが漸移的に混入している。出土遺物はごく少量の土師器細片のみだが、SF1のピット群に切られていることから９世紀以前の遺構と解釈できる。

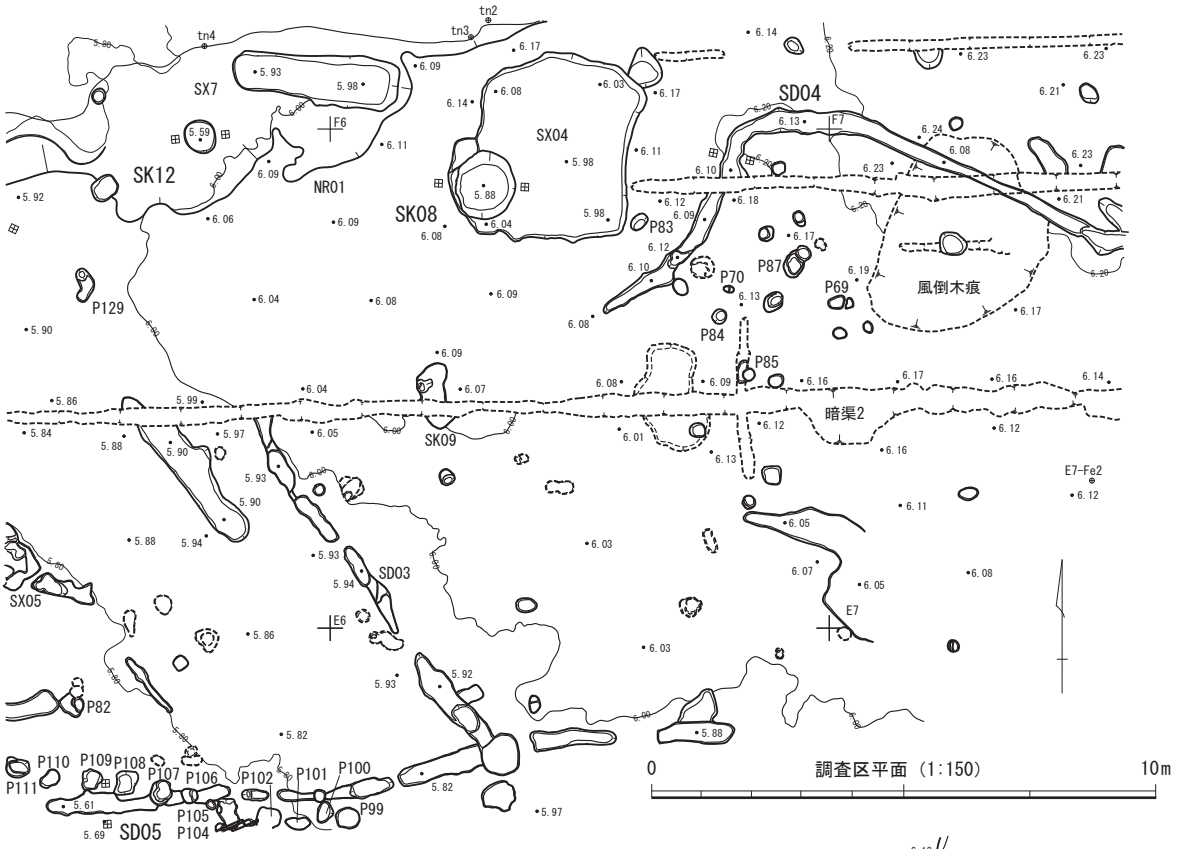
SD9（第47図、図版17）　２区東半E7～9・D9グリッドで検出し、検出面の標高は6.06～6.22m前後である。長さは約22mで、１区D10グリッドで検出したほぼ同じ幅・軸の溝が続きとするならより長くなる。幅約20～50㎝、深さ約８～13㎝を測る。主軸はN-66°-Wである。断面形は逆台形状で、覆土は黒褐色である（図版26）。須恵器や土師器の細片のほか、古墳時代後半に位置付けられる須恵器の坏身（第52図101）が出土した。

SD10（第47図、図版17）　２区東半D・E8グリッドで検出した。検出面の標高は6.00～6.12m前後で、長さ約13.5mを測る。SD10-aは幅約30～70㎝、深さ約２～18㎝を測る。SD10-bはSD10-aに切られているため正確な幅は不明だが、70～100㎝前後とみられる。深さは約12～14㎝を測る。溝の平面形は緩やかな弧を描き、断面形は逆台形状、覆土は褐灰色～黒褐色である（図版26）。須恵器や土師器が多数出土したが、いずれも細片のため時期は不明である。

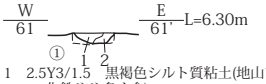
SD11・12（第47図）　２区F8・E8・E9・D9・D10グリッドで検出し、検出面の標高は6.04～6.26m前後である。当初別遺構として番号を付したが、SD11・12③断面の土層観察では別々の溝となる様相がとらえられなかったため、②断面付近（屈曲部）で広めに地山が削られたものと想定し、一つの遺構と



第45図　２区SD1・２実測図(S＝1/150・1/60)

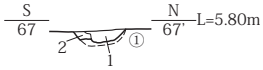


SD004 断面図



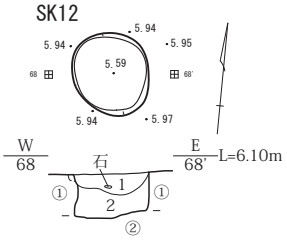
1　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(地山ブロック40%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(地山粒2%、酸化鉄やや多く含)
①　2.5Y6/3　にぶい黄色シルト(2.5Y4/1黄灰色シルト小ブロック2%、酸化鉄一面に含)

SD05 断面図



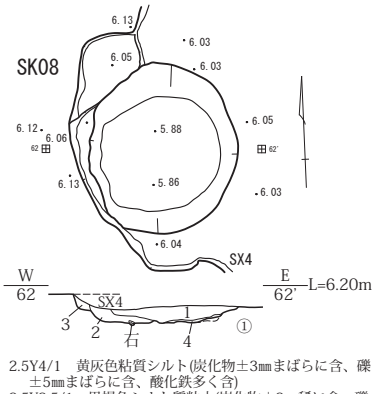
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫±3mm稀に含、炭化物±3mmごく稀に含、地山ブロック3%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山ブロック40%、酸化鉄まばらに含)
※下位で地山ブロック漸移的に混じる(溝全体的に)
①　7.5Y6/2　灰オリーブ色シルト　(2.5Y4/1黄灰色シルト小ブロック7%、酸化鉄一面に含)

SK12



1　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、礫10-30mmまばらに含、炭化物±mm10mmまばらに含、①ブロック5%(上位東側には層状に入る)、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土(粘性強、①ブロック7%、炭化物±5mm稀に含、酸化鉄稀に含)
①　2.5GY6/1　オリーブ灰色粘土(粘性強、礫10-20mm含、炭化物2-5mmまばらに含、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック3%、酸化鉄一面に含)
②　礫層

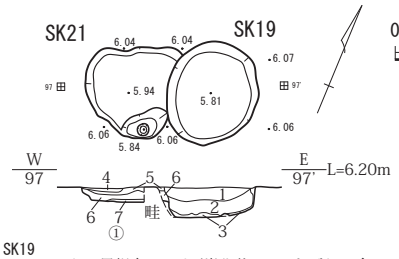
SK08



1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト(炭化物±3mmまばらに含、礫±5mmまばらに含、酸化鉄多く含)
2　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mm稀に含、礫5-20mm含、地山小ブロック30%、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(礫±10mmまばらに含、地山小ブロック10%)
4　地山に近似するがわずかに濁
※平面プランはSK1～SK4に類似するが、土質黒褐色味強め
①　2.5Y6/2　灰黄色粘土(わずかに砂混、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック10%、礫5-20mm含、酸化鉄多く含)

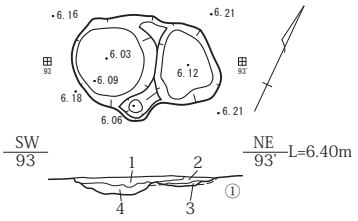
0　平・断面（1:60）　3m

SK21　SK19



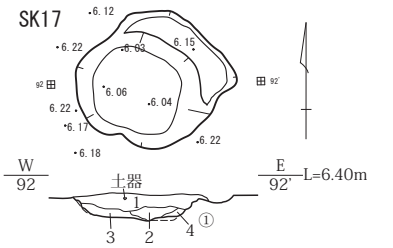
SK19
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±3mmまばらに含、礫±10mm稀に含、焼土稀に含、土器片含、地山粒2%、2.5Y2/1黒色粘土ブロック60%、酸化鉄含)
2　2.5Y2/1　黒色粘土(粘性強、炭化物±1mmごく稀に含、10YR5/3にぶい黄褐色粘土ブロック3%、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
SK21
4　2.5Y3/1　黒褐色シルト(地山ブロック60%、酸化鉄多く含)
5　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±5mm稀に含、地山粒1%、酸化鉄多く含)
6　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物1-5mm稀に含、地山粒30%、
2.5Y3/1黒褐色粘土粒2%、酸化鉄多く含)
7　地山を基層として(2.5Y3.5/1黒褐色粘土小ブロック10%)
※SK21の覆土特徴はSK17・18に類似

SK18



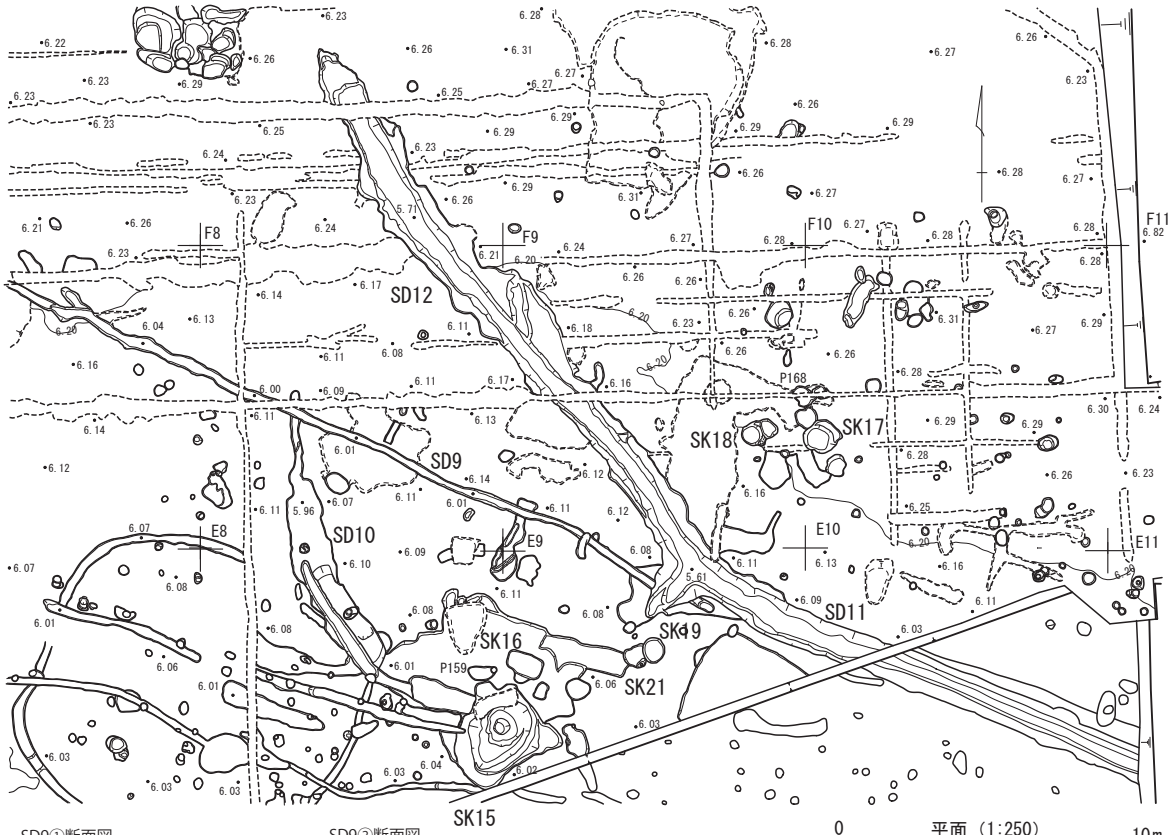
1　10YR3/1　黒褐色シルト(礫10-50mmまばらに含、炭化物1-10mm稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄やや多く含)
2　10YR3/1.5　黒褐色粘土(炭化物1-5mm稀に含、地山粒1%、酸化鉄やや多く含)
3　10YR3/1.5　黒褐色粘土(地山ブロック50%、酸化鉄やや多く含)
4　10YR3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mm稀に含、地山粒30%、酸化鉄やや多く含)
※SK17・18はP136、P137と検出状況や覆土類似
※SK17-3・4層とSK18-4層の地山ブロックの混入状況類似
①　10Y7/1　灰白色シルト(10YR4/1褐灰色シルト筋状に3%、酸化鉄多く含)

SK17

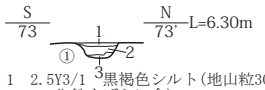


1　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト(炭化物±3mm稀に含、地山粒5%、酸化鉄多く含)
2　10YR3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±3mmまばらに含、地山粒10%、礫±10mm稀に含、酸化鉄多く含)
3　10YR2.5/1　黒褐色シルト質粘土(地山粒50%(中位以外に集中)、酸化鉄多く含)
4　10YR3/1　黒褐色粘土(地山粒30%、酸化鉄やや多く含)
①　10Y7/1　灰白色シルト(10YR4/1褐灰色シルト筋状に3%、酸化鉄多く含)

第46図　２区SD4・５、SK実測図(S＝1/150・1/60)

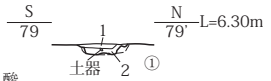


SD9①断面図



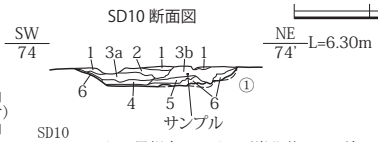
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(地山粒30%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト(地山粒40%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土(地山ブロック60%、酸化鉄まばらに含)
※地山ブロックは下位になる程大きくなる傾向(5mm→10mm前後→10-20mm)
①　5Y7/1　灰白色粘土(粘性やや強2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に10%、酸化鉄やや多く含)

SD9②断面図



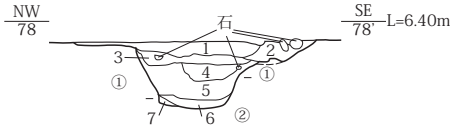
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土　(地山粒2%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土　(地山小ブロック7%、酸化鉄まばらに含)
①　2.5Y7/2　灰黄色粘質シルト(2.5Y4/1黄灰色粘質シルト筋状に5%、酸化鉄多く含)

SD10 断面図



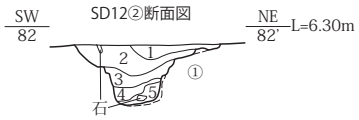
SD10
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト　(炭化物±1mm稀に含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土　(地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
3　2.5Y2.5/1　黒褐色粘土　(炭化物1-5mmまばらに含、地山粒15%、酸化鉄やや多く含(3bは3aより地山粒が細かく多い)
4　10YR3/1　黒褐色粘土　(炭化物±2mm稀に含、地山粒10%、酸化鉄まばらに含)
5　10YR4/1　褐灰色粘土　(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック7%、地山粒3%、酸化鉄含)
6　10YR3.5/1　褐灰色粘土　(地山ブロック60%、酸化鉄やや多く含)
※6層＝初期の流入土、3～5層＝自然堆積か
※炭化物サンプル採取
①　10Y7/1　灰白色粘土　(粘性強、2.5Y4/1黄灰色粘土筋状に3%、酸化鉄多く含)

SD12①断面図



1　2.5Y3.5/1　黄灰色シルト(礫±10mmまばらに含、炭化物2-5mm稀に含、地山粒3%、酸化鉄やや多く含)
2　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(礫±200mm含、炭化物±1mm稀に含、地山粒20%、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y3.5/1　黄灰色粘質シルト(礫±50mm稀に含、炭化物±3mm稀に含、地山粒5%、酸化鉄多く含)
4　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(礫±10mm稀に含、炭化物±3mmまばらに含、地山粒2%、酸化鉄やや多く含)
5　2.5Y3.5/1　黄灰色粘土(礫±5mmまばらに含、炭化物±5mmまばらに含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含、4層、6層よりやや暗)
6　2.5Y3.5/1　黄灰色シルト質粘土(粘性やや強、地山粒ごく稀に含、酸化鉄ごく稀に含)
7　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(砂わずかに混、炭化物±2mmまばらに含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
※2層＝北東方向からの流入土、拳大の礫目立つ。6・7層＝砂粒わずかに混じる程度で粘性強いため、流れていたというよりはよどんで堆積した様相が窺える
①　10Y7/1　灰白色粘質シルト(礫20-50mmまばらに含、2.5Y3/1黒褐色粘質シルト小ブロック3%、酸化鉄一面に含)
②　礫層

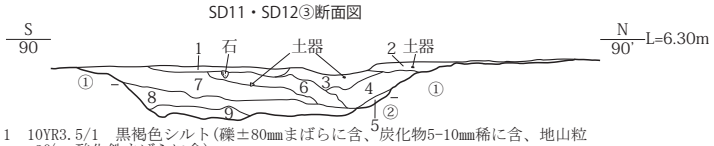
SD12②断面図



1　2.5Y3.5/1　黄灰色シルト(礫5-15mmまばらに含、炭化物2-10mmまばらに含、地山粒10%、酸化鉄やや多く含、砂わずかに混)
2　2.5Y3/1.5　黄灰色粘質シルト(砂わずかに混、礫±3mm稀に含、炭化物±2mmまばらに含、地山粒1%、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y3.5/1　黄灰色粘質シルト(炭化物±5mm稀に含、地山粒7%、2.5Y3/1黒褐色粘質シルトブロック3%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(粘性やや強、炭化物±3mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
5　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土(2.5Y3/1黒褐色粘土粒1%、地山粒20%、酸化鉄稀に含)
※3・4層は①断面の5・6層に対応、3～5層いずれも北東方向からの流入みられる
①　5Y7/2　灰白色粘土(粘性強、2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に10%、酸化鉄多く含)

0　断面（1:60）　3m

SD11・SD12③断面図



1　10YR3.5/1　黒褐色シルト(礫±80mmまばらに含、炭化物5-10mm稀に含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
2　10YR3/1　黒褐色シルト質粘土(礫2-15mm稀に含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含、2.5Y2.5/1黒褐色粘土粒2%)
3　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(礫±5mm稀に含、地山粒2%、2.5Y2.5/1黒色粘土粒3%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘土(2.5Y2.5/1黒色粘土粒3%、地山粒5%、炭化物±2mm稀に含、酸化鉄まばらに含)
5　2.5Y3/1.5　黒褐色粘土(焼土ごく稀に含、地山粒2%、2.5Y2.5/1黒色粘土粒1%)
6　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(地山粒1%、2.5Y2.5/1黒色粘土粒1%、炭化物±1mm稀に含)
7　2.5Y3/1　黒褐色粘土(礫±10mm稀に含、炭化物2-5mmまばらに含、地山粒2%、2.5Y2.5/1黒色粘土粒2%、酸化鉄含)
8　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±3mm稀に含、地山粒小ブロック10%、2.5Y2.5/1黒色粘土粒2%、酸化鉄含)
9　10YR3/1　黒褐色粘土(粘性強、炭化物±10mm稀に含、地山小ブロック15%、2.5Y2.5/1黒色粘土粒1%、酸化鉄多く含)
※1・2層＝SD11・12上面で広がる層群。断面ではSD11、SD12が別々の溝となる様相とらえられないため、断面②付近の屈曲部で広めに地山が削られたものと想定。
遺物は断面③より南を「SD11」北を「SD12」として取り上げた。
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土(2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に20%、酸化鉄多く含)
②　5GY6.5/1　オリーブ灰色シルト質粘土(粘性強、2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック2%、酸化鉄一面に広がる)

第47図　２区SD9 ～ 12実測図(S＝1/250・1/60)

してまとめて報告する。南部が２区調査区外へ延び、前年度調査の１区において溝の続き（１区SD08）が検出されている。１区と合わせた長さは約37mだが、１区東側で調査区外へ延びるため全長は不明である。幅は約1.1～1.9m、深さは18～53cm程である。主軸は、屈曲部より南部がN-62°-W、北部がN-39°-Wである。断面形は階段状～逆台形状で、覆土は概ね黄灰色～黒褐色である（図版26）。土層観察では、水が流れていたというより淀んで堆積したような様相や、北東方向から土が流入した様子が見て取れる。なお、遺物は③断面以南出土のものはSD11、以北出土のものはSD12として取り上げた。SD11からは多量の須恵器・土師器細片のほか、古墳時代に位置付けられる手捏ねの土師器（第52図102）や中世の加賀焼摺鉢（103）、中・近世の杭（第59図248）などが出土している。SD12からは多量の須恵器・土師器細片のほか、少量の陶器片、黒曜石剥片、近世の京焼風碗（第52図104）などが出土した。遺物の様相から、年代は中世～近世に位置付けられる。

SD14（第41図、図版25）　２区中央付近D7・8グリッドで検出し、検出面の標高は5.98～6.07m前後である。SX11などによって切られた部分も含めると長さは17.3m程で、溝の東部は２区調査区外へ延びる。幅約20～30cm、深さ約２～８cmで、溝は緩く蛇行してSI1の周溝であるSD8を切っている。少量の須恵器・土師器細片のほか、近世に位置付けられる染付の小坏（第52図105）が出土した。

SD15（第41図、図版25）　２区中央付近D7･8グリッドで検出した。検出面は標高6.03～6.09m前後で、途切れた部分も含めると全長は14.6m程である。幅約20～40cm、深さは約４～12cmを測る。主軸はN-72°-Wである。断面形は不整形な逆台形状で、覆土は黒褐色である。SI1の周溝であるSD8を切るが、少量の土師器細片が出土しているに過ぎず、時期は不明である。

SD17（第29図、図版17）　２区北部F7グリッドで検出した。検出面は標高6.22～6.29m前後で、全長は約4.2m、幅約60～120cm、深さ約６～11cmを測る。主軸はN-38°-Wである。底部外側にヘラ記号「－」と記された奈良・平安時代に位置付けられる須恵器の坏（第52図106）が出土している。

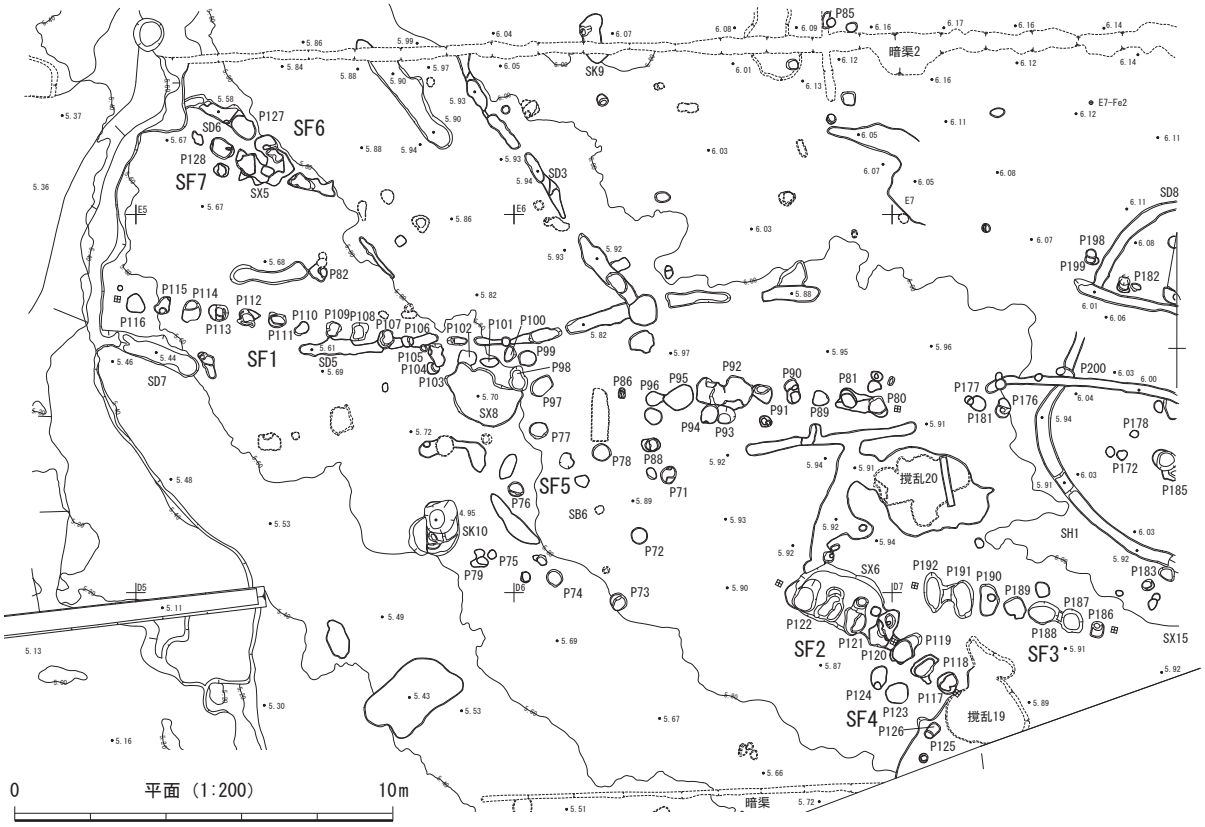
５．道路状遺構

２区河道の左岸、調査区中央から河道にかけて不整形な小穴が連続する波板状凹凸を検出した。右岸では確認できなかった。

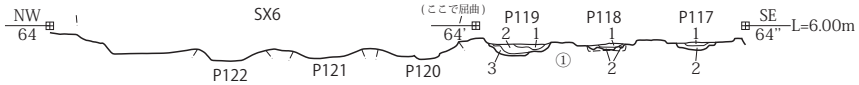
SF1（第48図、図版33）　２区中央D5・6グリッドを中心に検出し、検出面は標高5.56～5.98m前後である。長さ約20mにわたって長軸約20～150cmの小穴が近接して並んでいる。深さは約１～16cmといずれも浅い。主軸はN-81°-Wである。断面形は概ね半円状～逆台形状で、覆土は黄灰色～黒褐色、一部で灰オリーブ色である。SF1の西側では穴の底や上部に木片が混入するピットが多い。SF2・3では見られない特徴だが、その意味や河道に近いこととの関連性などは不明である。遺物は、P98から須恵器有台坏（第53図132）、P112から須恵器甕（133）、P115から須恵器瓶または壺（134）などが出土しており、須恵器の時期は９世紀頃に比定されるので、それ以降であろう。

SF2（第48図、図版33）　２区南部C6・7グリッドを中心に検出し、検出面の標高は5.86～5.93m前後である。長さは５m程で、長軸約60～110cmの小穴が連続して並んでいる。深さは１～21cm程を測る。主軸はN-56°-Wで、SF1やSF3とは異なる軸方向を示す。断面形は半円状～不整形な逆台形状で、覆土は黒褐色である。遺物はP124から出土したごく少量の土師器細片のみだが、SF1と同時期なら９世紀以降に位置付けられる。

SF3（第48図、図版33）　２区南部C・D7グリッドで検出した。検出面は標高5.89～5.97m前後で、長さは約５mを測る。長軸約40～110cmの小穴が連続して並んでおり、深さは８～18cm程である。主軸はN-72°-Wで、SF1と似た方向を示している。断面形は不整形な半円状で、覆土は黄灰色～黒色である。



SF2(P117・P118・P119・P120・P121・P122) 断面図

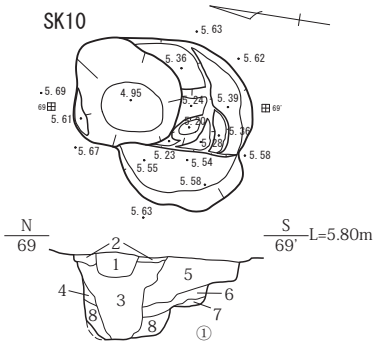


P119
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土　（炭化物±1mm稀に含、地山ブロック3%、酸化鉄多く含）
2　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土　（地山ブロック10%、酸化鉄多く含）
3　地山を基層として　（2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック2%、酸化鉄やや多く含）

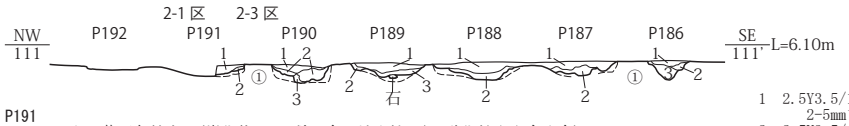
P118
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土　（炭化物±1mm稀に含、地山ブロック3%、酸化鉄多く含）
2　地山を基層として　（2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック2%、酸化鉄やや多く含）

P117
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土　（炭化物±1mm稀に含、地山ブロック3%、酸化鉄多く含）
2　地山を基層として　（2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック2%、酸化鉄やや多く含）
①　5Y6/2　灰オリーブ色粘土　（2.5Y3/1黒褐色粘土筋状に2%、酸化鉄多く含）

SK10



SF3(P186・P187・P188・P189・P190・P191・P192) 断面図



P191
1　2.5Y4/1　黄灰色粘土　（炭化物±2mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄やや多く含）
2　地山に近似するがわずかに濁

P190
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　（礫±5mm稀に含、酸化鉄多く含、わずかに砂混）
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（地山20%とマーブル状に混り合う、酸化鉄多く含）
3　地山に近似するがわずかに濁

P189
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　（礫±5mm稀に含、酸化鉄多く含、わずかに砂混）
2　2.5Y3/1　黒褐色粘土　（地山20%とマーブル状に混り合う、酸化鉄多く含）
3　2.5Y3.5/1　黒褐色粘土　（地山粒2%、酸化鉄やや多く含）

P187　P188
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　（礫±5mm稀に含、酸化鉄多く含、わずかに砂混）
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト　（炭化物±2mmまばらに含、地山ブロック15%、酸化鉄多く含）

P186
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　（礫±5mm稀に含、酸化鉄多く含、わずかに砂混）
2　2.5Y3/1.5　黒褐色粘質シルト　（炭化物±2mmまばらに含、地山ブロック15%、酸化鉄多く含）
3　2.5Y2.5/1　黒色粘土　（炭化物±2mm稀に含、地山小ブロック20%、酸化鉄多く含）

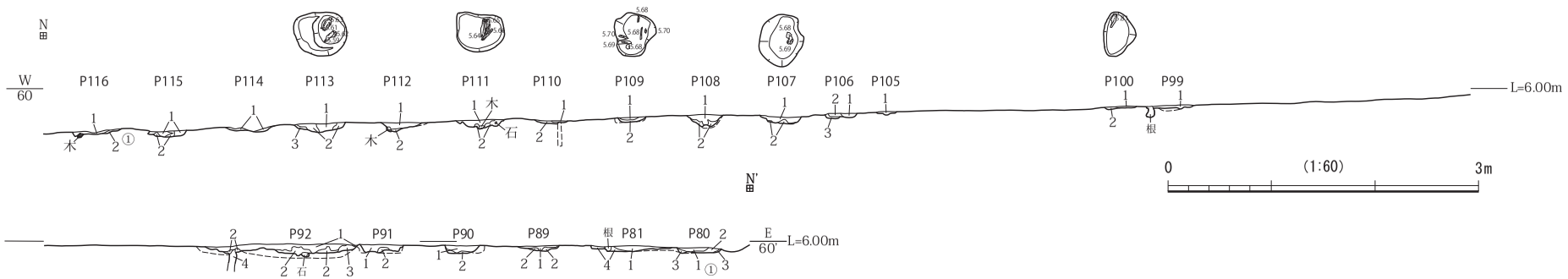
①　2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘質シルト　（2.5Y2/1黒褐色粘質シルト小ブロック5%、酸化鉄多く含）

1　2.5Y3.5/1黄灰色粘土ブロックと地山ブロックの混土層（礫2-5mmまばらに含、酸化鉄やや多く含）
2　2.5Y3.5/1黄灰色粘土ブロックと2.5Y4/1黄灰色粘土ブロックの混土層（地山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含）
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルトブロック（礫2-15mmまばらに含、炭化物±2mmごく稀に含、地山ブロック40%、酸化鉄やや多く含）
4　地山ブロックと2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック（粘性強）の混土層（酸化鉄稀に含）
5　2.5Y3.5/1　黒褐粘質シルト（わずかに砂混、礫2-40mm含、炭化物±3mm稀に含、酸化鉄まばらに含）
6　2.5Y3/1　黒褐色粘土（粘性強）
7　地山を基層として（2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック10%、酸化鉄多く含）
8　地山を基層として（2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック5%、酸化鉄やや多く含）

①　7.5GY6/1　緑灰色シルト質粘土（粘性強、上位は2.5Y4/1黄灰色粘質シルトブロック10%、酸化鉄一面に含）

0　断面（1:60）　3m

第48図　２区SF1 ～ ３、SK10実測図１（S＝1/200・1/60）



P116
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含)

①　7.5Y6/1　灰色シルト　(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック15%、炭化物±3mm稀に含)

P115
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
2　地山に近似するがわずかに濁

P114
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)

P113
1　2.5Y3.5/2　黒褐色シルト(炭化物±2mmまばらに含、礫±20mm稀に含、地山ブロック40%、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm含、地山粒1%)
3　5Y6/2　灰オリーブ色粘土(2.5Y4/1黄灰色粘土筋状に2%、酸化鉄やや多く含)

P112
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm含、地山粒1%)

P111
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含、黒褐色シルトの混じり方がマーブル状顕著)

P110
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含)

P109
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含)

P108
1　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト(炭化物1-5mm稀に含、地山粒7%、酸化鉄ごく稀に含)

P107
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含)

P106
1　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含)

P105
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)

P100
1　2.5Y3/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック20%、木片まばらに含、酸化鉄まばらに含)
2　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含)

P99
1　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含)

P92
1　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含、マーブル状顕著)
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック30%、酸化鉄含)
3　地山を基層として(2.5Y3/1黒褐色シルトブロック10%、木片稀に含、酸化鉄多く含)
4　地山を基層として(2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土30%、酸化鉄含)

P91
1　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック30%、酸化鉄含)

P90
1　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック30%、酸化鉄含)

P89
1　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含)
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト(炭化物±1mm稀に含、地山ブロック30%、酸化鉄含)

P80　P81
1　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土(砂粒まばらに混、酸化鉄若干混、地山小ブロックまばらに10～20%混)
2　2.5Y5/1　黄灰色シルト質粘土(1層ベースに地山ブロックまばらに30%混、砂粒まばらに混、酸化鉄若干混)
3　2.5Y6/3　にぶい黄色シルト質粘土(地山ベースに黄灰色粘質シルト20%混、酸化鉄若干混)
4　2.5Y5/1　黄灰色シルト質粘土＋2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粘土

①　2.5Y6/3　にぶい黄色シルト質粘土

※P105ラインより12cm南で断面図作成

第49図　2区SF1～3実測図2(S=1/60)

出土遺物は少量の須恵器や土師器の細片のみだが、SF1・2と同様９世紀以降に比定できると考える。なお、SF1～3の波板状凹凸の周辺で硬化面や轍など路面と認定できる痕跡は確認されていないが、削平を受けていることや地盤が軟らかいことなどから、痕跡として残らなかった可能性もある。

調査中に認識した道路状遺構以外に、それらに繋がる可能性があるピット列を指摘したい。

SF1－c（第48図、図版17）　２区南部D7グリッドのSI1の西側に位置し、検出面の標高は5.98m前後である。P177・181、P176がSF1から延びる可能性があろう。深さは４～14cmであるが、P176の中央部は24cmと深いので柱穴と思われる。

SF4（第48図、図版17）　２区南部C6･7グリッドを中心に検出し、検出面の標高は5.85～5.89mである。SF2の南西側0.2～0.7mに位置し、長さ2.4mにP124、123、P125・126があり、深さ４cmでP126が12cm、P125が16cmである。主軸はN-44°-Wである。

SF5（第48図、図版17）　２区南部D6グリッドのSB6内に位置し、検出面の標高は5.86m前後である。二つの深さ２cm程度のピットが２つあり、SF2～4からSF1のP97～99に繋がる可能性があろう。

SF6・7（第48図、図版17）　２区南部E5グリッドで検出し、検出面の標高は5.70～5.82mである。北側のSD6・P127・SX5・ピットをSF6（長さ4.6m、深さ５～19cm）、南側のピット・P128・SX5・ピットをSF7（長さ4.1m、深さ３～11cm）とした。

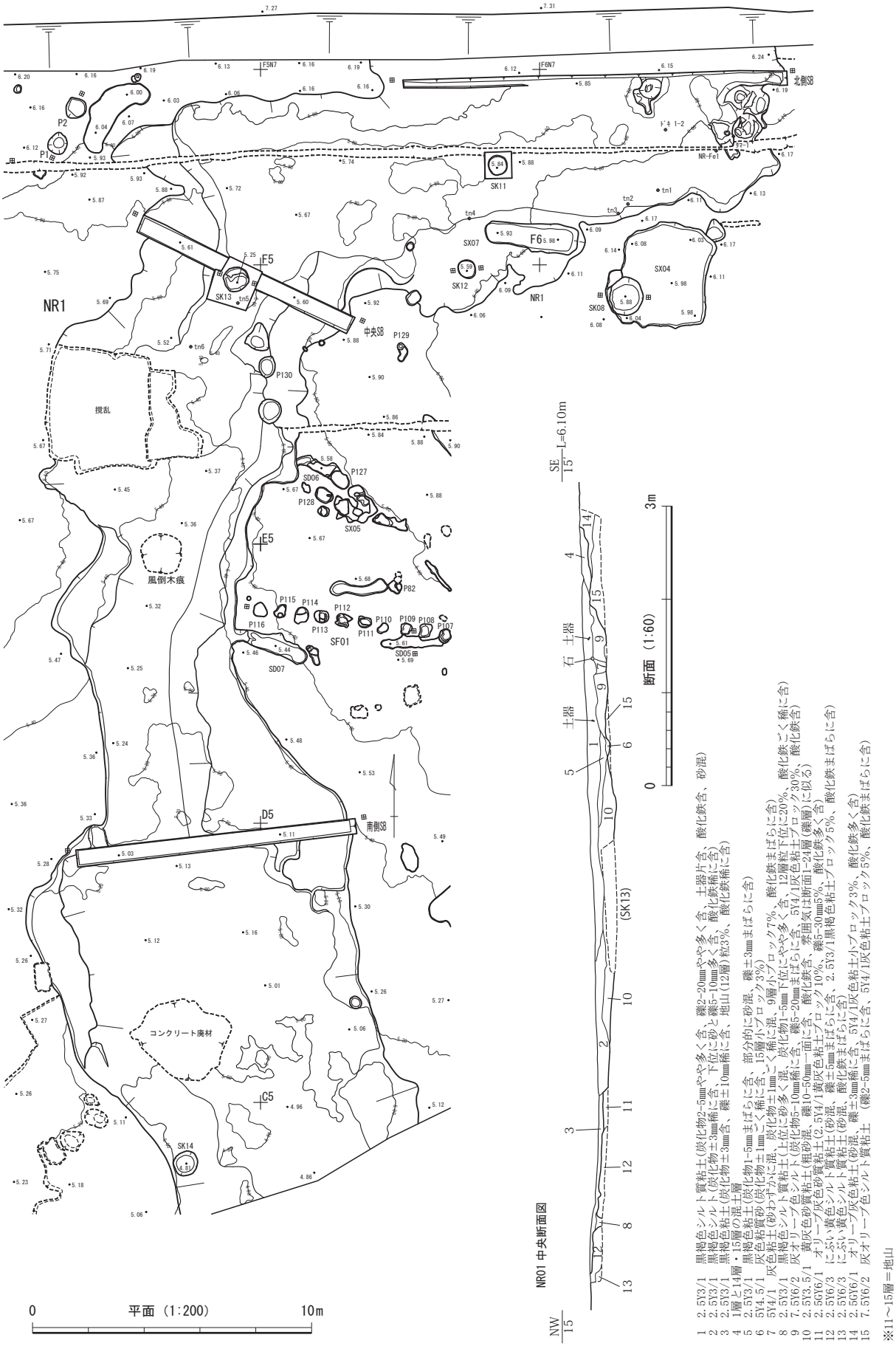
６．河　川　跡

NR1（第50図、図版34・35）　２区を北から南へ縦断する河道を検出した。検出面は標高5.01～6.27m前後である。１区で検出された箇所も含めると長さ約63m前後で、幅約５～14m、深さ約７～42cmを測る。調査区北端から南西へ流れ、F5グリッド杭付近で流路は南へと向きを変えている。断面形は概ね半円状を呈する。遺物は５m四方の小グリッドを設定して取り上げを行った。NR1からは、古墳時代の甑把手（第53図135）や土師器甕（136）・須恵器坏身（137）・滑石製臼玉（第57図235）などのほか、６世紀後葉に位置付けられる須恵器坏身（第53図138）、奈良～平安時代に属する墨書土器（139・140・141・142・143）や須恵器坏（144）、９世紀前葉～中葉に位置付けられる須恵器坏（145）、年代不明の土錘（146）・石英製碁石（236）・カマ状鉄製品（240）などが出土している。特に墨書土器の出土が注目され、道教の符号である九字の略号「＃」などが墨書されていることから、水辺で祭祀を行った後、河道に廃棄されたものと考えられる。他にも、下駄（第60図263）・杭（264・265）・木錘（266）などの木製品が出土しており、いずれも近世に位置付けられる。縄文時代の遺物も出土しており、深鉢（第54図147～149）、底部（150）などのほか、打製石斧（第57図232・233）、石鏃（215～219）、石錐（220）、石匙（221）、石錘（234）、剥片（222～227）なども確認した。今回の調査では縄文時代の遺構は確認されていないため、これらの遺物は河道上流にあたる遺跡北側の丘陵部に当該期の集落が存在したことを示唆している。河道の年代としては縄文～古代に位置付けられ、近世には埋没していた可能性がある。

７．小　　穴

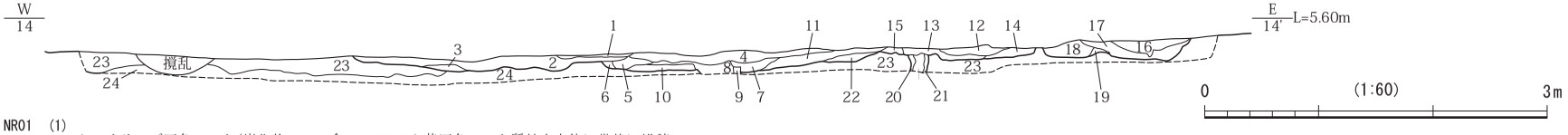
番号を付した小穴は222基を数える。掘立柱建物の柱穴として柱列を捉えられたもの以外にも、建物プランは把握できなかったが柱根や礎石らしき石、柱痕跡などが認められた小穴も複数確認できたため、断面図を作成したものの中から以下に記述する。

P11（第44図）　２区北西隅F2グリッドで検出した。検出面は標高6.15～6.19mで、平面形は方形を呈する。長軸は49cm、深さ９～13cmを測り、北方向への抜き取り跡とみられる土層を確認した。出土遺物はないが、調査区北側で検出されたことから近世の柱穴と推定される。



第50図　２区NR1実測図１（S＝1/200・1/60）

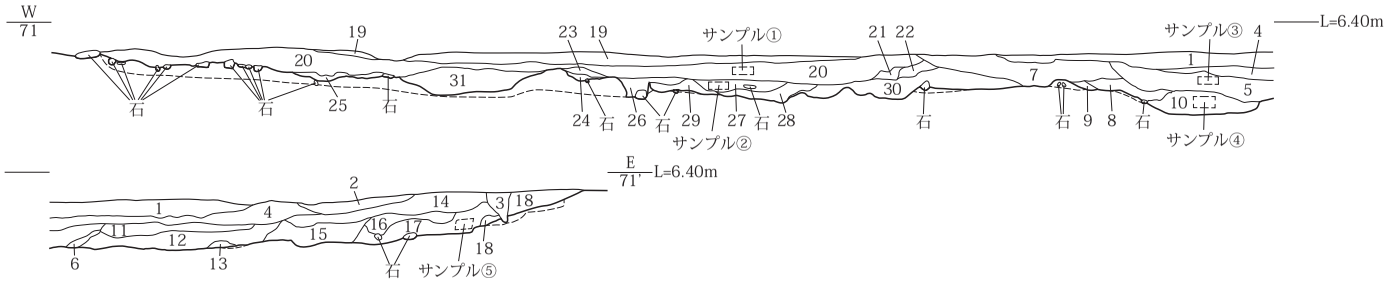
NR01 南側断面図



NR01　(1)

1　2.5GY6/1　オリーブ灰色シルト(炭化物1-10㎜含、2.5Y3.5/1黄灰色シルト質粘土上位に帯状に堆積、酸化鉄まばらに含)
2　2.5Y3/1　黒褐色砂質シルト(炭化物2-10㎜やや多く含、5Y2.5/1黒色粘質シルト層西側に堆積、7.5Y6/1灰色細砂層東側下位に堆積、2層上面は1層の影響あり、酸化鉄やや多く含)
3　2.5Y6/1　灰色微砂(礫±3㎜稀に含、炭化物±1㎜稀に含、酸化鉄多く含)
4　5Y5/2　灰オリーブ色砂(炭化物±5㎜含、礫2-10㎜上位に多く含、地山小ブロック上位に3%、酸化鉄多く含)
5　2.5Y5/2.5　暗灰黄色微砂(炭化物±1㎜まばらに含、礫±3㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)
6　2.5Y5/2　暗灰黄色砂(炭化物±1㎜稀に含)
7　2.5Y5/2　暗灰黄色シルト(砂混、炭化物±2㎜含、礫2-10㎜まばらに含、酸化鉄一面に含)
8　5Y5/2　灰オリーブ色微砂(炭化物±3㎜やや多く含、礫5-20㎜まばらに含、酸化鉄多く含)
9　5Y4/1　灰色砂質シルト(炭化物1-5㎜まばらに含、礫2-10㎜まばらに含、酸化鉄多く含)
10　2.5Y5/1.5　黄灰色砂質シルト(炭化物±2㎜まばらに含、礫±10㎜まばらに含、地山粒稀に含、酸化鉄多く含)
11　2.5Y5/2　暗灰黄色砂(炭化物±3㎜稀に含、礫3-10㎜やや多く含、酸化鉄含)
12　5Y3/1　オリーブ黒色粘土(5Y2/1黒色粘土粒5%、礫±10㎜稀に含)
13　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±3㎜稀に含、礫2-20㎜稀に含、7.5Y6/2灰オリーブ色シルト層東側に堆積、酸化鉄やや多く含)
14　5Y5/1　灰色シルト(炭化物±1㎜下位にやや多く含、礫10-30㎜まばらに含、下位に地山が漸移的に堆積、酸化鉄多く含)
15　5Y4.5/1　灰色シルト質粘土(砂混、炭化物±2㎜稀に含、礫3-20㎜やや多く含)
16　N1.5/0　黒色粘土(炭化物±1㎜稀に含、礫±5㎜まばらに含、地山粒2%)
17　5GY7/1　明オリーブ灰色シルト(炭化物±2㎜まばらに含、礫2-20㎜含、16層ブロック7%、酸化鉄稀に含)
18　7.5Y6/1　灰色シルト(炭化物±2㎜稀に含、礫2-20㎜やや多く含、酸化鉄やや多く含)
19　2.5Y6/2　灰黄色シルト(炭化物±1㎜稀に含、礫±2㎜やや多く含、酸化鉄一面に含)
20　2.5Y5/1.5　黄灰色粘質シルト(炭化物±2㎜ごく稀に含、下位で漸移的に地山と混ざり合う)
21　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質シルト(下位で地山と漸移的に混ざり合う)
22　11層と23層の混土層
23　7.5Y7/2　灰白色シルト質粘土(下位で砂質強くなる、礫20-150㎜まばらに含、酸化鉄一面に含)
24　2.5Y5/2　暗灰黄色砂(炭化物±2㎜稀に含、礫20-150㎜多く含(礫層))
※22層＝地山との漸移層、23・24層＝地山

NR01 北側断面図



1　2.5Y3.5/1　黒褐色粘質シルト(炭化物±5㎜稀に含、礫±5㎜稀に含、酸化鉄多く含)
2　2.5Y3/1　黒褐色土(炭化物±3㎜まばらに含、礫5-50㎜まばらに含、土器片含、酸化鉄やや多く含)
3　5Y3/1　オリーブ黒色粘質シルト(炭化物±3㎜ごく稀に含、礫3-5㎜稀に含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
4　2.5Y3.5/1　黒褐色砂質粘土(炭化物±5㎜含、礫2-10㎜含、酸化鉄やや多く含)　サンプル③
5　2.5Y3/1　黒褐色砂質粘土(炭化物5-10㎜やや多く含、礫10-20㎜含、下位で10層がブロック状に5%、酸化鉄やや多く含、地山ブロック2%)　サンプル④
6　2.5Y3/1　黒褐色砂質粘土(炭化物±2㎜稀に含、礫10-20㎜やや多く含)
7　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(砂混、炭化物±5㎜含、礫5-15㎜まばらに含、酸化鉄多く含)
8　2.5Y3/1　黒褐色粘土(砂混、炭化物5-10㎜やや多く含、地山ブロック10%、酸化鉄多く含、礫±10㎜稀に含)
9　2.5Y3/1　黒褐色粘土(砂混、炭化物5-10㎜まばらに含、礫±5㎜稀に含、地山ブロック20%、酸化鉄多く含)
10　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物±5㎜上位にやや多く含、礫±30㎜ごく稀に含、地山小ブロック層西側のみ10%、酸化鉄まばらに含)　サンプル⑤
11　2.5Y3/1　黒褐色砂質粘土(炭化物2-10㎜やや多く含、礫2-10㎜含、土器片含、酸化鉄やや多く含)
12　2.5Y3/2　黒褐色砂質粘土(11層より砂質強、炭化物5-10㎜やや多く含、礫2-20㎜含、土器片含、酸化鉄まばらに含)
13　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質砂(炭化物±2㎜稀に含、礫2-5㎜まばらに含、12層小ブロック上位に7%、酸化鉄多く含)
14　2.5Y3/1　黒褐色粘土(炭化物2-5㎜まばらに含、礫±15㎜稀に含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
15　10YR3/1　黒褐色粘質砂(炭化物2-10㎜含、礫2-5㎜まばらに含、土器片含、下位に10YR3/1黒褐色粘土層帯状に堆積、酸化鉄やや多く含)
16　2.5Y3/1.5　黒褐色土(炭化物±2㎜まばらに含、礫2-5㎜まばらに含、酸化鉄多く含)
17　10YR3/1.5　黒褐色シルト質粘土(炭化物±5㎜まばらに含、礫2-5㎜まばらに含、地山ブロック20%、酸化鉄多く含)
18　2.5Y3/1.5　黒褐色シルト質粘土(炭化物±1㎜稀に含、地山大ブロック40%、酸化鉄まばらに含)
19　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト(礫5-30㎜稀に含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
20　10YR3/1　黒褐色シルト(炭化物±5㎜下位にまばらに含、礫10-30㎜稀に含、酸化鉄やや多く含)　サンプル①
21　2.5Y3/1　黒褐色砂質粘土(炭化物2-5㎜まばらに含、礫2-5㎜含、酸化鉄やや多く含)
22　2.5Y3.5/1　黄灰色シルト(炭化物5-10㎜まばらに含、礫±20㎜ごく稀に含、酸化鉄やや多く含)
23　2.5Y3/1　黒褐色粘土(砂混、炭化物±5㎜ごく稀に含、礫5-20㎜多く含、酸化鉄まばらに含)
24　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(やや砂混、炭化物±1㎜稀に含、礫±10㎜稀に含、酸化鉄まばらに含)
25　2.5Y3.5/1　黒褐色シルト質粘土(砂混、炭化物2-5㎜稀に含、礫2-15㎜やや多く含、酸化鉄まばらに含)
26　2.5Y3/1　黒褐色砂質粘土(炭化物±2㎜まばらに含、礫2-5㎜まばらに含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
27　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±2㎜まばらに含、礫±2㎜まばらに含、酸化鉄やや多く含)　サンプル②
28　2.5Y2.5/1　黒褐色シルト質粘土(炭化物±5㎜まばらに含、礫5-40㎜やや多く含、地山粒1%、酸化鉄やや多く含)
29　2.5Y3/1　黒褐色シルト質粘土(砂わずかに混、炭化物±5㎜ごく稀に含、礫±2㎜稀に含、地山ブロック15%、酸化鉄多く含)
30　2.5Y3.5/1　黒褐色粘質シルト(砂混、炭化物2-10㎜やや多く含、礫5-30㎜やや多く含、地山ブロック1%、酸化鉄多く含)
31　10Y5/1　灰色シルト質粘土(粘性強、炭化物±2㎜ごく稀に含、礫20-80㎜多く含、酸化鉄一面に含)

①　5GY7/1　明オリーブ灰色シルト質粘土(粘性強、7.5Y5/1灰色シルト質粘土筋状に含、部分的に層上面礫層あり、酸化鉄一面に含)

第51図　2区NR1実測図2(S＝1/60)

P16　２区北西部E3グリッドで検出し、検出面の標高は6.05～6.07mである。平面形は楕円形を呈し、長軸約50cm、深さ約25～27cmを測る。17世紀後半～18世紀前半の京焼風陶器埦（第53図151）が出土していることなどから、近世の遺構と考えられる。

P17（第44図）　２区北西隅E2グリッドで検出し、検出面は標高6.15m前後、平面形は楕円形である。長軸53cm、深さ22cm前後を測り、柱痕跡を確認した。出土遺物がないが、近世の柱穴の可能性がある。

P18・19（第40図）　２区北西隅F2グリッドで検出し、検出面の標高は6.25m前後である。平面形は円形を呈し、P18で長軸37cm、深さ17cm、P19で長軸32cm、深さ23～25cmを測る。P18では南東方向への抜き取り跡とみられる土層を確認した。P19では明確な柱痕跡は確認できないが、底面に礎板らしき木材が残存していた。２基を結ぶ軸はN-25°-Wである。土器は出土していないが、近世の柱穴と考えられる。

P28（第40図）　２区北西隅F3グリッドで検出した。検出面は標高6.25mで、平面形は楕円形を呈する。長軸は60cm、深さは28cmを測る。木片が混入する柱痕跡らしき土層や礎石を確認した。土器の出土はなく時期は不明だが、近世に属するとみられる。

P30（第44図）　２区西端C2グリッドで検出した。検出面は標高5.66～5.69mで、平面形は楕円形を呈する。長軸44cm、深さ21～23cmを測り、柱痕跡を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

P33　２区北西部E3グリッドで検出した。検出面は標高6.17m、平面形は不整形である。長軸約33cm、深さは28cm程を測る。17世紀前半の唐津焼皿（第54図152）が出土した。近世の遺構である。

P43（第44図）　２区南西部B2グリッド、鞍部の上面で検出し、検出面の標高は5.73～5.75mである。平面形は楕円形を呈し、長軸78cm、深さ18～20cmを測る。土層観察から柱痕跡が確認できる。出土遺物はごく少量の土師器細片のみで、時期は不明である。

P65（第44図）　２区南西隅B2グリッドで検出した、鞍部が埋没する途中で掘削された小穴である。検出面の標高は5.69m前後で、平面形は円形を呈する。長軸約70cm、深さは30cm前後を測る。柱根や柱痕跡などは残っていなかった。出土遺物もなく時期は不明である。

P68（第31図）　２区西端D1グリッドで検出した。検出面は標高5.89mで、平面形は楕円形を呈するとみられる。長軸は約60cm、深さは約19cmを測る。柱痕跡は確認できず、SB1とは別の遺構と考えられる。少量の土師器片が出土したのみで、時期の特定には至っていない。

P86　２区中央付近D6グリッドで検出し、検出面の標高は5.91mである。平面形は方形を呈し、長軸約30cm、深さ約12～20cmを測る。奈良・平安時代の土師器甕（第54図153）が出土した。

P88（第44図）　２区中央部D6グリッドで検出した。検出面は標高5.94m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸約50cm、深さ約６～23cmを測り、西方向への抜き取り跡やその際の流入土とみられる土層を観察した。出土遺物はなく時期は不明である。

P125・126（第44図）　２区南部C7グリッドで検出し、検出面の標高は5.86～5.88m前後である。平面形は楕円形と方形を呈する。P125で長軸約25cm、深さ約17cm、P126で径約30cm、深さ約14cmを測る。柱根や明瞭な柱痕跡は確認できず、ごく少量の須恵器・土師器片が出土しているが、時期は不明である。

P159　２区南東部D8グリッドで検出した。検出面は標高6.02m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸１m前後、深さは６cm程を測る。内面が摩耗した古墳時代の土師器甕（第54図154）が出土した。

P168（第39図）　２区東端E9・10グリッドで検出した。検出面は標高6.23m前後で、平面形は不整な方形で、長軸約70cm、深さ10cm前後を測る。柱痕跡などは確認できず、覆土はSK17・18などに類似している。P168からは土師器甕（第54図155）が出土しており、古墳時代に位置付けられる。遺物の様相や年代から見て、P168は柱穴ではなく、P167やSK17・18などを含めた土坑群のうちの一つと考えられる。

P171（第41図）　２区東半D7グリッド、SI1-aで検出した。検出面は標高6.13m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸約40cm、深さ約６～17cmを測り、南方向への抜き取り跡とみられる土層を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

P172（第41図）　２区東半D7グリッド、SI1-dで検出した。検出面の標高は6.02m前後である。平面形は不整円形を呈し、径約30cm、深さ約17cmを測る。土層観察で柱痕跡を確認した。柱穴からは少量の土師器が出土しているが、小片であり時期は不明である。

P173（第41図）　２区東半E7グリッド、SI1-aで検出した。検出面の標高は6.11mで、平面形は円形を呈する。径は約25cm、深さは６～19cm程で、柱痕跡らしき土層が観察できる。出土遺物は少量の土師器片のみで、時期は不明である。

P174（第41図）　２区東半D7グリッド、SI1-aで検出し、検出面は標高6.08mである。平面形は円形を呈し、径約35cm、深さ約10cmを測る。土層観察で柱痕跡を確認した。柱穴からの出土遺物はなく時期は不明である。

P179（第41図）　２区東半D8グリッド、SI1-bで検出した。検出面の標高は6.07mで、平面形は隅丸方形を呈する。径は30cm程で、深さは12cm程を測り、柱痕跡を確認した。ごく少量の土師器片が出土したのみで、時期は不明である。

P182（第41・42図）　２区東半D7グリッド、SI1-aで検出した。検出面は標高6.07m前後で、平面形は不整方形を呈する。長軸約50cm、深さ約１～５cmを測り、柱痕跡ないし杭痕跡と思われる土層を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

P183（第41・42図）　２区東半D7グリッドで検出した。検出面は標高6.04m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸約45cm、深さ約89cmを測り、土層は斜位状に堆積している。南西方向に傾いた杭らしき木材が残存していたが、対となるような小穴は確認できなかった。出土遺物は少量の土師器細片のみだが、SD8を切ることから古墳時代後期以降に位置付けられる。

P200（第41・42図）　２区東半D7グリッドで検出した。検出面の標高は6.04mで、平面形は楕円形を呈する。一部SD14に切られており判然としないが、長軸で50cm前後、深さは６～19cm程を測る。土層観察では底面が平坦な柱痕跡が確認できる。柱穴からは少量の土師器細片のほか、須恵器蓋（第54図156）が出土した。有台坏の蓋を焼成時に上向きに据えた為に、内面に自然釉がかかる。SD8より新しくSD14より古い切り合い関係や、遺物の様相から、年代は９世紀に属すると考えられる。

P203（第41・42図）　２区東半D8グリッド、SI1-bで検出し、検出面は標高6.08mである。平面形は円形を呈し、長軸は約30cm、深さは約11cmである。柱痕跡らしき土層を確認した。SD15に切られているが、出土遺物はなく時期は不明である。

P204（第41・42図）　２区東半D8グリッド、SI1-bで検出した。検出面は標高6.06～6.08mで、平面形は楕円形を呈する。長軸は約25cm、深さは17cm程を測る。柱痕跡らしき土層が確認できるが、出土遺物はなく時期は不明である。

P205（第41・42図）　２区東半D8グリッド、SI1-cで検出し、検出面は標高6.03mである。平面形は隅丸方形で、径約30cm、深さは約22cmを測る。柱痕跡らしき土層を観察した。切り合い関係からSX11より古いことを確認したが、両遺構とも出土遺物は少量の須恵器・土師器片のみで、時期は不明である。

P206（第41・42図）　２区東半D8グリッド、SI1-cで検出し、検出面の標高は6.04mである。平面形は楕円形を呈し、長軸で約40cm、深さは19cm程を測る。柱痕跡と思われる土層が確認できるが、出土遺物はごく少量の土師器細片のみで時期は不明である。

P221（第27図）　２区南西隅の２面（鞍部底面）B2グリッドで検出した。検出面は標高5.56～5.58mで、

平面形は円形を呈する。径は約40㎝、深さは９～23㎝程を測る。出土遺物はなく時期は不明である。

P222（第27図）　２区南西隅の２面B2グリッドで検出した。検出面は標高5.46mで、平面形は不整方形を呈する。長軸で約１m、深さ約５～30㎝を測る。２層から木片が出土していることや、木片の周辺に粘性の強い暗灰黄色粘土がみられることから、柱根が腐朽した痕跡の可能性がある。出土遺物はなく時期は不明である。

８．そ　の　他

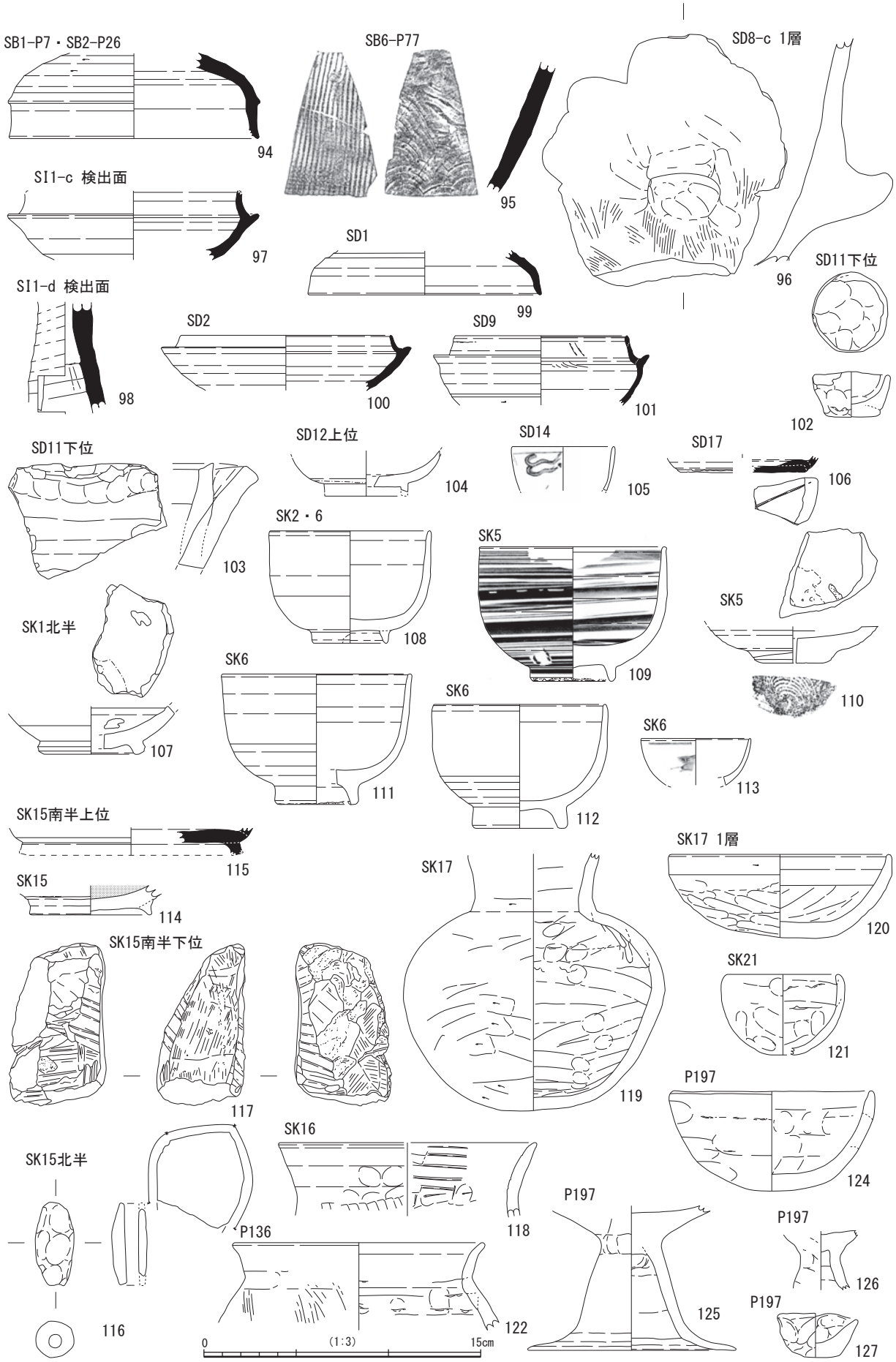
SX4（第46図）　２区北部E・F6グリッドで検出した。検出面は標高6.10～6.15m前後で、平面形は不整な方形を呈し、南西側にはSK3（近世）がある。長軸約3.8m、短軸約3.5mを測り、深さは４～17㎝程である。少量の須恵器･土師器細片のほか、染付碗（第54図157）、越前焼摺鉢（158･159）、陶器埦（160）、瓶（161）などが出土したことから、年代は近世（17世紀代）に位置付けられる。

SX6（第43図）　２区南部C・D6グリッドで検出した。検出面は標高5.88～5.93m前後で、平面形は不整な楕円形を呈し、SF2の一部である。長軸3.2m前後、短軸約1.4m、深さ約９～15㎝を測る。断面形は概ね半円状で､覆土は黒褐色である。上段部分は落ち込みに堆積した包含層の可能性がある。須恵器･土師器片が少量出土している。

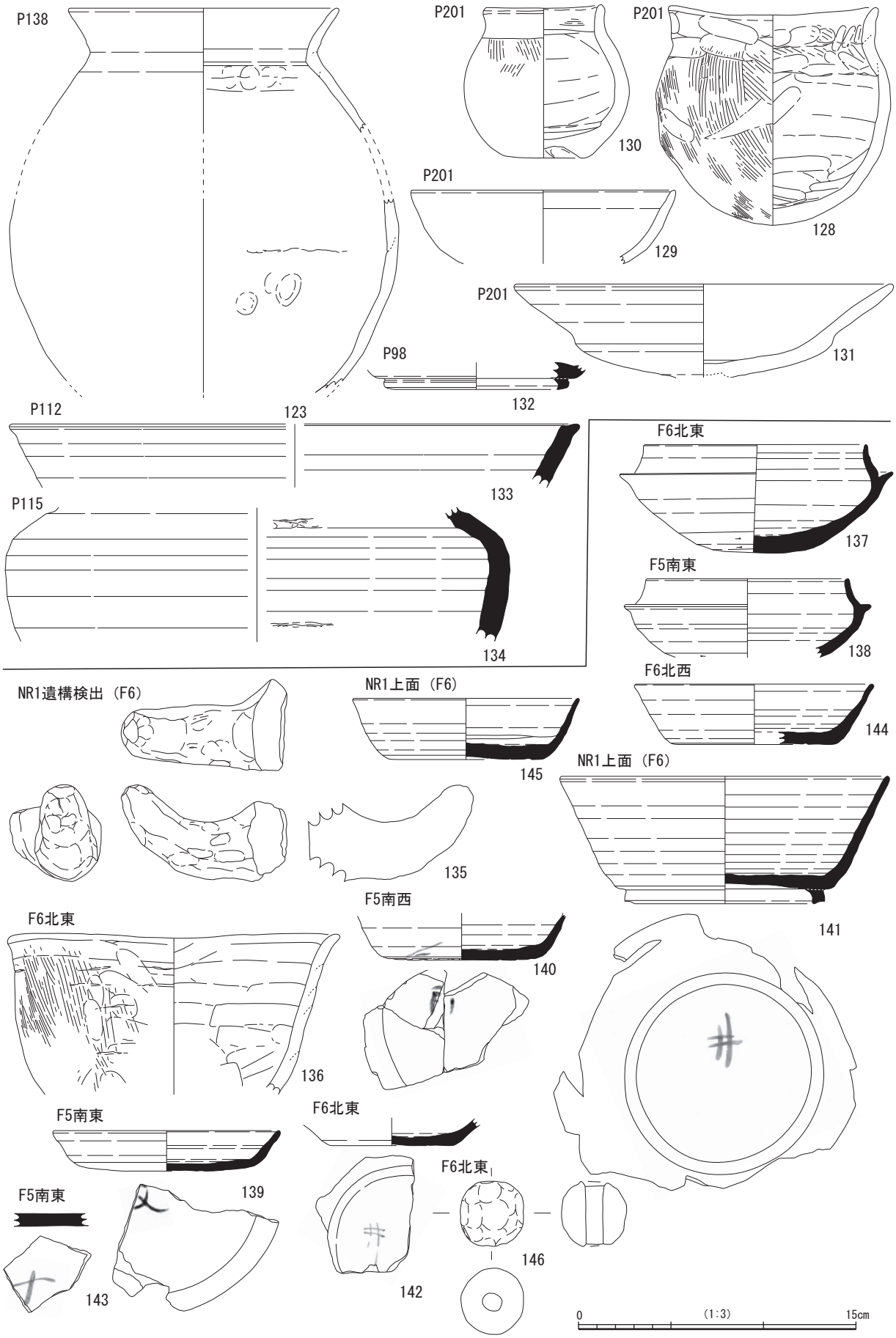
SX8（第48図）　２区中央付近D5グリッドで検出し、検出面は標高5.75～5.81m前後である。平面形は不整形で、長軸約２m、短軸約1.1m前後、深さ５～12㎝を測る。少量の土師器細片や奈良・平安時代に位置付けられる須恵器坏身（第54図162）が出土した。

SX15（第43図）　２区南部C7グリッドで検出し、検出面の標高は5.97～6.04m前後である。平面形は不整方形を呈し、長軸1.8m前後、短軸約1.3m、深さ約２～25㎝を測る。断面形は浅い逆台形状で、覆土は黒褐色である。平面では分からなかったが、土層断面の観察からSX15がSD8を切っている。出土遺物はごく少量の土師器細片のみだが、切り合い関係から古墳時代後期以降に位置付けられる。

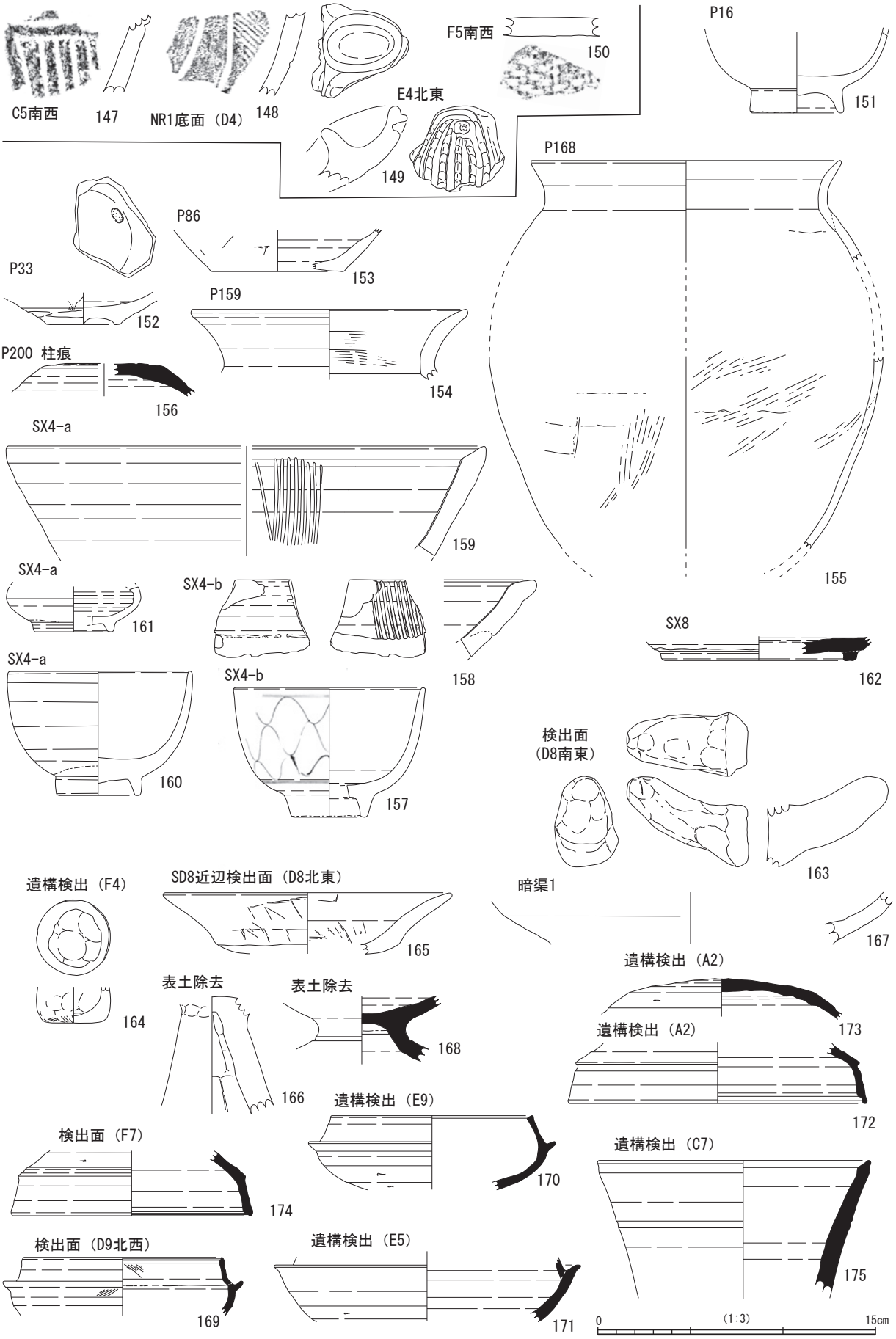
出土遺物　表土・表土除去・遺構検出・検出面・精査・壁立て・攪乱・暗渠・鞍部から出土した遺物の年代は、縄文時代～近代までと幅広い。縄文時代の遺物は、磨製石斧（231）、珪質頁岩剥片（228）、二次加工のある流紋岩剥片（230）、黒曜石製の楔形石器（229）などの石器が出土した。古墳時代の土師器では甑把手（第54図163）、手捏ねの土師器（164）、高坏（165･166･167･168）が、須恵器では坏身（169･170・171）、坏蓋（172・173・174）、瓶（175）、高坏（176・177・178・179・180・181・182・183）・瓲（184・185・186）、甕（187・188・189・190・191・192）が出土した。古代に位置付けられるものとしては須恵器の瓶（193）や壺（194）、土師器埦（195）を確認した。奈良・平安時代の遺物はいずれも須恵器で、壺（196・197）、瓶か壺（198）、瓶（199）、蓋つまみ（200）、坏蓋（201）、双耳瓶（202）が出土している。平安時代に位置付けられる遺物としては須恵器坏蓋（203）がある。中世の遺物は、青磁碗（204）、白磁碗（205）､珠洲焼摺鉢（206）を確認した。近世では､火入れ壺（第56図207）､京焼風陶器埦（208､漆継ぎ？）、肥前焼皿（209・210）、肥前焼摺鉢（213・214）、方形火鉢（第57図238・239）のほか、底板（第59図270）といった木製品や、銅銭（寛永通宝第57図271）も出土している。近代の遺物としては、磁器の碗（第56図211）や皿（212）が挙げられる。また、年代不明の砂岩製平刃用砥石（第57図237）も確認した。



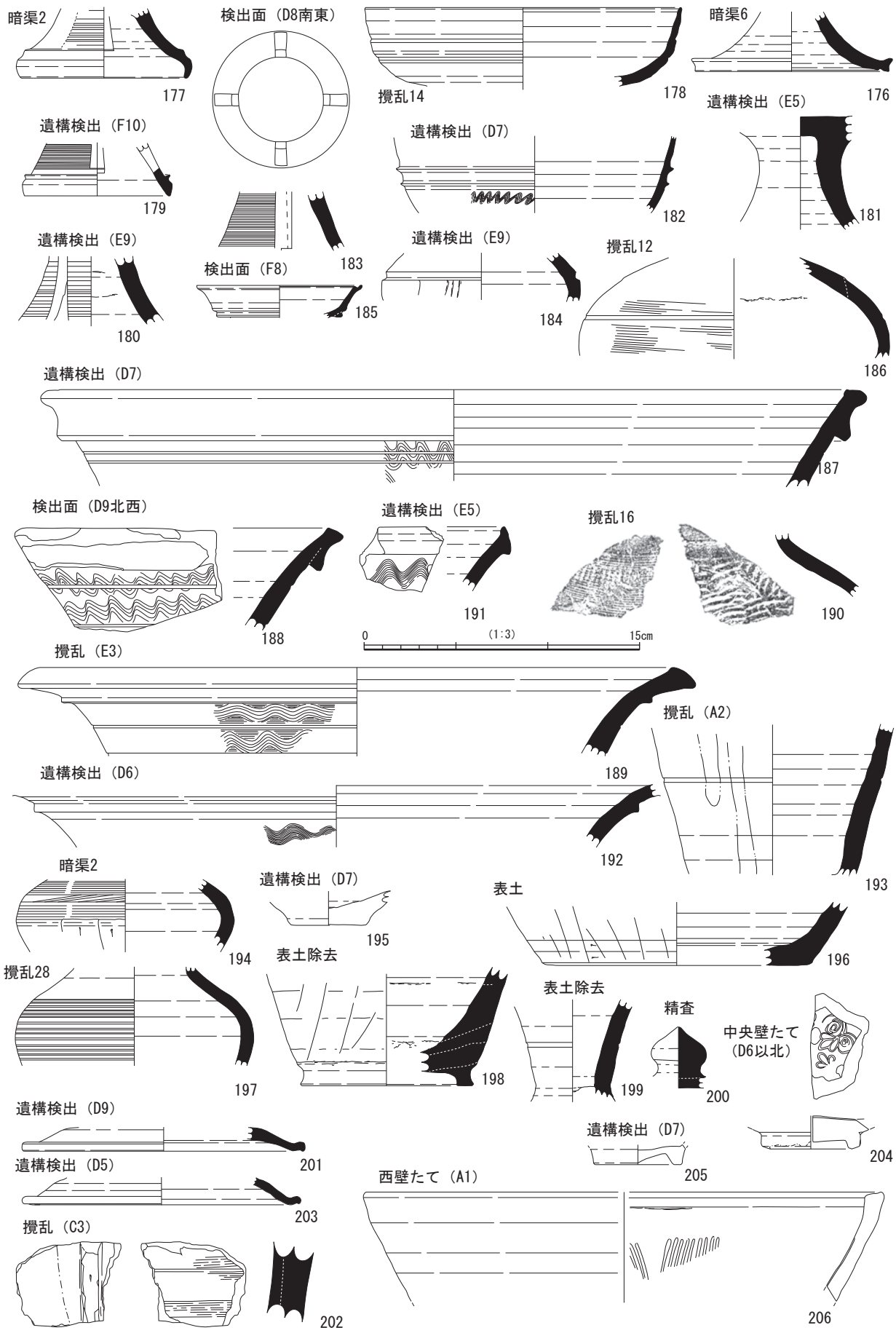
第52図　２区出土遺物１（S＝1/3）



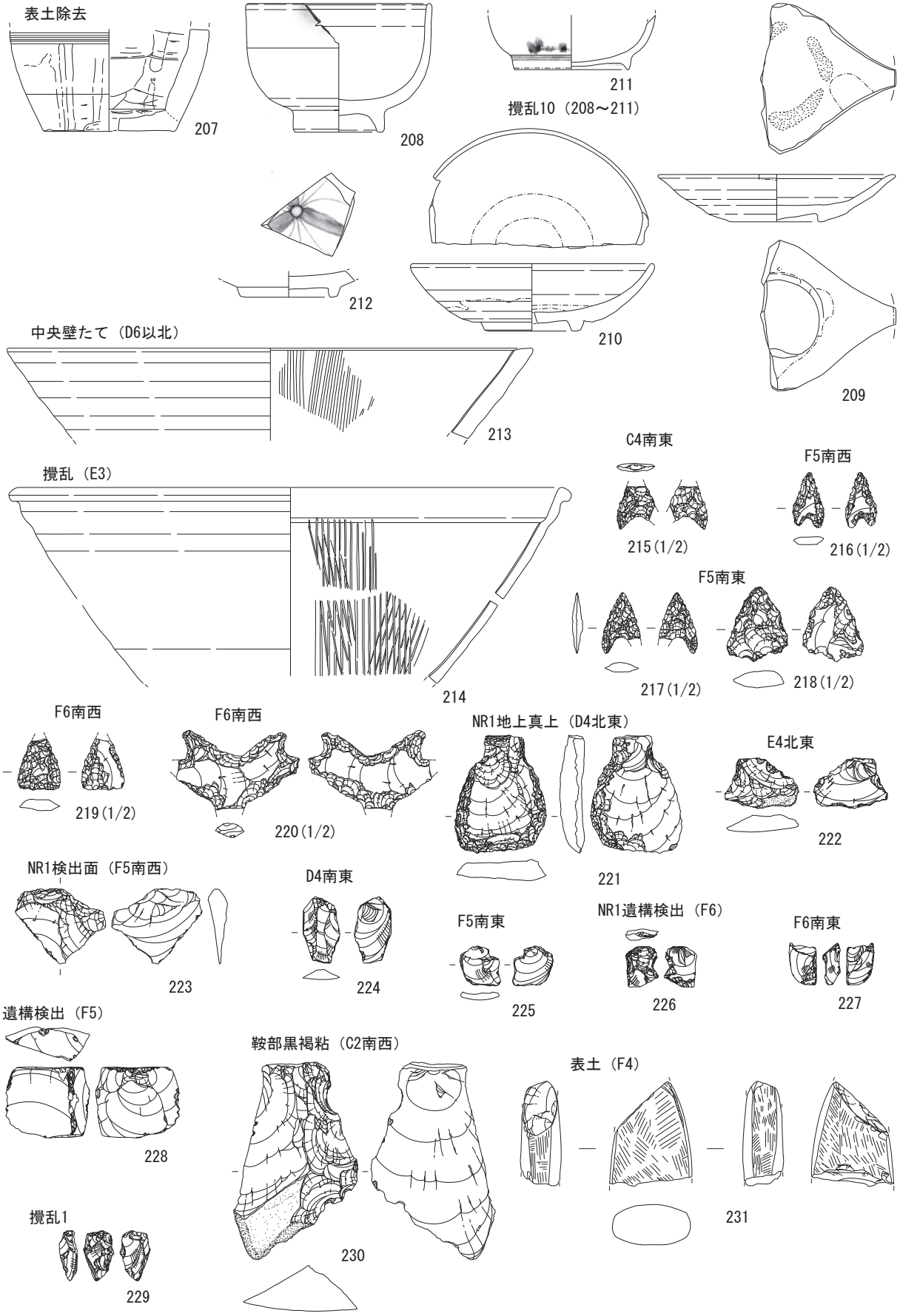
第53図　２区出土遺物２（S＝1/3）



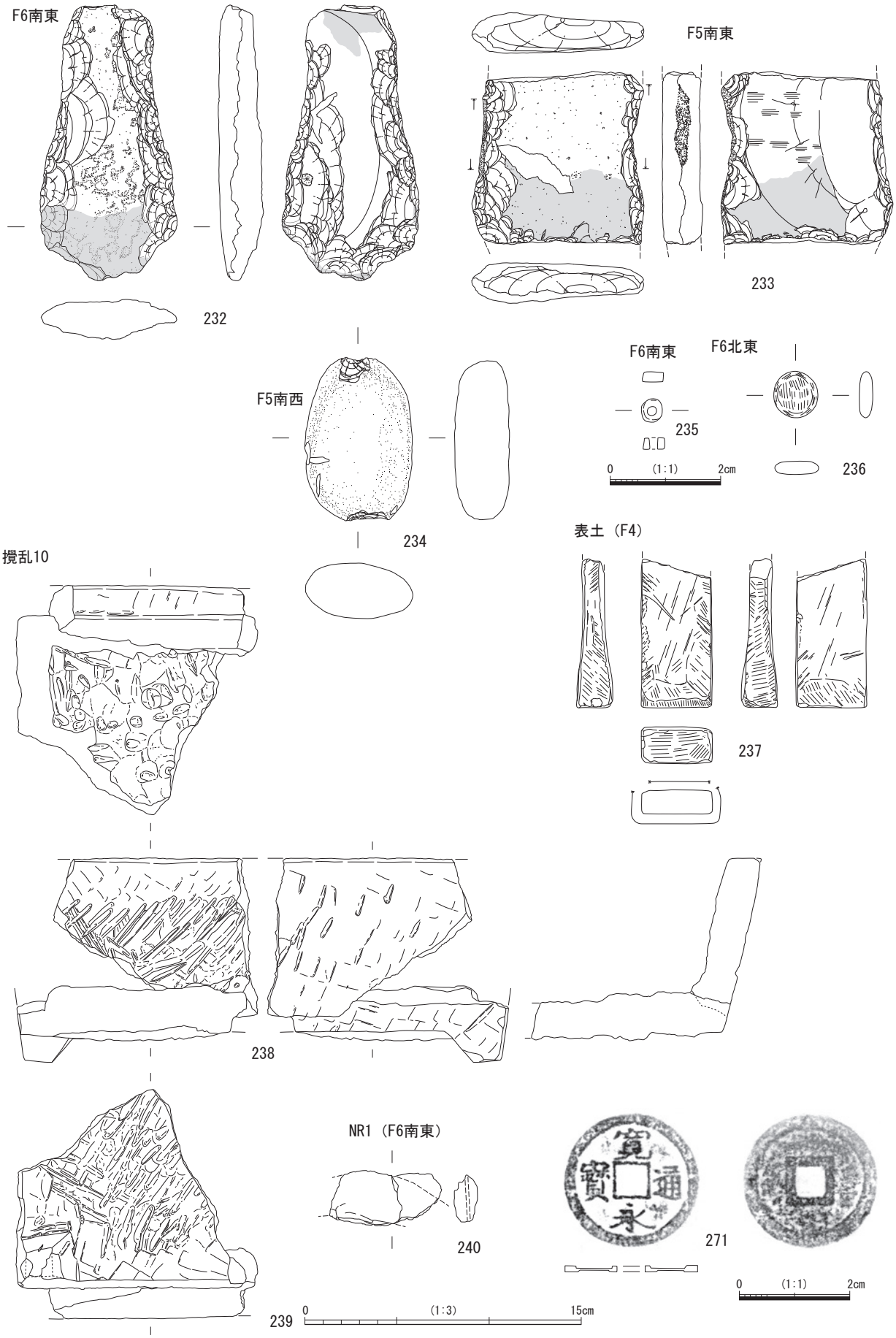
第54図　２区出土遺物３（S＝1/3）



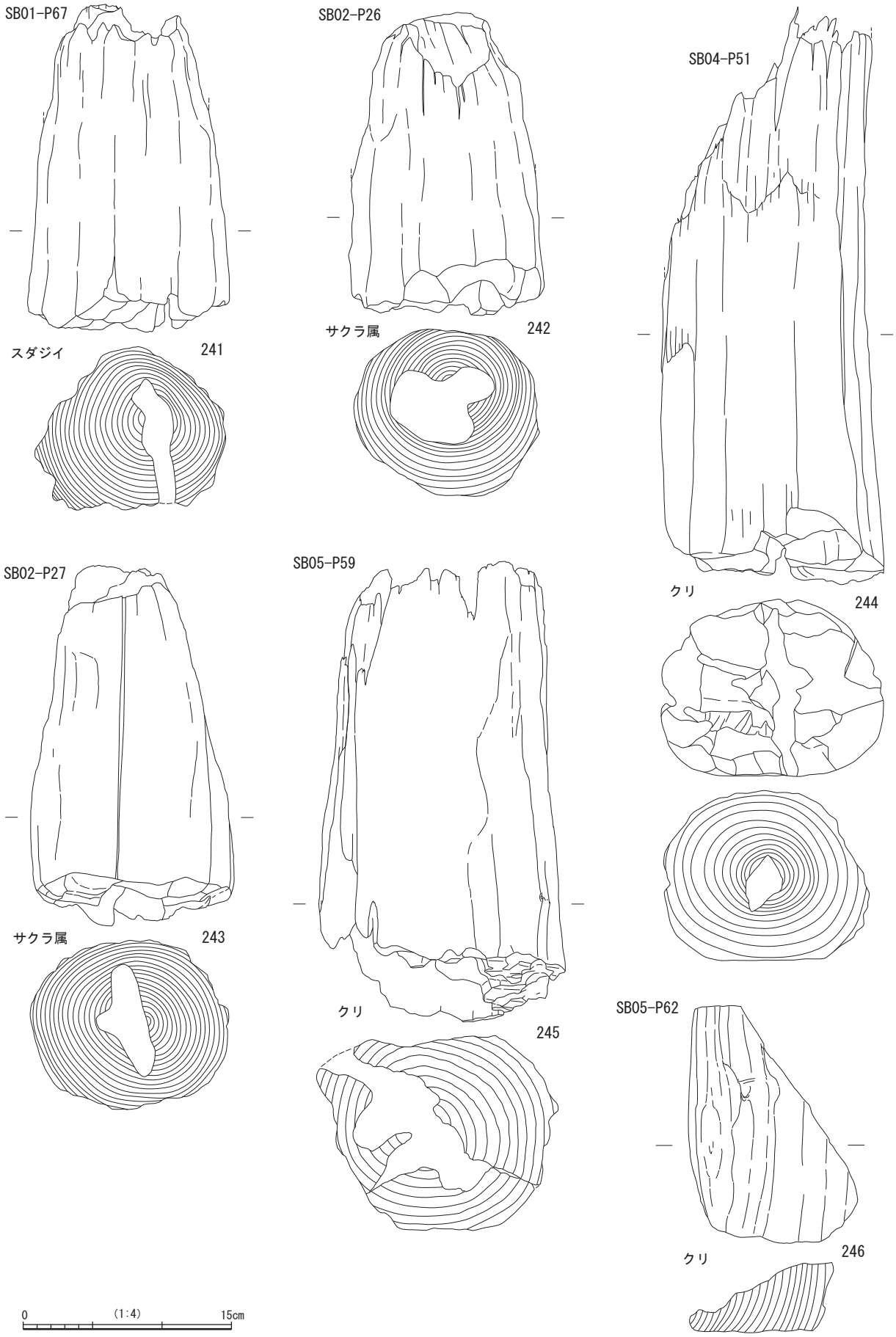
第55図　２区出土遺物４（S＝1/3）



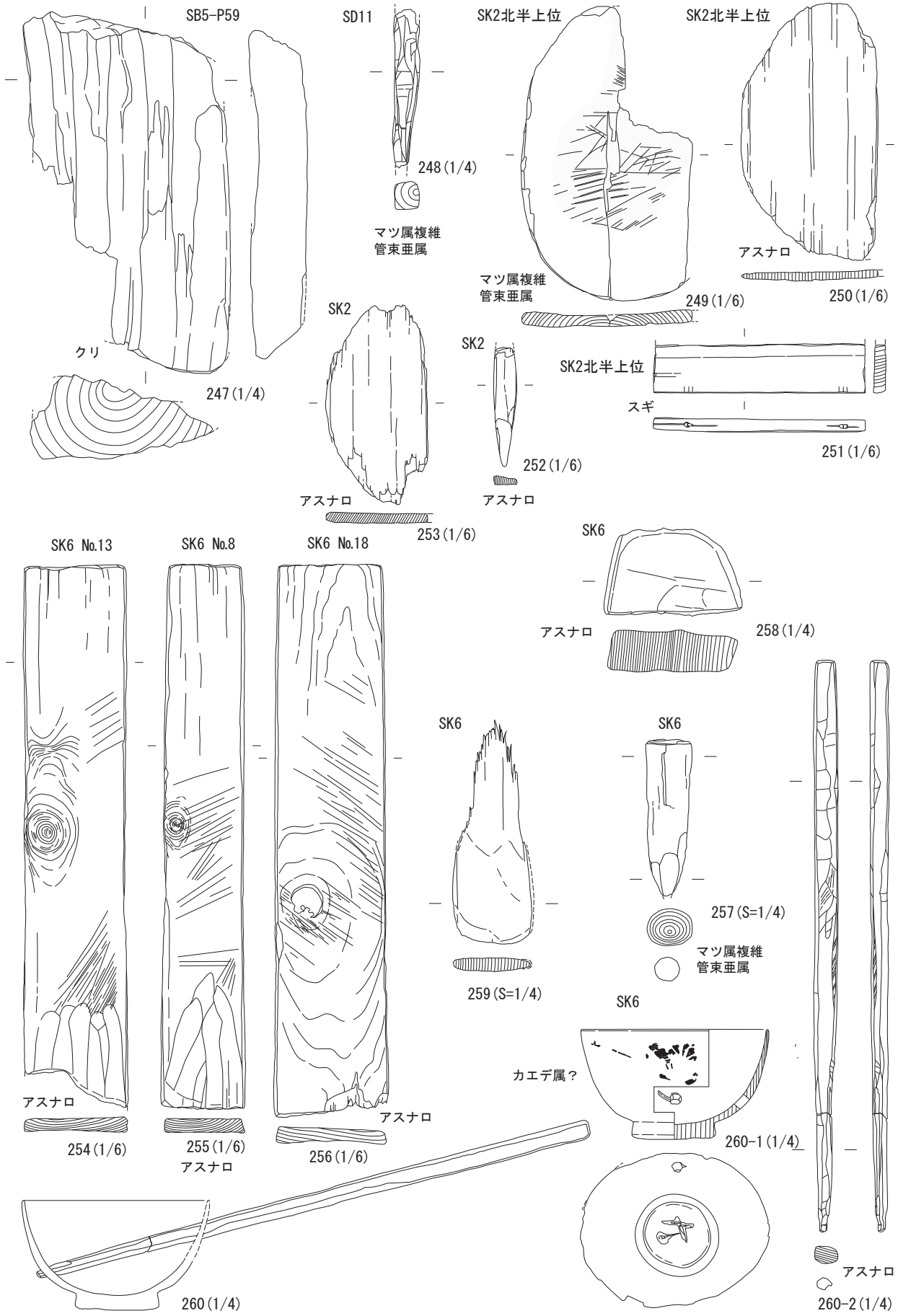
第56図　２区出土遺物５（S＝1/3・1/2）



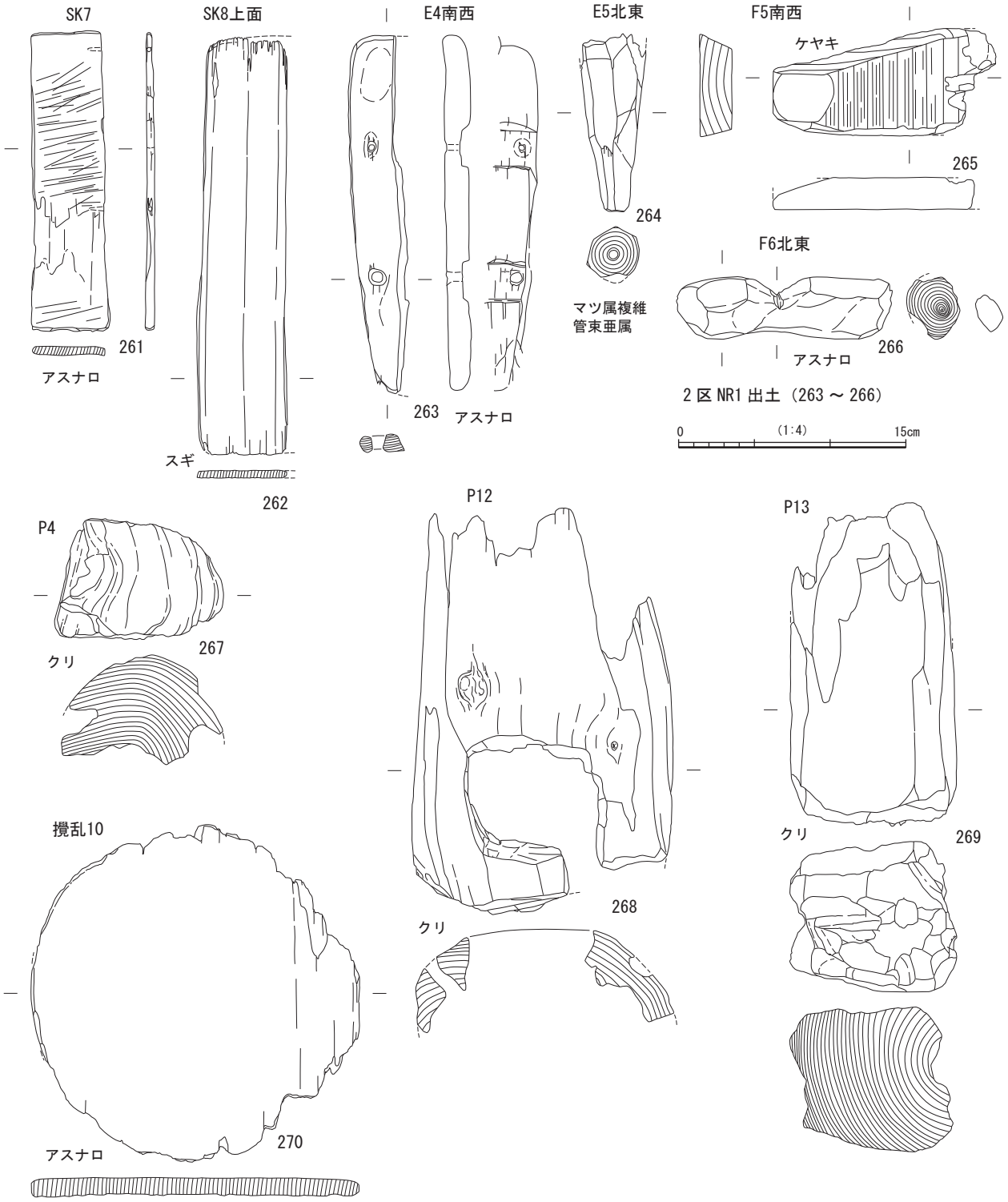
第57図　２区出土遺物６（S＝1/3：1/1）



第58図　２区出土木製品１（S＝1/4）



第59図　２区出土木製品２（S＝1/6・1/4）



第60図　２区出土木製品３（S＝1/4）

報告	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	色調(内)	色調(外)	釉調	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
94	0010	2区	D6	P7・P26柱痕	杯H蓋	(13.6)	－	(4.6)	小片	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	－	やや密・粗粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロ右回転、6C前葉
95	0100	2区	D6	SB6-P77	甕	－	－	(7.4)	－	内・外:5PB6/1青灰	中:5RP5/1紫灰	－	密・白色粒少量	良	同心円文当具	平行タタキ	
96	0004	2区	D7	SD8-c,1層	甑	－	－	(12.3)	－	10YR8/2灰白	2.5Y8/2灰白	－	密・粗粒砂やや多量	良	ナデ・ケズリ	ハケ・ナデ	外面上半剥離・外面下半黒斑・全体摩耗
97	0026	2区	D8	SI1-c検出面	杯H身	受部径:(3.7)	－	(3.7)	口:1/12	N6/灰	N6/灰	－	やや粗・粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	
98	0076	2区	D7	SI1-d検出面	高杯	－	－	(5.5)	－	N6/灰	N5/灰	－	白色粒やや多量	良	しぼり、ロクロナデ	ロクロナデ	
99	0038	2区	B2	SD1	杯H蓋	(12.7)	天径:(12.0)	(2.4)	口:1/12	N6/灰	N7/灰白	－	やや密・粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面自然釉微
100	0037	2区	D1	SD2	杯H身	受部径:(13.6)	－	(3.0)	受:1/12	N7/灰白	N7/灰白	－	密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	立上径:(11.5)
101	0036	2区	E8	SD9	杯H身	(9.4)	－	(3.7)	口:1/12	N5/灰	N6/灰	－	密・粗粒砂少量・微細な白色粒少量	良	ロクロナデ、しぼり	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロ右回転
102	0051	2区	D9	SD11下位	手づくね	(4.0)	2.0	2.3	8/12	2.5Y8/3浅黄	10YR8/3浅黄橙	－	やや密・粗粒砂少量	良	指圧痕	指圧痕・ナデ	外面に黒斑有
103	0102	2区	E9	SD11下位	加賀擂鉢	－	－	(5.7)	口:－	10Y5/4にぶい黄橙	2.5Y5/3黄橙	－	密・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ、指圧痕・縦ナデ	ロクロナデ、ナデ・指圧痕	口唇部に沈線、口縁部少し寝る
104	0035	2区	F8	SD12上位	碗	－	4.6	(2.5)	底:2/12	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白		精良・微細な黒色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロケズリ(ロクロナデ)	京焼風陶器
105	0003	2区	F8	SD14	小杯	(5.5)	－	(2.4)	口:3/12	N8/灰白	N8/灰白	透明	精良・黒色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外:染付(口)圏線1、(体)雲文
106	0034	2区	F7	SD17	杯A	－	6.8	(0.8)	底:1/12	N6/灰	N5/灰	－	密・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、底:ヘラ切り	底外:ヘラ記号「ー」
107	0039	2区	E3	SK1北半	皿	－	5.4	0.7	高台:5/12	2.5YR4/8赤褐	2.5YR4/8赤褐	灰釉	密・微細な白色粒やや多量	良	ロクロナデ・段	ロクロナデ、ロクロケズリ	砂目・肥前灰釉・17C前半
108	0042	2区	E3	SK2・6	碗	(8.7)	(4.0)	6.1	2/12	(胎)2.5Y7/2灰黄	(釉)5Y4/2灰オーブ	灰釉	やや密、黒色・白色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	
109	0005	2区	F2	SK5	碗	10.0	4.4	7.3	底:5/12	10YR3/2黒褐	10YR3/2黒褐	透明	精良	良	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	貫入・高台砂目・刷毛目文(白化粧土)・17C前半
110	0040	2区	F2	SK5	皿	－	(3.8)	(2.0)	底:6/12	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	灰釉	やや粗・細粒砂を少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り	肥前、17C前半
111	0041	2区	F4	SK6	碗	(10.2)	(3.7)	7.1	4/12	(胎)2.5Y7/2灰黄	(釉)5Y6/3オーブ黄	灰釉	精良・黒色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	京焼風・17C後半～18C前半
112	0043	2区	F4	SK6	碗	(9.4)	(4.9)	6.7	2/12	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	灰釉	精良・微細な黒色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	京焼風陶器(呉器手)。断面漆接ぎ痕ヵ。高台に？
113	0044	2区	F4	SK6	小杯	(5.9)	－	(2.5)	2/12	N8/灰白	N8/灰白	透明	密・黒色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	肥前
114	0045	2区	D8	SK15	椀	－	(6.4)	(1.6)	底:4/12	2.5YR4/1赤灰	2.5YR5/6明赤褐	－	やや粗・粗粒砂やや多量	良	ミガキヵ	ロクロナデ・糸切りヵ	内黒。全面摩耗
115	0046	2区	D8	SK15南半上位	杯B身	－	－	(1.3)	底:1/12	N6/灰	N6/灰	－	粗・白色粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	
116	0047	2-3区	D8	SK15北半	土錘	4.5	2.1	2.0	10/12	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	－	密・粗粒砂少量、細粒砂やや多量	良	－	指圧痕	孔径上7.5×6.2㎜、下7.1×6.5㎜
118	0048	2区	D9	SK16	甕	(14.4)	－	(3.7)	口:1/12	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	－	密・雲母・細粒砂少量	良	ナデ・ケズリ	横ナデ・指圧痕・ケズリ	口縁部もっと寝る
119	0006	2区	E10	SK17	丸底壺	－	－	14.0	底:12/12	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/6橙	－	精良・粗粒砂・細粒砂赤色粒少量	良	指圧痕・ケズリ	ナデ・ケズリ	全体摩耗
120	0049	2区	E10	SK17-1層	椀	(11.9)	6.0	4.5	口:5/12	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	－	密・雲母・粗粒砂少量	良	横ナデ、ケズリ・ナデ	横ナデ、ケズリ・ナデ	やや楕円か
121	0050	2区	D9	SK21	手づくね	(6.3)	(2.5)	4.4	口:1/12	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	－	やや祖・粗粒砂やや多量	良	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	
122	0021	2区	F8	P136	甕	(13.7)	－	(4.7)	頸:2/12	7.5YR7/6橙	10YR8/3浅黄橙	－	やや密・粗粒砂多量	良	口端:横ナデ、口～胴:ナデ・指圧痕	口～頸:横ナデ胴:ハケメ	全体摩耗
123	0017	2区	F7	P138	甕	(14.7)	－	(20.8)	頸:2/12	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	－	粗・粗粒砂多量	良	ナデ・指圧痕	ナデ	全体摩耗
124	0022	2区	F8	P197No.1	椀	10.7	－	5.4	口:7/12	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	－	密・粗砂少量	良	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	全体摩耗
125	0023	2区	F8	P197No.3,5	高杯	－	(11.3)	(7.9)	底:1/12	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	－	密・粗粒砂少量	良	ナデ	ナデ・指圧痕	全体摩耗
126	0025	2区	F8	P197No.4	高杯	－	－	(3.2)	脚:小片	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	－	精良・粗粒砂少量	良	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	全体摩耗
127	0024	2区	F8	P197No.2	手づくね	4.4	2.0	2.4	完形	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	－	やや祖・粗粒砂やや多量	良	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	
128	0001	2区	F7・8,G7・8	P201No.5	甕	11.4	－	11.9	口:9/12	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	－	やや粗・粗粒砂多量	良	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕・ハケメ	全体摩耗
129	0018	2区	F7・8,G7・8	P201No.1	椀	(14.3)	－	(4.0)	口:2/12	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	－	やや粗・粗粒砂少量	良	摩耗	摩耗	
130	0019	2区	F7・8,G7・8	P201No.3	小壺	6.6	4.7	8.3	完形	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	－	やや祖・粗粒砂やや多量	良	ナデ	横ナデ・ハケメ	摩耗
131	0020	2区	F7・8,G7・8	P201No.4	高杯	(20.6)	－	(5.1)	杯2/12	2.5Y8/3淡黄	10YR8/4浅黄橙	－	粗・粗粒砂多量	良	摩耗	摩耗	
132	0029	2区	D6	SF-P98	杯B身	－	(8.9)	(1.5)	底:1/12	N6/灰	N5/灰	－	やや密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
133	0028	2区	D5	SF1-P112	鉢	(30.1)	－	(3.45)	口:1/12	N7/灰白	N5/灰	－	やや密・雲母・細粒砂をやや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロ右回転
134	0027	2区	D5	SF1-P115	瓶又壺	胴径:(27.3)	－	(7.25)	肩:1/12	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	－	密・黒色粒やや多量	良	ロクロナデ・指圧痕	ロクロナデ	

第6表　2区出土遺物観察表1

報告	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	色調(内)	色調(外)	釉調	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
135	0007	2区	F6	NR1遺構検出	甑(把手)	-	-	-	-	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	やや密・粗粒砂多量	不良	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	
136	0058	2区	F6北東	NR1	甕	(18.0)	-	(8.7)	口:9/12	5YR7/6橙、7.5YR2/1黒	7.5YR7/3にぶい橙、7.5YR2/1黒	-	やや粗・細粒砂多量・粗粒砂少量	良	横ナデ・ナデ	横ナデ・ナデ・ハケメ	
137	0059	2区	F6北東	NR1	杯H身	(12.0)	3.3	(6.1)	底:完形	2.5Y8/1灰白	2.5Y6/1黄灰	-	やや粗・白色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロ右回転
138	0053	2区	F5南東	NR1	杯H身	受部径:(13.4)	-	(4.3)	口:3/12	N5/灰	N5/灰	-	密・白色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロ右回転、6C後葉、外面滑らか、立上径:(11.0)
139	0054	2区	F5南東	NR1	盤	(12.2)	(9.0)	2.2	口:2/12	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	やや粗・粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	墨書あり。重焼きⅢ類
140	0055	2区	F5南西	NR1	杯A	-	(9.0)	(2.6)	底:8/12	7.5Y8/1灰白	10Y8/1灰白	-	やや粗・粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り後ナデ	墨書底部外面・体部外面墨書
141	0057	2区	F6	NR1上面土器1-1	杯B身	(17.9)	9.6	6.9	底:完形	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	-	やや祖・粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	墨書「井、ロクロ右回転
142	0061	2区	F6北東	NR1	杯A	-	(6.6)	(1.5)	底:3/12	2.5Y7/1灰白	N8/灰白	-	やや粗・粗粒砂多量	不良	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	底部外面墨書「井□」、少し摩耗
143	0106	2区	F5南東	NR1	杯	-	-	(0.7)	底(天):-	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	-	やや祖・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	底部外面墨書「？」
144	0060	2区	F6北西	NR1	杯A	(12.8)	(8.5)	3.3	口:2/12	N6/灰	N6/灰	-	やや密・白色粒多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	体部外面に正位「十」カ。重焼きⅢ類
145	0056	2区	F6	NR1上面	杯A	(12.2)	(8.4)	3.3	5/12	N7/灰白	N6/灰	-	やや粗・粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	9C前葉～中葉、重焼きⅢ類
146	0052	2区	E5	NR1	土錘	3.5	3.4	3.6	11/12	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	やや密・粗粒砂をやや多量	良	-	指圧痕	外面に黒斑有
147	0103	2区	C5南西	NR1	深鉢	-	-	(4.4)	-	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	-	やや粗・粗砂をやや多量	不良	ナデ$_{ヵ}$	半截竹管文	全体摩耗
148	0104	2区	D4	NR1底面	深鉢	-	-	(5.3)	-	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	-	粗・白色粒多量	良	ナデ	沈線文3条・ナデ・RL縄文	
149	0105	2区	E4北東	NR1	深鉢	-	-	(4.6)	-	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/2灰白	-	やや粗・粗粒砂多量	良	ナデ	ナデ	押引沈線文、巻貝刺突文。起きる
150	0107	2区	F5南西	NR1	深鉢	-	-	(1.0)	底:-	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	やや密・粗粒砂やや多量	不良	ナデ	網代痕	
151	0014	2区	E3	P16	碗	-	5.1	(4.4)	底:6/12	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	灰釉	密・黒色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、削出高台	京焼風陶器、17C後半～18C前半
152	0015	2区	E3	P33	皿	-	(4.0)	(1.8)	高台:4/12	5Y6/2灰オリーブ	2.5Y6/2灰黄	灰釉	やや密・粗粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、削出高台	胎土目・7C前半・ロクロ右回転、肥前(唐津)
153	0011	2区	D6	P86	甕	-	(7.2)	(2.2)	底:2/12	10YR8/2灰白	7.5YR6/2灰褐	-	やや密・雲母・粗粒砂やや多	良	ロクロナデ	摩耗	全体摩耗
154	0012	2区	D8	P159	甕	(14..8)	-	(3.8)	口:1/12	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙	-	密・雲母・細粒砂少量	良	ナデ	ナデ	内面摩耗
155	0016	2区	E10	P168	甕	(16.8)	-	(21.0)	口:2/12	10YR7/2にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	-	粗・粗粒砂多量	良	ナデ	ハケメ$_{ヵ}$・ナデ	全体剝離・摩耗
156	0013	2区	D7	P200柱痕	蓋	-	-	(1.8)	底:1/12	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	-	密・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	8～9C、内面に自然釉
157	0002	2区	E・F6	SX4-b	碗	10.1	3.9	7.0	口:1/12	7.5YG8/1明緑灰	7.5YG8/1明緑灰	透明	精良・黒色粒多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	染付・網目文・2条圏線・肥前・17C後半
158	0031	2区	E・F6	SX4-b	擂鉢	-	-	(4.2)	口:1/12	7.5YR5/4にぶい褐	(胎)N7/灰白	-	密・粗粒砂少量	良	ロクロナデ・擂目8条以上/1単位	ロクロナデ	越前・17C前半
159	0101	2区	E6	SX4-a	擂鉢	(26.0)	-	(5.9)	口:1/12	2.5YRにぶい橙	2.5YR橙	-	やや密・石英・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	擂目27㎜間8条、17C・越前。少し寝る
160	0032	2区	E6	SX4-a	碗	(9.7)	4.4	6.7	口:1/12、底:10/12	(釉)10YR3/3暗褐	(胎)10YR7/4にぶい黄橙	鉄釉	密・粗粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、削出高台	口縁欠損部分に被熱有・肥前17中～後半
161	0033	2区	E6	SX4-a	瓶	-	(4.2)	(2.4)	底:3/12	(内外)2.5Y6/1黄灰	(胎)N8/灰白	透明	密・黒色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	底部被熱有り・17C
162	0030	2区	D5	SX8	杯B身	-	(10.1)	(1.3)	底:3/12	N6/灰	N5/灰	-	密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	内面少し滑らか
163	0009	2区	D8南東	検出面	甑(把手)	-	-	-	-	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	やや密・粗粒砂多量	良	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	全体摩耗
164	0068	2区	F4	遺構検出	手づくね	-	2.0	(2.0)	8/12	10YR8/3浅黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	-	やや密・細粒砂やや多量	良	指圧痕	指圧痕	摩耗
165	0075	2区	D8北東	検出面(SD08近辺)	高杯	(15.4)	-	(3.3)	口:1/12	7.5YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	密・細粒砂少量	良	横ナデ・縦ナデ	横ナデ、ナナメナデ	
166	0080	2-2区	-	表土除去	高杯	-	-	(6.4)	脚:-	7.5YR7/4にぶい橙	10YR8/3浅黄橙	-	やや密・粗粒砂をやや多量	良	横ナデ	指圧痕・ナデ$_{ヵ}$	全体摩耗
167	0097	2区	F8	暗渠1	高杯	-	-	(2.3)	-	2.5YR7/1橙	2.5Y7/1橙	-	密・白色粒少量	良	-	-	全面摩耗
168	0098	2-1区	-	表土除去	高杯	-	-	(3.7)	不明	5Y8/2灰白	10YR8/1灰白	-	密・細粒砂少量	良	ナデ	ナデ	被熱$_{ヵ}$・沈線
169	0074	2区	D9北西	検出面	杯H身	受部径(13.0)	-	(3.15)	口:1/12	N5/灰	N5/灰	-	密・黒色粒やや多量・白色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	立上径:(10.7)
170	0089	2区	E9	遺構検出	坏身	(11.0)	-	(4.0)	口:1/12	N5/灰	N5/灰	-	やや密・白色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	
171	0091	2区	E5	遺構検出	杯H身	受部径(16.6)		(3.5)	口:5/12	N8/灰白	N6/灰	-	やや密・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	
172	0071	2区	A2	遺構検出	杯H蓋	(16.0)	-	(3.2)	1/12	N7/1灰白	N6/灰	-	密・黒色白色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
173	0072	2区	A2	遺構検出	杯H蓋	-	-	(2.2)	3/12	N6/灰	N7/灰	-	やや粗・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	
174	0073	2区	F7	検出面	杯H蓋	(13.0)	-	(3.3)	口:1/12	N6/灰	7.5Y3/2オリーブ黒	-	密・白色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロケズリ・ロクロナデ	外面に自然釉

第7表　2区出土遺物観察表2

第8表　2区出土遺物観察表3

報告	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	色調(内)	色調(外)	釉調	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
175	0069	2区	C7	遺構検出	瓶	(14.6)	－	(7.5)	口:1/6	2.5GY5/1	7.5Y2/2オリーブ黒	－	やや密・黒色・白色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
176	0077	2区	E8	暗渠6	高杯	－	(10.5)	(3.25)	脚:3/12	N5/灰	N6/灰	－	やや密・白色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
177	0078	2区	E10	暗渠2	高杯	－	(8.9)	(3.8)	脚:3/12	N7/灰白	N6/灰	－	密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	
178	0084	2区	C2	撹乱14	高杯	(17.2)	－	(4.3)	1/12	N6/灰	N2/黒	－	密・黒色粒やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	
179	0086	2区	F10	遺構検出	高杯	－	(8.0)	(2.9)	底:2/12	N8/灰白	N8/灰白	－	密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	
180	0088	2区	E9	遺構検出	高杯	－	－	(3.8)	－	N6/灰	7.5Y7/1灰白	－	やや粗・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	透し3箇所
181	0090	2区	E5	遺構検出	高杯	－	－	(6.2)	－	5B7/1明青灰	5B6/1青灰	－	やや粗・白色粒多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
182	0110	2区	D7	遺構検出	高杯	－	－	(4.2)	－	N6/灰	N7/灰	－	密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	波状文、突帯2条
183	0113	2区	D8南東	検出面	高杯	－	－	(3.2)	－	N6/灰	N5/灰	－	やや粗・細粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	透し4箇所で復元
184	0087	2区	E9	遺構検出	瓏	－	－	(2.7)	－	N7/灰白	N7/灰白	－	密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	凹線
185	0095	2区	F8	検出面	瓏	(9.0)	－	(1.7)	口:9/12	5PB7/1明青灰	5PB7/1明青灰	－	密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
186	0117	2区	C3	撹乱12	瓏	最大幅(17.0)	－	(5.3)	－	N7/灰白	2.5GY6/1オリーブ灰	－	粗・粗粒砂多量	良	ナデ	ナデ	内外面に自然釉・降灰・凹線
187	0093	2区	D7	遺構検出	甕	(42.8)	－	(5.3)	口:1/12	N7/灰白	N6/灰	－	やや密・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	波状文
188	0108	2区	D9北西	検出面	甕	－	－	(5.6)	1/12以下	2.5Y7/1灰白	2.5Y8/1灰白	－	やや密・黒色白色粒やや多量	不良	ナデ	ナデ	沈線2条、波状文2条
189	0115	2区	E3	撹乱	甕	(34.3)	－	(5.1)	1/12以下	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/1灰黄	－	やや密・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	突帯・波状文2条
190	0118	2区	C2	撹乱16	甕	－	－	(3.4)	－	5B7/1明青灰	5B7/1明青灰	－	やや粗・粗粒・白色粒やや多量	良	ロクロナデ・同心円状当具痕	ロクロナデ・カキメ・刺突列	
191	0119	2区	E5	遺構検出	甕	－	－	(3.5)	1/12以下	N3/暗灰	N7/灰白	－	密・白色粒少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	波状文
192	0120	2区	D6	遺構検出	甕	－	－	(3.4)	－	N5/灰	2.5GY4/暗オリーブ	－	やや密・細粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	波状文
193	0085	2区	A2	撹乱	瓶	－	－	(8.2)	－	N6/灰	(釉)5GY2/1オリーブ黒	－	やや粗・粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	胴部外面:凹線
194	0096	2区	E10	暗渠2	壺	最大幅:(15.2)	－	(3.95)		10Y7/1灰白	10Y6/1灰	－	やや密・白色粒をやや多量	良	ロクロナデ	カキメ、縦ケズリ	内面:赤色顔料付着
195	0094	2区	D7	遺構検出	椀	－	4.2	(1.8)	底:12/12	2.5YR7/3淡赤橙	7.5Y8/4浅黄橙	－	やや密・粗粒砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、糸切り	摩耗
196	0081	2区	－	表土	壺	－	(14.8)	(3.45)	底:4/12	N5/灰	N8/灰白	－	やや粗・粗粒砂多量	良	横ナデ	縦ナデ・ケズリ→縦ナデ	
197	0116	2区	D9	撹乱28	壺	－	－	(5.4)	－	5Y6/1灰	(釉)5Y4/2灰オリーブ	－	やや粗・粗粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	
198	0079	2-1区	－	表土除去	瓶又壺	－	(9.3)	(6.1)	底:1/12	N7/灰白	N5/灰	－	やや密・白色粒を含む	良	横ナデ	胴:横ナデ後縦ナデ、高台:横ナデ	内底面に降灰
199	0082	2-1区	－	表土除去	瓶	－	d	(6.6)	頸:－	N7/灰白	N7/灰白	－	粗・粗砂多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	外面凹線1条
200	0083	2区	－	精査	壺蓋	－	－	(3.3)	つまみ:12/12	N7/灰白	N7/灰白	－	密・粗粒砂やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	7～8C
201	0092	2区	D9	遺構検出	杯B蓋	(15.4)	－	(1.3)	口:1/12	N6/灰	N7/灰	－	やや粗・白色粒多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
202	0099	－	C3	撹乱	双耳瓶	－	－	(4.2)	－	N7/灰白	N8/灰白	－	やや密・粗粒砂やや多量	良	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	
203	0070	2区	D5	遺構検出	杯B蓋	(15.0)	－	(2.0)	1/12	N5/灰	N6/灰	－	粗・白色粒を多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
204	0008	2区	D6以北	中央壁たて	青磁碗	－	(4.4)	(1.8)	底:6/12	(釉)10Y6/2オリーブ灰	(胎土)N8/灰白	青磁	精良・黒色粒をやや多量	良	線刻花文	ケズリ・削出高台	
205	0111	2区	D7	遺構検出	碗	－	(4.6)	(1.1)	底:1/12	7.5Y6/2灰オリーブ	2.5GY8/1灰白	白磁	やや密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロケズリ	12C後
206	0114	2区	A1	西壁たて	擂鉢	(28.4)	－	(6.0)	1/12以下	10Y3/1オリーブ黒	10Y3/1オリーブ黒	－	粗・粗粒砂多量	良	ロクロナデ・擂目	ロクロナデ	13～14C・珠洲
207	0062	2-2区	－	表土除去	瓶類	－	(6.8)	(5.5)	底:3/12	(胎)10YR7/2にぶい黄橙	(釉)10YR8/1灰白	灰釉	やや密・細粒砂少量	不良	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ・ナデ	内面:煤付着・釉だれ、外面:沈線3条以上　17C
208	0063	2区	E3	撹乱10	碗	(9.7)	(4.6)	6.9	2/12	(胎)2.5Y8/2灰白	(釉)2.5Y8/4淡黄	灰釉	やや粗・白色粒少量・微細な気泡状	良	ロクロナデ	クロナデ、ロクロケズリ	油・煤つぎか、京焼風陶器
209	0064	2区	E3	撹乱10	皿	(12.6)	(5.1)	7.5	底:6/12	10Y5/2オリーブ灰	5YR4/2灰褐	灰釉	やや粗・細粒砂・やや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	肥前・砂目
210	0067	2区	E3	撹乱10	皿	(12.9)	4.8	(3.6)	5/12	2.5Y8/3淡黄	10YR7/4にぶい黄橙	灰釉	やや密・細粒砂を少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	内面見込:蛇の目釉剥ぎ・肥前、18C前半
211	0065	2区	E3	撹乱10	碗	－	(6.1)	(2.9)	底:3/12	N8/灰白	N8/灰白	透明	精良・黒色粒をやや多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、削出高台	肥前17C後半～18世紀前半
212	0066	2区	E3	撹乱10	皿	－	(4.8)	(1.4)	底:3/12	N8/灰白	N8/灰白	透明	密・黒色粒多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ、削出高台	初期伊万里、17C中
213	0112	2区	D6以北	中央壁たて	擂鉢	(28.6)	－	(4.9)	1/12	10YR6/4にぶい黄褐	10YR5/1褐灰	－	やや密・粗粒砂少量	不良	ロクロナデ	ロクロナデ	17C・越前。23mm中9本の卸目
214	0109	2区	E3	撹乱	擂鉢	(30.2)	－	(10.5)	1/12	7.5YR4/2灰褐	7.5YR4/2灰褐	－	密・細粒砂少量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	肥前、17C前半

第9表　2区出土石製品観察表

報告番号	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	長(cm)	幅(cm)	厚・高(cm)	重量(g)	石材	備考
117	0142	2区	D9	SK15南半下位	砥石	(8.8)	5.25	4.8	(257)	凝灰岩	金属製刃物用。切断痕。
215	0123	2区	C4南東	NR1	石鏃	(1.3)	(1.2)	0.3	(0.5)	凝灰岩	先端部欠損、脚部欠損
216	0126	2区	F5南西	NR1	石鏃	1.6	1.1	0.4	0.7	ガラス質安山岩	
217	0124	2区	F5南東	NR1	石鏃	1.6	(1.3)	0.3	(0.6)	下呂石	脚部欠損(裏面から)
218	0125	2区	F5南東	NR1	石鏃	2.6	2.1	0.6	(3.2)	凝灰岩	全体的に稜が摩滅
219	0127	2区	F6南西	NR1	石鏃	(1.8)	1.5	0.4	(1.3)	珪質頁岩	先端部欠損(裏面から)
220	0128	2区	F6南西	NR1	石錐	(2.3)	(4.3)	0.8	(7.3)	流紋岩	先端部欠損(両極から)
221	0129	2区	D4北東	NR1地上真上	石匙	6.2	4.8	1.2	40.3	凝灰岩	
222	0130	2区	E4北東	NR1	剥片	2.7	3.9	1.0	9.9	凝灰岩	自然面：有
223	0131	2区	F5南西	NR1検出面	剥片	4.0	4.7	1.0	12.0	ガラス質安山岩	
224	0133	2区	D4南東	NR1	剥片	3.4	2.0	0.6	3.6	黒曜石	縁辺に微細剥離あり
225	0134	2区	F5南東	NR1	剥片	2.1	2.1	0.5	2.1	黒曜石	全体的に風化が顕著
226	0135	2区	F6	NR1遺構検出	剥片	2.1	1.7	0.6	2.1	黒曜石	縁辺に微細剥離あり
227	0136	2区	F6南東	NR1	剥片	2.0	1.4	0.9	2.8	黒曜石	他の黒曜石より表面に細かいキズ多い
228	0132	2区	F5	遺構検出	剥片	3.8	4.5	1.8	24.5	珪質頁岩	全体的に風化が顕著。65と同じ石材
229	0138	2区	E1	撹乱1	楔形石器	2.6	1.6	1.0	3.5	黒曜石	
230	0137	2区	C2南西	鞍部黒褐粘	剥片	10.2	6.2	2.5	133.8	流紋岩	自然面：有(亜角礫)
231	0144	2区	F4	表土	磨製石斧	(5.6)	(4.4)	(7.3)	(73)		
232	0121	2区	F6南東	NR1	打製石斧	14.9	7.4	2.4	280.7	凝灰岩	自然面有(層状素材)。刃部・基部の一部に使用の磨耗
233	0122	2区	F5南東	NR1	打製石斧	(9.3)	9.3	2.2	(283.1)	流紋岩	自然面有(層状素材)。刃部・基部欠損、側面敲打調整
234	0141	2区	F5南西	NR1	石錘	8.5	5.8	2.9	207	凝灰岩	
235	0145	2区	F6南東	NR1玉1	臼玉	0.4	0.4	0.2	0.1g以下	滑石	
236	0146	2区	F6北東	NR1	碁石	2.5	2.4	0.7	7.1	石英	
237	0143	2区	F4	表土	砥石	(8.1)	3.35	2.0	(76.6)	細粒砂岩	平刃用砥石･裏面からの破損
238・239	0139・0140	2区	E3	撹乱10	方形火鉢	(26.7)	(25.6)	22.2	(5160)	凝灰岩	内面上半に煤付着。内外面に小割痕と仕上げ整形痕(平刃)
240	0272	2区	F6gr南東	NR1	鎌	(4.0)	(8.1)	2.7			
271	0273	1区	A2gr北西	鞍部　黒褐粘(褐)	銅銭	a 24,6mm b 24,5mm c 20.5mm d 20.5mm e 5.2mm f 5.0mm					寛永通宝

報告番号	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚・高(cm)	樹種	木取り	時期	備考
241	0234	2区	D1gr	SB1-P67		(23.6)	14.6	11,75	スダジイ	芯持丸木	古墳	
242	0233	2区	C2gr	SB2-P26		(21.8)	(14.2)	(12.2)	サクラ属	芯持丸木	古墳	
243	0235	2区	C2gr	SB2-P27		26.0	14.7	12.3	サクラ属	芯持丸木	古墳	
244	0250	2区	C2gr	SB-4P51		(41,6)	(16.1)	(12.2)	クリ	芯持丸木	古墳	
245	0251	2区	B2gr	SB5-P59		(33.2)	(17.9)	(15.0)	クリ	芯持丸木	古墳	
246	0243	2区	B3gr	SB5-P62		12.9	9.2	3.9	クリ	割れ	古墳	
247	0249	2区	B2gr	SB5-P59礎板下		26.5	14.7	6.8	クリ	板目	古墳	
248	0237	2区	E9gr	SD11		(11.6)	2.0	2.5	マツ属複維管束亜属	芯去削出	中・近世	
249	0252	2区	E3gr	SK2北半上位	底板	32.4	19.0	1.9	マツ属複維管束亜属	板目	近世	炭化あり　表、裏面とも炭化部分に擦痕残る
250	0257	2区	E3gr	SK2北半上位	曲物底板	(28.3)	(15.1)	1.35	アスナロ	柾目	近世	
251	0253	2区	E3gr	SK2北半上位	指物	5.4	23.2	1.4	スギ	板目	近世	接合用孔2つあり
252	0254	2区	E3gr	SK2	(13.2)	(13.2)	2.6	1.0	アスナロ	みかん割り	近世	
253	0255	2区	E3gr	SK2	(21.95)	(21.95)	(11.25)	1.2	アスナロ	板目	近世	
254	0258	2区	F4gr	SK6　No.13	(59.8)	(59.8)	12.0	1.7	アスナロ	板目	近世	
255	0259	2区	F4gr	SK6　No.8	60.0	60.0	9.4	1.6	アスナロ	板目	近世	
256	0260	2区	F4gr	SK6　No.18	60.8	60.8	12.7	1,9	アスナロ	板目	近世	鋸痕あり
257	0246	2区	F4gr	SK6	(11.5)	(11.5)	3.4	2.7	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	近世	
258	0261	2区	F4gr	SK6　No.21の下	5.6	5.6	10.1	3.15	アスナロ	芯去削出	近世	
259	0262	2区	F4gr	SK6	(16.5)	(16.5)	5.8	1.0			近世	
260	0241-3	2区	F4gr	Sk6	(41.7)	(41.7)	(13.6)	(14.0)			近世	合成予想図
260-1	0241-1	2区	F4gr	SK6	口径 (13.6)	(13.6)	6.1	8,1	カエデ属？	横木取り	近世	孔1か所。底部 ロクロ爪痕3か所。 残存 口縁1/12 底12/12 。総黒色、外面に赤漆絵(花文？)
260-2	0241-2	2区	F4gr	SK6	41.95	41.95	1.8	1.4	アスナロ	芯去削出	近世	コゲあり
261	0247	2区	F3gr	SK7	19,8	19,8	5,2	0.6	アスナロ	柾目	近世	側面に孔2つあり
262	0248	2区	E6gr	SK8上面	27.6	27.6	6.0	0.5	スギ	柾目	近世	
263	0236	2区	E4gr	NR1南西	(23.6)	(23.6)	(4.1)	1.9	アスナロ	板目	近世	転用か
264	0238	2区	E5gr	NR1北東	(11.8)	(11.8)	(4.3)	(3.3)	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	近世	
265	0239	2区	F5gr	NR1南西	(14.7)	(14.7)	7.1	2.1	ケヤキ	板目	近世	鋸か　擦痕あり
266	0240	2区	F6gr	NR1北東	4.2	4.2	14.2	3.5	アスナロ	柾目	近世	
267	0242	2区	E2gr	P4	(8.0)	(8.0)	(11.2)	(7.3)	クリ	割れ	近世	
268	0244	2区	F2gr	P12	(26.8)	(26.8)	17.3	(8.5)	クリ	割れ	近世	
269	0245	2区	F2gr	P13	(21.4)	(21.4)	10.0	9.6	クリ	芯去削出	近世	
270	0256	2区	D3gr	カクラン10	(22.3)	(22.3)	(21.1)	1.3	アスナロ	柾目	近世	

第10表　2区出土木製品観察表

第５章　自然科学的分析

第１節　花　粉　分　析

１．は　じ　め　に

大菅波コショウズワリ遺跡において、古植生を検討するために花粉分析用の試料が採取された。以下では、試料の花粉分析結果を示し、遺跡周辺の古植生について推定した。

試料No.	遺構	岩　　質
1	NR1	黒褐色(10YR3/1)シルト
2		黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土
3		黒褐色(2.5Y3/1)砂質粘土
4		黒褐色(2.5Y3/1)粘土
5		黒褐色(10YR3/1.5)シルト質粘土

第11表　分析試料一覧表

２．試 料 と 方 法

分析試料は、NR1(自然河道)から採取された５試料である(第11表)。これらの試料から、次の手順で花粉分析を実施した。

試料(湿重量約３～４g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。

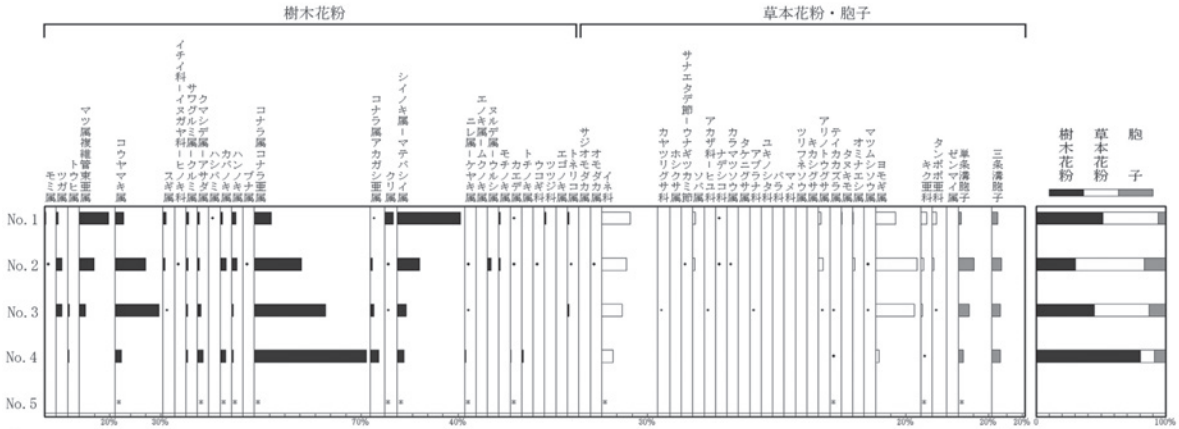
３．結　　果

産出花粉・胞子の一覧を第12表に、花粉分布図を第61図に示した。分布図において樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。No.5については、含まれる花粉化石の含有量が少なかったため、分布図では産出した分類群を＊で表示するにとどめた。図および表においてハイフン(－)で結んだ分類群

学　　名	和　　名	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5
樹木						
Abies	モミ属	2	1	－	－	－
Tsuga	ツガ属	1	8	3	－	－
Picea	トウヒ属	－	－	2	1	－
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	5	－	8	－	－
Sciadopitys	コウヤマキ属	1	2	2	2	3
Cryptomeria	スギ属	－	－	1	－	－
Taxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	－	1	－	－	－
Pterocarya－Juglans	サワグルミ属－クルミ属	－	3	2	2	－
Carpinus－Ostrya	クマシデ属－アサダ属	3	－	5	2	2
Corylus	ハシバミ属	1	－	－	－	－
Betula	カバノキ属	3	－		7	1
Alnus	ハンノキ属	－	7	2	2	2
Fagus	ブナ属	－	1	－	－	－
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1	2	1	1	－
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1	3	5	2	－
Castanea	クリ属	1	1	1	－	1
Castanopsis－Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	－	－	1	1	3
Ulmus－Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	－	1	1	2	1
Celtis－Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	－	－	－	1	－
Rhus－Toxicodendron	ヌルデ属－ウルシ属	－	5	－	－	－
Ilex	モチノキ属	2	2	－	－	－
Acer	カエデ属	1	1	－	1	1
Aesculus	トチノキ属	－	－	－	2	－
Araliaceae	ウコギ科	－	1	－	－	－
Ericaceae	ツツジ科	2	－	－	－	－
Styrax	エゴノキ属	－	－	－	－	1
Fraxinus	トネリコ属	2	1	2	－	－
草本						
Alisma	サジオモダカ属	－	－	1	－	－
Sagittaria	オモダカ属	－	1	－	－	－
Gramineae	イネ科	1	3	2	－	10
Cyperaceae	カヤツリグサ科	－	－	1	－	－
Eriocaulon	ホシクサ属	－	－	－	1	－
Moraceae	クワ科	－	－	2	－	－
Polygonum sect. Persicaria－Echinocaulon	サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	3	－	－	－
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	－	－	1	－	－
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	1	－	－	－
Thalictrum	カラマツソウ属	－	1	－	－	－
Ranunculaceae	キンポウゲ科	－	－	－	1	－
Macleaya	タケニグサ属	－	－	－	1	－
Brassicaceae	アブラナ科	－	－	1	－	－
Saxifragaceae	ユキノシタ科	－	－	－	2	－
Rosaceae	バラ科	－	－	3	－	－
Leguminosae	マメ科	－	1	－	－	－
Impatiens	ツリフネソウ属	－	－	1	－	－
Rotala	キカシグサ属	－	－	－	1	－
Haloragis	アリノトウグサ属	6	－	1	－	－
Apiaceae	セリ科	－	－	1	－	－
Trachelospermum	テイカカズラ属	－	－	－	1	1
Utricularia	タヌキモ属	2	－	－	－	－
Patrinia	オミナエシ属	2	1	－	－	－
Scabiosa	マツムシソウ属	－	1	1	－	－
Artemisia	ヨモギ属	2	1	－	6	－
Tubuliflorae	キク亜科	－	1	－	1	1
Liguliflorae	タンポポ亜科	1	－	2	－	－
シダ植物						
Osmunda	ゼンマイ属	－	－	－	－	－
monolate type spore	単条溝胞子	1	2	－	8	4
trilate type spore	三条溝胞子	2	1	－	14	－
Arboreal pollen	樹木花粉	26	40	36	26	15
Nonarboreal pollen	草本花粉	15	14	17	14	12
Spores	シダ植物胞子	3	3	0	22	4
Total Pollen＆Spores	花粉・胞子総数	44	57	53	62	31
Unknown pollen	不明花粉	10	4	－	2	－

第12表　産出花粉化石一覧表

は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科やユキノシタ科、バラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。



第61図　大菅波コショウズワリ遺跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で産出した。
＊は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。

樹木花粉では、マツ属複維管束亜属やコウヤマキ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属−マテバシイ属の産出が目立つ。マツ属複維管束亜属はNo.4とNo.5では産出が見られないが、No.1，２，３の層準で上位層に向かって産出率が増加しており、４％〜19%の産出率を示す。コウヤマキ属はNo.4とNo.5では産出が少ないが、No.3で29%の産出率を示し、上位層に向かって減少している。コナラ属コナラ亜属はNo.4で74%と最も高い産出率を示すが、上位層に向かって減少している。シイノキ属−マテバシイ属はNo.2〜No.4で５％〜15%の産出率を示して微増しており、No.1になると42%の産出率を示し、急増する。草本花粉では、イネ科とヨモギ属の産出が目立つ。イネ科は８％〜19%の産出率で、上位層に向かって微増している。ヨモギ属はNo.4で２％の産出率にとどまるが、No.3になると26%と急増し、No.1〜No.3では13%〜27%の産出率を示す。また、栽培植物のソバ属がNo.1とNo.2でわずかに産出している。

４．考　　察

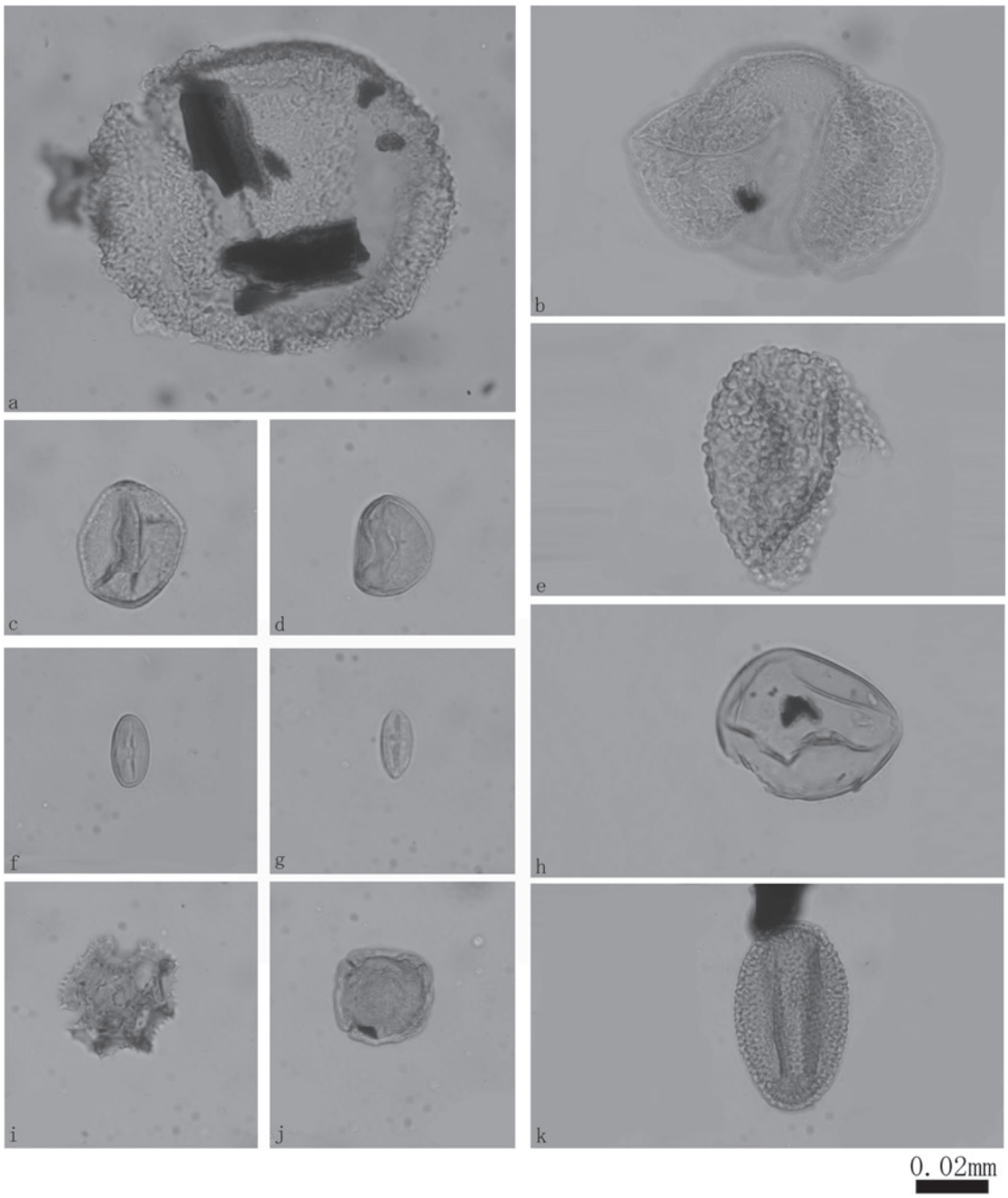
まず、No.4であるが、この層準ではコナラ属コナラ亜属が圧倒的に多く産出している。よって、遺跡周辺にはコナラ属コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が広がっていたと思われる。

次のNo.3の時期になると、コウヤマキ属が増加している。コナラ属コナラ亜属は減少しているものの、依然として高い産出率であり、この時期の遺跡周辺ではコナラ属コナラ亜属とともにコウヤマキ林も分布を広げていたと思われる。さらにこの時期には、二次林要素のマツ属複維管束亜属が微増し、ヨモギ属の急増、イネ科の微増といった特徴が見られる。遺跡周辺のナラ林が切り開かれ、その跡地にヨモギ属やイネ科を主体とした草本植生が広がり、ニヨウマツ類の二次林も発達していた可能性などが考えられる。

No.2の時期には、さらにコナラ属コナラ亜属やコウヤマキ属が減少し、マツ属複維管束亜属やイネ科、ヨモギ属が増加している。遺跡周辺の二次林化、あるいは草地化が進んでいたと思われる。この時期にはシイノキ属−マテバシイ属の増加も目立ってくるようになり、遺跡周辺にはシイノキ属−マテバシイ属を含む照葉樹林が分布を拡大していたと思われる。また、No.1，２ではソバ属が産出しており、

少なくともこの時期以降に遺跡周辺でソバ栽培が行われていたと考えられる。

No.1の時期になっても、遺跡周辺の二次林化と草地化の傾向は続き、主に、この時期にはシイノキ属-マテバシイ属の照葉樹林が遺跡周辺に広がっていたと思われる。



図版１　大菅波コショウズワリ遺跡から産出した花粉化石

a. ツガ属　b. マツ属複維管束亜属　c. コナラ属コナラ亜属　d. コナラ属アカガシ亜属　e. コウヤマキ属
f. クリ属　g. シイノキ属-マテバシイ属　h. イネ科　i. タンポポ亜科　j. アリノトウグサ属　k. ソバ属

第２節　寄生虫卵分析

１．は　じ　め　に

大菅波コショウズワリ遺跡において、用途不明の遺構が検出された。トイレ遺構などの可能性を検討する目的で寄生虫卵分析を行った。

２．試料と分析方法

分析試料は、SK2とSK6から採取された２点である。これらの試料について、以下の手順にしたがって寄生虫卵分析を試みた。

計量した試料に、10％の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46％のフッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。なお、試料１g中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

$X = BD/AC$

X：試料１g中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の重量（g）、B：濃縮試料＋グリセリンの重量（g）、C：濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた重量（g）、D：プレパラート中の寄生虫卵数

３．分　析　結　果

計量し、検鏡した結果を第13表に示す。両試料とも、回虫卵と鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫卵、不明寄生虫卵の産出が確認できた。試料１g当たりの個数はSK2が回虫卵88個、鞭虫卵28個、肝吸虫卵46個、横川吸虫卵56個、不明寄生虫卵14個、SK6が回虫卵88個、鞭虫卵32個、肝吸虫卵49個、横川吸虫卵60個、不明寄生虫卵18個である。試料１㎤当たりではSK2が257個、SK6が272個になる。

４．考　　察

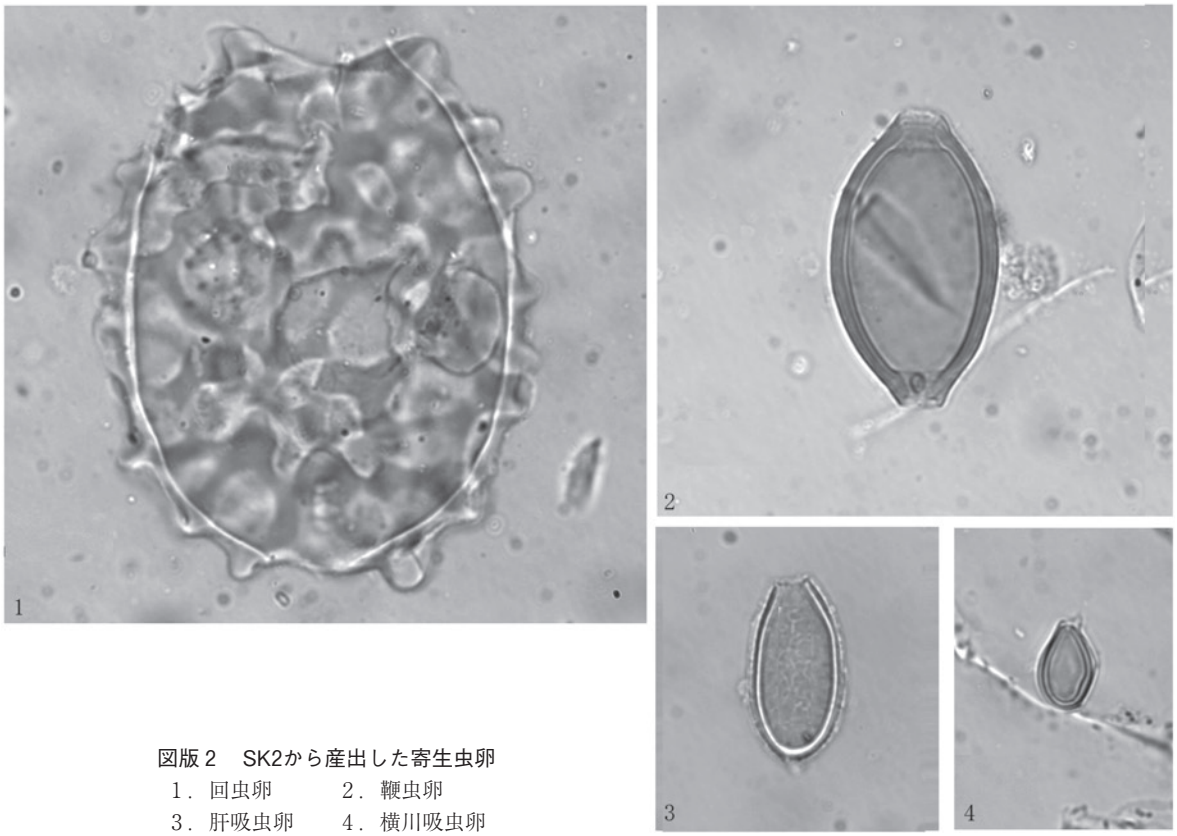
寄生虫卵数については、試料１㎤中に1,000個以上あれば糞便の可能性があると考えられている（金原1997）。SK2では試料１㎤当たり257個、SK6は試料１㎤当たり272個の寄生虫卵が確認できた。寄生虫卵数から考えると、両試料は糞便自体とは言い難い。しかし、寄生虫卵が含まれているため、糞便が混じりこんでいる試料であるといえる。両試料には寄生虫卵が比較的多く含まれるため、SK2とSK6はトイレ遺構の可能性がある。

	SK2	SK6
分析に用いた試料(g)	5.633	5.633
残渣＋グリセリン(g)	1.023	1.023
封入に用いた量(g)	0.052	0.052
試料の密度(g/㎤)	1.11	1.11
回虫卵	25	25
(試料1g当たりの個数)	88	88
鞭虫卵	8	9
(試料1g当たりの個数)	28	32
肝吸虫卵	13	14
(試料1g当たりの個数)	46	49
横川吸虫卵	16	17
(試料1g当たりの個数)	56	60
不明寄生虫卵	4	5
(試料1g当たりの個数)	14	18
計	66	70
(試料1g当たりの個数)	231	245
(試料1㎤当たりの個数)	257	272

第13表　寄生虫卵分析に用いた試料の計量値と寄生虫卵数

引用文献

金原正明　1997　「自然科学的研究からみたトイレ文化」『トイレの考古学』大田区立郷土博物館編：197−216，東京美術.



図版２　SK2から産出した寄生虫卵
１．回虫卵　　２．鞭虫卵
３．肝吸虫卵　　４．横川吸虫卵

第３節　珪藻化石分析

１．は　じ　め　に

珪藻は、10～500μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉1988；安藤1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、大菅波コショウズワリ遺跡の自然流路から採取された堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

２．試 料 と 方 法

試料は、NR1の断面から採取された土層堆積物４点である（第14表）。

分析No.	遺構/位置
1	NR1
3	
4	
5	

第14表　試料一覧表

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。(1)湿潤重量約0.5～1.0gを取り出し、秤量した後、ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2)反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を10回ほど繰り返した。(3)懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートを顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形(原則として半分程度残っている殻)に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物１g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良好な珪藻化石を選び、写真を図版１に載せた。なお、珪藻化石の少ない試料については、プレパラートの面積の2/3以上について同定・計数した。

３．珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉1988および安藤1990が設定し、千葉・澤井2014により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種(?)として、海～汽水種は海～汽水不定・不明種(?)として、汽水種は汽水不定・不明種(?)として、淡水種は広布種(W)として、その他の種はまとめて不明種(?)として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱った。以下に、小杉1988が設定した海水～汽水域における環境指標種群と、安藤1990が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群(A)]：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群(B)]：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群(C1)]：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草(アマモなど)に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群(D1)]：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群(E1)]：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群(C2)]：塩分濃度が４～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群(D2)]：塩分濃度が５～26パーミルの水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群(E2)]：塩分濃度が２～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群(J)]：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群(K)]：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群(L)]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には､水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは､河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群(M)]：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群(N)]：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

［沼沢湿地付着生指標種群(O)］：水深１m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
［高層湿原指標種群(P)］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。
［陸域指標種群(Q)］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。
［陸生珪藻Ａ群(Qa)］：耐乾性の強い特定のグループである。
［陸生珪藻Ｂ群(Qb)］：Ａ群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

４．結　　果

堆積物から検出された珪藻化石は、淡水種が３分類群３属１種であった(第15表)。環境指標種群は検出されなかった。珪藻化石の産出数が少ないため、珪藻分布図は作成していない。

以下では、試料における珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

分析No.5

殻が半分以上残存している珪藻化石は検出されなかった。珪藻化石が検出されなかったため、化石群集から復元される堆積環境は不明である。

分析No.4

殻が半分以上残存している珪藻化石は検出されなかった。珪藻化石が検出されなかったため、化石群集から復元される堆積環境は不明である。

No.	分類群	種群	種群	1	3	4	5
1	*Eunotia* spp.	25	?	7	1		
2	*Pinnularia* spp.	25	?	3			
3	*Stauroneis* acuta	24	W	1			
4	Unknown	26	?		1		
	広布種	24	W	1			
	淡水不定・不明種	25	?	10	1		
	その他不明種	26	?		1		
	海水種						
	海～汽水種						
	汽水種						
	淡水種			11	1		
	合　計			11	2	0	0
	完形殻の出現率(%)			36.4	50.0	－	－
	堆積物１g中の殻数(個)			4.4E+03	8.5E+02	0.0E+00	0.0E+00

第15表　堆積物中の珪藻化石産出表(種群は、千葉・澤井(2014)による)

分析No.3

堆積物１g中の珪藻殻数は8.5×10^{2}個、完形殻の出現率は50.0%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群は検出されなかった。

珪藻化石の産出数が少なすぎるため、珪藻化石群集から復元される堆積環境は不明である。

分析No.1

堆積物１g中の珪藻殻数は4.4×10^{3}個、完形殻の出現率は36.4%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群は検出されなかった。

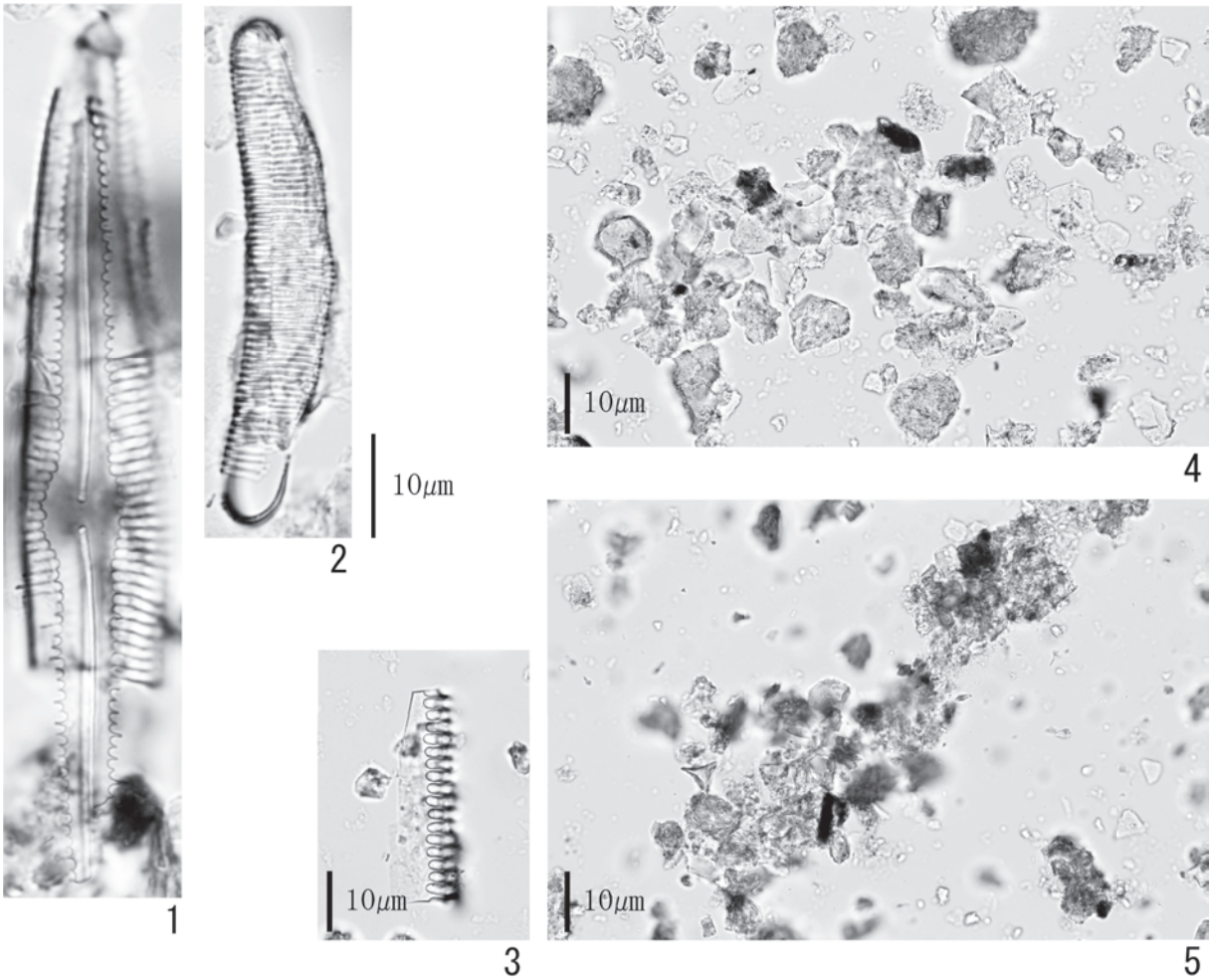
珪藻化石の産出数が少なすぎるため、珪藻化石群集から復元される堆積環境は不明である。

５．考　　察

珪藻化石がほとんど検出されなかったため、堆積環境については不明だが、淡水種のみが検出されたため、海域の影響を受けない堆積環境であったと思われる。

引用文献

安藤一男　　1990　　『淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用』東北地理，42，73−88.
千葉　崇・澤井裕紀　　2014　　『環境指標種群の再検討と更新』Diatom，30，７−30.
小杉正人　　1988　　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究，27』１−20．日本第四期学会



図版３　珪藻プレパラートと珪藻化石の顕微鏡写真
１．*Pinnularia* spp.(No.1)　２．*Eunotia* spp.(No.2)　３．珪藻化石の破片(No.3)　４．不明粒子(No.4)　５．不明粒子(No.5)

第４節　樹　種　同　定

１．は　じ　め　に

石川県加賀市の大菅波コショウズワリ遺跡から出土した木製品の樹種同定を行なった。

２．試 料 と 方 法

試料は、大菅波コショウズワリ遺跡から出土した木製品39点である。各試料の時期については、第16表に示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定では、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

３．結　　果

同定の結果、針葉樹ではモミ属とマツ属複維管束亜属、スギ、アスナロの４分類群、広葉樹ではサクラ属とケヤキ、クリ、スダジイ、コナラ属クヌギ節(以下、クヌギ節)、カエデ属？、トチノキの７

分類群の、計11分類群がみられた。アスナロとクリが12点で最も多く、マツ属複維管束亜属が５点、スギとサクラ属が各２点、モミ属とケヤキ、スダジイ、クヌギ節、カエデ属？、トチノキが各１点であった。同定結果を第16表に、一覧を第17表に示す。

樹種	時期	古墳末～古代			古墳後期～中世	中世	中・近世	近世											近世以降	
	器種	柱	柱根	礎板	柱	漆器椀	杭	木錘	下駄	結桶	底板	柄杓（漆器椀）	柄杓柄	栓？	柱根	板状木製品	杭	不明	板	合計
モミ属					1															1
マツ属複維管束亜属							1				1			1			1		1	5
スギ																2				2
アスナロ								1	1	4	3		1			1		1		12
サクラ属			2																	2
ケヤキ																	1			1
クリ		4	2	2	1										3					12
スダジイ			1																	1
コナラ属クヌギ節					1															1
カエデ属？												1								1
トチノキ						1														1
	合計	4	5	2	3	1	1	1	1	4	4	1	1	1	3	3	2	1	1	39

第16表　大菅波コショウズワリ遺跡出土木製品の樹種同定結果

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属　*Abies*　マツ科　図版４　1a-1c（No.0269）

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ１～８列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、１分野に２～４個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科　図版４　2a-2c（No.0238）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(3) スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　ヒノキ科　図版４　3a-3c（No.0253）

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ２～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(4) アスナロ　*Thujopsis dolabrata*（L.f.）Siebold et Zucc.　ヒノキ科　図版４　4a-4c（No.0261）

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ２～13列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、１分野に２～４個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工

は比較的容易である。また、精油分が多く、耐朽性に優れている。

(5) サクラ属(広義)　*Prunus* s.l.　バラ科　図版４　5a-5c(No.0233)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１列が直立する異性で、１～５列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(6) ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　ニレ科　図版４、５　6a-6c(No.0239)

年輪のはじめに大型の道管が１～２列並び、晩材部では急に径を減じた道管が多数複合し、接線～斜線方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１列が方形となる異性で、幅１～５列となる。放射組織の上下端には、結晶が認められる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

(7) クリ　*Castanea crenata* Siebold. et Zucc.　ブナ科　図版５　7a-7c(No.0242)

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(8) スダジイ　*Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba　ブナ科　図版５　8a-8c(No.0234)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属クヌギ節　*Quercus sect. Aegilops*　ブナ科　図版５　9a-9c(No.0264)

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では急に径を減じた厚壁で丸い道管が、放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(10) カエデ属？　*Acer*?　ムクロジ科　図版５　10b-10c(No.0241-１)

小型の道管が単独ないし２～３個複合してやや疎らに散在する散孔材であるが、横断面の採取が行えなかった。木部繊維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅１～６列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(11) トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　ムクロジ科　図版５　11a-11c(No.0271)

小型の道管が単独ないし２～３個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

４．考　　察

古墳時代末～古代の柱および柱根はサクラ属とクリ、スダジイ、礎板はクリであった。いずれも堅硬な部類に属する樹種である（伊東ほか2011）。石川県の丘陵付近や山地の遺跡で確認されている古代の柱では、クリがあり（久田2012）、傾向は概ね一致する。

古墳時代後期～中世の柱は、モミ属とクリ、クヌギ節であった。モミ属は真っすぐで加工性が良く、耐朽性が高い樹種である。また、クヌギ節はクリと同様に、堅硬な樹種である（久田2012）。

中世の漆器椀は、トチノキであった。トチノキは軽軟で加工性の良い樹種であり、漆器の木胎としても多く利用される樹種である（伊東ほか2011）。石川県で確認されている中世の漆器椀にも、トチノキが利用されている（伊東・山田編2012）。

中・近世の杭は、マツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は真っすぐで加工性が良く、耐朽性の高い樹種である（伊東ほか2011）。

近世の木錘と下駄、結桶、柄杓柄、不明木製品はいずれもアスナロで、底板はマツ属複維管束亜属とアスナロ、栓？はマツ属複維管束亜属であった。アスナロは真っすぐで加工性が良く、耐朽性に優れている樹種である（伊東ほか2011）。これらの木製品には、耐朽性が高いマツ属複維管束亜属とアスナロが選択的に利用されていた可能性が考えられる。

近世の柱根はクリ、杭はマツ属複維管束亜属とケヤキであった。ケヤキはクリと同じく堅硬だが、加工性が良い樹種である（伊東ほか2012）。石川県で確認されている古代以降の柱では、クリの利用頻度が高くなると指摘されており（久田2012）、傾向は一致する。

柄杓（漆器椀）は、カエデ属？であった。カエデ属は堅硬な樹種であり、漆器の木胎としても多く利用される樹種である（伊東ほか2011）。石川県で確認されている中世頃の漆器椀では、ケヤキ、ブナ属、トチノキが多くみられるが、カエデ属も確認されている。

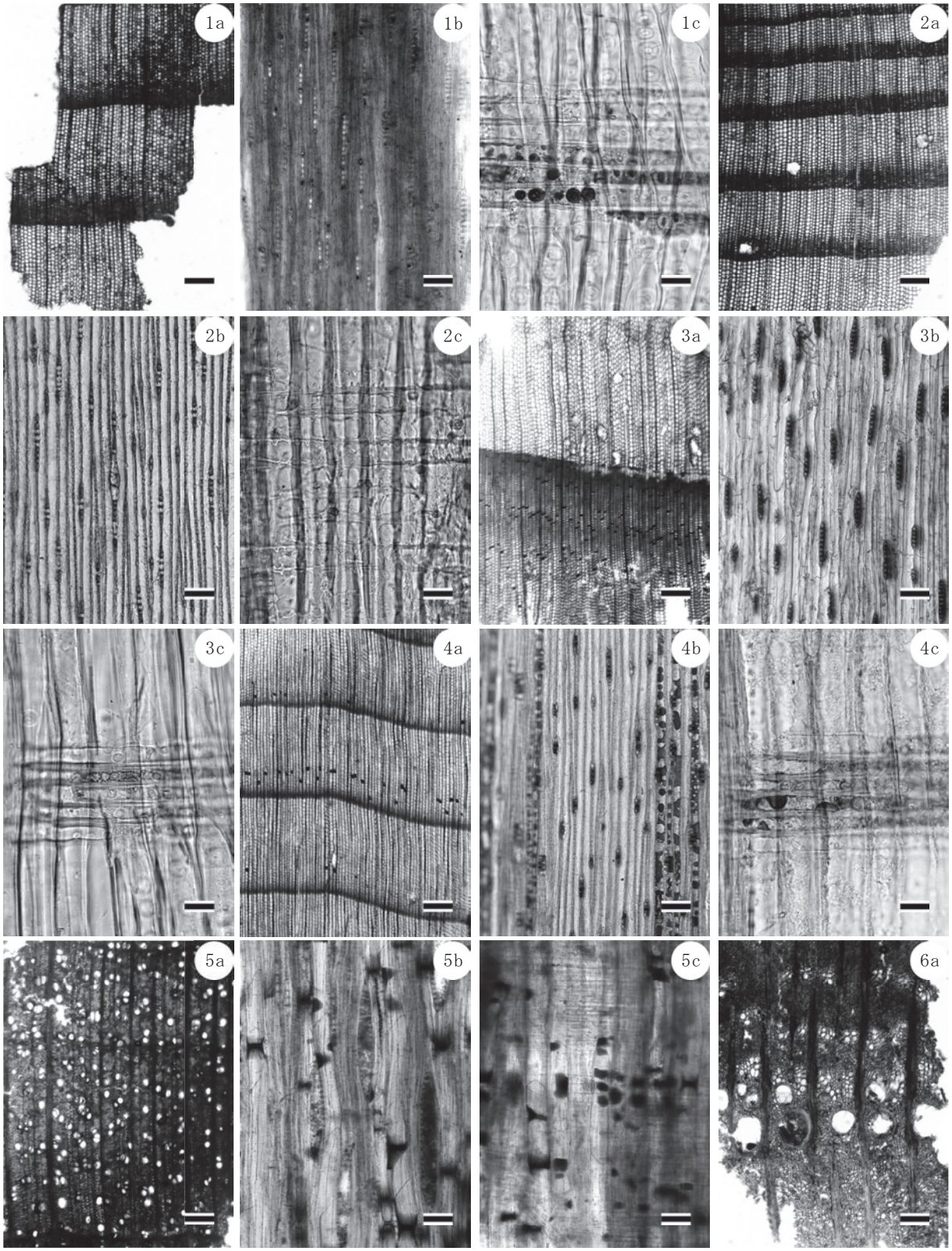
近世以降の板は、マツ属複維管束亜属であった。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂　　2011　『日本有用樹木誌』海青社

伊東隆夫・山田昌久編　　2012　『木の考古学―出土木製品用材データベース―』海青社

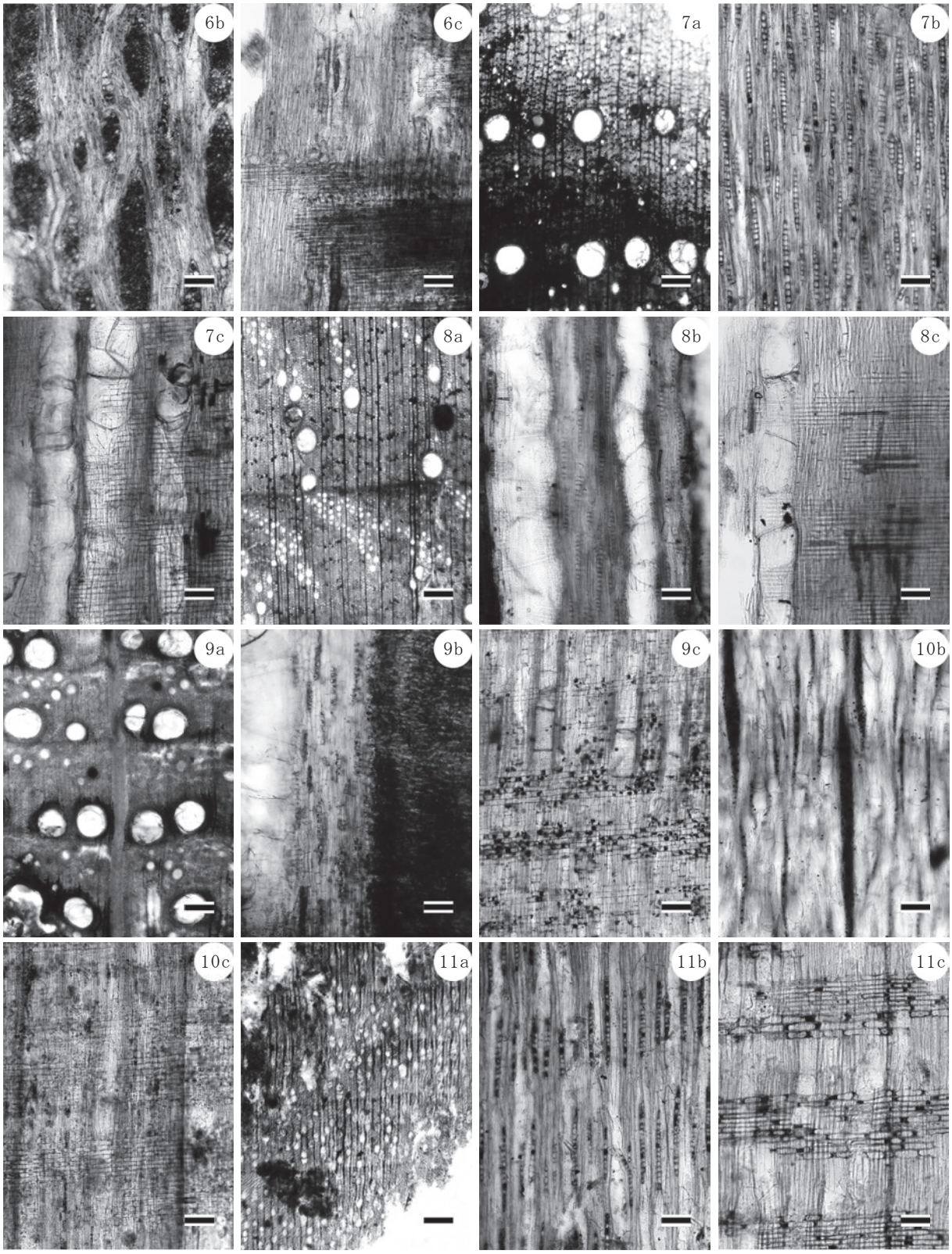
久田正弘　　2012　「中部日本海側―福井県・石川県・富山県・新潟県―」『木の考古学―出土木製品用材データベース―』海青社　210-223



図版４　大菅波コショウズワリ遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（1）

1a-1c.　モミ属（No.0269）、2a-2c.　マツ属複維管束亜属（No.0238）、3a-3c.　スギ（No.0253）、4a-4c.　アスナロ（No.0261）、5a-5c.　サクラ属（No.0233）、６a.　ケヤキ（No.0239）

a：横断面（スケール＝250μm）、b：接線断面（スケール＝100μm）、c：放射断面（スケール＝1-4：25μm・5：100μm）



図版５　大菅波コショウズワリ遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(2)

6b-6c.　ケヤキ(No.0239)、7a-7c.　クリ(No.0242)、8a-8c.　スダジイ(No.0234)、9a-9c.　コナラ属クヌギ節(No.0264)、10b-10c.　カエデ属？(No.0241-1)、11a-11c.　トチノキ(No.0271)

a：横断面(スケール＝250μm)、b：接線断面(スケール＝100μm)、c：放射断面(スケール＝100μm)

試料No.	調査区	グリッド	遺構	器種	樹種	木取り	時期
0233	2区	C2gr	SB2-P26	柱根	サクラ属	芯持丸木	古墳時代末～古代
0234	2区	D1gr	SB1-P67	柱根	スダジイ	芯持丸木	古墳時代末～古代
0235	2区	C2gr	SB2-P27	柱根	サクラ属	芯持丸木	古墳時代末～古代
0236	2区	E4gr	NR1南西	下駄	アスナロ	板目	近世
0237	2区	E9gr	SD11	杭	マツ属複維管束亜属	芯去削出	中・近世
0238	2区	E5gr	NR1北東	杭	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	近世
0239	2区	F5gr	NR1南西	杭	ケヤキ	板目	近世
0240	2区	F6gr	NR1北東	木錘	アスナロ	芯去削出	近世
0241-1	2区	F4gr	SK6	柄杓(漆器椀)	カエデ属？	横木取り	近世
0241-2	2区	F4gr	SK6	柄杓柄	アスナロ	芯去削出	近世
0242	2区	E2gr	P4	柱根	クリ	割れ	近世
0243	2区	B3gr	SB5-P62	礎板	クリ	割れ	古墳時代末～古代
0244	2区	F2gr	P12	柱根	クリ	割れ	近世
0245	2区	F2gr	P13	柱根	クリ	芯去削出	近世
0246	2区	F4gr	SK6	栓？	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	近世
0247	2区	F3gr	SK7	板状木製品	アスナロ	柾目	近世
0248	2区	E6gr	SK8上面	板状木製品	スギ	柾目	近世
0249	2区	B2gr	SB5-P59礎板下	礎板	クリ	板目	古墳時代末～古代
0250	2区	C2gr	P51	柱根	クリ	芯持丸木	古墳時代末～古代
0251	2区	B2gr	SB5-P59	柱根	クリ	芯持丸木	古墳時代末～古代
0252	2区	E3gr	SK2北半上位	底板	マツ属複維管束亜属	板目	近世
0253	2区	E3gr	SK2北半上位	板状木製品	スギ	板目	近世
0254	2区	E3gr	SK2	不明	アスナロ	みかん割り	近世
0255	2区	E3gr	SK2	底板	アスナロ	板目	近世
0256	2区	D3gr	カクラン10	底板	アスナロ	柾目	近世
0257	2区	E3gr	SK2北半上位	底板	アスナロ	柾目	近世
0258	2区	F4gr	SK6　No.13	結桶	アスナロ	板目	近世
0259	2区	F4gr	SK6　No.8	結桶	アスナロ	板目	近世
0260	2区	F4gr	SK6　No.18	結桶	アスナロ	板目	近世
0261	2区	F4gr	SK6　No.21の下	結桶	アスナロ	芯去削出	近世
0263	1区	C7gr	SB02-P05	柱	クリ	板目	古墳時代末～古代
0264	1区	B8gr	P05	柱	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	古墳時代後期～中世
0265	1区	B3gr	P24	柱	クリ	割れ	古墳時代後期～中世
0266	1区	C7gr	SB02-P07	柱	クリ	芯持丸木	古墳時代末～古代
0267	1区	B8gr	SB04-P01	柱	クリ	割れ	古墳時代末～古代
0268	1区	A3gr	SD04	板	マツ属複維管束亜属	板目	近世以降
0269	1区	A2gr	P15	柱	モミ属	芯持丸木	古墳時代後期～中世
0270	1区	B7gr	SB04-P04	柱	クリ	板目	古墳時代末～古代
0271	1区		排土	漆器椀	トチノキ	横木取り	中世

第17表　大菅波コショウズワリ遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

第５節　石　質　同　定

１．は　じ　め　に

大菅波コショウズワリ遺跡は、石川県加賀市北部の橋立丘陵の裾から平野部にかけて所在する。調査では、尖頭器や剝片などの石製品が出土した。ここでは、出土した石製品について、肉眼観察による石材同定を行った。

２．試 料 と 方 法

石材同定を行った石製品は､大菅波コショウズワリ遺跡において出土した石製品46点である(第18表)。石材同定は、主に肉眼により行い、マイクロスコープを用いて石材の接写撮影を行った。

３．結　　果

第18表に、肉眼による石製品の石材同定を行った結果を示す。なお、各石材の記載は、表面観察による色調や構成鉱物、岩石組織あるいは破断面の特徴等について行った。

以下に、代表的な石材の特徴について記載した。

１．頁岩(図版６－１)　白色の風化が著しい岩石である。破断面では黒色を呈する。
２．泥岩(図版６－２)　黒灰色の硬質の泥質の岩石である。
３．砂岩(図版６－３)　灰色の細砂から構成される岩石である。
４．凝灰岩(図版６－４)　灰白色の砂質～砂礫混じり～砂混じりシルト質～軽石混じりなどからなる。
５．ガラス質安山岩(図版６－５)　黒灰色の緻密な岩石である。縞状を呈するのもある。
６．安山岩(図版６－６)　白色～灰色の斑晶質であるが、細粒斑晶質でややガラス質のものもある。
７．流紋岩(図版６－７)　灰白色の流理構造のある岩石である。
８．黒曜石(図版６－８)　淡黒色のガラス質で縞模様が見せられる。被熱痕があり濁った非ガラス質のものもある。
９．透閃石(図版６－９)　淡白色の硬質の不均質な岩石である。
10．メノウ(図版６-10)　黄色の半透明のガラス質鉱物である。

４．考　　察

第19表に、各石製品とその石材についてまとめた。坂本ほか1967の20万分の１地質図では、周辺では第四紀更新世中部洪積層および未区分洪積層や下部更新層(凡例tdとdl)､新第三紀中新世(東別所階)砂岩および礫岩(凡例YsとYc)、礫岩および礫岩砂岩泥岩互層(凡例Kc)、安山岩溶岩および安山岩凝灰角礫岩(凡例Ia)が分布する。

石材同定を行った石製品では、石材環境として凝灰角礫岩や安山岩が在地石材と言えるが、多くの石製品が流通品であることを考えると他地域の石材である可能性がある。

引用文献

鹿野和彦・原山　智・山本博文・竹内　誠・宇都浩三・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久　　1999　『20万分の１地質図「金沢」』地質調査所.

坂本　亨・今井　功・角　靖夫・野沢　保・盛谷　智之　　1967　『20万分の１地質図「七尾及び富山」』地質調査所

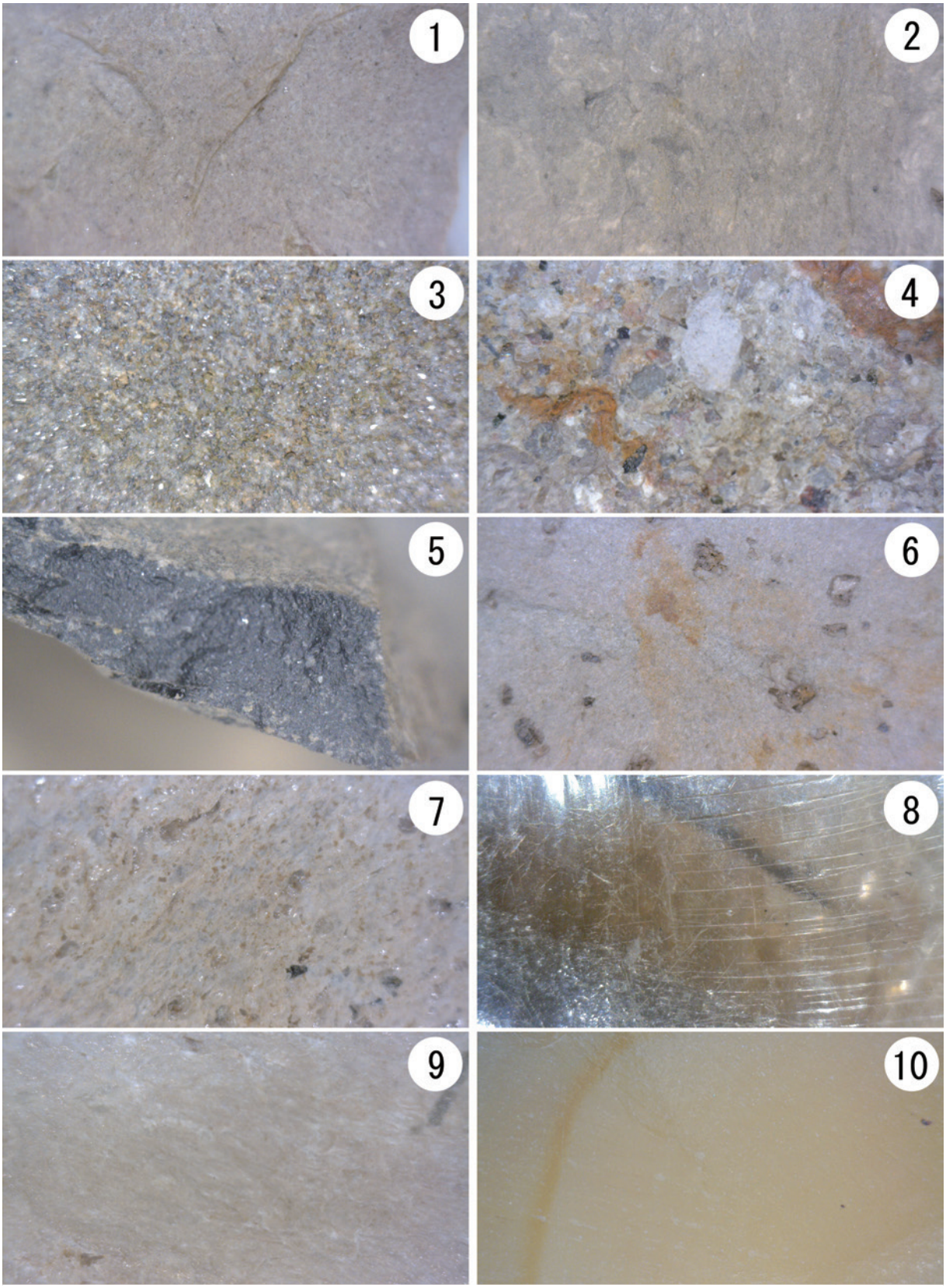
高田祐一・日本遺跡学会　　2019　『産業発展と石切場』285p，戎光祥出版

図版番号	管理番号	遺物ID（MA番号）	地区	グリッド	出土遺構等	資料種別１（素材）	器種	色調	岩石名	備考
1	0121	MA0000013909	2区	F6南東	NR1	11006	打製石斧	灰白色	凝灰岩	砂礫混じりシルト質
2	0122	MA0000013910	2区	F5南東	NR1	11006	打製石斧	灰色	安山岩	斑晶質
3	0123	MA0000013911	2区	C4南東	NR1	11006	石鏃	ややピンク味の灰色	頁岩	
4	0124	MA0000013912	2区	F5南東	NR1	11006	石鏃	黒灰色	ガラス質安山岩	縞状
5	0125	MA0000013913	2区	F5南東	NR1	11006	石鏃	白色	頁岩	風化著しい
6	0126	MA0000013914	2区	F5南西	NR1	11006	石鏃	黒色	ガラス質安山岩	
7	0127	MA0000013915	2区	F6南西	NR1	11006	石鏃	白色	頁岩	
8	0128	MA0000013916	2区	F6南西	NR1	11006	石錘	淡褐灰色	凝灰岩	文様シルト質
9	0129	MA0000013917	2区	D4北東	NR1地上真上	11006	石匙	やや赤み味	凝灰岩	岩片含む
10	0130	MA0000013918	2区	E4北東	NR1	11006	二次加工のある剥片	白色	頁岩	斑状、風化著しい
11	0131	MA0000013919	2区	F5南西	NR1検出面	11006	剥片	黒色	ガラス質安山岩	
12	0132	MA0000013920	2区	F5	遺構検出	11006	剥片	淡青灰色	頁岩	
13	0133	MA0000013921	2区	D4南東	NR1	11006	剥片	淡黒色	黒曜石	縞あり
14	0134	MA0000013922	2区	F5南東	NR1	11006	剥片	淡黒色	黒曜石	被熱痕
15	0135	MA0000013923	2区	F6	遺構検出　NR1	11006	二次加工のある剥片	淡黒色	黒曜石	
16	0136	MA0000013924	2区	F6南東	NR1	11006	剥片	淡黒色	黒曜石	
17	0137	MA0000013925	2区	C2南西	鞍部黒褐粘	11006	二次加工のある剥片	灰白色	流紋岩	流理
18	0138	MA0000013926	2区	E1	撹乱1	11006	楔形石器	淡黒色	黒曜石	
19	0139	MA0000013927	2区	E3	撹乱10	11006	方形火鉢	灰白色	凝灰岩	砂礫質、軽石混じり
20	0140	MA0000013928	2区	E3	撹乱10	11006	方形火鉢	白色	頁岩	風化著しい
21	0141	MA0000013929	2区	F5南西	NR1	11006	石錘	灰色	凝灰岩	砂礫混じり、球果粒状
22	0142	MA0000013930	2区	D9	SK15南半下位	11006	砥石	黄灰色	凝灰岩	砂混じりシルト質
23	0143	MA0000013931	2区	F4	表土	11006	砥石	灰色	砂岩	細砂
24	0144	MA0000013939	2区	F4	表土	11006	磨製石斧	黒灰色	泥岩	硬質
25	0145	MA0000013932	2区	F6南東	NR1玉1	11006	臼玉	黒色	頁岩	
26	0146	MA0000013933	2区	F6北東	NR1	11006	碁石	やや橙灰色	頁岩	
27	0211	MA0000013772	1区	A4	SD05	11006	玉石核	緑灰色	頁岩	
28	0212	MA0000013773	1区	A3	下面　包含層	11006	尖頭器	白色	頁岩	風化著しい
29	0213	MA0000013774	1区	B8東	SD09	11006	不明	灰白色	凝灰岩	砂質
30	0214	MA0000013775	1区	B5	暗部　最下層	11006	剥片	白色	安山岩	細粒斑晶質、ややガラス質
31	0215	MA0000013776	1区	B5	暗部　最下層	11006	剥片	白色	頁岩	風化著しい
32	0216	MA0000013777	1区	B5	暗部　最下層	11006	剥片	白色	頁岩	風化著しい
33	0217	MA0000013778	1区	A5	暗部　最下層	11006	剥片	白色	頁岩	風化著しい
34	0218	MA0000013779	1区		表土除去　排土内	11006	打製石斧	白色	頁岩	斑晶質
35	0219	MA0000013780	1区	C11	検出面	11006	打製石斧	緑色	安山岩	斑晶質
36	0220	MA0000013781	1区	B5	検出面	11006	石鏃	黒灰色	ガラス質安山岩	縞状
37	0221	MA0000013782	1区		排土	11006	剥片	黄色	メノウ	半透明、ガラス質鉱物
38	0222	MA0000013783	1区	B9	南壁	11006	剥片	淡黒色	黒曜石	
39	0223	MA0000013784	1区		検出面	11006	剥片	淡黒色	黒曜石	
40	0224	MA0000013785	1区	A4	下面　壁　排水	11006	剥片	灰白色	頁岩	風化著しい
41	0225	MA0000013786	1区	A3	検出面　土器1	11006	磨製石斧	緑色	凝灰岩	細粒質
42	0226	MA0000013787	1区	A5	暗部　最下層	11006	磨製石斧	淡白色	透閃石	不均質
43	0227	MA0000013788	1区	D9	北壁　溝	11006	磨製石斧	黄白色	凝灰岩	シルト質
44	0228	MA0000013789	1区		東側通路　2番目の水田	11006	石錘	緑灰色	凝灰岩	やや粗粒質
45	0229	MA0000013790	1区	D10東	SD08上層	11006	石錘	黄白色	凝灰岩	軽石質
46	0230	MA0000013791	1区	D10東	SD08上層	11006	石錘	緑色	凝灰岩	粗粒質、軽石含む

第18表　大菅波コショウズワリ遺跡出土石製品の石質同定（肉眼観察）一覧表

大分類	中分類	岩石名	臼玉	碁石	玉石核	石匙	石錘	石鏃	尖頭器	剥片	楔形石器	二次加工のある剥片	打製石斧	磨製石斧	砥石	方形火鉢	不明	総計
堆積岩類	砕屑岩	頁岩	1	1	1			3	1	5		1	1			1		15
		泥岩												1				1
		砂岩													1			1
	火山砕屑岩	凝灰岩				1	5						1	2	1	1	1	12
火成岩類	火山岩	ガラス質安山岩						3		1								4
		安山岩								1			2					3
		流紋岩										1						1
		黒曜石								5	1	1						7
	深成岩	透閃石												1				1
その他		メノウ								1								1
総計			1	1	1	1	5	6	1	13	1	3	4	4	2	2	1	46

第19表　石製品と石材の関係



図版６　石製品石材のマイクロスコープ写真（scale：１㎜）

１．頁岩（分析 No.3）　２．泥岩（分析 No.24）　３．砂岩（分析 No.23）　４．凝灰岩（分析 No.19）
５．ガラス質安山岩（分析 No.11）　６．安山岩（分析 No.2）　７．流紋岩（分析 No.17）
８．黒曜石（分析 No.13）　９．透閃石（分析 No.42）　10．メノウ（分析 No.37）

第62図　遺跡周辺の地質図

第６節　ガラス質安山岩製石器の産地推定

１．は　じ　め　に

加賀市大菅波町地内に所在する大菅波コショウズワリ遺跡より出土したガラス質安山岩製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

２．試 料 と 方 法

分析対象は、遺跡より出土したガラス質安山岩製石器４点である（第20表）。試料はいずれも風化層に覆われている。測定は原則非破壊で行ったが、分析No.3の剥片のみ、サンドブラストを用いて風化層を一部除去し、新鮮面も測定した。

分析No.	図版番号	管理番号	遺物ID（MA番号）	地区	グリッド	出土遺構等	器種	色調	備考	測定位置
1	4	0124	MA0000013912	2区	F5南東	NR1	石鏃	黒灰色	縞状	風化面
2	6	0126	MA0000013914	2区	F5南西	NR1	石鏃	黒色	被熱痕	風化面
3	11	0131	MA0000013919	2区	F5南西	NR1検出面	剥片	黒色		風化面および新鮮面
4	36	0220	MA0000013781	1区	B5	検出面	石核	黒灰色	縞状	風化面

第20表　分析対象のガラス質安山岩製石器

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA 1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径８㎜、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に

設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法は、黒曜石産地推定法として用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（望月1999など）を用い、分析対象をガラス質安山岩に置き換えて適用した。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計７元素のX線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

１）Rb分率=Rb強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

２）Sr分率=Sr強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

３）Mn強度×100/Fe強度

４）log（Fe強度/K強度）

そして、これらの指標値を用いた２つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度/K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第21表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を示す。

都道府県	エリア	判別群	原石採取地（試料点数）
福島	会津	柳津	只見川支流（6）
群馬	みなかみ	武尊山	武尊山（11）
	下仁田	荒船山	荒船山（9）
長野	佐久	八風山	香坂（9）、八風山下（10）、八風山（9）
岐阜	下呂	湯ヶ峰	大林（10）、山の西口（3）、火口そばくずれニ（3）、山の東ホ（3）、火口そば北寄り尾根へ（3）
石川	能登	富来	大福寺A地点（1）、大福寺B地点中央鞍部（4）、大福寺B地点南（15）、西大福寺A地点（2）、笹波（15）
奈良	二上山	春日山	春日山みかん畑内（10）、株山（61）
香川	讃岐	国分台1	自衛隊演習場付近（21）、神谷神社付近（8）、高産霊神社谷（1）、国分台下みかん畑（4）、蓮光寺山南東麓（1）
		国分台2	神谷神社付近（3）、高産霊神社谷（4）
		国分台3	自衛隊演習場付近（1）、神谷神社付近（2）、高産霊神社谷（7）、国分台下みかん畑（1）、蓮光寺山南東麓（25）、出雲神社周辺（5）
		赤子谷	赤子谷第1地点（5）、赤子谷第2地点（5）
		法印谷	法印谷（10）
		金山1	北峰道路脇（10）、金山南麓（31）、金山北東部（27）
		金山2	北峰道路脇（10）、金山南麓（31）、金山北東部（27）
		城山	城山南側（5）、城山北側（5）
		東奥1	雄山（5）、雌山（5）、神谷神社付近（4）、出雲神社周辺（23）、奥池付近（11）
		東奥2	神谷神社付近（3）、出雲神社周辺（2）、奥池付近（5）
		双子山	双子山南嶺（10）
		香色山	佐伯神社付近（30）、宮ヶ尾古墳周辺（1）
		大麻山北麓	宮ヶ尾古墳周辺（2）
鳥取	青谷	青谷	青谷（12）
	東郷	東郷	麻畑（12）
佐賀	多久	鬼ノ鼻山	天ヶ瀬ダム下みかん畑（8）
宮崎	高千穂	黒岳	黒岳（1）

第21表　ガラス質安山岩産地の判別群

３．分　析　結　果

第22表に石器の測定値および算出された指標値を、第63図にガラス質安山岩原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

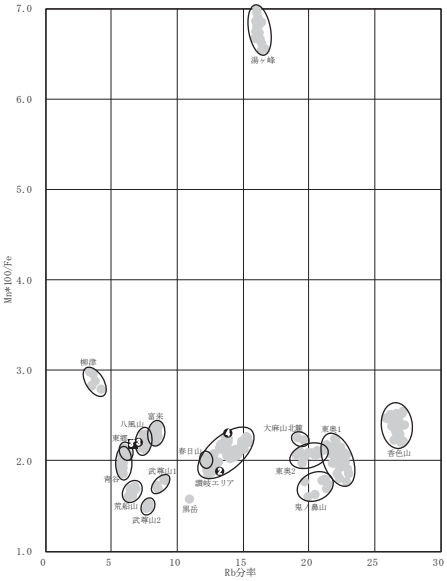
風化面を除去した分析No.3の新鮮面（第22表、第63図中では分析No.3'と表記）の測定では、合致する判別群がなく、産地不明であった。

風化面を測定した分析No.1、２、４の３点については、分析No.1は湯ヶ峰群（岐阜県、下呂エリア）、分析No.2は春日山群（奈良県、二上山エリア）、分析No.4は讃岐エリア（香川県）に比較的近い位置にプロットされた。３点の石器は、これらの判別群に属する可能性がある。ただし、新鮮面を測定した結果、合致する判別群がなかった分析No.3も、風化面の測定では八風山群（長野県、佐久エリア）の比較的近い位置にプロットされており、風化面の測定での産地推定は困難といえる。

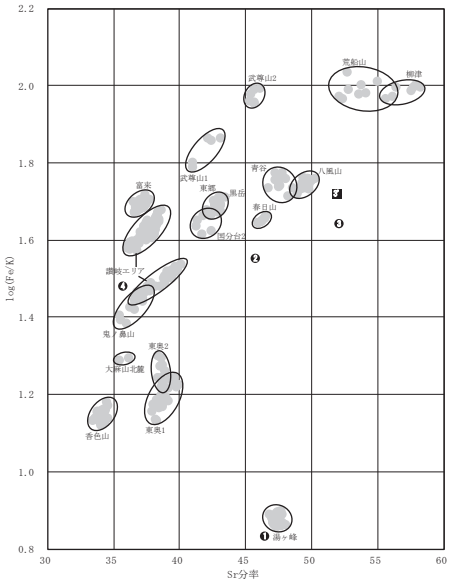
分析No.	K強度（cps）	Mn強度（cps）	Fe強度（cps）	Rb強度（cps）	Sr強度（cps）	Y強度（cps）	Zr強度（cps）	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア	分析No.
1	225.3	116.1	1533.3	584.8	1620.4	238.1	1048.6	16.75	7.57	46.40	0.83	?	不明	1
2	185.8	125.4	6647.1	370.3	1285.4	201.2	953.4	13.18	1.89	45.74	1.55	?	不明	2
3	223.8	215.5	9805.7	351.7	2610.4	292.5	1761.6	7.01	2.20	52.04	1.64	—	—	3
3′	190.0	218.2	9981.4	327.7	2596.4	290.5	1786.5	6.55	2.19	51.92	1.72	?	不明	3′
4	213.5	149.5	6474.7	505.4	1304.4	267.0	1577.5	13.83	2.31	35.70	1.48	?	不明	4

※1～4は風化面を測定、3′は新鮮面を測定

第22表　測定値および産地推定結果



第63図　ガラス質安山岩産地推定判別図(1)



第63図　ガラス質安山岩産地推定判別図(2)

4．お　わ　り　に

大菅波コショウズワリ遺跡より出土したガラス質安山岩製石器４点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行ったが、いずれも産地不明だった。

引用文献

望月明彦　　1999　「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書２―上和田城山遺跡篇―』172-179　大和市教育委員会

第７節　黒曜石製石器の産地推定

1．は　じ　め　に

加賀市大菅波町地内に所在する大菅波コショウズワリ遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2．試 料 と 方 法

分析対象は、遺跡より出土した黒曜石製石器８点である(第23表)。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の洗浄を行った。

分析No.	図版番号	管理番号	遺物ID(MA番号)	地区	グリッド	出土遺構等	器種	色調	備考
1	13	0133	MA0000013921	2区	D4南東	NR1	剥片	淡黒色	縞あり
2	14	0134	MA0000013922	2区	F5南東	NR1	剥片	淡黒色	被熱痕
3	15	0135	MA0000013923	2区	F6	遺構検出 NR1	二次加工のある剥片	淡黒色	
4	16	0136	MA0000013924	2区	F6南東	NR1	剥片	淡黒色	
5	16	0136	MA0000013924	2区	F6南東	NR1	剥片	淡黒色	
6	18	0138	MA0000013926	2区	E1	攪乱1	楔形石器	淡黒色	
7	38	0222	MA0000013783	1区	B9	南壁	剥片	淡黒色	
8	39	0223	MA0000013784	1区		検出面	剥片	淡黒色	

第23表　分析対象の黒曜石製石器

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径８㎜、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計７元素のX線強度(cps：count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

１）Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

２）Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

３）Mn強度×100/Fe強度

４）log(Fe強度/K強度)

そして、これらの指標値を用いた２つの判別図(横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe強度/K強度)の値が減少する(望月1999)。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第24表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を示す。

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢露頭(15)	赤石山山頂、八号沢露頭、八号沢、黒曜の沢、幌加林道(36)
		白滝2	7の沢川支流(2)、IK露頭(10)、十勝石沢露頭直下河床(11)、アジサイの滝露頭(10)	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)	
	上士幌	上士幌	十勝三股(4)、タウシュベツ川右岸(42)、タウシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)	
	置戸	置戸山	置戸山(5)	
		所山	所山(5)	
	豊浦	豊浦	豊泉(10)	
	旭川	旭川	近文台(8)、雨紛台(2)	
	名寄	名寄	忠烈布川(19)	
	秩父別	秩父別1	中山(65)	
		秩父別2		
		秩父別3		
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)	
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)	
	留辺蘂	留辺蘂1	ケショマップ川河床(9)	
		留辺蘂2		
	釧路	釧路	釧路市営スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15)、鶴ヶ坂(10)	
	深浦	八森山	岡崎浜(7)、八森山公園(8)	
	青森	青森	天田内川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)	
		脇本	脇本海岸(4)	
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9)、真城(33)	
		北上折居2		
		北上折居3		
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)	
	色麻	根岸	根岸(40)	
	仙台	秋保1	土蔵(18)	
		秋保2		
	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24)、大越沢(10)	
		櫛引	たらのき代(19)	
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)	
	新津	金津	金津(7)	
	佐渡	真光寺	追分(4)	
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)	
		七尋沢	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)	
長野	和田	西餅屋	芙蓉バーライト土砂集積場(30)	
		鷹山	鷹山(14)、東餅屋(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
		土屋橋1	土屋橋西(10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北(20)、土屋橋北西(58)、土屋橋西(1)	
		古峠	和田峠トンネル上(28)、古峠(38)、和田峠スキー場(28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)	
		高松沢	高松沢(19)	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)	
	蓼科	冷山	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)	
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)	
		畑宿	畑宿(51)	
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)	
静岡		上多賀	上多賀(20)	
	天城	柏峠	柏峠(20)	
東京	神津島	恩馳島	恩馳島(27)	
		砂糠崎	砂糠崎(20)	
島根	隠岐	久見	久見バーライト中(6)、久見採掘現場(5)	
		箕浦	箕浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3)	

第24表　東日本黒曜石産地の判別群

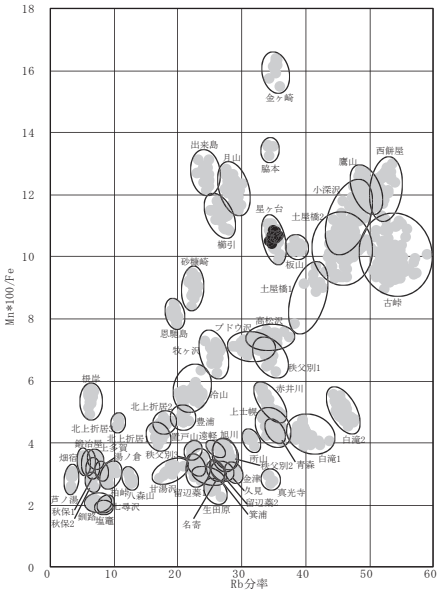
３．分　析　結　果

第25表に石器の測定値および算出した指標値を、第64図に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

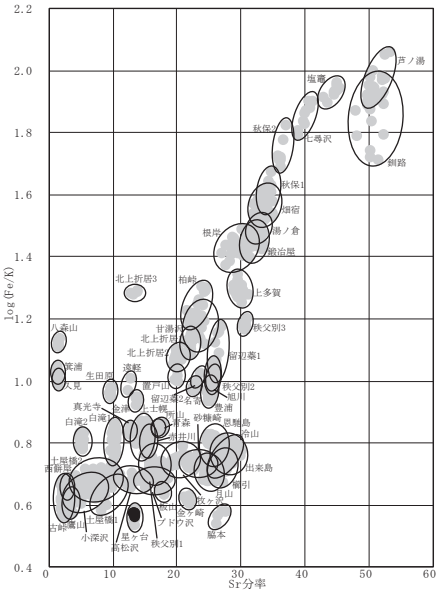
分析の結果、７点が星ヶ台群(長野県、諏訪エリア)の範囲にプロットされた。また、分析No.2は、

分析 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	$\frac{Mn*100}{Fe}$	Sr分率	$\log\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	分析 No.
1	316.3	126.3	1192.9	809.4	305.0	399.9	779.4	35.29	10.59	13.30	0.58	星ヶ台	諏訪	1
2	422.2	105.5	987.0	708.7	257.9	345.5	667.9	35.79	10.69	13.03	0.37	星ヶ台?	諏訪?	2
3	304.2	121.6	1126.4	789.8	296.4	388.8	762.0	35.31	10.79	13.25	0.57	星ヶ台	諏訪	3
4	220.4	87.0	826.8	590.2	225.1	305.3	597.1	34.36	10.52	13.11	0.57	星ヶ台	諏訪	4
5	260.4	102.2	979.6	691.0	261.5	347.7	686.7	34.78	10.44	13.16	0.58	星ヶ台	諏訪	5
6	292.6	116.2	1072.6	735.5	280.0	365.6	729.4	34.85	10.84	13.27	0.56	星ヶ台	諏訪	6
7	325.9	130.4	1227.1	837.0	315.0	414.4	795.1	35.44	10.63	13.34	0.58	星ヶ台	諏訪	7
8	255.9	103.6	967.9	671.1	254.4	341.0	662.6	34.79	10.70	13.19	0.58	星ヶ台	諏訪	8

第25表　測定値および産地推定結果



第64図　黒曜石産地推定判別図(1)



第64図　黒曜石産地推定判別図(2)

第64図(1)では星ヶ台群の範囲にプロットされたが、第64図(2)では星ヶ台群の下方にあたる位置にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ(望月1999)、星ヶ台群に属する可能性が高い。

第25表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

４．お　わ　り　に

大菅波コショウズワリ遺跡より出土した黒曜石製石器８点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、いずれも諏訪エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦　　1999　「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書２―上和田城山遺跡篇―』172-179　大和市教育委員会

第６章　総　　括

第１節　旧石器時代～弥生時代

大菅波コショウズワリ遺跡の調査面積は5,170㎡であるが、ほ場整備などに伴う撹乱・削平が多いためか、遺構と遺物が少ないので３つの時代を概観する（第65図）。

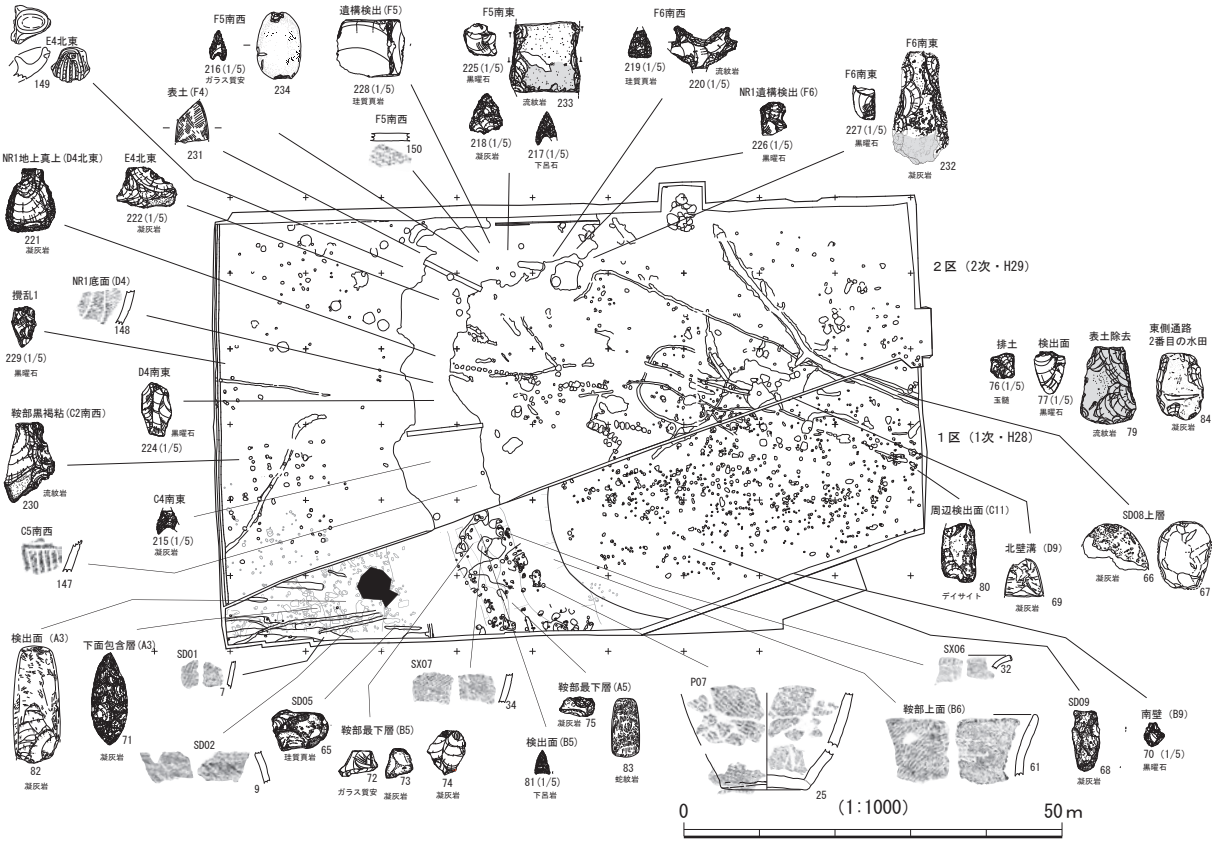
旧石器時代は、１区西側下面包含層から柳葉形尖頭器（71）が出土したことから認識されるが、剥片（72～74・77・224・230）だけでは当時期の人々の活動を説明できない。

縄文時代は１区下層で、SI02？（第18図）は簡易な住居が存在した可能性が指摘できる。しかし、少量の縄文土器・石器などが新しい遺構やNR1や包含層から出土した程度である。２区147は浅い半截竹管文であり、中期前半～中期中葉前半と思われる。２区148は沈線文にRL縄文を施す深鉢で後期前半と思われる。２区149は厚手の波頂部に巻貝刺突を持ち、押引き沈線文で文様を施文する波頂部で内面を大きく凹ます。押引き沈線文から後期前半の気屋式併行の可能性を指摘されたが、当期の福井市波寄三宅田遺跡第19群（工藤ほか2021）の厚手の口縁波頂部には内面の窪みが無いことや、厚手の波頂部の押引き沈線文は波頂部中央にしかなく、それを沈線で囲むものとはやや異なる。よって、南加賀地方の変容形なのであろうか。粗製深鉢（25・61）があり、中期であろうか。石器などは、地元の石材（凝灰岩：66・68・73～75・78・84・215・218・221・222・232・234、流紋岩：79・220・230、玉髄：76）や（地元系？の）産地不明の石材（ガラス質安山岩：72・216・223、珪質頁岩：65・219・228）や遠隔地石材（下呂石：81・218、諏訪産黒曜石：70・77・224～227・229、蛇紋岩・透閃石岩ヵ：83）が確認された。NR1を水源や水場として利用していたと思われるが、明確な遺構や遺物は少ない。それは、丘陵部などに存在する遺跡や200m東に位置する小菅波国道遺跡（第３・４図中期中葉～後葉の集落）が当遺跡の遺物の母体であったからなのであろう。小菅波国道遺跡でも蛇紋岩製磨製石斧や黒曜石の石鏃・剥片などの遠隔地の石材が出土している。

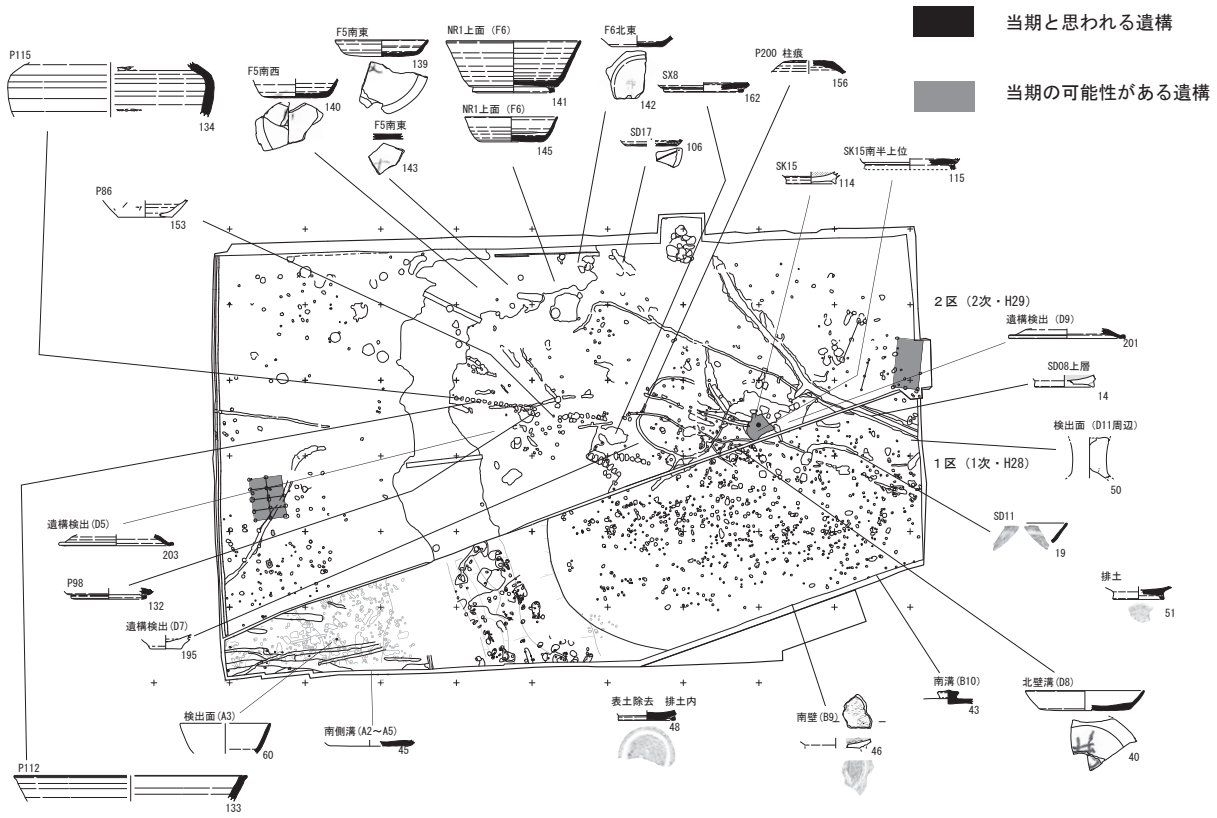
弥生時代は、１区鞍部上面のSX06から中期中葉の土器（32）が出土し、１区西側上層検出面では凝灰岩製の太型蛤刃石斧（82）が確認される程度で、少ない。小菅波国道遺跡は、中期後半の小型方形竪穴（SD437）、区画溝（SD632）か土坑（SD632下層）が遺構として確認され、SD632から太型蛤刃石斧が出土している。包含層などから中期後半～後期末の土器が出土している。

第２節　古　墳　時　代

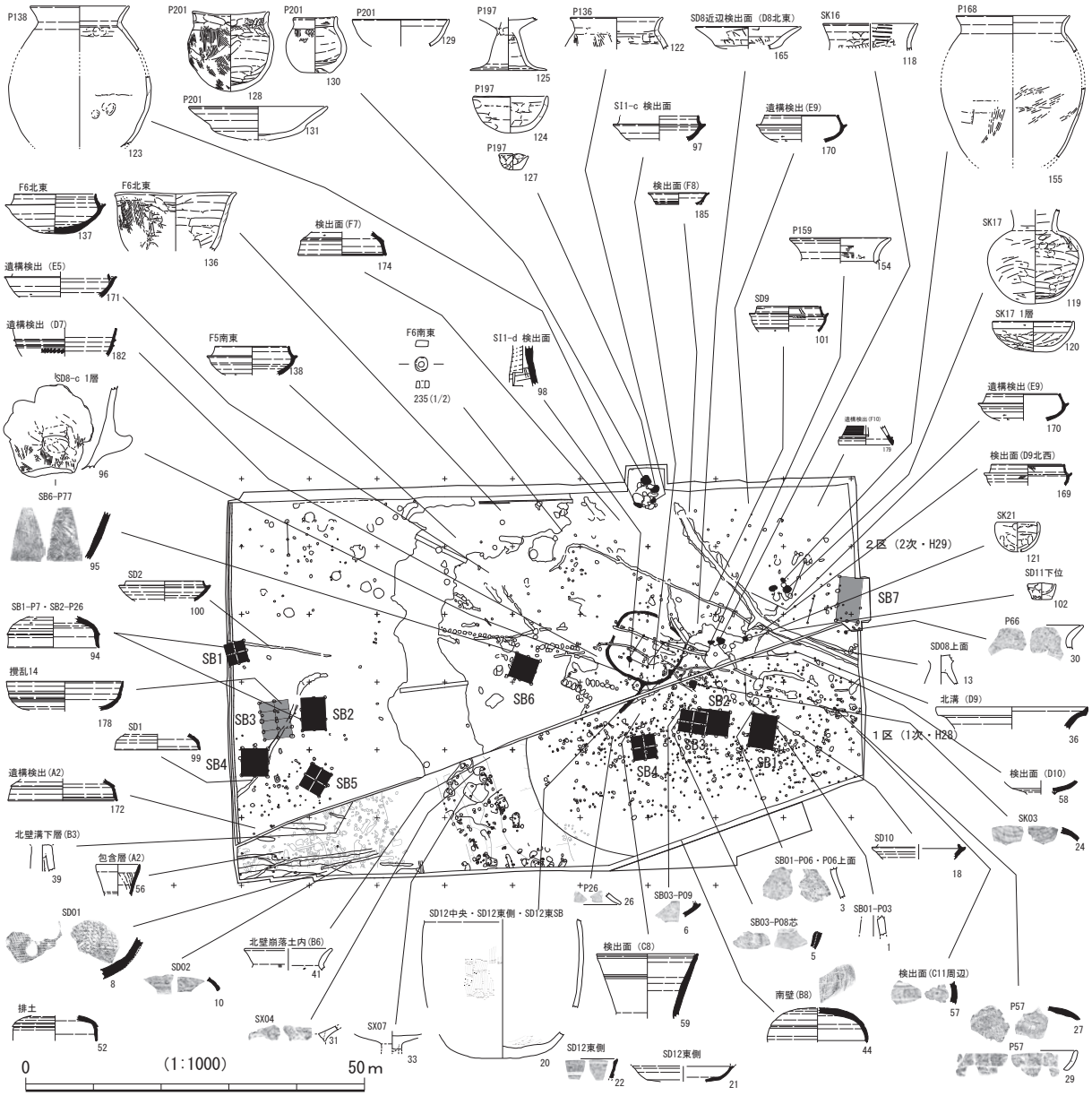
古墳時代後期～末期をまとめてみたい（第67図）。NR1を挟んで両側に遺構がみられるので自然河道にも水流があったか、鞍部の状態であったのであろう。掘立柱建物は９棟、古代までの可能性がある掘立柱建物２棟を確認した。１区での事例から側柱建物と総柱建物の２棟セットが確認され、１区SB01とSB03、１区SB02とSB04、２区SB2とSB1、２区SB4とSB5が想定されよう。１区SB01とSB03は７世紀初頭ぐらいと思われるが、他は５世紀後半～６世紀後半と思われるが、時期の特定は出来ない。２区SB6は側柱の単独棟なので、付近に２×２間の総柱建物が存在した可能性もあろう。２区SB3は桁行４間の総柱建物なので、他の建物とは異なり、２区SB07は他より桁行の間が長いことから、古代の可能性もあろうが、共に時期は確定できない。SB7の西側には柱列が確認され、SI1の周辺にも柱痕跡を持つピットが多いので掘立柱建物が存在した可能性があろう。２区SI1は隅丸方形の周溝を



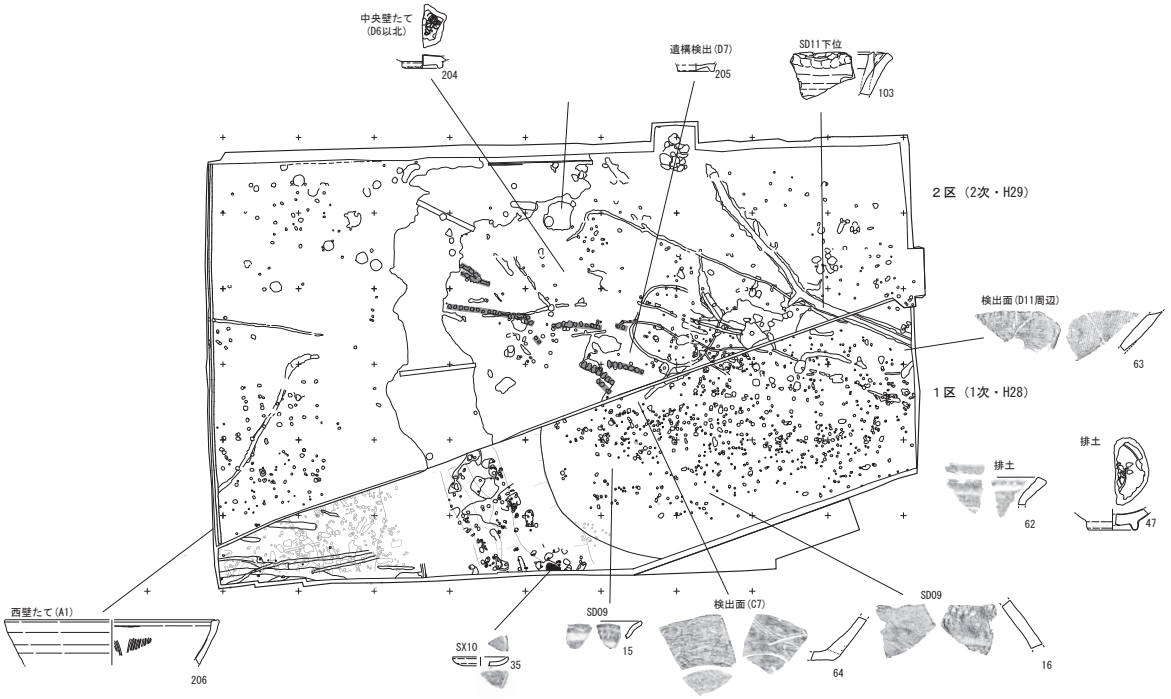
第65図　旧石器～弥生時代の遺構・遺物出土位置図（S＝1/1000、S=1/10・1/5）



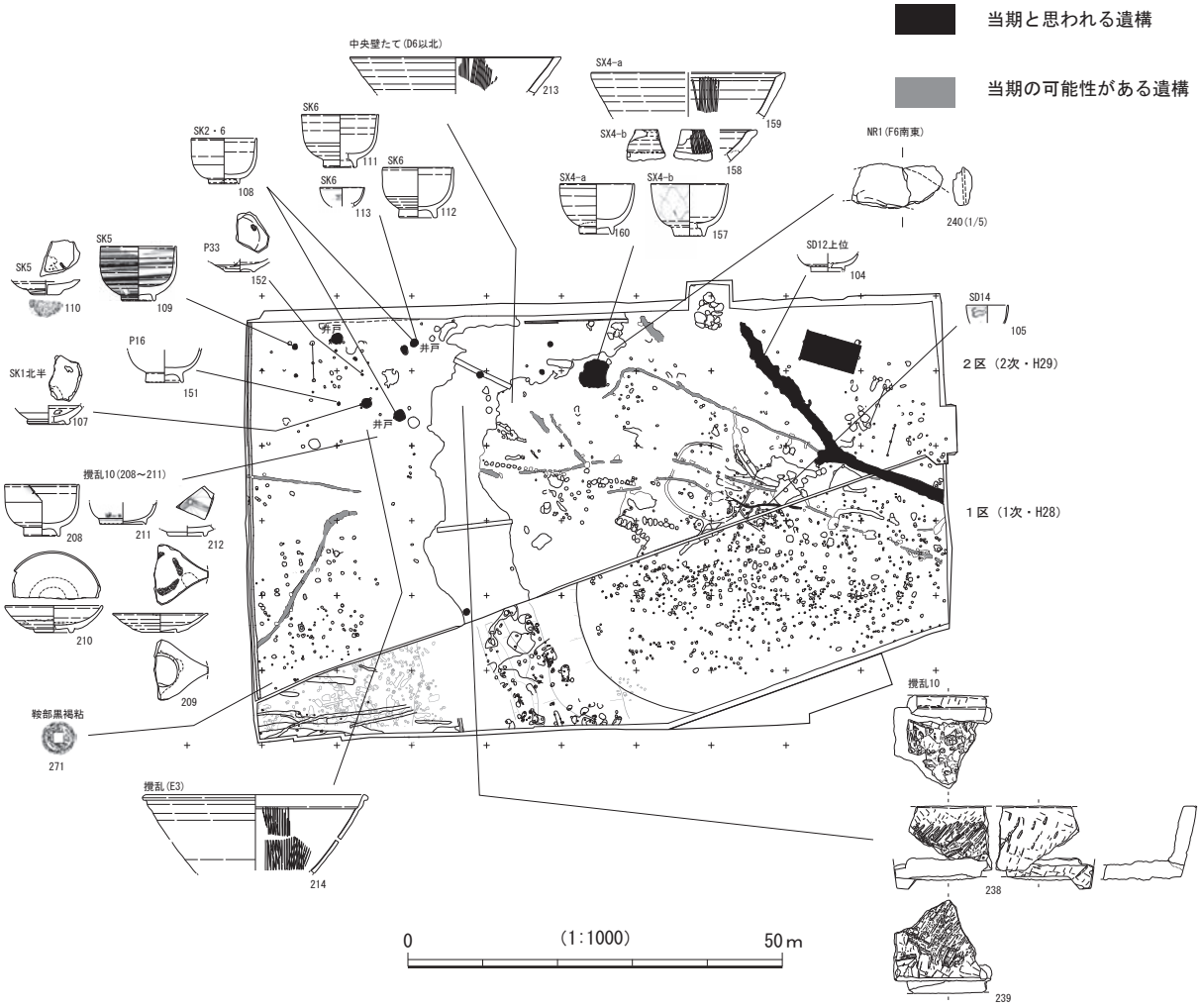
第66図　古代の遺構・遺物出土位置図（S＝1/1000、S＝1/10）



第67図　古墳時代の遺構・遺物出土位置図(S＝1/1000、S＝1/10・1/2)



第68図　中世の遺構・遺物出土位置図(S＝1/1000、S＝1/10)



第69図　近世の遺構・遺物出土位置図(S＝1/1000、S＝1/10)

持つ竪穴系建物であり、４本の主柱穴と周溝の間に多角形の柱を持つようである。周溝は１区の鞍部方向に排水用の溝（１区SD12の西側）が延びている。土坑はSI1の東側からSB07の西側に多く確認され、北部の土坑群（第43図）も確認された。SI1や土坑群は中期とすべきであろうか。

小菅波国道遺跡では、古墳中・後期の甕・高坏が出土している。

第３節　古代～近世

古代は明確な遺構は、あまり確認されていない（第66図）。２区SK15が古代後半以降の井戸と思われ、SB3・7が古代の可能性もあろう。SB7の西側には柱列が確認され、SI1の周辺にも柱痕跡を持つピットが多いので掘立柱建物が存在した可能性があろう。NR1から墨書土器（139～143）がややまとまって出土しており、水辺の祭祀が想定されよう。

小菅波国道遺跡では、８～12世紀代の須恵器・土師器が報告されている。

中世も明確な遺構は、１区SX10（35）ぐらいであろう（第68図）。SF1から９世紀代の須恵器が出土していることから、それ以降なので古代末～中世であろうか。図化された遺物も、土師器皿（15・35）、珠洲焼（206）、加賀焼（16・63・64・103）、白磁（205）、青磁（47・204）と少ない。

近世の遺構は、北側に多く確認される（第69図）。17世紀代の遺物を中心に18世紀代もあるものと思われる。井戸と思われるSK2・5・6では、SK2・6には寄生虫卵が確認されている。北側の円形土坑の多くは近世の肥溜めと思われ、SK2・6には廃棄時に便糞が混じり込んだのであろう。SX2は底に筵状の敷物を２枚重ね、その上に径80～95㎝程の底を外した結桶を据えたものと推定されおり、その用途が気になる。自然科学分析の結果、NR1の花粉分析では周辺でソバの栽培痕跡が確認され、寄生虫卵分析では淡水魚（鮎の生食など）やカワニナに付く寄生虫卵が確認され、周辺の生業･食生活･残飯処理･衛生状況などが垣間見れた。

大菅波コショウズワリ遺跡の小字は、コショウズワリ＝小清水割と漢字をあてることが可能であり、ほ場整備前の状況が伺える。ほ場整備工事により撹乱を受けており、特に２区に多い。また、小菅波国道遺跡（第４図）でも盛土・削平が著しく、開発対象区域内の埋蔵文化財が存在した範囲は限定されていた。それは周辺では一辺70～80ｍ×30ｍの大規模水田造成（第４図）により、特に水田の北東側の削平が著しいからである。１区東側の水田では須恵器・土師器・石錘（80）などを表採しており、大菅波コショウズワリ遺跡から小菅波国道遺跡は、縄文時代～古代にかけて密ではないが繋がっていた可能性もあろう。

調査区は撹乱が多く、出土遺物は細片が多くて出土量も少なく、遺構の時期などを押さえられなかった。また、柱痕跡がある柱穴を確認するも建物を復元することが難しかった。本書をまとめるにあたり、調査・整理・原稿作成担当者以外の協力を得たので指名を記して感謝したい。

敬称省略、赤澤徳明、浅野豊治、石川日出志、川畑　誠、高田秀樹、刀根比呂子、藤田邦雄、藤根　久、安中哲徳、吉田　淳、米澤義光、和田龍介。

参考文献

戸根比呂子　　2019　『小菅波国道遺跡発掘調査報告書』加賀市教育委員会

工藤俊樹ほか　　2021　『波寄三宅田遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

報告書抄録

ふりがな	かがし　おおすがなみこしょうずわりいせき
書名	加賀市　大菅波コショウズワリ遺跡
副書名	北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	6
編著者名	久田正弘、西山美那、森　将史、野口真利江、小林克也、藤根　久
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
所在地	〒920－1336　石川県金沢市中戸町18番地１　TEL（076）229－4477
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	2022年３月22日

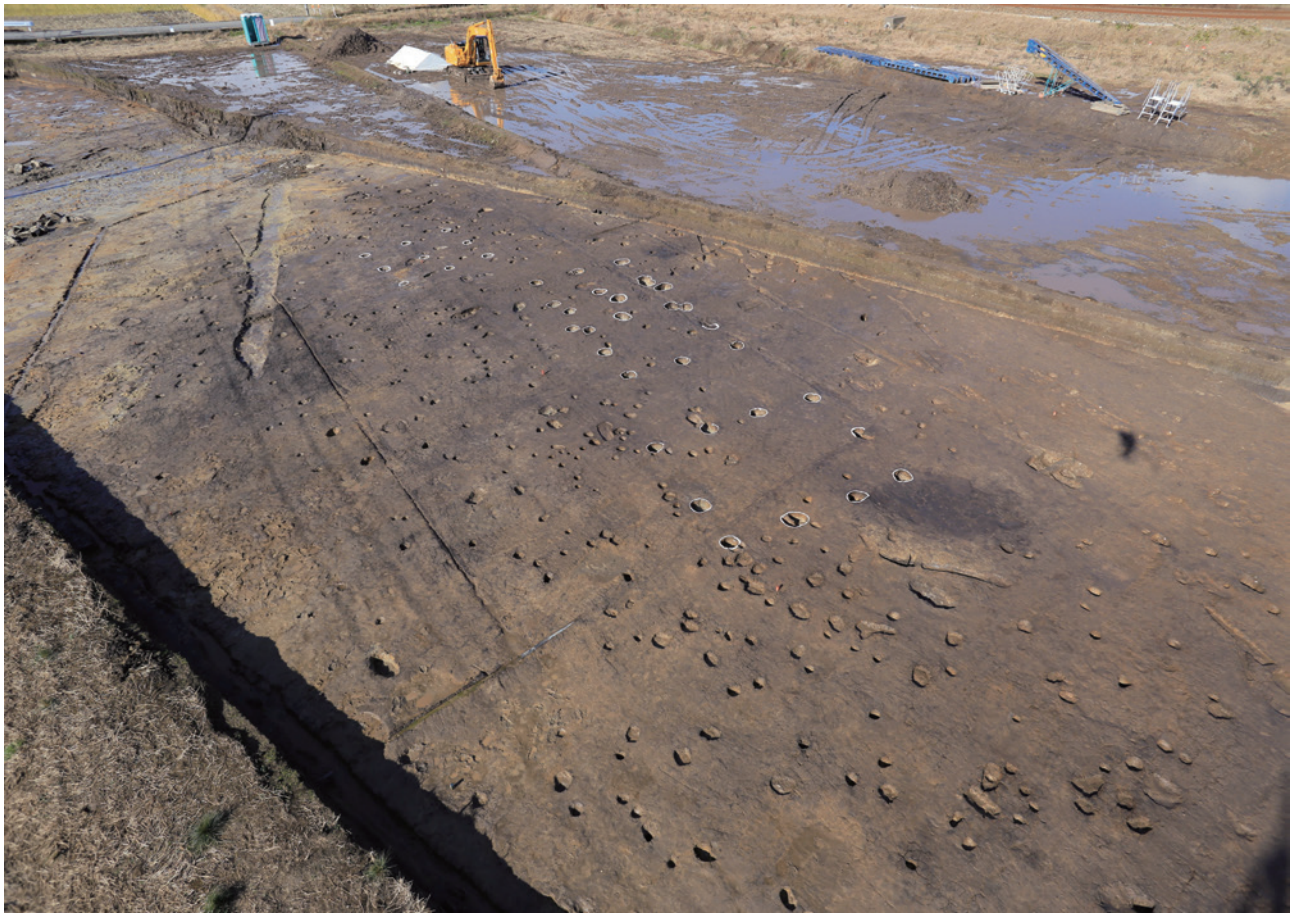
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
大菅波（おおすがなみ）コショウズワリ遺跡（いせき）	石川県（いしかわけん）加賀市（かがし） 大菅波地内（おおすがなみちない）	17206	643000	36度 19分 ３秒	136度 20分 23秒	20160926 ～ 20161214	1,800㎡	記録保存調査
						20170414 ～ 20170731	3,370㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大菅波（おおすがなみ）コショウズワリ遺跡（いせき）	集落跡	旧石器時代		尖頭器、剥片	柳葉形
		縄文時代	竪穴建物、小穴	縄文土器、磨製石斧、打製石斧、石鏃、石匙	黒曜石（諏訪産）、下呂石
		弥生時代		弥生土器、太型蛤刃石斧	
		古墳時代	掘立柱建物、周溝を持つ建物、土坑	土師器、須恵器	２棟セットを確認
		奈良・平安時代	小穴、井戸	土師器、須恵器	河道に墨書土器
		鎌倉・室町時代	小穴、道路状遺構	土師器、越前焼、加賀焼、白磁、青磁	
		江戸時代	掘立柱建物、井戸、土坑、溝	陶磁器、銅銭、石製品	

要約	橋立丘陵の裾に立地する遺跡で、南側に向かって低くなる。低い部分には鞍部・自然河道があり、下層から柳葉形尖頭器や剥片類、磨製石斧が出土した。自然河道は江戸時代まで存在していたようである。古墳時代後期以後には側柱・総柱建物の２棟セットが確認され、古代では墨書土器を使った水辺の祭祀が行われたようである。江戸時代になると、調査区北側に遺構が多く確認され、掘立柱建物や井戸の他に、肥溜めと思われる土坑があるので、耕作地も存在したようである。寄生虫卵分析により、鮎やカワニナなどを利用していたことが判明した。

１区遠景（北東から）

１区遠景（南東から）



１区遠景（南東から）

１区SB01～04全景（上が北）

１区西側上層（北西から）

１区西側上層全景（西から）

１区西側下層全景（西から）

１区下層河跡全景（北西から）

１区SB01～04検出状況（東から）

１区SB01～04完掘状況（南東から）

１区SB01完掘状況（東から）

１区SB01検出状況（北から）

１区SB01－P02断面（東から）

１区SB01－P03断面（東から）

１区SB01－P10断面（南から）

１区SB02完掘状況（北から）

１区SB02検出状況（北から）

１区SB02―P05柱根出土状況（南から）

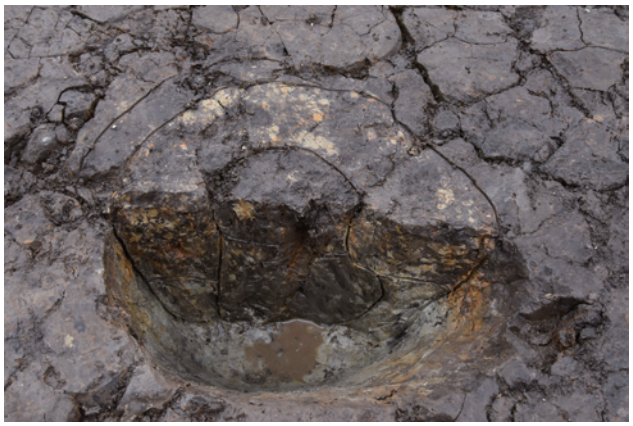
１区SB02―P07断面（南から）

１区SB02―P09断面（南から）

１区SB03完掘状況（北から）

１区SB03検出状況（北から）

１区SB03－P02断面（東から）



１区SB03－P08断面（西から）

１区SB03－P09断面（西から）

１区SB04完掘状況（東から）

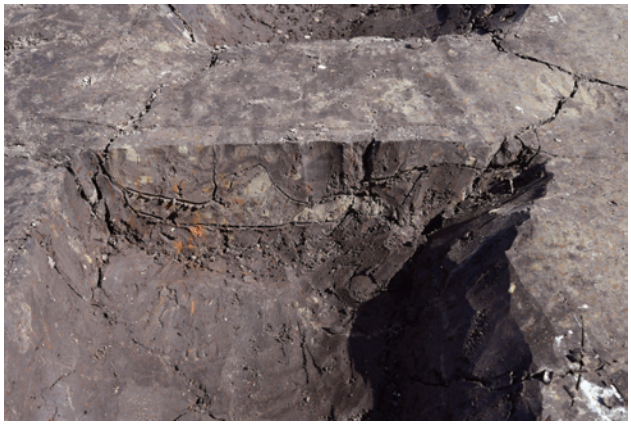
１区SB04検出状況（北から）

１区SB04ーP03断面（東から）

１区SB04ーP04断面（南から）

１区SB04ーP06断面（北東から）

１区SD02断面（西から）

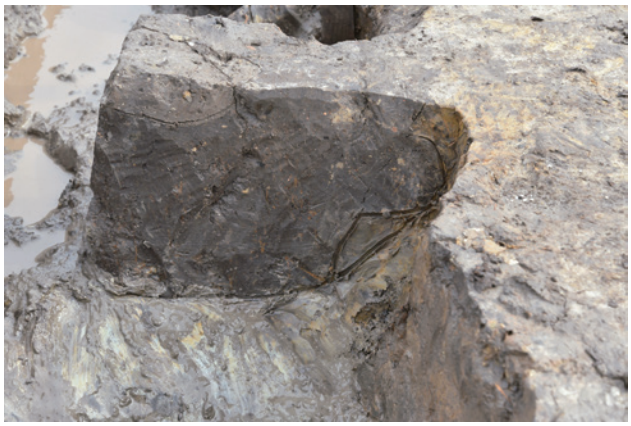


１区SD03断面（西から）

１区SD06断面（北から）

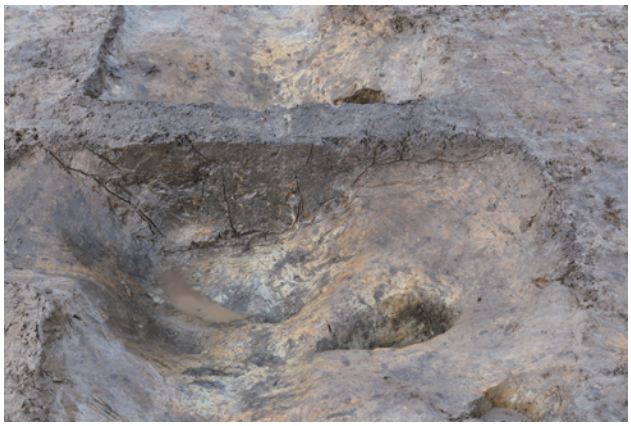
１区SD10断面（南東から）

１区SD12西部断面（西から）



１区SD12東部断面（西から）

１区SD12遺物出土状況（南から）



１区SD13東部断面（南東から）

１区SD08全景（北西から）

１区SD08断面（北西から）

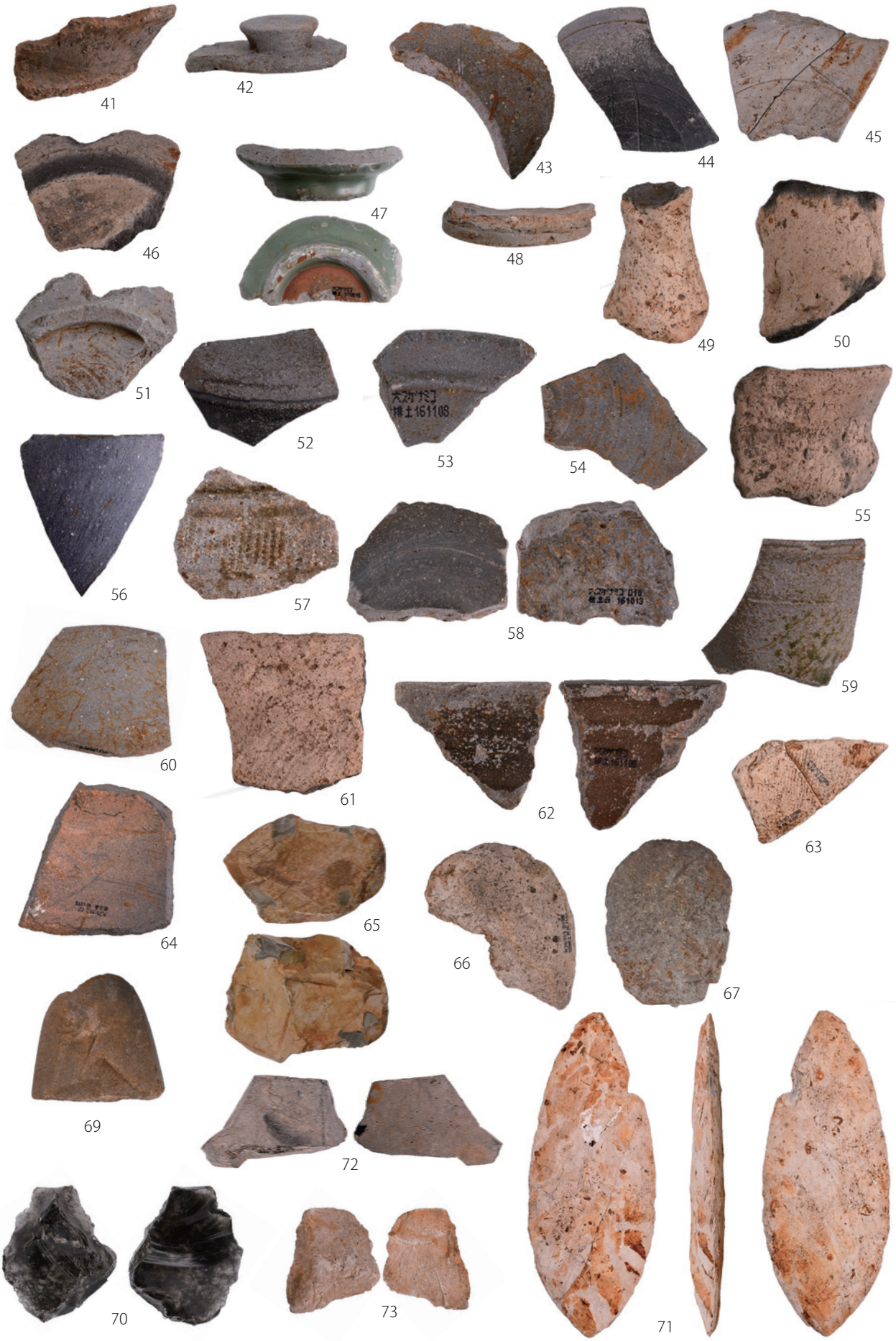
１区検出面太型蛤刃石斧出土状況（北から）

１区P07縄文土器出土状況（西から）

１区尖頭器出土状況（北から）

図版12

1 区出土遺物 1


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
69
70
71
72
73

1 区出土遺物 2

図版14

1 区出土遺物 3

２－１・２－２区遠景（南から）

２－１・２－２区遠景（北から）

２－１・２－２区遠景（南から）

２－３区遠景（北から）

２区２面全景（右が北）

調査区全景（上が北）

２区SB１完掘状況（北東から）

２区SB１－P７断面（北東から）

２区SB１－P10断面（北西から）

２区SB１－P32柱根出土状況（北東から）

２区SB１－P67柱根出土状況（東から）

２区SB２完掘状況（南から）

２区SB２・３検出状況（東から）

２区SB２－P25断面（西から）

２区SB２－P26断面（西から）

２区SB２－P27断面（西から）

２区SB３完掘状況（南から）

２区SB３－P29断面（西から）

２区SB３－P40断面（西から）

２区SB３－P41断面（西から）

２区SB３－P44断面（西から）

２区SB４完掘状況（南から）

２区SB４－P46断面（西から）

２区SB４－P50完掘状況（西から）

２区SB４－P51柱根出土状況（北から）

２区SB４－P64断面（北西から）

２区SB５完掘状況（南西から）

２区SB５－P55柱根出土状況（南東から）

２区SB５－P59柱根・礎板出土状況（北東から）

２区SB５－P62礎板出土状況（北東から）

２区SB５－P63木片出土状況（北東から）

２区SB６完掘状況（南西から）

２区SB６検出状況（南東から）

２区SB６ーP76断面（北西から）

２区SB６ーP77断面（北西から）

２区SB６ーP78断面（北東から）

２区SB７完掘状況（南から）

２区SB７掘削作業（南から）

１区SB７－P54断面（西から）

２区SB７－P132断面（西から）

２区SB７－P133断面（西から）

２区SI１他検出状況（南西から）

２区SI１・SD８作業状況（南西から）

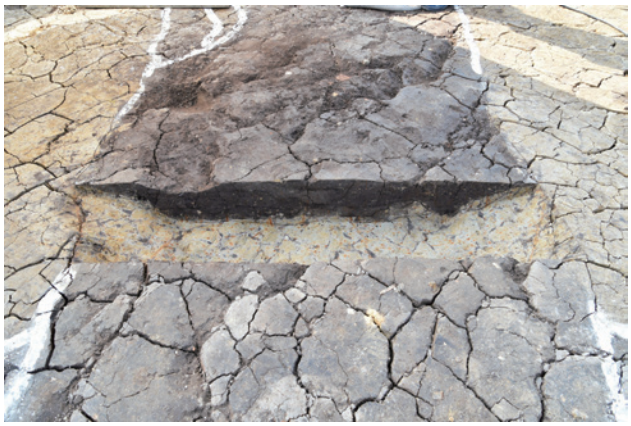
２区SD１断面１（北東から）

２区SD２断面（東から）

２区SD４断面（南から）

２区SD８断面２（東から）

２区SD９断面（東から）



２区SD10断面（南東から）

２区SD11・12断面（北東から）

２区SD15断面（西から）

２区SK１断面（南東から）

２区SK２遺物出土状況（北から）

２区SK２断面（北から）

２区SK３断面（南から）

２区SK４断面（南から）

２区SK５断面（西から）

２区SK５礫・陶磁器出土状況（西から）

２区SK５完掘状況（東から）

２区SK６断面（北から）

２区SK６遺物出土状況（東から）

２区SK６桶枠（南から）

２区SK７断面（東から）

２区SK８検出状況（南西から）

２区SK８断面（南から）

２区SK10断面（西から）

２区SK11断面（南から）

２区SK12断面（南から）

２区SK12完掘状況（北から）

２区SK13断面（南から）

２区SK14断面（南から）

２区SK15断面（南東から）

２区SK15下部断面（南東から）

２区SK15完掘状況（南東から）

２区SK16断面（南から）

２区SK17遺物出土状況（南東から）

２区SK17断面（南から）

２区SK17土師器出土状況１（北西から）

２区SK17土師器出土状況２（北西から）

２区SK17他完掘状況（南から）

２区SK18断面（南東から）

２区SK19・21断面（南から）

２区SK19・21完掘状況（南から）

２区SX２編物全景（東から）

２区SX２上位断面・編物出土状況（東から）

２区SX２編物出土状況（南から）

２区SX２編物の重なり（北から）

２区SX２完掘状況（南から）

２区SX４ー b遺物出土状況（北東から）

２区SX４・SK８完掘状況（南から）

２区SX７断面（南西から）

２区SX８・P97～P102（南東から）

２区土坑群（南から）

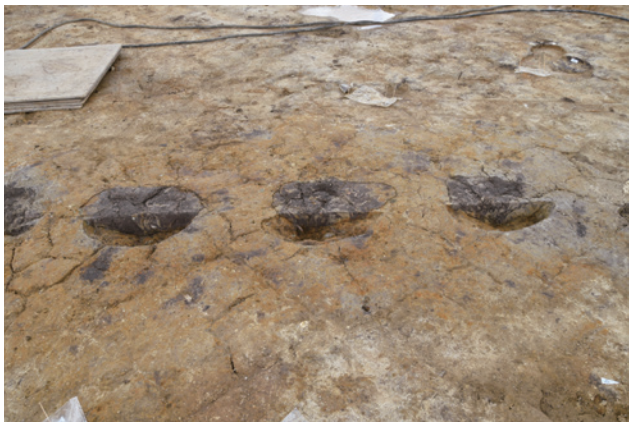
２区SD10（南東から）

２区SD９・11・12遺（南東から）

２区２面全景（南から）

２区SF全景（東から）

２区SF１検出状況（東から）



２区SF１－P111～113断面（南西から）

２区SF１・６・７（南から）

２区SF２・３（北東から）

２区NR１墨書土器出土状況１（南西から）

２区NR１墨書土器出土状況２（南西から）

２区NR１断面１（南東から）

２区NR１断面２（南西から）

２区NR１遺物出土状況（北東から）

２区NR１完掘状況（南から）

２区NR１北壁断面（南西から）

２区NR１北壁断面２（南西から）

２区NR１臼玉出土状況（北東から）

２区NR１黒曜石出土状況（西から）

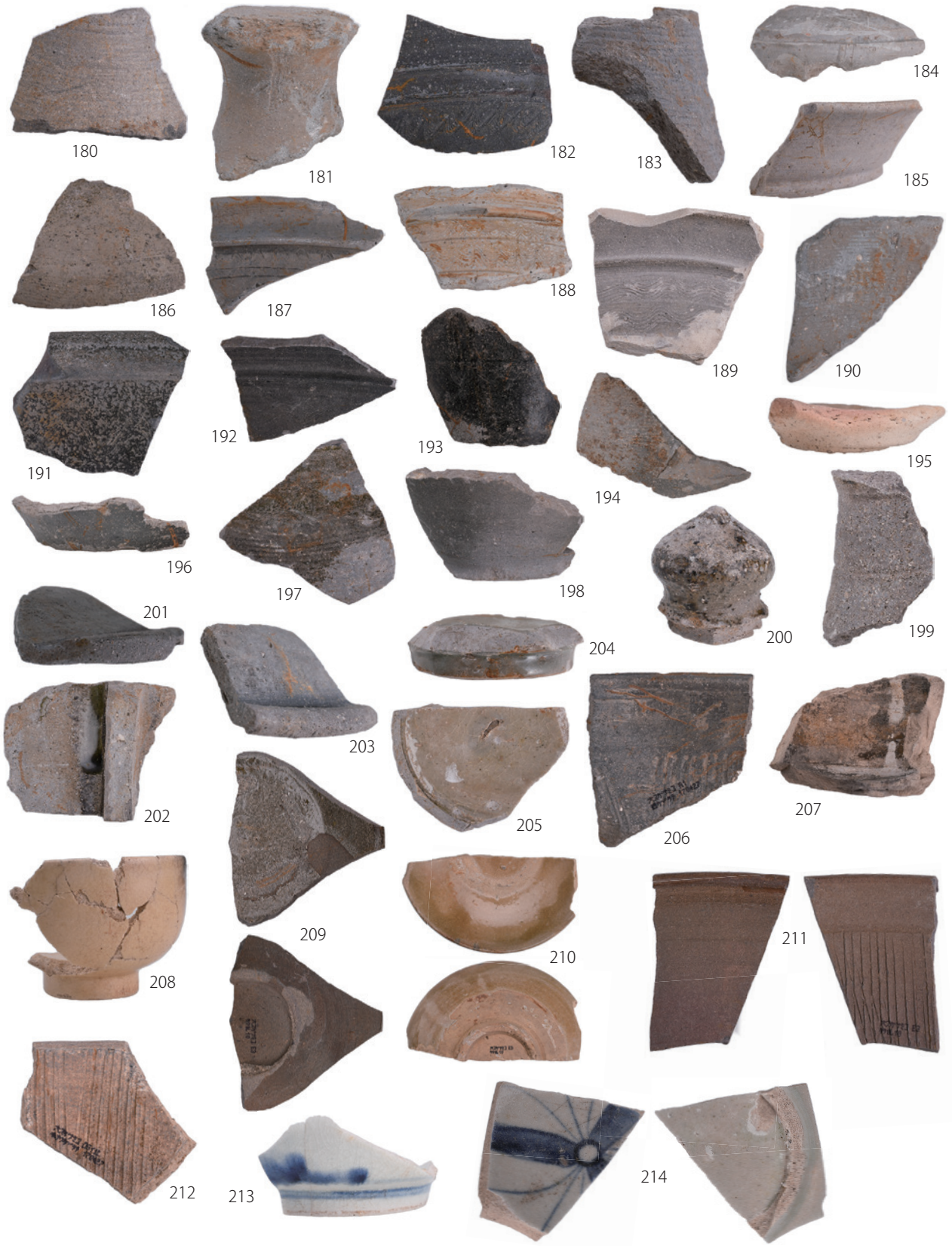
94
95
96
97
99
98
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139

2区出土遺物1

140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179

2区出土遺物2

図版38



2 区出土遺物 3

215
216
217
218
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
239
240

2区出土遺物4

241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
259
260-1
258
261
262
263
264
265
260-2
266
267
268
269
270
271

2 区出土遺物 5

加賀市　大菅波コショウズワリ遺跡

発行日　令和４(2022)年３月22日

発行者　石川県教育委員会
〒920－8575　石川県金沢市鞍月１丁目１番地
電話　076－225－1842(文化財課)

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター
〒920－1336　石川県金沢市中戸町18番地１
電話　076－229－4477
E－mail　daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　田中昭文堂印刷株式会社
〒920－0377　石川県金沢市打木町東1448番地
電話　076－269－7788